

# 京都府遺跡調査概報

## 第 94 冊

1. 五十河遺跡
2. 南稻葉遺跡
3. 杉北遺跡
4. 太田遺跡第10次
5. 河原遺跡
6. 新田遺跡第5次
7. 新田遺跡第6次
8. 柿添遺跡第4次
9. 春日神社遺跡

2 0 0 0

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方の協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成11年度に実施した発掘調査のうち、京都府農林水産部・建設省近畿地方建設局・京都府亀岡地方振興局・京都府土木建築部の依頼を受けて行った五十河遺跡・南稲葉遺跡・杉北遺跡・太田遺跡第10次・新田遺跡第5次・新田遺跡第6次・柿添遺跡第4次・春日神社遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、大宮町教育委員会・綾部市教育委員会・亀岡市教育委員会・城陽市教育委員会・京田辺市教育委員会・精華町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 樋口 隆 康

# 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- |            |             |
|------------|-------------|
| 1. 五十河遺跡   | 2. 南稲葉遺跡    |
| 3. 杉北遺跡    | 4. 太田遺跡第10次 |
| 5. 河原遺跡    | 6. 新田遺跡第5次  |
| 7. 新田遺跡第6次 | 8. 柿添遺跡第4次  |
| 9. 春日神社遺跡  |             |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	五十河遺跡	中郡大宮町字五十河	平11. 5. 11～8. 12	京都府農林水産部	引原 茂治
2.	南稲葉遺跡	綾部市安国寺町字南稲葉	平11. 10. 20～平12. 2. 28	建設省近畿地方建設局	黒坪 一樹
3.	杉北遺跡	亀岡市旭町杉	平11. 11. 29～平12. 1. 14	京都府農林水産部	中川 和哉
4.	太田遺跡第10次	亀岡市稗田野町字太田小字森23	平11. 5. 25～平12. 2. 28	京都府農林水産部	増田 孝彦
5.	河原遺跡	城陽市長池河原	平11. 12. 15～平12. 2. 17	京都府土木建築部	森島 康雄
6.	新田遺跡第5次	京田辺市松井北ヶ市	平11. 11. 10～平12. 2. 25	京都府農林水産部	竹井 治雄 筒井 崇史
7.	新田遺跡第6次	京田辺市松井	平11. 11. 17～平12. 1. 28	京都府土木建築部	岡崎 研一
8.	柿添遺跡第4次	相楽郡精華町北稲八間柿添	平12. 1. 6～2. 28	京都府土木建築部	松尾 史子
9.	春日神社遺跡	相楽郡精華町大字菱田小字宮河原	平11. 11. 18～12. 16	京都府土木建築部	伊賀 高弘

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

# 本文目次

1. 五十河遺跡発掘調査概要-----	1
2. 南稲葉遺跡発掘調査概要-----	17
3. 杉北遺跡発掘調査概要-----	23
4. 太田遺跡第10次発掘調査概要-----	29
5. 河原遺跡発掘調査概要-----	69
6. 新田遺跡第5次発掘調査概要-----	73
7. 新田遺跡第6次発掘調査概要-----	101
8. 柿添遺跡第4次発掘調査概要-----	107
9. 春日神社遺跡発掘調査概要-----	113

# 挿図目次

## 1. 五十河遺跡

第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図-----	2
第2図 調査区位置図-----	3
第3図 A地区平面図-----	4
第4図 A地区主要土坑実測図-----	6
第5図 B地区平面図-----	7
第6図 B地区S D21部分図-----	8
第7図 A地区出土遺物実測図-----	10
第8図 B地区溝S D21出土遺物実測図-----	11
第9図 B地区出土遺物実測図-----	13
第10図 出土遺物実測図-----	14

## 2. 南稲葉遺跡

第11図 調査地および周辺遺跡分布図-----	18
第12図 トレンチ配置図-----	19
第13図 Gトレンチ竪穴式住居跡-----	20
第14図 Rトレンチ出土遺物実測図-----	20

第15図	由良川流域竪穴式住居跡規模分布図	21
<b>3. 杉北遺跡</b>		
第16図	調査地位置図	24
第17図	調査トレンチ配置図	25
第18図	杉北遺跡断面実測図	26
第19図	杉北遺跡トレンチ実測図	27
<b>4. 太田遺跡第10次</b>		
第20図	調査地および周辺遺跡分布図	29
第21図	調査地位置図	30
第22図	検出遺構配置図(1)	32
第23図	検出遺構配置図(2)	33
第24図	竪穴式住居跡 S H01実測図	34
第25図	竪穴式住居跡 S H03・04実測図	34
第26図	竪穴式住居跡 S H11・12実測図	35
第27図	竪穴式住居跡 S H05～07実測図	36
第28図	掘立柱建物跡 S B17実測図	37
第29図	掘立柱建物跡 S B18実測図	37
第30図	掘立柱建物跡 S B19実測図	38
第31図	掘立柱建物跡 S B20実測図	38
第32図	掘立柱建物跡 S B21実測図	39
第33図	掘立柱建物跡 S B22実測図	39
第34図	掘立柱建物跡 S B23実測図	40
第35図	掘立柱建物跡 S B24実測図	40
第36図	太田1号墳実測図	41
第37図	太田2号墳実測図	41
第38図	掘立柱建物跡 S B25実測図	42
第39図	掘立柱建物跡 S B26実測図	42
第40図	掘立柱建物跡 S B27実測図	43
第41図	掘立柱建物跡 S B30実測図	43
第42図	掘立柱建物跡 S B37実測図	44
第43図	掘立柱建物跡 S B38実測図	44
第44図	掘立柱建物跡 S B39実測図	45
第45図	井戸 S E52・53実測図	45
第46図	掘立柱建物跡 S B33実測図	46
第47図	掘立柱建物跡 S B31実測図	46

第48図	掘立柱建物跡 S B 34実測図	47
第49図	掘立柱建物跡 S B 35・36実測図	48
第50図	出土遺物実測図(1)	49
第51図	出土遺物実測図(2)	50
第52図	出土遺物実測図(3)	50
第53図	出土遺物実測図(4)	51
第54図	出土遺物実測図(5)	52
第55図	出土遺物実測図(6)	53
第56図	出土遺物実測図(7)	53
第57図	出土遺物実測図(8)	54
第58図	出土遺物実測図(9)	55

#### 5. 河原遺跡

第59図	調査地位置図	69
第60図	トレンチ配置図	70
第61図	1トレンチ・4トレンチ平面図	71
第62図	1トレンチ土層断面図	71
第63図	出土遺物実測図	72

#### 6. 新田遺跡第5次

第64図	調査地位置図	73
第65図	調査地周辺主要遺跡分布図	74
第66図	新田遺跡調査地点配置図	77
第67図	遺構配置図	79
第68図	竪穴式住居跡実測図	81
第69図	竪穴式住居跡 S H04・竪穴式住居跡 1 実測図	83
第70図	掘立柱建物跡 4 実測図	83
第71図	掘立柱建物跡 2・3 実測図	84
第72図	大溝 S D27実測図	86
第73図	溝 S D27断面実測図	86
第74図	調査区西北部分検出遺構平面図	87
第75図	土坑状遺構 S X46ほか実測図	87
第76図	出土遺物実測図(1)	90
第77図	出土遺物実測図(2)	92
第78図	出土遺物実測図(3)	93
第79図	出土遺物実測図(4)	94
第80図	出土遺物実測図(5)	95

第81図	出土遺物実測図(6)	-----	97
第82図	出土遺物実測図(7)	-----	98
第83図	出土遺物実測図(8)	-----	98
<b>7. 新田遺跡第6次</b>			
第84図	調査地および周辺遺跡分布図	-----	102
第85図	調査地位置図	-----	103
第86図	第4トレンチ柱状断面図	-----	104
第87図	第3トレンチ遺構実測図	-----	104
第88図	出土遺物実測図	-----	105
<b>8. 柿添遺跡第4次</b>			
第89図	調査地位置図	-----	108
第90図	トレンチ配置図	-----	109
第91図	遺構平面図	-----	110
第92図	トレンチ南壁断面図	-----	111
第93図	S D01付近実測図および出土遺物実測図	-----	111
<b>9. 春日神社遺跡</b>			
第94図	調査地位置図	-----	114
第95図	トレンチ配置図	-----	115
第96図	土層断面図	-----	116

## 付 表 目 次

<b>新田遺跡第6次発掘調査概要</b>		
第1表	新田遺跡調査次数表	-----101

## 図 版 目 次

<b>1. 五十河遺跡</b>		
図版第1	(1) 調査前風景(北西から)	(2) A地区全景(空撮・左が北)

- 図版第2 (1)溝S D01(南から) (2)土坑S K02(南から)
- 図版第3 (1)土坑S K07(東から) (2)集石除去後の土坑S K07(東から)
- 図版第4 (1)土坑S K08(北から) (2)土坑S K09(西から)
- 図版第5 (1)土坑S K14(南から) (2)竪穴式住居跡S H10・11(空撮・左が北)
- 図版第6 (1)竪穴式住居跡S H10(北から) (2)竪穴式住居跡S H11(東から)
- 図版第7 (1)B地区調査前全景(北から) (2)調査地全景(空撮・左が北)
- 図版第8 (1)溝S D21遺物出土状況(南から) (2)溝S D21遺物出土状況(南から)
- 図版第9 (1)溝S D22遺物出土状況(東から) (2)ピットP A104遺物出土状況(東から)
- (3)ピットP A256遺物出土状況(東から)
- 図版第10 出土遺物(1)
- 図版第11 出土遺物(2)
- 図版第12 (1)出土遺物(3) (2)出土遺物(4)

## 2. 南稲葉遺跡

- 図版第13 (1)調査前風景(A・Gトレンチ付近、北西から)
- (2)調査前風景(F・Gトレンチ付近、南から)
- 図版第14 (1)竪穴式住居跡(Gトレンチ、西から)
- (2)竪穴式住居跡内土器出土状況(Gトレンチ)
- 図版第15 (1)竪穴式住居跡・溝(Gトレンチ、南西から)
- (2)M・Nトレンチ掘削状況(北西から)
- 図版第16 (1)Hトレンチ遺構検出状況(南東から)
- (2)Hトレンチ遺構断面(東から)

## 3. 杉北遺跡

- 図版第17 (1)第1トレンチ全景(北から) (2)第2トレンチ全景(北から)
- 図版第18 (1)第3トレンチ全景(西から) (2)第3トレンチ検出遺構(北から)

## 4. 太田遺跡第10次

- 図版第19 調査地全景(東上空から)
- 図版第20 (1)調査地空中写真(南上方から)
- (2)調査地空中写真(東上方から)
- 図版第21 (1)S H01近景(北から) (2)S H02・09近景(北から)
- (3)S H03・04近景(南東から)
- 図版第22 (1)S H11・12近景(西から) (2)S H11遺物出土状況(北東から)
- (3)S H11遺物出土状況(北西から)

- 図版第23 (1)太田1・2号墳全景(北西から) (2)太田1・2号墳S B37全景(南から)  
(3)太田2号墳近景(西から)
- 図版第24 (1)太田2号墳南側周溝内遺物出土状況(西から)  
(2)太田2号墳南側周溝内遺物出土状況(北から)  
(3)太田2号墳南側周溝内遺物出土状況(南から)
- 図版第25 (1)S B17周辺全景(北東から) (2)S B18周辺全景(東から)  
(3)S H02・S B23全景
- 図版第26 (1)S B34全景(南から) (2)S B34周辺全景(北東から)  
(3)S B32周辺全景(西から)
- 図版第27 (1)S H05~07、S D47全景 (2)S D46・47近景(北から)  
(3)S D42・49周辺全景(南から)
- 図版第28 (1)S D43周辺全景(南から) (2)S D40全景(南から)  
(3)S D41周辺全景(北東から)
- 図版第29 (1)S E53近景(南から) (2)S E54近景(南から)  
(3)S E52近景(北から)
- 図版第30 出土遺物(1)
- 図版第31 出土遺物(2)
- 図版第32 出土遺物(3)
- 図版第33 出土遺物(4)
- 図版第34 (1)出土遺物(5) (2)出土遺物(6)

## 5. 河原遺跡

- 図版第35 (1)調査前風景(南から) (2)調査前風景(東から)  
(3)トレンチ全景(南西から)
- 図版第36 (1)1トレンチ北東部(南東から) (2)1トレンチ拡張部全景(南西から)  
(3)1トレンチ拡張部断面(北西から)
- 図版第37 (1)2トレンチ全景(北東から) (2)2トレンチ深掘り全景(南西から)  
(3)3トレンチ全景(南東から)
- 図版第38 (1)4トレンチ全景(南西から) (2)4トレンチ拡張部全景(南東から)  
(3)出土遺物

## 6. 新田遺跡第5次

- 図版第39 (1)調査地遠景(北西から) (2)調査地全景(上が北)
- 図版第40 (1)調査地全景(東から) (2)調査地全景・大溝S D27(西から)
- 図版第41 (1)調査前風景(西から) (2)重機掘削風景(西から)

- (3)調査作業風景(南東から)
- 図版第42 (1)素掘り溝群、S D14・15・17(南から)  
(2)素掘り溝群(トレンチ北西部分、東から)  
(3)掘立柱建物跡1(北から)
- 図版第43 (1)掘立柱建物跡1柱穴断面(北から) (2)掘立柱建物跡2・3(南東から)  
(3)掘立柱建物跡4(南から)
- 図版第44 (1)大溝S D27断面(東から)  
(2)大溝S D27内(4・d区)土器出土状況(北西から)  
(3)大溝S D27内(2・c区)土器出土状況(垂直方向)
- 図版第45 (1)竪穴式住居跡S H03(上)・竪穴式住居跡S H02(下)(南から)  
(2)竪穴式住居跡S H03内土器出土状況(南から)  
(3)竪穴式住居跡S H03竈(南から)
- 図版第46 (1)竪穴式住居跡S H13(北東から) (2)竪穴式住居跡S H13竈(北東から)  
(3)竪穴式住居跡S H13内鉄製品出土状況(南から)
- 図版第47 (1)竪穴式住居跡S H39(北東から) (2)竪穴式住居跡S H39煙道部(北東から)  
(3)竪穴式住居跡S H50(南東から)
- 図版第48 (1)竪穴式住居跡S H04(北から) (2)竪穴式住居跡S H40(南西から)  
(3)竪穴式住居跡S H41(上)・竪穴式住居跡S H52(下)(南西から)

#### 7. 新田遺跡第6次

- 図版第49 (1)調査地全景(西から) (2)調査風景(北西から)  
(3)トレンチ掘削状況(西から)
- 図版第50 (1)第3トレンチ溝検出状況(西から) (2)第3トレンチ溝完掘状況(西から)  
(3)第4トレンチ断ち割り状況(南から)

#### 8. 柿添遺跡第4次

- 図版第51 (1)調査前風景(西から) (2)トレンチ内作業風景(南東から)  
(3)調査区全景(西から)
- 図版第52 (1)S D01横断面(南東から) (2)調査区西半部検出状況(東から)  
(3)調査区東半部検出状況(西から)

#### 9. 春日神社遺跡

- 図版第53 (1)調査前風景(3・6トレンチ部分、西南西から)  
(2)作業風景(1トレンチ、西南西から)
- 図版第54 (1)1トレンチ全景(東から) (2)4トレンチ全景(東から)

図版第55 (1) 2 トレンチ全景(西から)

(2) 3 トレンチ全景(西から)

図版第56 (1) 5 トレンチ全景(東から)

(2) 6 トレンチ全景(東から)

# 1. 五十<sup>い</sup>河<sup>か</sup>遺跡<sup>が</sup>発掘調査概要

## 1. はじめに

五十河遺跡は、京都府中郡大宮町字五十河に所在する。今回の調査は、府営ほ場整備事業に伴うもので、京都府農林水産部の依頼を受けて実施し、調査経費は、全額負担していただいた。

五十河遺跡は、丹後半島を貫流する竹野川の上流域に位置する。調査地は、竹野川東岸に張り出した小尾根の先端部にあたる。今回は、2地点で調査を行った。南側の地点をA地区、北側をB地区と仮称する。ここでは平成9年度に京都府教育委員会により試掘調査が行われている<sup>(注1)</sup>。A地区では、平安時代を中心とする遺構・遺物が確認され、また、水晶剥片が出土した。B地区では、柱穴が検出され、中世段階のものだと推定されている。今回の調査は、その試掘調査の成果に基づいて実施した。

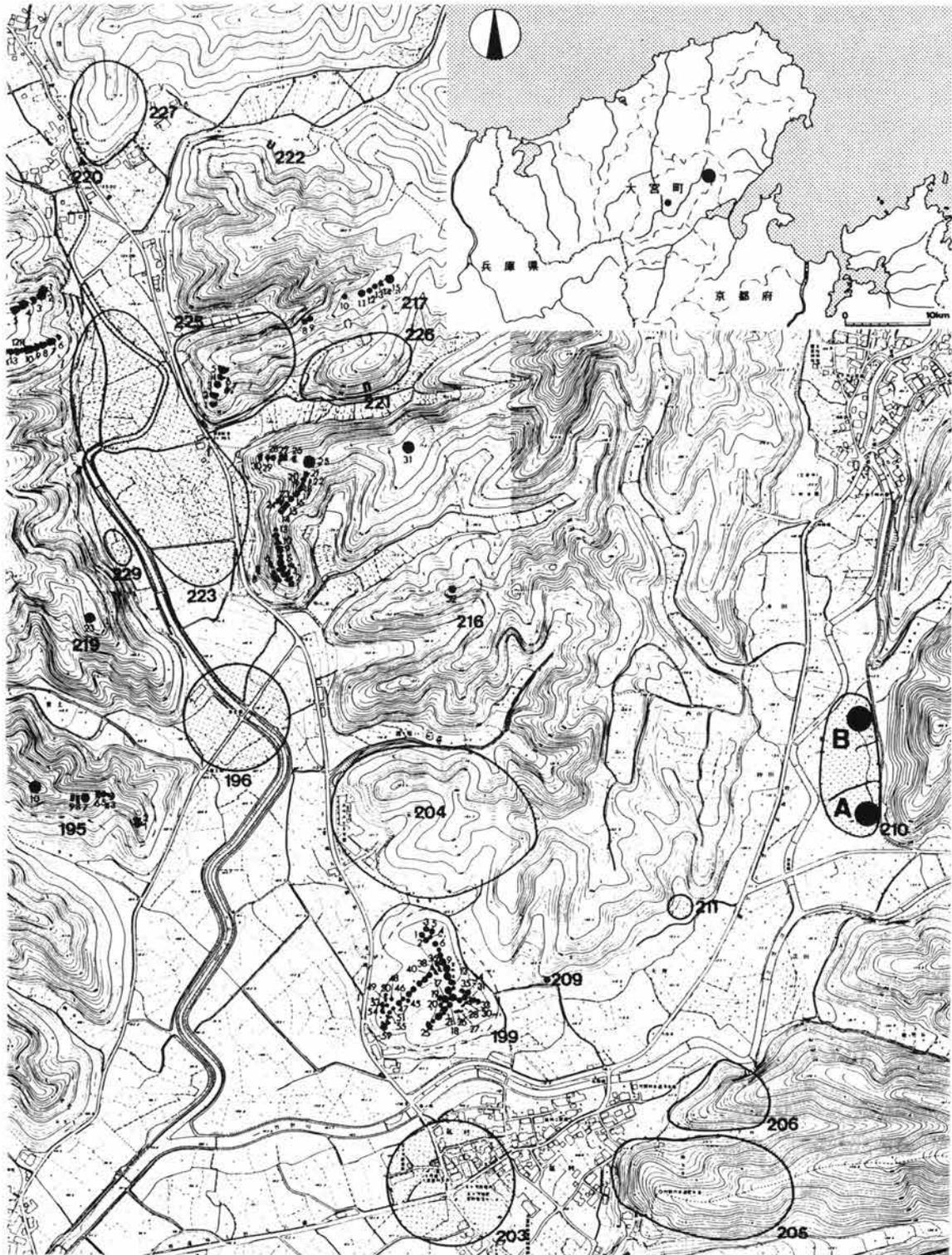
現地調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、主任調査員引原茂治である。調査期間は平成11年5月11日～8月12日で、調査面積はA・B両地区あわせて約1,500㎡である。8月11日には関係者説明会を実施した。

調査にあたっては、京都府教育委員会をはじめ、大宮町教育委員会、五十河地区ほ場整備組合長田上貞朗氏、施工業者である(株)田中組などからご協力いただいた。現地調査作業においては、地元五十河地区やその周辺地区の方々に参加していただいた<sup>(注2)</sup>。あわせて感謝したい。また、現地調査事務所として所有建物を使用させていただいた岡田 孝氏にも謝意を表したい。

## 2. 位置と環境

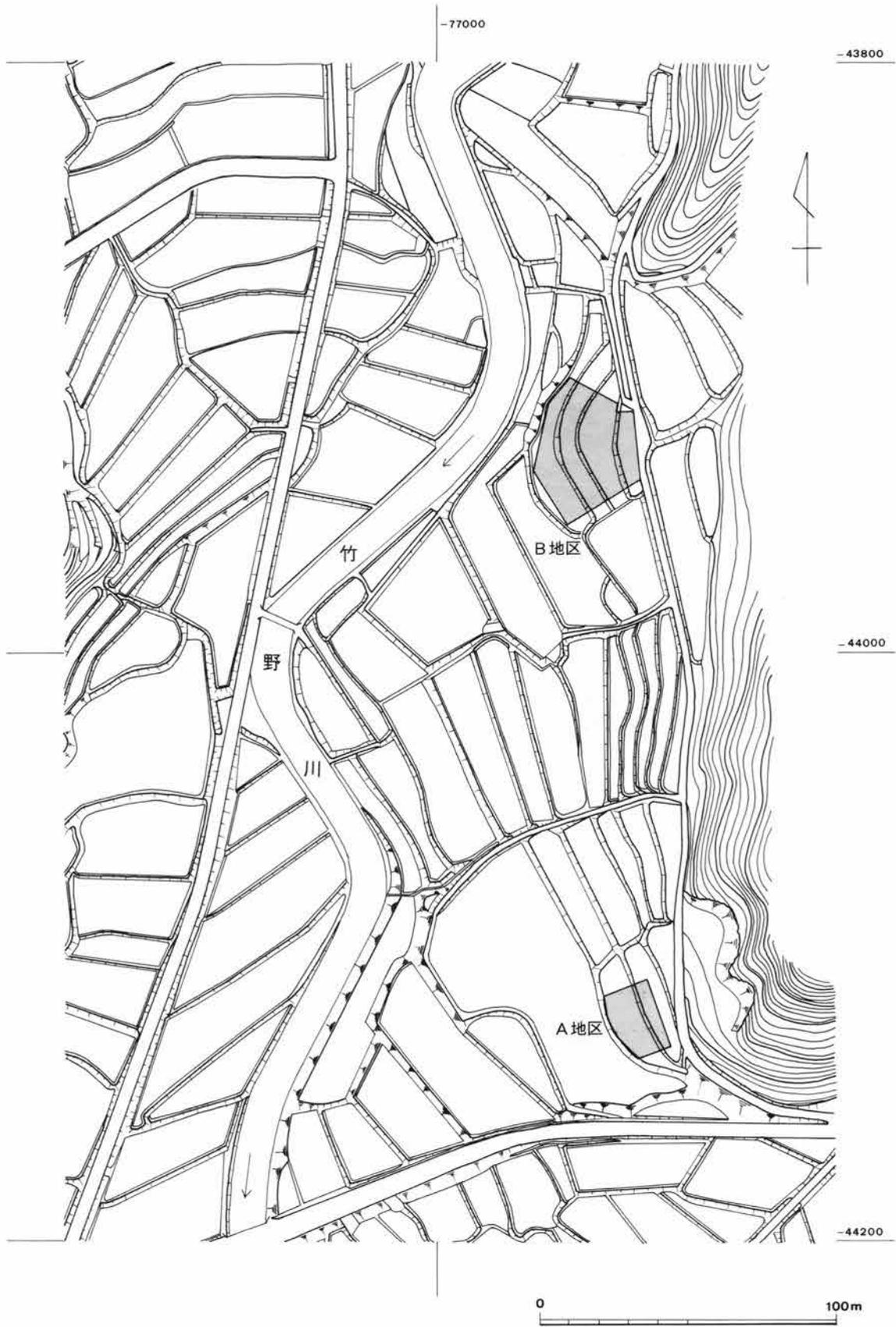
大宮町は、中央部を南北にのびる木積山系の山並みによって東西に二分される。五十河遺跡が所在する五十河地区は、その東部に属する。東部は竹野川の上流域にあたる。五十河地区北側の山地を源流とする竹野川は、木積山系に沿って南流し、山系南端で北に流れを転じ、大宮町西部から日本海まで丹後半島を南から北に貫流する。五十河遺跡は、竹野川東岸に張り出す小尾根状地形の先端部に位置する。標高は140m前後である。

周辺には、多くの遺跡が分布している。弥生時代の遺跡としては、延利遺跡・沖田遺跡・久住遺跡・岩立橋遺跡などがある。延利遺跡・沖田遺跡では磨製石斧の出土が知られている。古墳時代の遺跡としては、笠町古墳群・奥谷古墳群・熊谷古墳群などがある。数十基の古墳で構成される。熊谷5号墳は、全長21mの小規模な前方後円墳であるが、東部地域唯一の前方後円墳である。また、新宮遺跡では竪穴式住居跡が検出されている。歴史時代の遺跡としては、新宮窯跡群がある。3基の窯で構成される半地下式登窯群であり、飛鳥時代後期の須恵器窯である。中世の遺跡としては、五十河城跡・延利城跡・久住城跡などの山城跡が点在している。



第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(1/10,000.大宮町遺跡地図に加筆)

- |           |            |           |             |            |
|-----------|------------|-----------|-------------|------------|
| 210.五十河遺跡 | 195.金屋古墳群  | 196.岩立橋遺跡 | 199.笠町古墳群   | 203.延利遺跡   |
| 204.菊谷城跡  | 205.高森城跡   | 206.高森支城  | 209.荒神古墳    | 211.五十河南遺跡 |
| 216.熊谷古墳群 | 217.日ヶ谷古墳群 | 219.奥谷古墳群 | 220.彦四郎横穴   | 221.熊谷窯跡   |
| 222.堂ヶ谷窯跡 | 223.久住遺跡   | 225.久住別城跡 | 226.久住別城支城跡 | 227.久住城跡   |
|           |            |           |             | 229.雲泉寺跡   |



第2図 調査区位置図

### 3. 調査内容

今回は、上記のとおり、A・Bの2地区で調査を行った。検出した遺構の主なものは、柱穴と考えられる多数のピット・土坑・溝などである。以下、各地区の主要遺構の概要を記述する。

#### (1) A地区

この地区では、耕作土および黒茶褐色の堆積土の下層が地山の赤褐色土になり、検出遺構は、この地山を切り込んでいる。調査地中央東側に黒褐色の包含層が若干残存している。



第3図 A地区平面図

竪穴式住居跡 S H10 調査地北半部で検出した。南東隅および東辺約3.5m・南辺約1.8mのみ残存する。東辺から西側約3.3mに炉跡とみられる焼土が残存する。高杯・甕などの土師器片が出土している。赤色顔料を塗布したものもある。5世紀末から6世紀初頭頃のものともみられる。

竪穴式住居跡 S H11 調査地西側中央付近で検出した。周壁溝のみの残存であり、南東隅および東辺約4.4m・南辺約1.5mのみ残存する。周壁溝埋土から土師器片が出土している。

掘立柱建物跡 S B17 調査地南半部に位置する。南北2間×東西1間以上の東西棟の建物である。西側に1間の廂をもつ。柱間は、南北約2.2m・東西約2.6mである。柱穴埋土は、黒褐色土である。

掘立柱建物跡 S B18 調査地南西部で検出した。南北3間以上×東西1間以上とみられる。東側1間分は廂になる様子である。柱間は、東西約3m・南北約2.5mである。柱穴埋土は、黒褐色土である。

掘立柱建物跡 S B19 調査地ほぼ中央で検出した。2間×5間の総柱の建物跡である。南北約5.7m・東西約12mの規模をもつ。柱間は、南北約2.8m・東西約2.2~2.5mである。柱穴埋土は、黒褐色土である。

溝 S D01 調査地東側ほぼ中央で検出した「L」字状の溝である。南東隅および東辺約7.2m・南辺約2.1mが残存する。幅は、東辺で約1.2mである。埋土から瓦質鍋片・東播系の鉢片などが出土した。

土坑 S K02 調査地ほぼ中央東側で検出した。南北約1.6m・東西約2.2mの東西方向に主軸をもつ長方形土坑である。土師器皿片などが埋土から出土している。完掘後に底部から柱穴と考えられるピットを検出した。

土坑 S K04 調査地東側ほぼ中央で検出した。南北約1.6m・東西約0.8mの、南北方向に主軸をもつ長楕円形土坑である。埋土から手づくねの京都系土師器皿片などが出土している。

土坑 S K07 調査地ほぼ中央東側、S K02の南側で検出した。南北約2.5m・東西約2mの隅丸長方形土坑である。南北方向に主軸をもつ。埋土から土師器皿片などが出土した。土坑内には、人頭大から拳大の礫が集積している。石材は、ほとんどが花崗岩で、角礫ではない。完掘後に、底部から柱穴と考えられるピットを検出した。

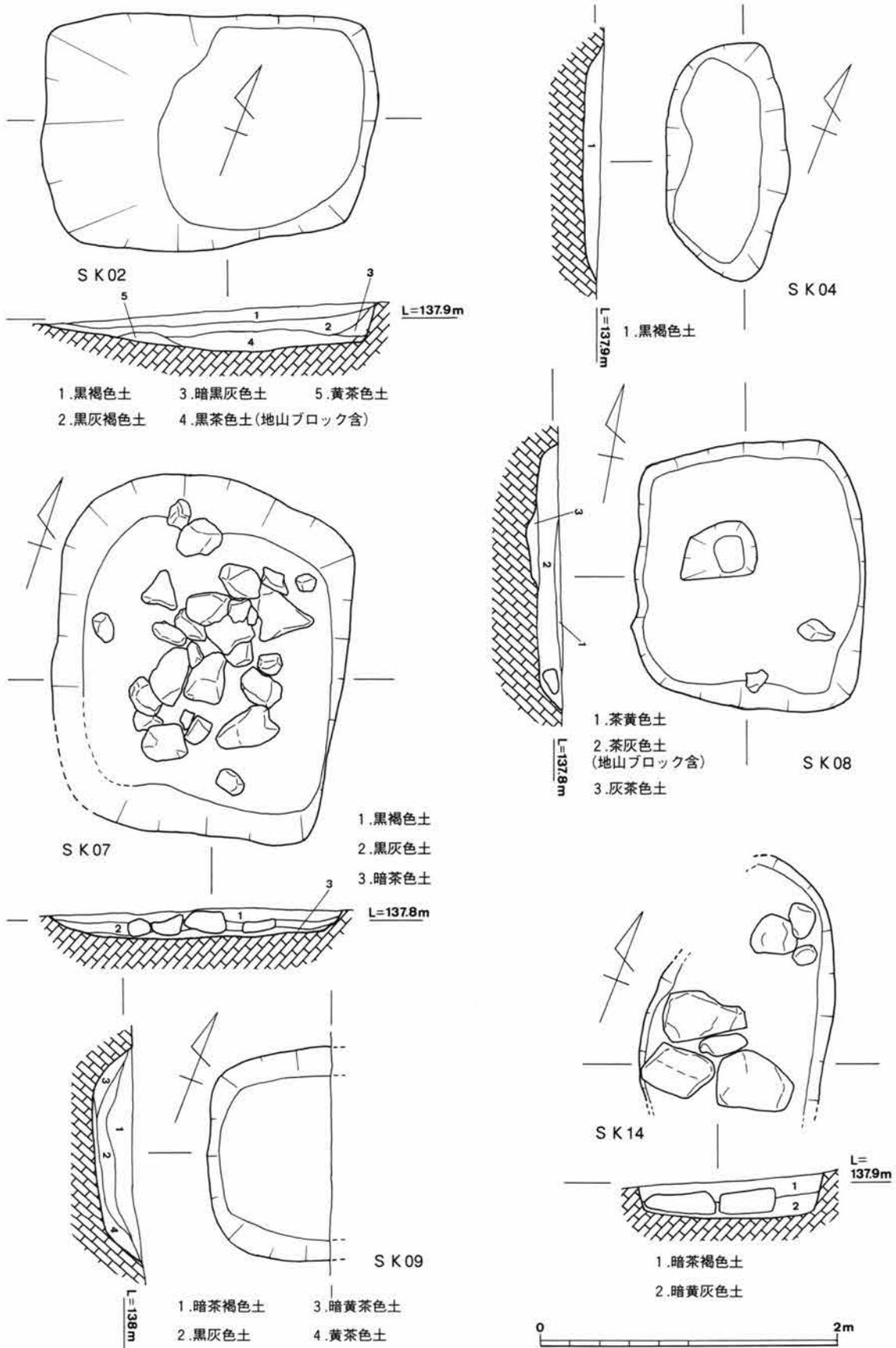
土坑 S K08 調査地北東側で検出した。南北約1.8m・東西約1.6mの土坑である。埋土から土師器皿片などが出土している。

土坑 S K09 調査地東辺の、中央よりやや北側で検出した。南北約1.5mであるが、東西の規模は調査地外となるため不明である。円形ないしは隅丸方形の土坑と考えられる。

土坑 S K14 S K02とS K07の間で検出した。東西約1.2mである。南北側はこれらの土坑に切られているため、規模は不明である。板状の花崗岩3石を敷いた状況を呈する。石材は、角礫や切石ではなく、自然礫である。

## (2) B地区

この地区の層序は、北半部では耕作土直下で砂質土層となり、遺構はこの層上から検出される。

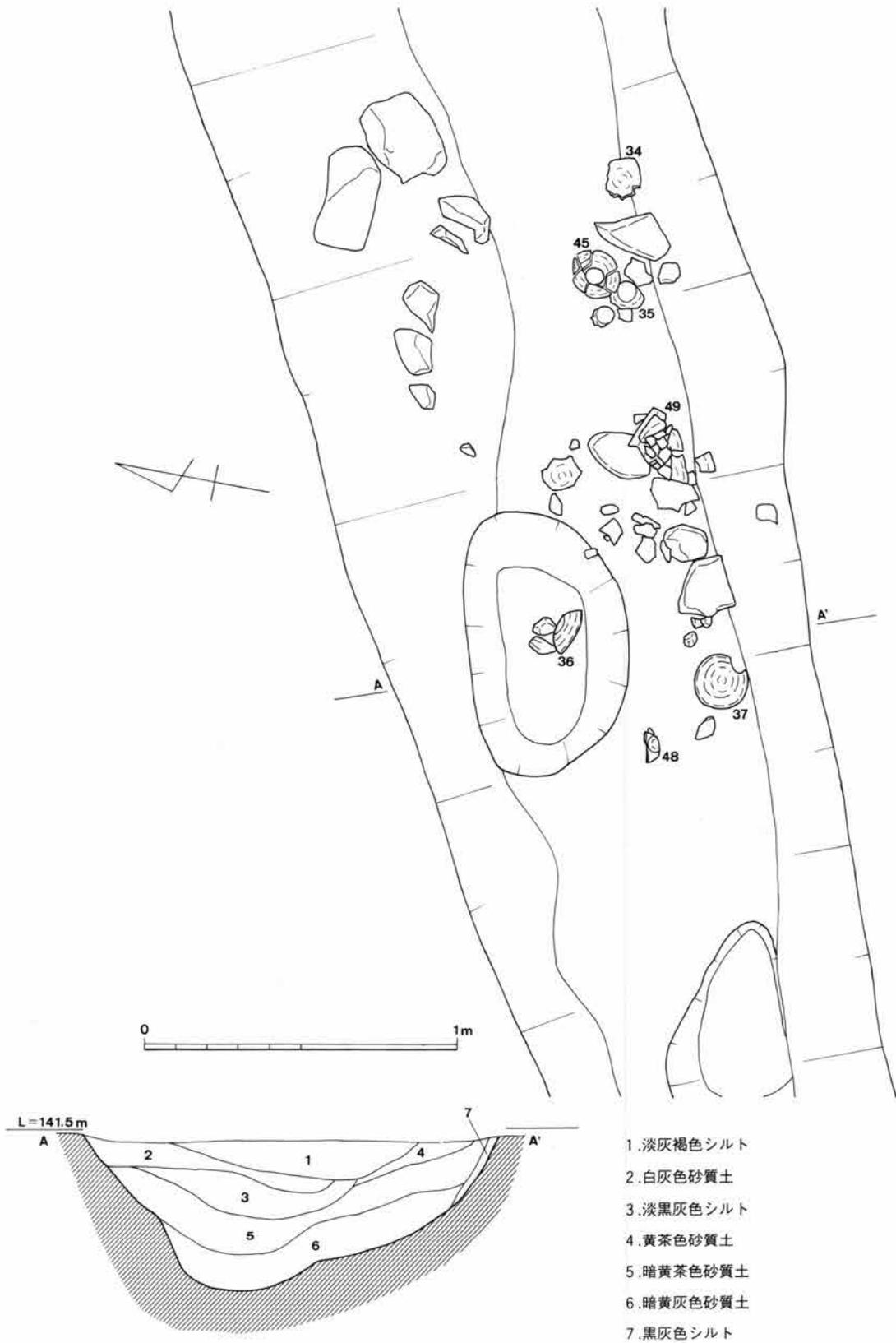


第4図 A地区主要土坑実測図

南半部では、耕作土下に整地土・包含層などがみられる。遺構はその下の砂質土層上から検出される。遺構のベースは全体的にはほぼ砂質土層であるが、シルト層や粘質土層になる部分もあり、沖積地状の様相である。この地区からは、柱穴とみられるピットを多数検出したが、具体的に建物として復原できるものはない。



第5図 B地区平面図



第6図 B地区S D21部分図

溝S D21 調査地ほぼ中央を、北東から南西に向かって直線的にのびる素掘りの溝である。幅は約0.3~1.5mである。中央やや東寄りの部分から、土師器・黒色土器・中国製白磁などがまとまって出土した。

溝S D22 S D21のほぼ中央から南に向かって分岐する素掘りの溝である。幅は約0.3~1mである。南東方向に湾曲する部分から、土師器・黒色土器などがまとまって出土した。

#### 4. 出土遺物

今回の調査では、多数の遺物が出土したが、そのほとんどが土器・陶磁器である。ほかに石器が少量とB地区の包含層から北宋銭の皇宋通寶が1点出土している。

##### (1) 土器・陶磁器

###### ① A地区

溝S D01 1・2・3は土師器皿で、いずれも底部糸切りである。1は口径8cm・器高1.3cm、2は口径8.2cm・器高1.3cm、3は口径7.8cm・器高1.6cmを測る。4は、土師器皿で、口縁部が外反気味に立ち上がる。磨滅のため、調整は不明である。口径14.9cm・器高2.2cmを測る。5は、土師器碗で、水挽き成形のロクロ目が残る。内外面ともミガキはみられない。口径11.6cmである。6は、黒色土器碗で、内面のみに炭素を吸着させたA類である。内外面をミガキ調整する。口径15.3cmである。7は、瓦質の鍋で、口縁部を「て」の字状に屈曲させる。表面が磨滅しており調整は不明である。口径33.8cmを測る。12世紀末~13世紀初頭頃のものともみられる。8は、須恵質の鉢で、東播系のものである。注口をもつ。口径29.8cmを測る。7とほぼ同時期とみられる。

土坑S K02 9は、黒色土器碗の底部で、低い糸切り高台をもつ。A類で、内面にミガキが残る。高台径6cmを測る。

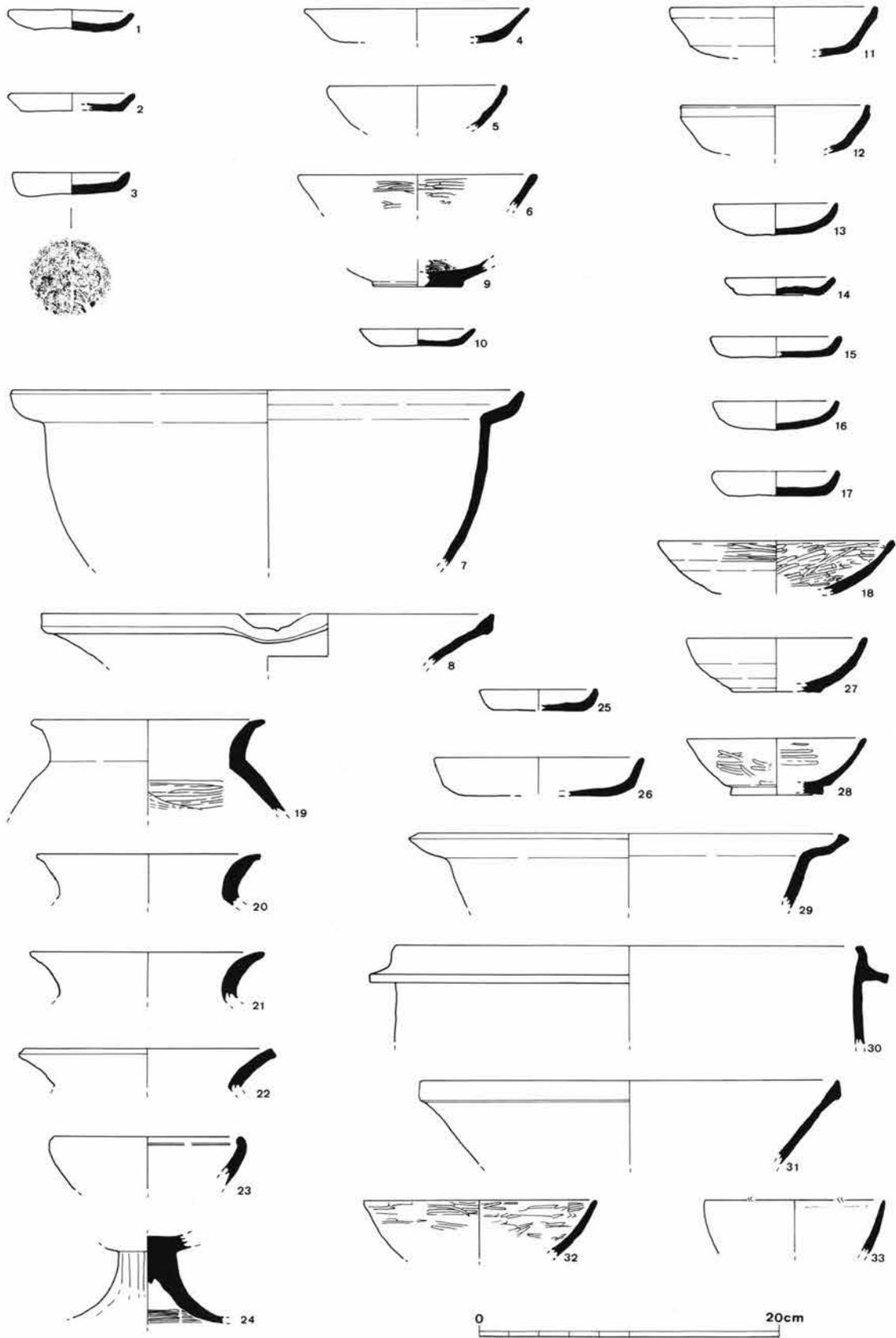
土坑S K04 11・12は、土師器皿で、体部外面を強く横ナデする。口縁端部は、やや内湾気味になる。手づくね成形である。11は口径13.8cm、12は口径12.6cmを測る。12世紀末~13世紀初頭頃のものともみられる。13は、土師器皿で、手づくね成形である。口径8cm・器高2.1cmを測る。14は、土師器皿で、底部糸切りである。口径7cm・器高1.2cmを測る。

土坑S K07 15は、土師器皿である。磨滅のため調整は不明である。口径8.4cm・器高1.4cmを測る。

土坑S K08 10は、土師質の皿で、底部糸切りである。口径7.4cm・器高1.2cmを測る。

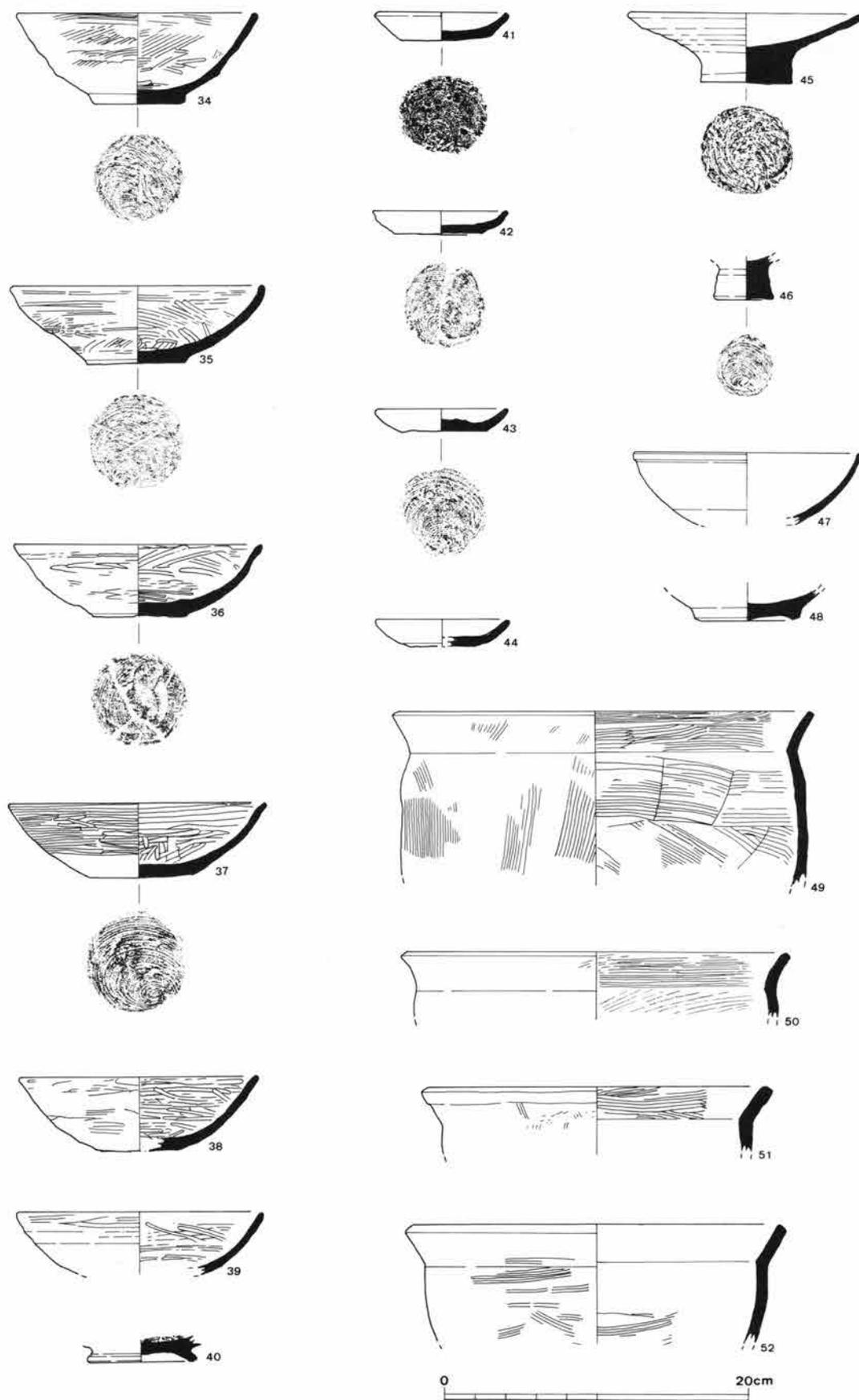
ピット 16は、土師器皿で、手づくね成形である。口径8.4cm・器高1.9cmを測る。P A 6出土である。17は、土師器皿で、底部糸切りである。口径8.4cm・器高1.6cmを測る。P A 20出土である。18は、黒色土器碗で、A類である。内外面をミガキ調整する。口径15cmを測る。P A 383出土である。

竪穴式住居跡S H10 19~23は、土師器甕の口縁部である。それぞれ口径は15.6cm・12.8cm・15cm・16.5cm・12.5cmである。19・20は、口縁端部が強く外反する。22の端部は面をもつ。23の端部は内湾し、やや肥厚する。いずれも器胎はやや厚目である。24は、土師器高杯の脚部である。



第7図 A地区出土遺物実測図

1～8. 溝S D01 9. 土坑S K02 11～14. 土坑S K04 15. 土坑S K07 10. 土坑S K08 16～18. ビット  
 19～24. 竪穴式住居跡S H10 25～32. 包含層 33. 耕作溝



第8図 B地区溝S D21出土遺物実測図

磨滅のため調整の詳細は不明であるが、脚部内面端部にはハケメ調整が残る。

包含層 25・26は、土師器皿である。25は、底部糸切りである。26は、磨滅のため調整不明である。それぞれ口径7.6cm・器高1.5cm、口径13.8cm・器高2.5cmを測る。27は、土師器碗である。ミガキ調整はみられない。口径11.8cm・器高4.5cmを測る。28は、糸切り高台の黒色土器小碗である。内外面に炭素を吸着させたB類である。内外面ともミガキ調整する。口径12cm・器高3.8cm・高台径6.2cmを測る。29は、瓦質の鍋である。「て」の字状に屈曲する口縁部をもつ。口径29.4cmを測る。30は、土師器羽釜である。口径30cmを測る。31は、東播系の須恵質鉢である。口径27.6cmを測る。32は、黒色土器A類の碗である。口径15.4cmを測る。

その他 33は、肥前染付磁器碗である。18世紀頃のものともみられる。耕作溝出土である。

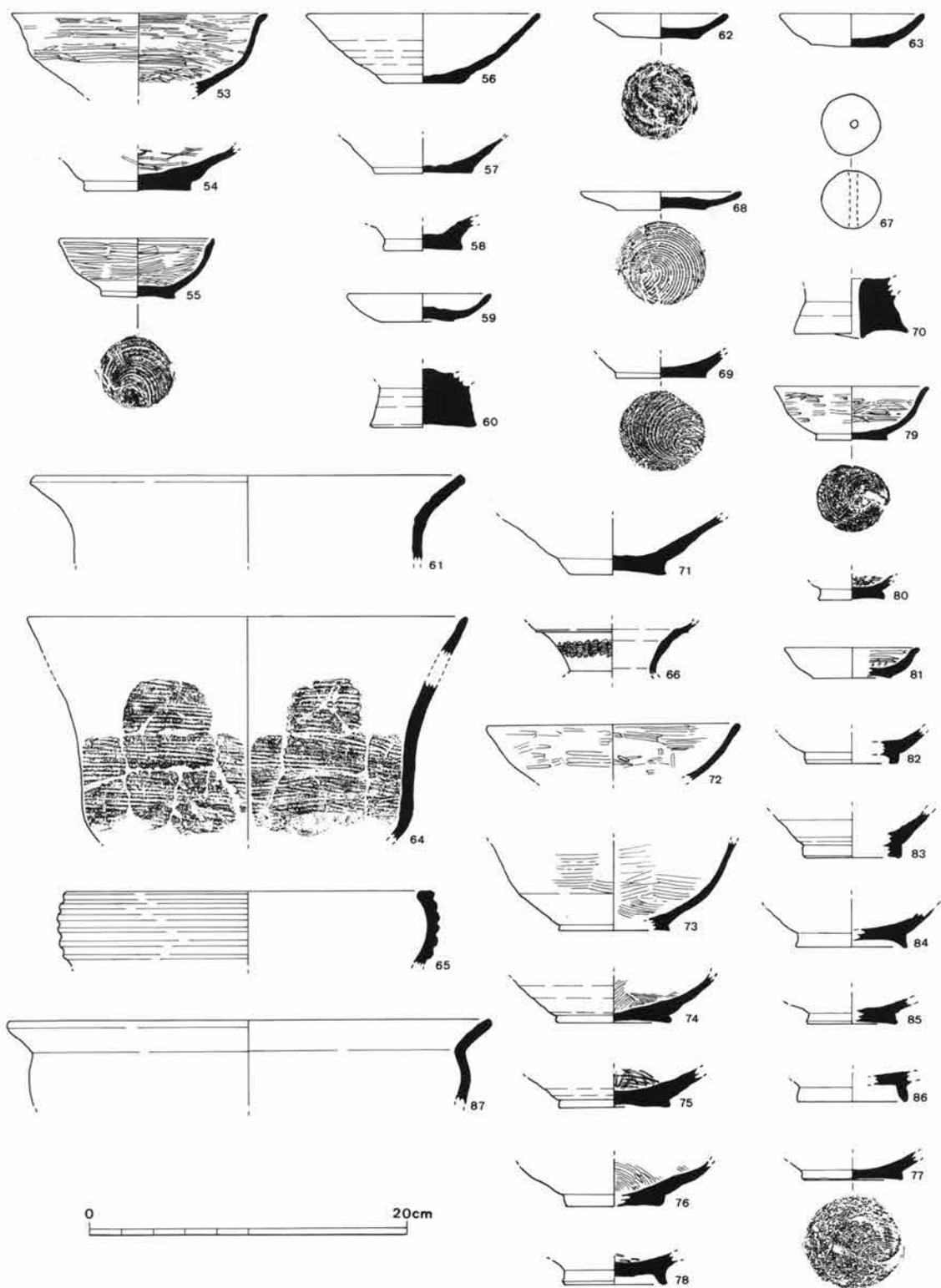
## ②B地区

溝SD21 34~40は、黒色土器碗で、A類である。内外面をミガキ調整する。34は、口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、糸切り高台をもつ。口径15cm・器高5.9cm・高台径5.8cmを測る。35は、口縁端部が内湾気味になり、やや低目の糸切り高台をもつ。口径16.4cm・器高5.1cm・高台径6.4cmを測る。36は、口縁端部が外反気味になり、わずかな糸切り高台をもつ。口径16.2cm・器高4.7cm・高台径6.3cmを測る。37・38は、高台がなくなる。それぞれ口径16.6cm・器高4.9cm・底径6.6cm、口径15.4cm・器高4.9cm・底径5.6cmを測る。39は、口径15.6cmを測る。40は、貼付高台をもつ。高台径6.7cmを測る。41~44は、土師器皿である。底部糸切りである。それぞれ口径8.5cm・器高1.9cm、口径8.4cm・器高1.6cm、口径8.3cm・器高1.5cm、口径8.7cm・器高1.7cmを測る。45は、土師器皿で、高い糸切り高台をもつ。外面にはロクロ目が残るが、内面は平滑である。口径15.4cm・器高4.5cm・高台径6.1cmを測る。46は、同様の皿の高台とみられる。高台径2.5cmを測る。47は、中国製の白磁碗である。体部は丸みをもち、端部は細目の玉縁口縁になる。大宰府編年<sup>(註3)</sup>でⅡ類に分類されるもので、11世紀中葉~12世紀初頭頃のものともみられる。口径14.6cmである。48は、白磁碗底部である。見込みに段をもつ。高台径5.9cmである。49~52は、土師器鍋である。「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、内外面ともハケメ調整される。それぞれ口径26cm・24.8cm・22.7cm・24.1cmである。

溝SD22 53・54は、黒色土器A類の碗である。内外面ともミガキ調整する。53は、口縁端部が外反し、腰部が明瞭に屈曲する。口径16cmである。54は、高台径6.7cmである。55は、黒色土器B類の小碗で、内面口縁端部に沈線をもつ。口径9.7cm・器高3.7cm・高台径4.7cmを測る。56~58は、土師器碗である。内外面に水挽のロクロ目が残り、ミガキ調整はされていない。56は口径14.5cm・器高4.4cm・高台径5.2cm、57は高台径6.2cm、58は高台径5cmを測る。59は、糸切り底の土師器皿で、口径8.8cm・器高1.8cmを測る。60は、高い糸切り高台をもつ土師器皿の高台とみられ、高台径6.8cmを測る。61は、土師器鍋で、口径26.8cmを測る。

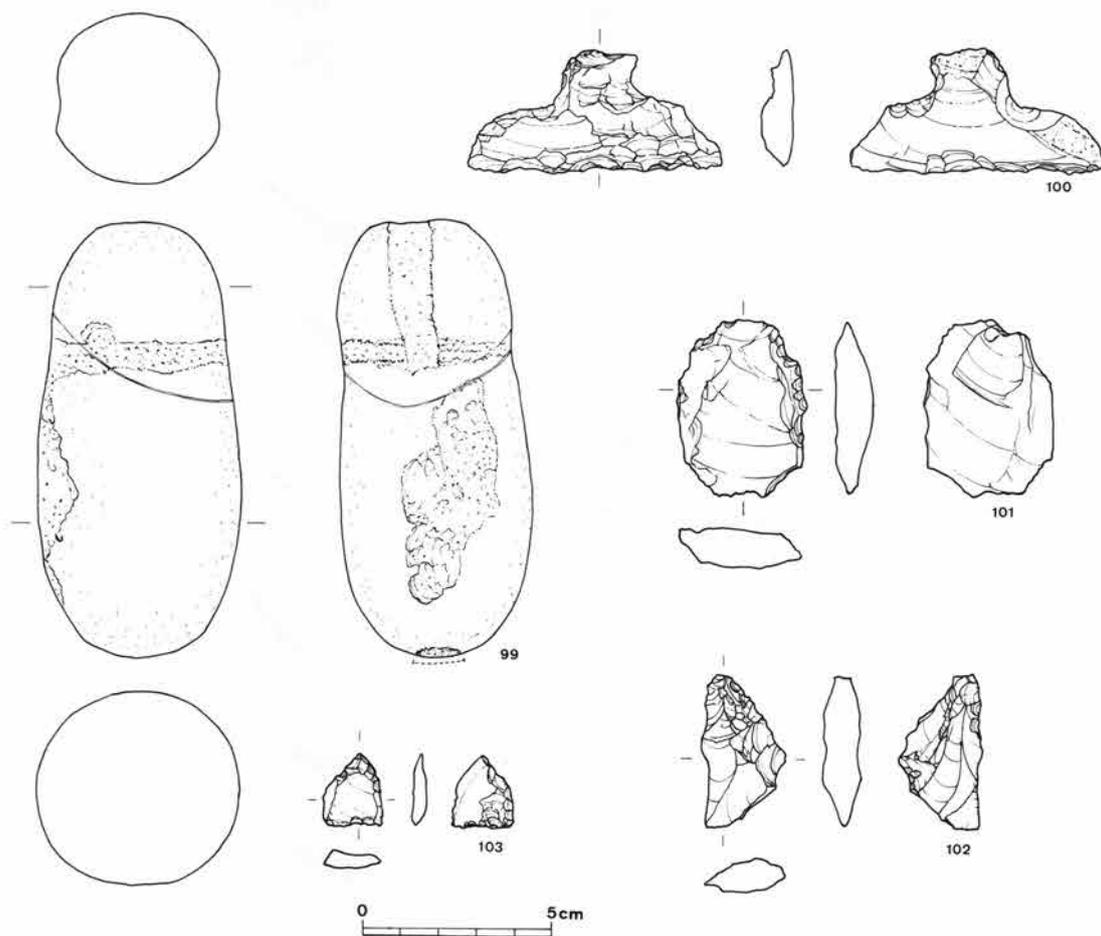
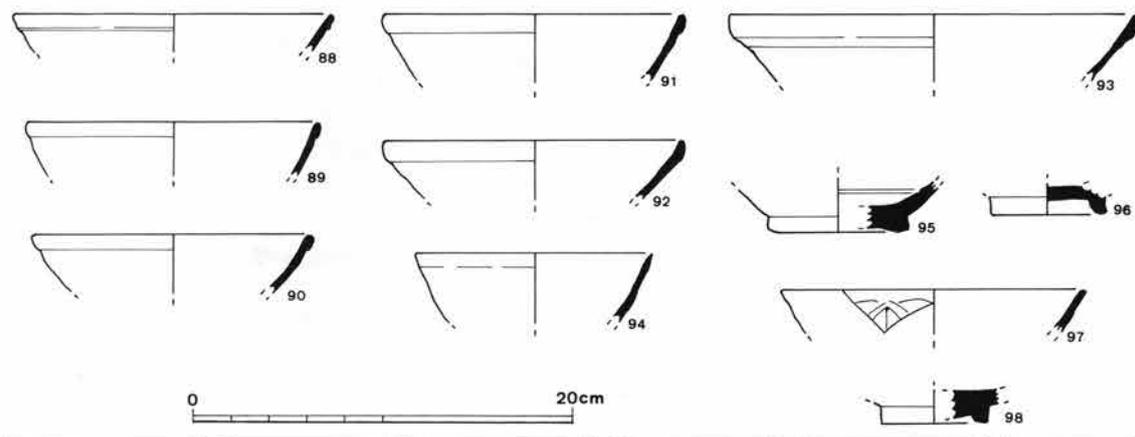
ピット 62・63は、糸切り底の土師器皿で、それぞれ口径8.1cm・器高1.6cm、口径8.7cm・器高2.1cmを測る。62はPB104、63はPB246出土である。

包含層 64は、縄文土器鉢とみられる。内外面に条痕文を施す。口縁端部は山形になるとみら



第9図 B地区出土遺物実測図  
53～61.溝S D22 62・63.ピット 64～87.包含層

れるが、小片のため復原できない。65は、弥生土器台付無頸壺の口縁部とみられ、外面に凹線文を施す。畿内第IV様式併行とみられ、口径21.8cmを測る。66は、須恵器甕の頸部であり、波状文を施す。陶邑古窯址群の編年でT K47型式併行か。67は、球形の土錘とみられる。径3.8cmを測



第10図 出土遺物実測図(B地区・石器)

る。68・69は、糸切り底の土師器皿で、68は口径10.2cm・器高1cm、70は底部径5.6cmを測る。68は、高い糸切り高台の土師器皿の高台に類似するが、焼成前に穿孔されている。径7.2cmである。孔径は1.1~1.4cmである。71は、土師器碗である。高台径6.2cmを測る。72~78は、黑色土器A類の碗である。78のような貼付高台をもつものもある。79・80は、黑色土器B類の小碗である。79は、口径9.6cm・器高3.4cm・高台径4.5cmを測る。81は、黑色土器B類の皿である。口径8.4cm・器高2.9cm・底径4.9cmを測る。82~85は、須恵器である。85は、糸切り高台をもつ。86は、灰釉陶器とみられる。高台外面にわずかに灰釉が付着している。高台径7cmを測る。87は、

土師質の鍋である。ハケメ調整される。口径32cmを測る。88～94は、白磁碗の口縁部である。細目の玉縁口縁のもの(88～90)、太い玉縁口縁のもの(91～93)、玉縁口縁でないもの(94)がある。95・96は、白磁碗の高台である。97は、青磁碗の口縁部で、外面に連弁文を施す。口径16cmを測る。98は、青磁碗の高台で、見込みに印花文を施す。高台径5.8cmを測る。

## (2)石器

99は、繭形の石錘とみられる。頂部からくびれ部にかけて切目があり、くびれ部付近に斜行する線刻がみられる。敲打痕があり、敲石としても使用されていたものと考えられる。淡緑灰色を呈する。全長11.4cm・最大径5.4cmを測る。100は、石匙である。やや雑な作りである。石材は不明である。6.7cm×3.3cmを測る。101・102はチャートの剥片である。101は黄橙色、102は暗青緑色を呈する。103は、サヌカイトの剥片とみられる。

## 5. ま と め

今回の調査では、各時期にわたる遺構・遺物を多数確認した。A地区で検出した土坑は、その性格は不明であるが、その形態から墓の可能性も考えられる。これらの土坑からは、12世紀末～13世紀初頭頃の土師器皿・瓦質鍋などが出土した。これらの土坑の東側に、「L」字状の溝SD01がある。土坑と同時期の土器が出土しており、元は、これらの土坑を方形ないし「コ」字状に囲んでいたものとも考えられる。土坑を墓と考えると、周囲を溝で囲まれた墓地が復原できる。なお、土坑SK07の石を取り除いた段階で、底部からピットを検出しており、ピットの方が土坑に先行すると考えられる。

このほか、この地区からは、古墳時代の竪穴式住居跡2基(SH10・11)を検出した。いずれも断片的にしか残っていないが、出土した土器から、5世紀末頃ないしは6世紀初頭頃の住居跡とみられる。また、東西方向の溝群も検出した。18世紀頃の肥前磁器(伊万里)片が出土しており、その時期以降の畑耕作に伴う床掘りとみられる。

このような状況から、A地区では、古墳時代以降平安時代まで居住地であったものが、鎌倉時代初頭頃に墓地に変わり、江戸時代後期頃には耕作地になっていたものと考えられる。

B地区の溝SD21から出土した白磁碗は、12世紀前半頃に比定され、この溝はその時期のものと考えられる。ピットは、溝埋土上から掘り込まれており、溝より新しいものと考えられる。なお、包含層から、縄文土器片や石器剥片・弥生土器片・古墳時代の須恵器片なども出土しており、付近にそれらの時期の遺跡が存在する可能性が考えられる。特に縄文土器の出土は、丹後地域の数少ない縄文時代の遺跡の存在を示す資料と言えよう。

(引原茂治)

注1 森 正「五十河・新宮遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1998)』 京都府教育委員会) 1998

注2 調査参加者は以下の通りである(順不同・敬称略)。

沖上美和子・山口奈美・藤村文美・岡田由美・中川明美・田上政子・田上初子・田上利治・田上三郎・田上貞朗・田上和子・上田ユリ子・上田喜知恵・井上幸子・井上盈恵・井上喜久治・大下喜久代・永島俊夫・野村 功・吉村晴夫・水口節夫・楠田太助・谷口勝江・山本弥生・丸谷はま子・及川あや子

注3 森田 勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館) 1978

注4 近隣に位置する久住遺跡から類似の遺物が出土している。

今田昇一「平成9年度町内遺跡試掘調査概報」(『大宮町文化財調査報告書』第13集 大宮町教育委員) 1998

## 2. 南稲葉遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

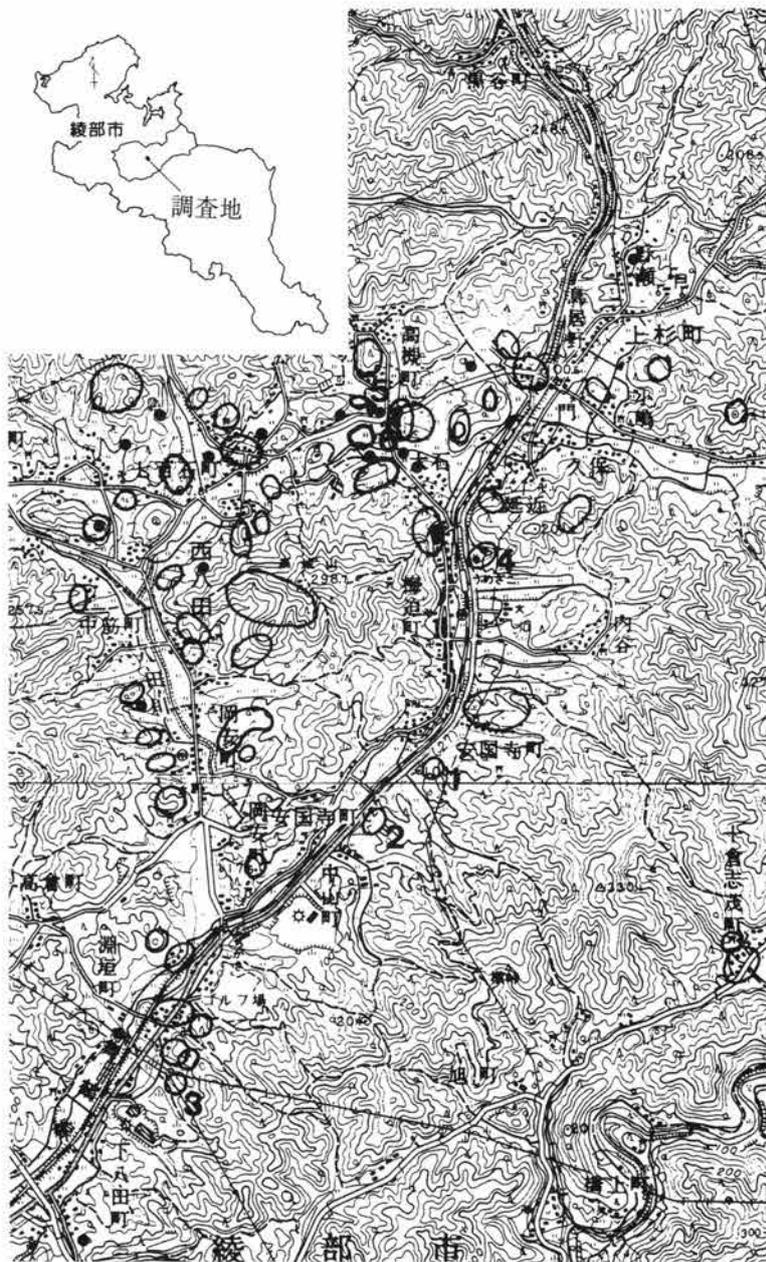
今回の調査は、建設省近畿地方建設局の依頼を受け、京都縦貫自動車道建設工事に伴って実施したものである。調査地は京都府綾部市安国寺町字南稲葉に位置する。この南稲葉遺跡は、国道27号とJR舞鶴線が縦断する八田川流域の狭い平野部を見下ろす丘陵上にある(第11図)。その丘陵一带に五輪塔・一石五輪塔・石仏などが点在する中世墓地として周知された遺跡である。調査地周辺の丘陵裾部には、散布していた石仏や五輪塔を集めて安置したとみられる部分を確認することができる。また丘陵上にはいくつかの浅谷による起伏が見られるものの、台地状の平坦地が広々と展開している。調査地は現在の丘陵先端部から、奥の山間部へ約200m入った所までの広い範囲に及ぶ。この調査範囲において、遺跡の広がりを確認するための試掘調査を実施し、本格調査は顕著な成果の得られた地点を中心に次年度に行う予定である。

調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、調査第1係主査調査員黒坪一樹が担当した。現地調査期間は平成11年10月20日～平成12年2月28日までである。調査面積は約1,200m<sup>2</sup>である。全調査期間を通じ、京都府教育庁指導部文化財保護課・綾部市教育委員会からはあたたかい御指導・御協力を得た。現地の作業員各位は、社団法人綾部市シルバー人材センターからの派遣で、厳冬期のたいへんな作業に最後まで熱心に従事していただいた。さらに調査補助員・整理員の方々にも、測量遺構実測や遺物の洗浄・接合・実測などで御協力いただいた。以上の関係者の方々に心より御礼申し上げる次第である。<sup>(注1)</sup>なお調査にかかる費用は全額建設省近畿地方建設局が負担した。

### 2. 位置と環境

南稲葉遺跡のある安国寺町は、綾部市北東部を流れる八田川の中流域に位置している。谷合いを国道27号やJR舞鶴線が縦走し、北に向かっては丹後・若狭に通じる道の要衝と言える。

八田川中流域のこの辺りは、北東から南西に縦走する狭い谷平野で、大小の丘陵が平野部に向かって延びている。この地域は八田川下流域(久田山丘陵～吉見盆地)や上流域(高槻・上杉町付近)と比較して、遺跡の調査例は少ない。これまでのところ、旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡の存在は明確ではない。古墳時代の調査には重要なものがある。<sup>(注2)</sup>特に古墳時代後期(6世紀前半)の安国寺平山古墳1号墳(第11図2)の調査では貴重な成果が上がっている。この古墳は、直径約20m・墳丘高2.2～3.3mの規模で、木棺直葬の主体部内からは須恵器・土師器などの土器のほか、豊富な鉄製馬具や刀・土玉などが出土している。また周辺において中世墓関連遺構の存在も明らかとなっている。



第11図 調査地および周辺遺跡分布図(S=1/50,000)

- 1. 南稲葉遺跡 2. 安国寺平山古墳 3. 兵谷4号墳
- 4. 石子古墳群 5. 茶臼山古墳群 6. 野崎古墳群

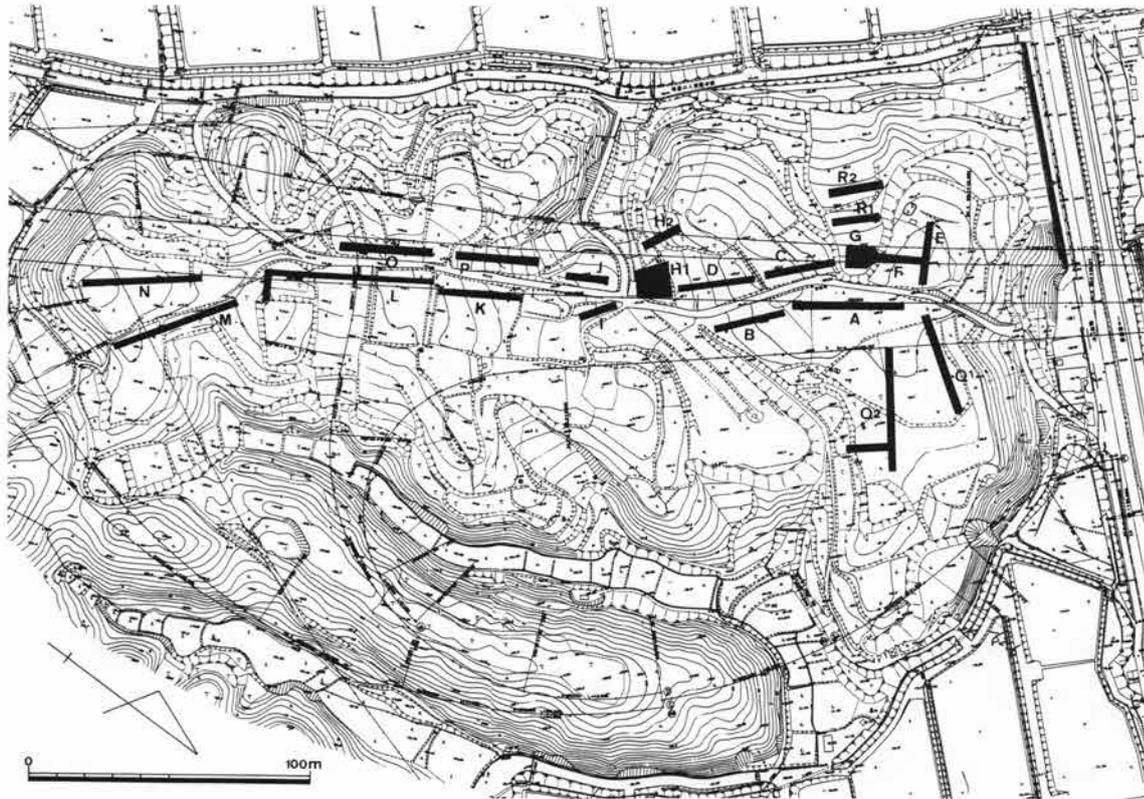
## 2. 調査概要

### (1) 検出遺構

今回の試掘調査では、広く起伏のある丘陵上および浅谷部に合計20本(A～Rトレンチ)の細長いトレンチを掘削し、遺構・遺物の確認に努めた(第12図)。その結果およそ半分のトレンチから何らかの遺構や遺物が得られた。調査地のほぼ中間地にあたるI・Jトレンチから南側については、MトレンチとLトレンチ中間部の谷部、さらに斜面地であるPトレンチにおいてまとまった遺物の包含層を確認した。すべて丘陵上ではなく、低くなった谷地形や斜面地に当たっている。遺物の時期はおおよそ奈良時代に属するものである。これら遺物の出土状況からみて、かつては丘

安国寺平山古墳の立地するのと同様な丘陵は、近隣地区の淵垣町・上杉町にもあり、淵垣町の兵谷古墳群(第11図3)・淵垣古墳群、上杉町の石子古墳群(第11図4)などが点在しており、八田川中流域の古墳文化を知る上で重要なものである。八田川上流域の高槻町にも、前方後円墳である茶臼山古墳(注4)(同図5)、野崎5号墳(注5)(同図6)をはじめ、多くの古墳がある。

飛鳥時代～平安時代にかけての遺跡は、安国寺町内ではこれまでのところ知られていないが、綾部市街により近い味方町の味方遺跡からも当該期の竪穴式住居跡の検出が報告されている。また著名な文化財としては調査地の対面の丘陵地に、安国寺町の町並みにとけこむように足利尊氏生誕の寺院とされる安国寺がある。



第12図 トレンチ配置図

陵上に建物等が存在していた可能性は高いが、長年における開墾で現在ではまったく消滅していると考えられる。I～K・M～Oトレンチからは顕著な遺構・遺物を検出することはできなかった。

Hトレンチでは、谷部であるにもかかわらず、暗褐色土の詰まった竪穴状の落込みや柱穴痕などの遺構を検出している。ただ、これらの遺構は不明瞭なもので、確実に竪穴式住居跡や掘立柱建物跡を構成するものとはならないようである(図版第16)。

調査地北側のRおよびGトレンチからは、竪穴式住居跡(Gトレンチ)・柱穴痕(RおよびGトレンチ)・溝(Gトレンチ)などの顕著な遺構を検出することができた。またそれらの遺構に伴う多量の出土遺物がある。出土遺物の年代は、主に飛鳥時代後半(7世紀前半)～平安時代前半(9世紀前半)にかけてのもので非常に幅がある。竪穴式住居跡・溝の所属時期は飛鳥時代末～奈良時代にかけてのものと思われるが、詳細は検討中である。

竪穴式住居跡は、2基が切り合いをもって重なっている。ともに後世の削平を受けて、ほとんど立ち上がりがみられない状態であるが、1基は一辺5m・深さ10cmほどを測る。東側の長辺中央部に土師器の集積と焼土の範囲を検出している。床面(機能面)からは、土師器(杯・移動式竈など)・須恵器(杯身・杯蓋など)が出土している。もう1基は、谷状の落込みによって西側を大きく消失している。東側の1辺は、およそ4m・深さ数cmを測る。柱穴痕は、直径20～50cmを測るものがある。竪穴式住居跡と柱穴痕は現在も調査中であり、住居跡の構造や建物跡の抽出などについては不明である。今後整理作業で明らかにしていきたい。

溝は古い方の住居跡の周壁に沿って掘られているが、南西側はその住居跡を壊してのびている。そしてより新しい時期の竪穴式住居跡を囲んでおり、その竪穴式住居跡の排水用に掘られたもの

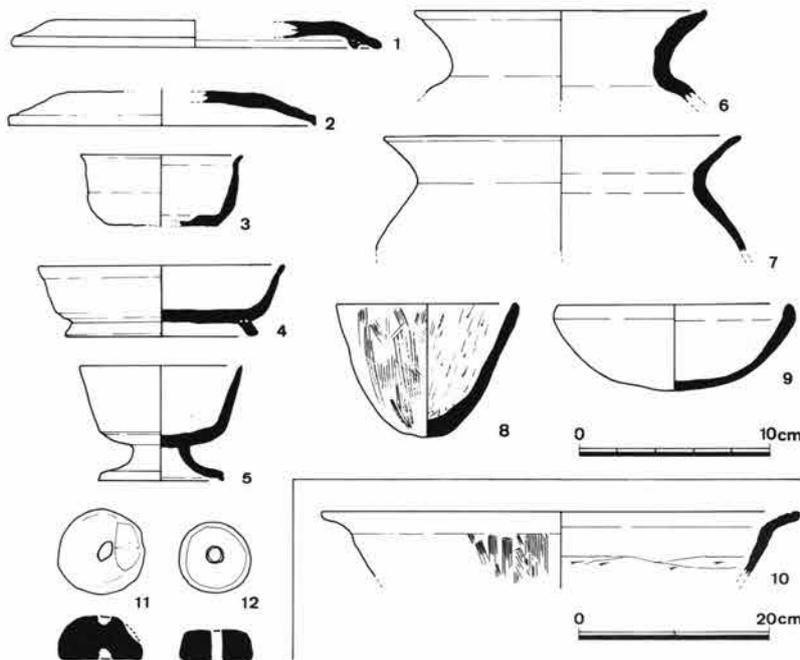


第13図 Gトレンチ 竪穴式住居跡

であろう。溝の平均的な幅は約40cm、深さは約10cm前後である。

その他、Gトレンチ西側では谷部の落込みを確認している。暗黒褐色土の堆積が厚く認められ、その層中に多量の土師器・須恵器などの遺物が包含されている。時期は奈良時代～平安時代前半頃までとみられる。またこの谷部は、Rトレンチの谷部に続くものと考えている。

Rトレンチでは、北側で地山面の堅い岩盤の検出をみたが、中間部は2m以上の谷部の深い堆積(包含層)がみられる。包含層中からは、多量の須恵器・土師器が出土している。



第14図 Rトレンチ出土遺物実測図

積(包含層)がみられる。包含層中からは、多量の須恵器・土師器が出土している。時期はおよそ8世紀代のものが中心であるが、全体の詳細は整理中のため明らかになっていない。上の丘陵部における遺構は、前述の竪穴式住居跡や溝などであるが、本トレンチの出土遺物量からみて、もっと多くの遺構群が丘陵上に存在していたものとする。

(2)出土遺物

ここでは、Rトレンチ中間部の深い谷を埋めた包含層下層から出土した遺物を図化した。1・2は須恵器蓋である。1は口縁部の直径(口径)18.4cmを測り、口縁内側にかえりをもつものである。時期は7世紀前半頃である。2は口径16.2cmで、杯蓋であろう。これは2に比較して時期的に新しく8世紀に入る資料である。3・4は須恵器杯Aと杯Bである。3は口径4.4cm・器高3.8cmを測り、口縁部端部がやや外反している。4は口径12.8cm・器高3.9cmで、底部の高台は外にやや踏ん張った形態をとっている。時期は8世紀中葉である。5は須恵器高杯で、深い杯部に短い脚部がつく小型のものである。6は土師器壺で、口径15.4cmを測る。体部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。口縁部内面には、ナデ整形によるなだらかな起伏がみられる。7は土師器甕である。口径18.8cmである。内外面ともナデ整形が施される。8は小型の土師器鉢である。砲弾形を呈し、器高約7cmである。手づくねのいびつな整形で、体部径はやや楕円形となっている。外面にハケメの調整、内面は縦方向のケズリ調整が観察される。9は土師器碗である。口径12.8cm・器高4.6cmで、赤い色調である。10は土師器鍋とみられる。体部から大きく開く口縁部で、口径50.5cmを測る。体部外面はハケメ、内面下半はケズリで調整される。

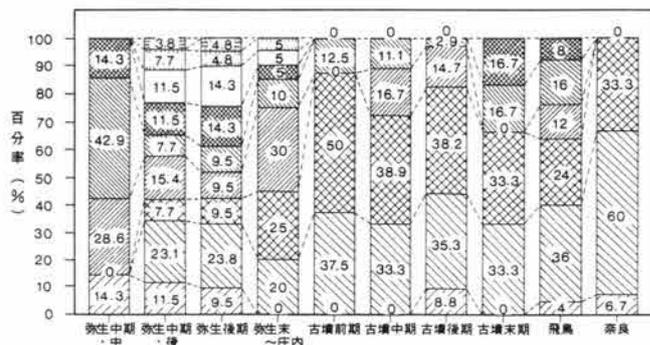
11・12は土師器製の紡垂車である。11は中心の穿孔が未完である。重さは11が50g、12が30gである。

3. ま と め

今回の試掘調査において、当初に予想していた中世墓群については、その片鱗さえ検出してない。丘陵裾部に近い場所に分布しているのかもしれないが、それらについては詳細を明らかにすることはできなかった。

調査区のI・Jトレンチより南側については、トレンチ内で検出した浅谷に溜まった堆積層から若干の遺物が出土したのみである。

調査地の丘陵先端部側のR・Gトレンチでは、顕著な遺構(竪穴式住居跡・溝・柱穴)や遺物



第15図 由良川流域竪穴式住居跡規模分布図(注4文献より)

(須恵器・土師器)を確認した。主として飛鳥～平安時代に営まれた集落に伴うものとする。Gトレンチの竪穴式住居跡は2基あり、その内の1基は一辺5mを測る。後世の削平が著しく、遺存状況は悪いが、柱穴痕や竈らしき焼土の集中部分などを検出しており、飛鳥～奈良時代の土器類とともに

に当地域の集落立地を知る上で重要な発見といえる。この八田川流域ではないが、広く由良川中・下流域の竪穴式住居跡のデータを収集し、それらの床面積・出土遺物を特に重視して、集落の性格や時代の画期を理解しようとする研究がある<sup>(注6)</sup>。それによると、古墳時代末～飛鳥時代にかけては、古墳時代前期～後期にはなかった床面積50㎡<sup>(注6)</sup>のものが再び出現し、全体のなかで高率(24%)を占める(第15図)。これは、当時の社会の階層における中間層が力を得てきた現象とされる。次の奈良時代になると、すべての竪穴式住居跡の規模が30㎡未満となるという。竪穴式住居跡から掘立柱建物跡に居住することが一般化した証拠であるとみる。このように飛鳥時代～奈良時代は住居からみても重要な画期であるとみられ、今回検出したGトレンチの竪穴式住居跡については、慎重に時期・構造・出土遺物などを検討する必要がある。さらに、次年度の本格調査で、周辺の遺構群の広がりを確認し、南稲葉遺跡の全容を少しでも明らかにしていきたい。

(黒坪一樹)

注1 調査参加者は以下の通りである(順不同・敬称略)。

調査補助員 工藤 信・伊藤裕康

整理員 川端文子・川端裕子・村井裕香・森 京子・山田美和子・渡辺あやみ・渡辺文子  
渡辺洋子

注2 中村孝行「安国寺山古墳発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第14集 綾部市教育委員会) 1987

注3 中村孝行「兵谷4号墳発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第14集 綾部市教育委員会) 1987

注4 奥村清一郎「綾部市高槻茶白山古墳測量調査略報」(『京都考古』16 京都考古刊行会) 1975

注5 小山雅人・石井清司「近畿自動車道敦賀線(8次区間)関係遺跡発掘調査報告書-福垣古墳群・野崎古墳群-」(『京都府遺跡調査報告書』第17集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注6 藤原敏晃「由良川中・下流域の住居-竪穴住居を中心として-」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

### 3. 杉北遺跡発掘調査概報

#### 1. はじめに

杉北遺跡は、京都府亀岡市旭町杉に所在する奈良・平安時代、縄文時代の散布地である。今回の発掘調査は、府営ほ場整備事業(三俣地区)に先立ち、京都府農林水産部の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。現地調査は、調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正・同調査員中川和哉が行い、平成11年11月29日～平成12年1月14日に実施した。調査面積は500m<sup>2</sup>である。

調査地点は亀岡市教育委員会の試掘調査の結果を受けて選定し、調査前の試掘調査等の結果から、中世の遺構面の存在が期待されていた。

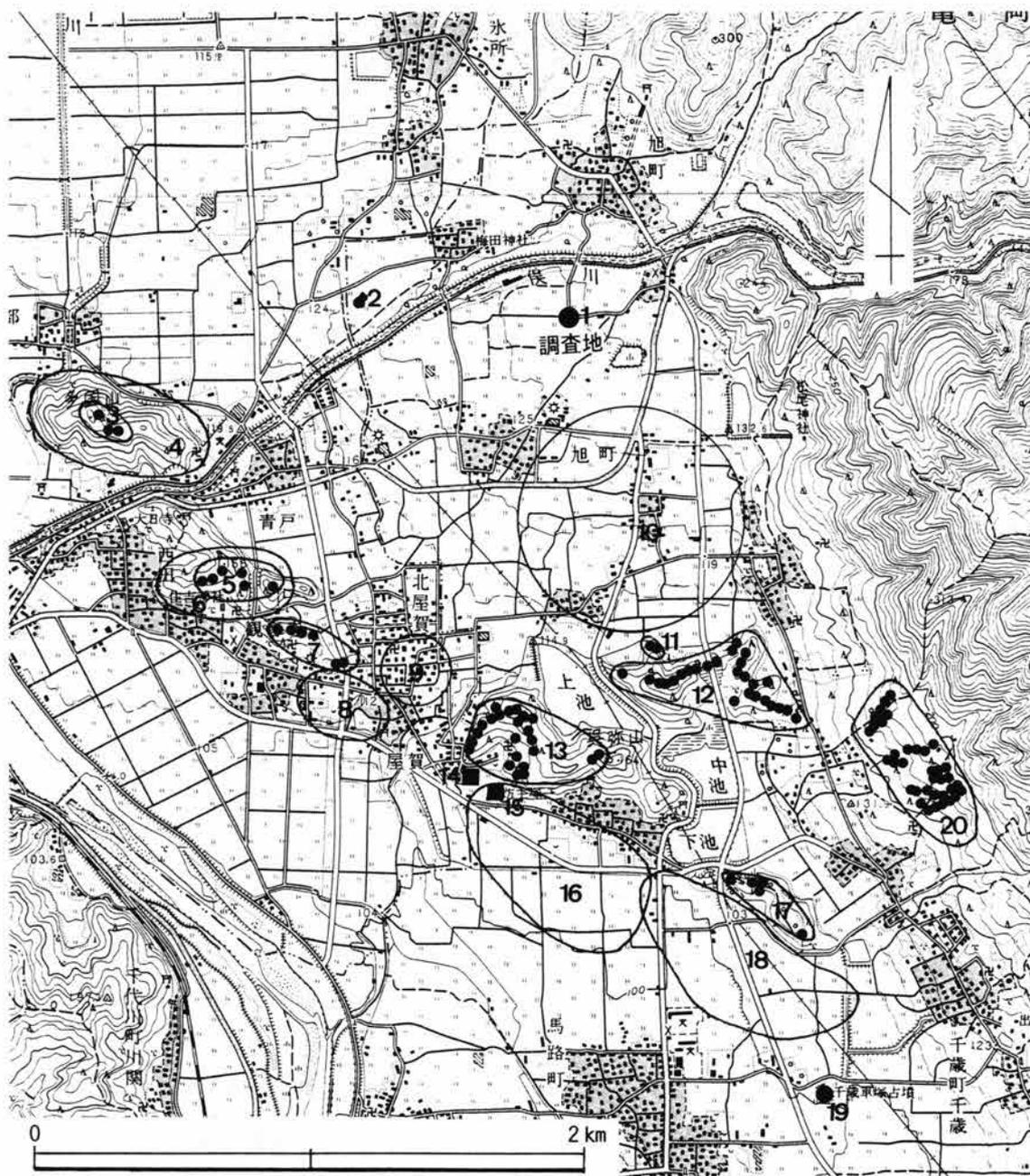
#### 2. 地形・歴史的環境

杉北遺跡は京都盆地の北西部に位置する亀岡盆地北東部に立地する。位置図でも分かるように、周辺には低い丘陵が点々と見られ、盆地の中においてもさらに小さな盆地状の地形を形成している。遺跡の北限は、天井川である桂川の支流三俣川によって限られる。また、亀岡市の試掘調査結果では、杉北遺跡内においても多くの旧流路が発見されているという。現在の地図では畦畔の乱れる場所が三俣川の南側に北東から南西に見られ、その北東端は現在の三俣川に取り付く。水田面が形成されたある段階で、三俣川の流路が現在と異なっていたことを裏付けている。

このことは三俣川の北側の集落である山階地区が、川の南側の杉地区までの耕作地や水利権を持っていることから裏付けられる。集落の成立についても、流路の変化以前に遡るものと考えられる。今回の調査地は、現有の河川と旧流路との間の比較的安定した場所に当たるが、後述するように、洪水性の堆積物が見られ、水の影響を受ける地域であったことがわかる。

遺跡のある桂川の東岸は、平野部が広がり水田景観を見せている。現在の国道9号線が川の西側にあるのに対して、この地域に奈良時代の山陰道が有ったことが、丹波国府や国分寺・国分尼寺の存在から想定されている<sup>(注1)</sup>。遺跡の西側の八木町屋賀は、小字名の「国府」の存在や、「吉富荘絵図」に「国八庁」として国府と考えられる建物が描かれていることから、丹波国府と考えられている。

また、山陰道のルートは、大形前方後円墳の分布から古墳時代に遡ることも指摘されている<sup>(注2)</sup>。周辺地域での本格的な発掘調査事例が少ないためはっきりとしない部分が多いが、近接する遺跡には三俣川の北側にある糠塚古墳がある。墳丘は東西約40m・南北約25mの前期古墳とされている。遺跡の南約3kmには亀岡盆地最大の前方後円墳千歳車塚古墳(全長約80m)があり、西約1.7kmの丘陵西麓には大形の方墳である天神塚古墳・坊主塚古墳がある。また前述した周辺の丘陵上には池尻古墳群・美濃田古墳群・多国山古墳群・住吉神社裏山古墳群・池内古墳群が分布し



第16図 調査地位置図

- |            |           |           |          |             |            |
|------------|-----------|-----------|----------|-------------|------------|
| 1. 杉北遺跡    | 2. 糠塚古墳   | 3. 多国山遺跡  | 4. 刑部城跡  | 5. 住吉神社裏古墳群 | 6. 西田城跡    |
| 7. 池内古墳群   | 8. 観音寺遺跡  | 9. 尾賀城跡   | 10. 里遺跡  | 11. 広保古墳群   | 12. 美濃田古墳群 |
| 13. 池尻古墳群  | 14. 天神塚古墳 | 15. 坊主塚古墳 | 16. 池尻遺跡 | 17. 稲葉山古墳群  | 18. 時塚遺跡   |
| 19. 千歳車塚古墳 | 20. 平野古墳群 |           |          |             |            |

ている。

### 3. 調査の概要

発掘調査トレンチは、ほ場整備にともなう工事において、掘削が遺構面に達すると考えられる地点を中心に、3か所設定した。北から第1・2・3トレンチと名付けた。

各トレンチにおける基本層序は、最上層が耕作土、その下は床土と考えられる黄灰色砂質土が



第17図 調査トレンチ配置図

何層にも盛られていることがわかる。更に下層では部分的では、あるがマンガンを多く含む暗褐色の礫混じり層が、暗褐色粘砂質土を覆っている。暗褐色粘砂質土の下層は、暗黄褐色粘砂質土さらに下層は砂礫堆積となる。

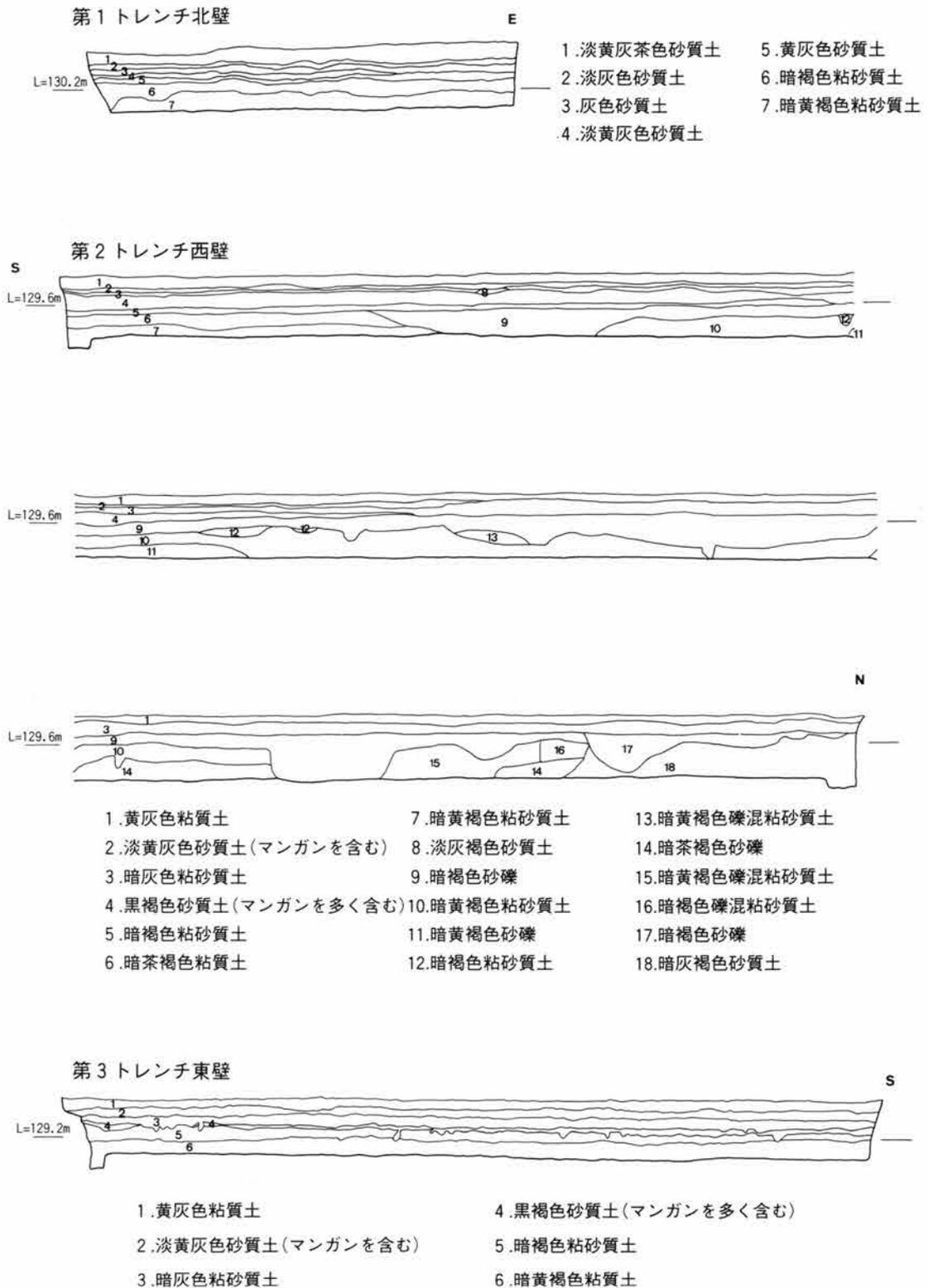
**第1トレンチ** 東西約5m・南北30mの調査区である。暗黄褐色粘砂質土上面において、遺構らしき輪郭が亀岡市の試掘調査同様、多く認められたが、上層の褐色粘質土が、層理面の凹面に充填されていたため遺構状に見えたことが、遺構精査の結果明らかになった。

床土からは律令期の須恵器杯蓋・土師器片が出土している。

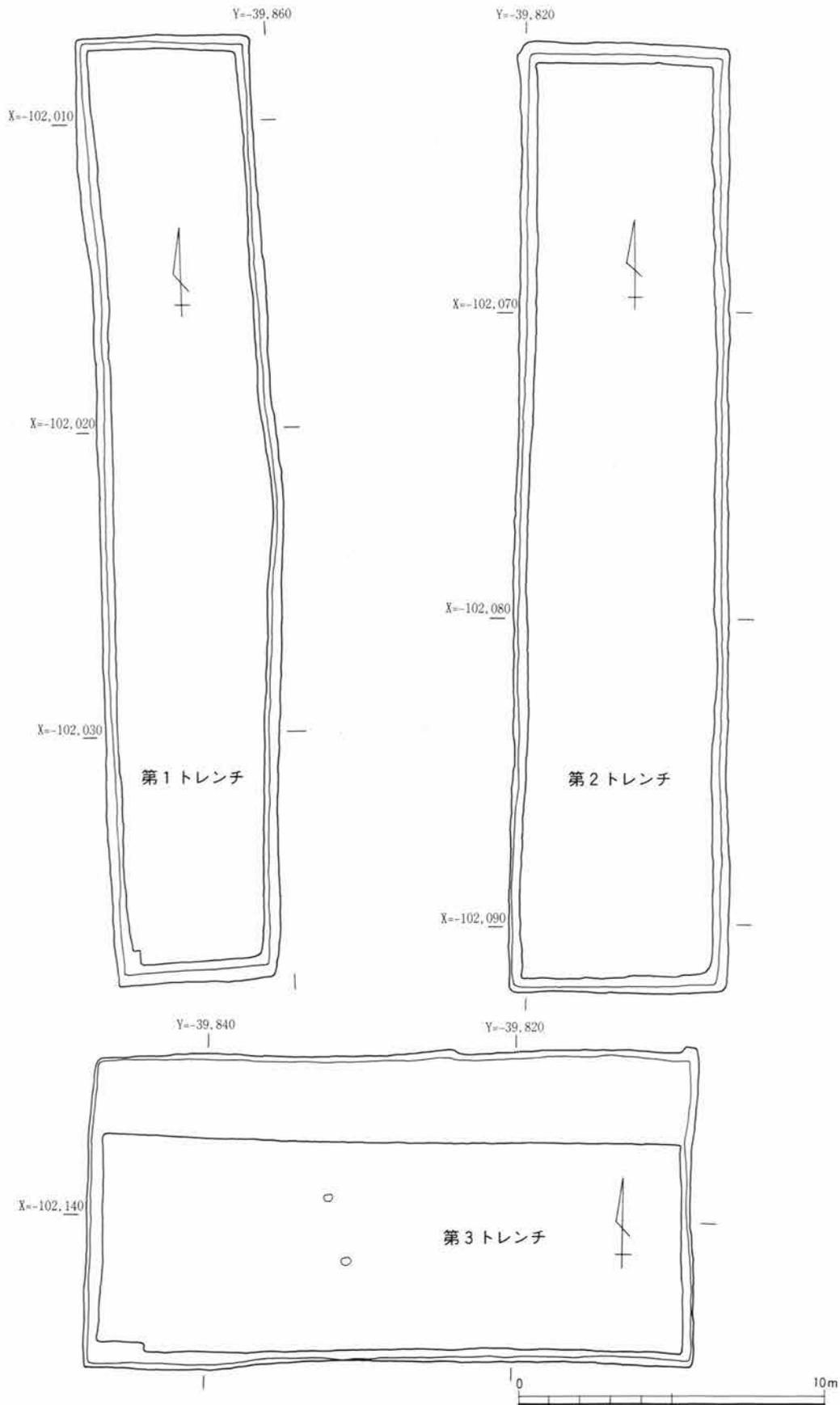
**第2トレンチ** 東西約5m・南北30mの調査区である。暗褐色の礫混じり層が掘り込んだ砂礫を包含する旧流路跡が、床土面下層から検出できた。この流路は流心から離れるにしたがい粒径が細くなり褐色粘質土と変化していく。その下には他の調査区同様暗黄褐色粘砂質土があるが、部分的に暗黄褐色粘砂質土検出面にまで下層の砂礫堆積が露出していた。

床土からは土師器片・炉壁と考えられる破片が出土している。

**第3トレンチ** 東西約20m・南北10mの調査区である。暗黄褐色粘砂質土の上面で遺構精査を実施した結果、柱穴と考えられる遺構を2か所検出したが、遺物を伴わないので、性格は不明で



第18図 杉北遺跡断面実測図



第19図 杉北遺跡トレンチ実測図

ある。暗黄褐色粘砂質土を部分的に掘り下げた結果、縄文土器片が出土し、焼土塊・炭化物も含まれていることが分かった。ただ明確な遺構や形が復原可能な土器片は認められなかったことから、詳細な時期は不明であるが、刻みを持つ突帯が2条認められる個体、外面に条痕の有るものなどがある。この包含層の下層には人頭大から拳大の礫層があり、東側の山体からもたらされた扇状地性の礫と考えられる。縄文時代の集落が山裾に広がっていた可能性も想定される。

#### 4. ま と め

今回の発掘調査においては、遺構の性格を特定できるものは検出できなかったが、亀岡市でも珍しい縄文時代にさかのぼる土器片が出土しており、近接する地域に、同時期の遺跡があったことを示している。また床土中の奈良・平安時代の遺物の存在は、水田造成時に近辺の遺跡が破壊されたことを示しているのかもしれない。

現地調査においては亀岡市教育委員会、現地土地改良事務所をはじめ、調査に参加していただいた山階地区の住民の方々、学生諸氏<sup>(注3)</sup>にご協力いただき、御礼申し上げます。

(中川和哉)

注1 足利健亮「第4章第5節 古山陰道の変遷」(『新修亀岡市史本文編』第1巻 亀岡市) 1995

注2 細川康晴「丹波の前期古墳と垣内古墳」(『園部垣内古墳』同志社大学文学部文化史学科) 1990

注3 調査参加者は以下の通りである(順不同・敬称略)。

稲尾昭子・蔭山利夫・加茂和代・加茂寛司・加茂満代・加茂陽史・柚田祐子・田中直義・田中みき子・田中保造・手島美香・長井謙治・原加代子・人見秋野・人見一男・人見和宏・人見清子・人見進・人見末・人見千恵子・人見つたの・人見ふさ江・人見実・人見やゑ子・人見豊・宮西佐代子・横山正行

## 4. 太田遺跡第10次発掘調査概要

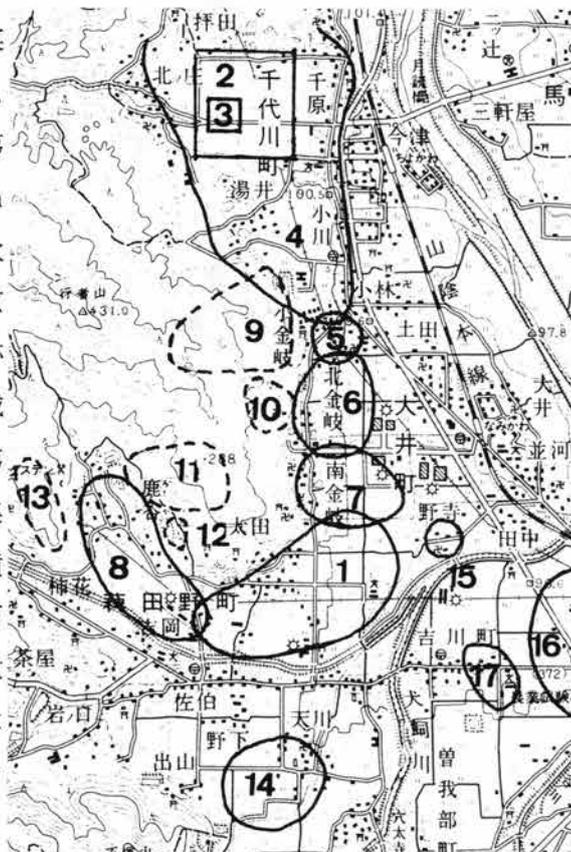
### 1. はじめに

太田遺跡は、大堰川右岸の行者山麓部に東西1,400m・南北600mにわたって広がる弥生時代前期から中世にかけての大規模な複合遺跡である。遺跡西端では山内川が東流し、その北側には調査地である台地状の微高地が形成されている。

調査地周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡や古墳群が存在している。北方には千代川遺跡<sup>(注1)</sup>・北金岐遺跡<sup>(注2)</sup>・北金岐古墳群<sup>(注3)</sup>・小金岐古墳群<sup>(注4)</sup>、西方には古墳時代後期の竪穴式住居跡が多数検出された鹿谷遺跡<sup>(注5)</sup>・鹿谷古墳群<sup>(注6)</sup>・稗田野西山古墳群<sup>(注7)</sup>、東方では弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての大規模な墓域や集落、弥生時代中期後半の玉作り工房などが検出された余部遺跡<sup>(注8)</sup>などがある。

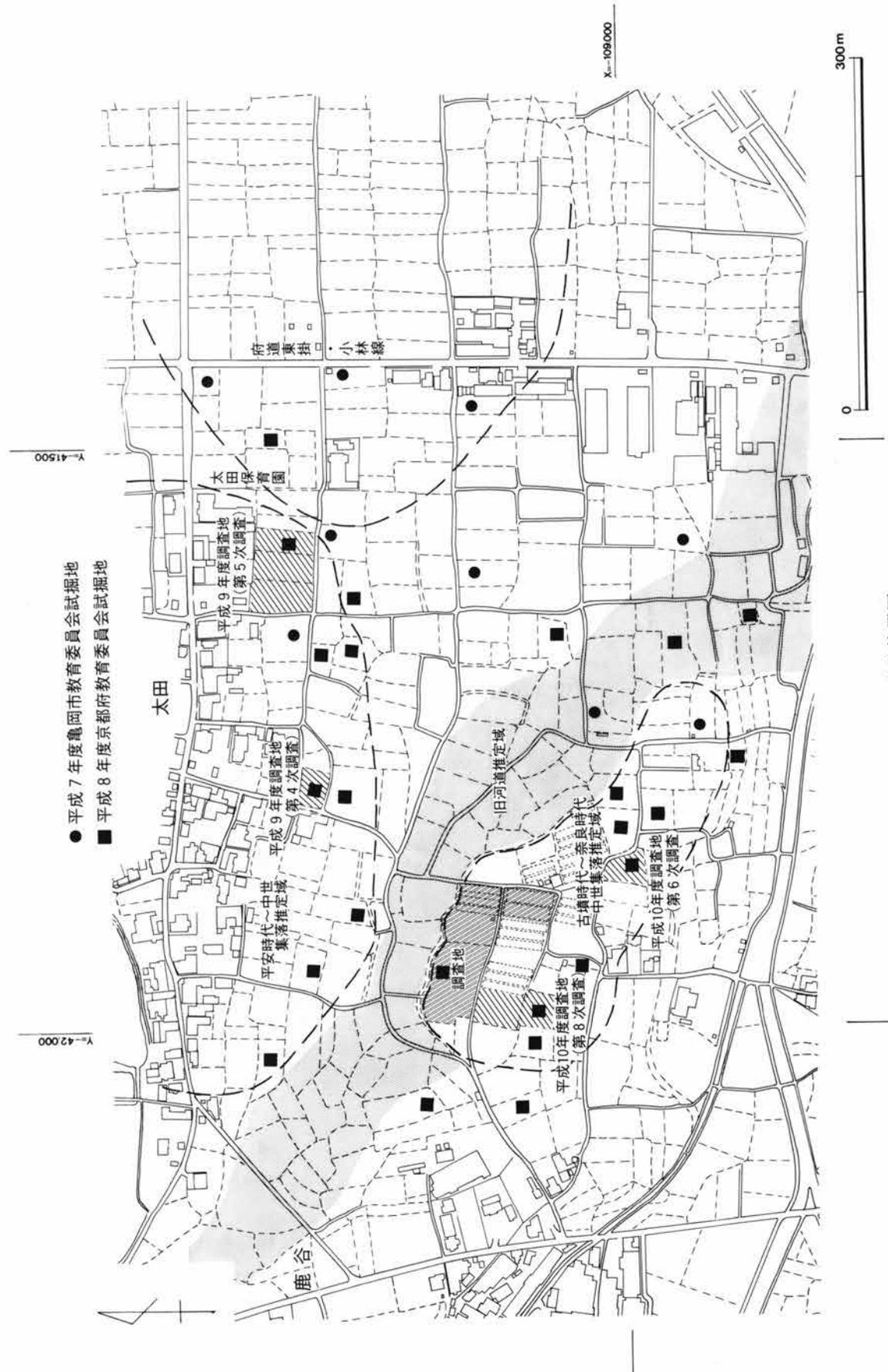
太田遺跡は、過去9次にわたる発掘調査が実施されている。京都縦貫自動車道建設に伴い、昭和57年度に当調査研究センターが実施した第1次調査では、弥生時代前期～中期の直径160m以上の環濠集落が検出されている<sup>(注9)</sup>。第2～3次調査は平成7・8年度に亀岡市教育委員会・京都府教育庁指導部文化財保護課により太田遺跡西側を中心に試掘調査が行われ、旧河道推定域を挟む形で集落域が推定されるようになった(第21図)。第4・5次調査では、弥生時代後期の集落跡が存在することを確認するとともに、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出し、中世の礎石を伴わない大型掘立柱建物跡や井戸・道路状遺構が検出された。また、時期を特定することはできなかったが、鍛冶滓が出土し、生産活動を知る上で重要なものとなった。平成10年度第6～8次調査は、旧河道推定域南側の微高地、およびその南側での調査となり、古墳時代後期の竪穴式住居跡、8世紀中頃を中心とすると考えられる掘立柱建物跡が検出されている<sup>(注10-12)</sup>。

今回の調査地は、亀岡市稗田野町字太田小字



第20図 調査地および周辺遺跡分布図(1/50,000)

- |              |            |             |
|--------------|------------|-------------|
| 1. 太田遺跡      | 2. 丹波国府推定地 | 3. 桑原廃寺     |
| 4. 千代川遺跡     | 5. 馬場ヶ崎遺跡  | 6. 北金岐古墳群   |
| 7. 南金岐遺跡     | 8. 鹿谷遺跡    | 9. 小金岐古墳群   |
| 10. 北金岐古墳群   | 11. 鹿谷古墳群  | 12. 鹿谷池田古墳群 |
| 13. 稗田野西山古墳群 | 14. 天川遺跡   |             |
| 15. 野寺廃寺     | 16. 余部遺跡   | 17. 穴川遺跡    |



第21図 調査地位置図

森23ほかで、微高地上に位置し、第8次調査地の北側となる。調査は府営ほ場整備事業に伴い、京都府農林水産部の依頼を受け実施した。

現地調査は、調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正、同主任調査員増田孝彦、同主査調査員竹井治雄が担当し、平成11年5月25日～平成12年2月28日まで実施した。現地説明会は、平成11年12月10日に行った。調査面積は約4,000m<sup>2</sup>である。

概報作成にあたっては、整理および執筆は増田が行った。写真は遺構を増田、遺物を調査第1課資料係主任調査員田中 彰が撮影した。調査期間中は、京都府教育庁指導部文化財保護課・亀岡市教育委員会・亀岡市土地改良事務所の協力を得、地元住民の方々には作業員・調査補助員・整理員として協力をいただいた。<sup>(注13)</sup>記して感謝する。

## 2. 調査概要

事前の試掘調査結果をもとに、調査地を設定した。重機により耕作土・床土を除去したのち遺構検出作業に着手した。調査地の標高は106m前後を測り、トレンチ全体が西から東に向かってゆるやかに傾斜している。水田として耕作されているため、標高が高い西側ほど削平が大きく、包含層は消失している。基本層序は、トレンチ西端では耕作土直下20cmほどで地山面となる。トレンチ中央付近が最も堆積が厚く、耕作土・床土・暗茶褐色土・黒色土と続き0.6mで地山面となる。この黒色土は約20cm程の堆積が認められ、部分的に上下2層からなり、上層からは奈良時代以降の遺構が、下層からは古墳時代以前の遺構が検出されたが、大半は地山面で検出したものである。中世の遺構は暗茶褐色土から掘り込まれていると考えられるが、土色の変化が明確でないため、黒色土下層付近まで掘り下げて遺構検出につとめた。トレンチ東端・南端では耕作土・床土と続き、30cmで地山面となる。地山は、場所によって明黄褐色粘土・灰褐色砂土・砂層であったりする。

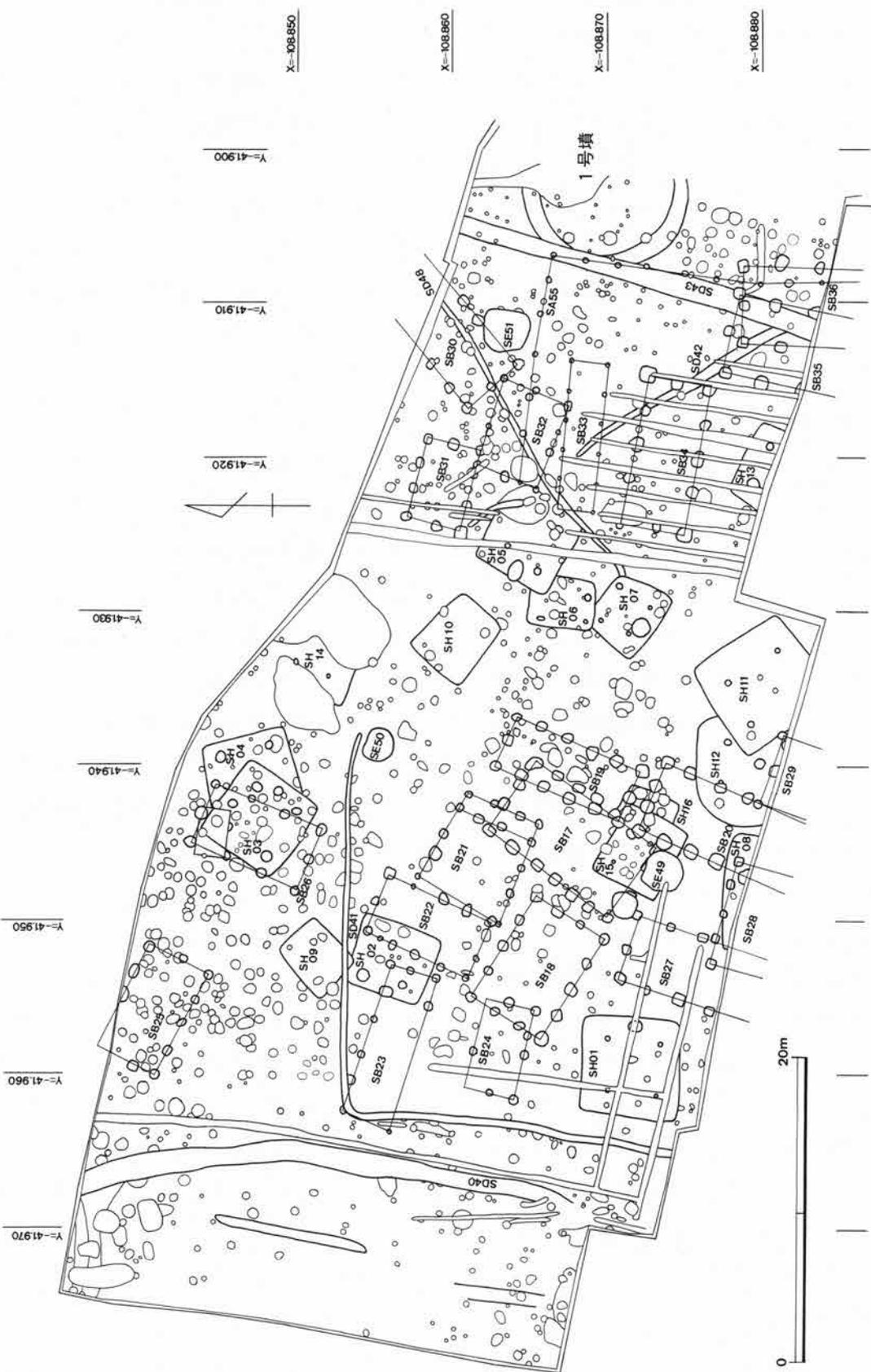
今回の調査では、弥生時代後期から中世までの各時代の遺構を検出した。検出された遺構は、竪穴式住居跡16棟、掘立柱建物跡23棟、柵2条、柱穴約1,200基、井戸7基、溝9条などがある。調査地東側には古墳が存在するため、古墳より西側は奈良時代以前の遺構が中心になり、古墳周辺および南側は、平安時代以降の遺構が検出された。トレンチ中央部や南側で検出された南北方向に延びる多くの溝は、14世紀以降、現在に至るまでの耕作や区画に伴うものと考えられる。半数の井戸跡に関しては地山が粘土と砂層の互層であることから、途中で何度も崩壊し掘削が困難であるために、完掘することができなかった。そのため、井戸枠等については取り上げ後、復原製図した。以下、検出された遺構の概略を記す。

### (1) 弥生時代

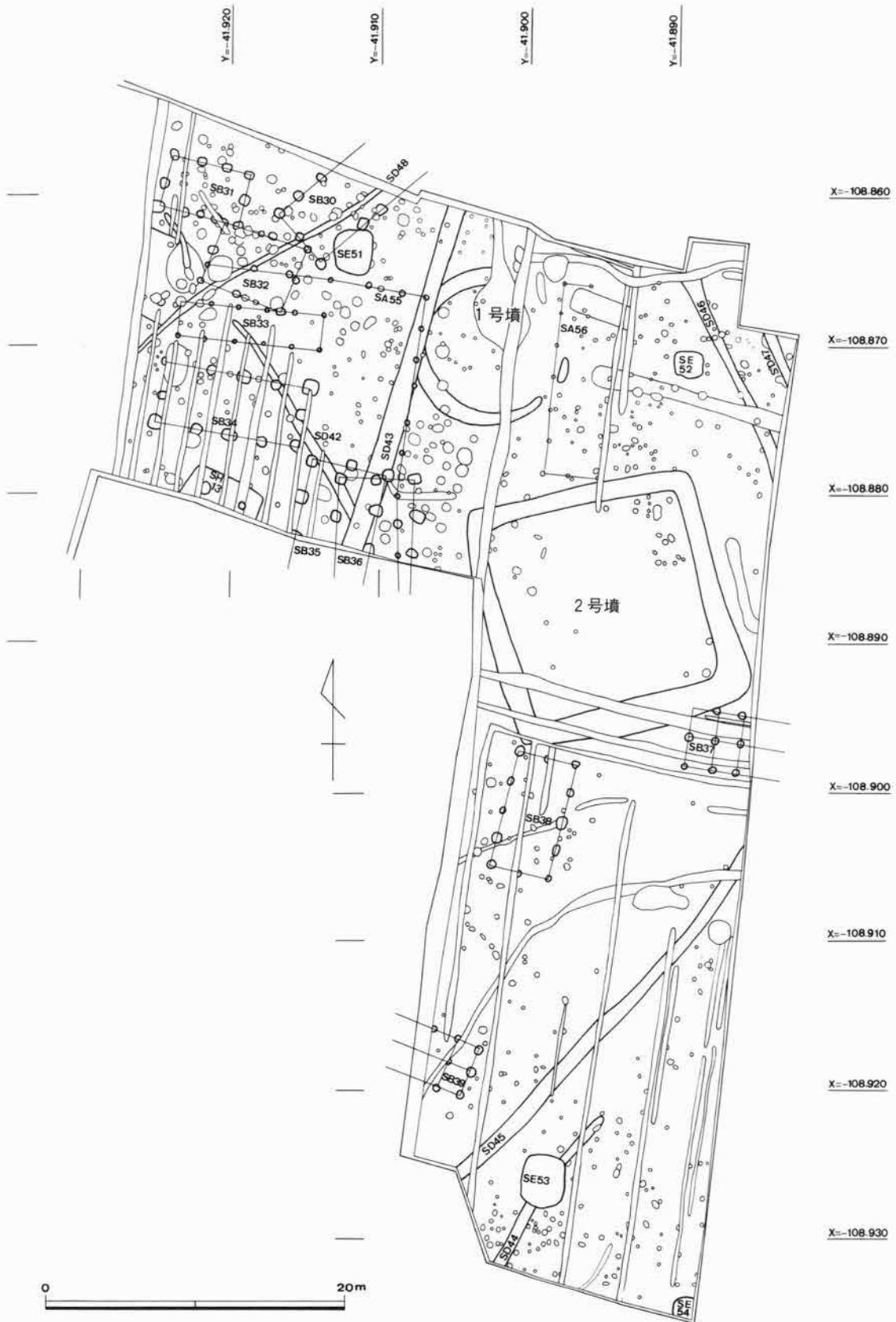
#### ① 検出遺構

弥生時代の遺構は、トレンチ西側寄りの南・北端で3棟検出した。このうちSH04はSH03と、SH12はSH11に切られ、遺構内に後世の柱穴が多く存在するため、残存状況は良くない。

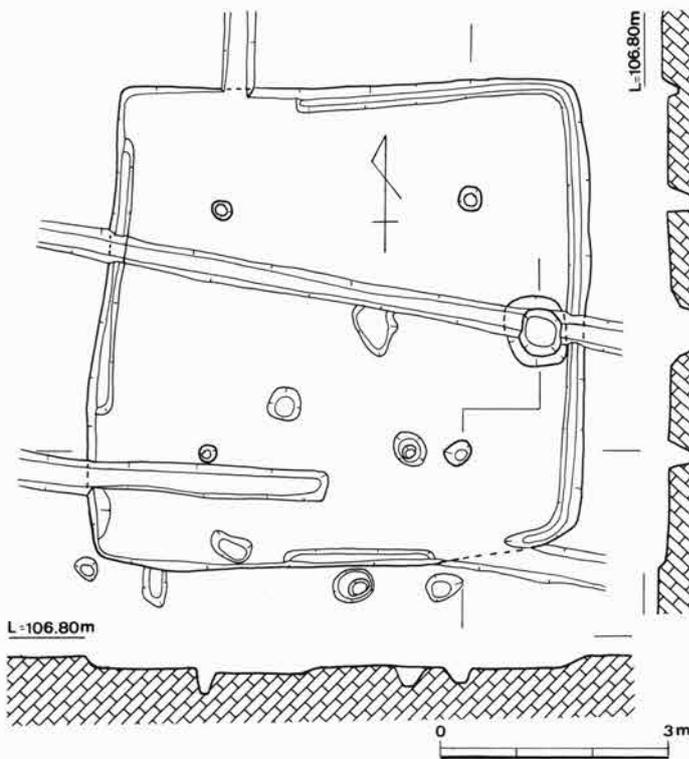
竪穴式住居跡SH01(第24図、図版第21) トレンチ西側の南端で検出した方形の竪穴式住居跡



第22図 検出遺構配置図(1)

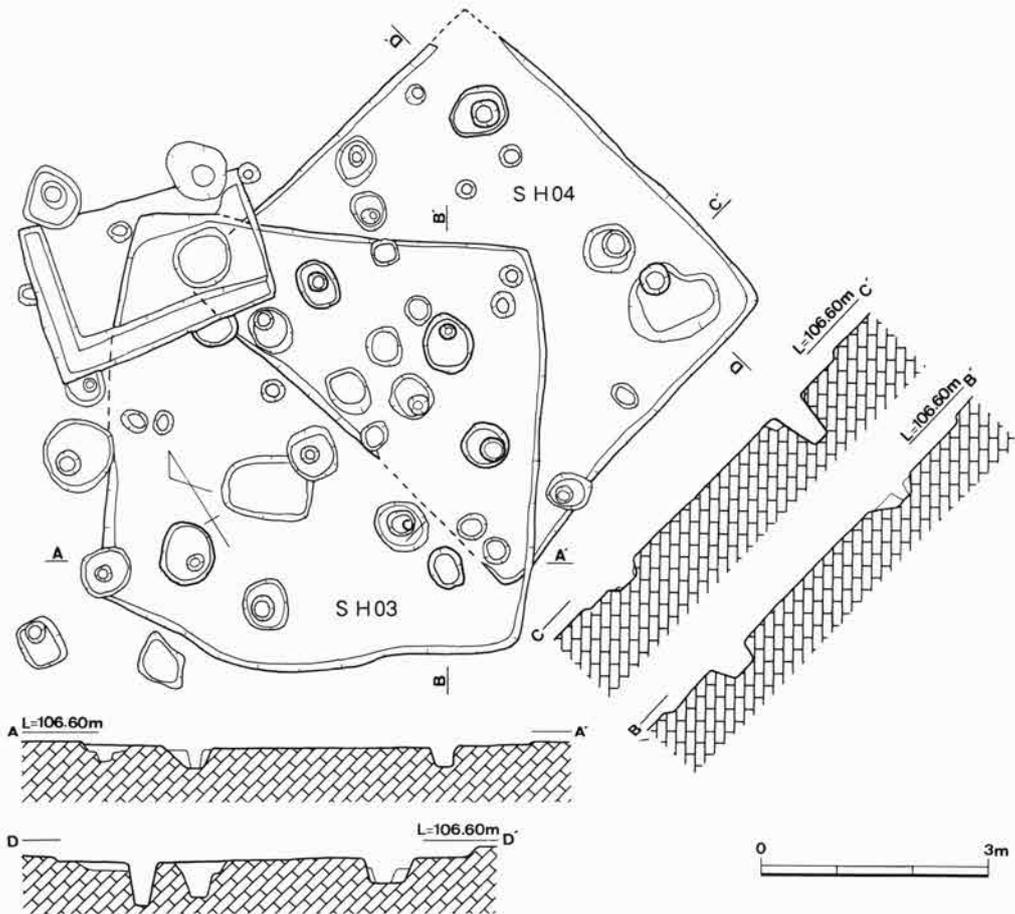


第23図 検出遺構配置図(2)



第24図 竪穴式住居跡 S H01実測図

である。暗渠溝により部分的に削平を受ける。一辺約6m、周壁高は床面から約15cmを測る。主軸は、ほぼ南北である。東辺中央に直径50cm・深さ47cmの貯蔵穴を持つ。壁沿いには部分的に幅10cm・深さ7cmの断面逆台形状の壁溝が残存する。主柱穴は4本で、掘形は円形で、直径20~30cm・深さ28~50cmを測る。遺物は、各辺の壁寄りから甕・高杯・器台・鉢・手焙形土器などバラエティーに富んだ器種が出土した。また、床面や埋土に焼土や木炭を比較的多く検出しており、この竪穴式住居跡は火災にあった可能性もある。



第25図 竪穴式住居跡 S H03・04実測図

竪穴式住居跡SH04(第25図、図版第21) SH03と切り合い、一辺5.3mの規模が復原される方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から12cmを測る。主軸はN14°Wである。壁溝は認められなかった。主柱穴は4本で、掘形は円形で直径60~75cm・深さ16~59cmを測る。遺物は竪穴式住居跡の床面で細片化した弥生土器が出土した。

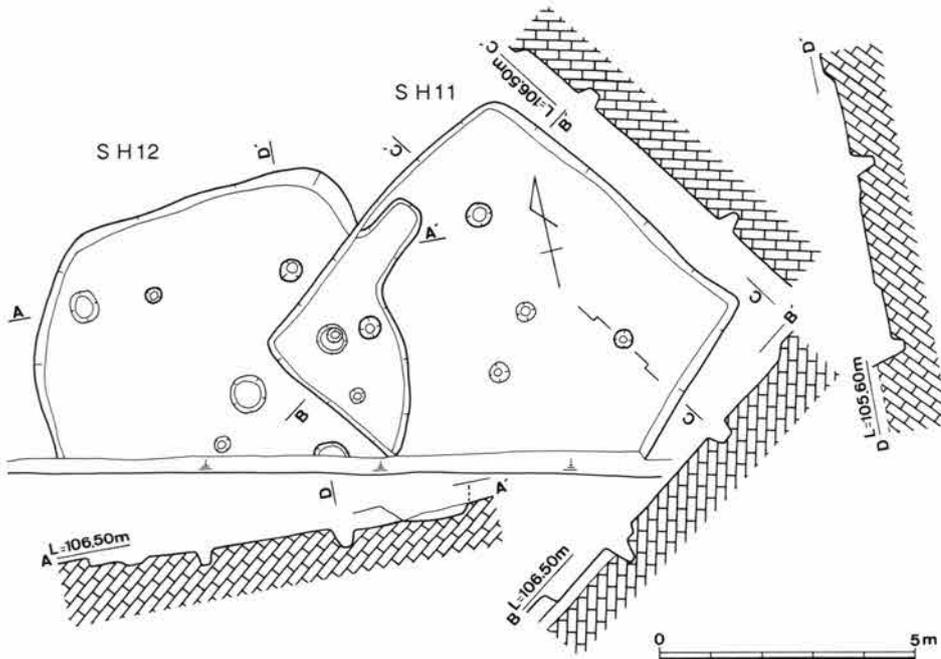
竪穴式住居跡SH12(第26図、図版第22) SH11と切り合い関係を有し、南東隅付近が調査地外となる、一辺約5.3mの規模が復原される隅丸方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から0.25mを測る。主軸はほぼ南北である。壁溝は認められなかった。主柱穴は4本で、うち3本を検出した。掘形は円形で、直径25~60cm・深さ26~65cmを測る。遺物は竪穴式住居跡の床面で、甕・鉢などが出土した。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構には、竪穴式住居跡13棟・掘立柱建物跡9棟・溝1条・古墳2基がある。竪穴式住居跡は、SH11以外は削平が著しく、残存状況がよくない。また、掘立柱建物跡の内、5棟は出土遺物が少なく、古墳時代ではない可能性があるが、建物跡の切り合い、主軸方向などからこの項で取り扱った。古墳2基は、新規検出されたもので、関係諸機関で協議のうえ、太田古墳群と命名することとなり、調査順に番号を付した。

① 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡SH11(第26図、図版第22) SH12と切り合い、南隅付近が調査地外となる、一辺約6.5mの規模が復原される方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から24cmを測る。主軸はN34°Wである。床面は、北側から中央部付近に向かってゆるい傾斜を持つ。主柱穴は4本で、うち3本を検出した。掘形は円形で、直径35~47cm・深さ23~37cmを測る。遺物は竪穴式住居跡の南西隅付近より、土師器甕・壺・高杯・小型丸底壺・ミニチュア土器が出土している。検出面



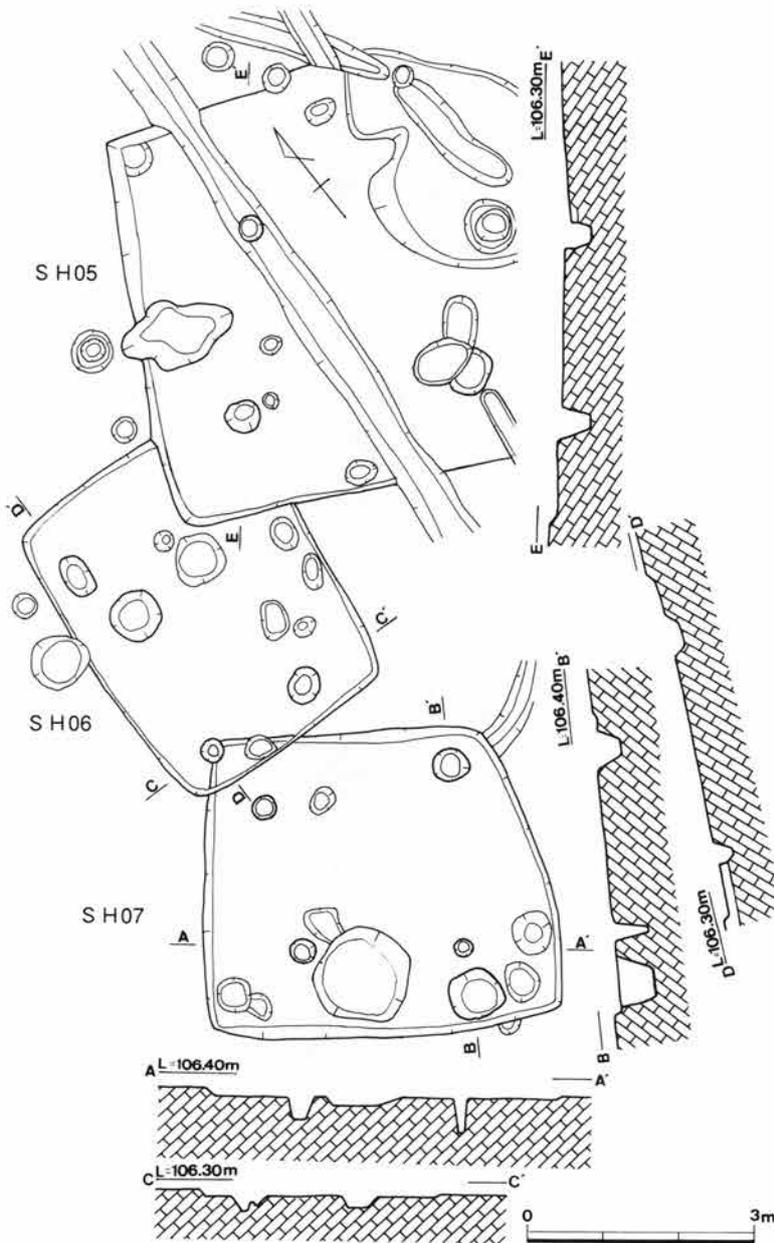
第26図 竪穴式住居跡SH11・12実測図

からは混入遺物の可能性が高いが、鍛冶滓の出土も認められた。

**竪穴式住居跡 S H15・16(第22図)** 掘立柱建物跡3棟・井戸1基と切り合うため、残存状況が悪い。同一場所に重なり合うもので、S H15は一辺約4.5m、S H16は一辺約3.3mの規模が復原される隅丸方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から約8cmを測る。主軸は、S H15がN30°E、S H16がN22°Eである。壁溝は認められなかった。支柱穴は4本と考えられるが、S H15の北西側の柱穴(直径20cm・深さ12cm)のみ確認できたが、住居床面には多くの柱穴が存在しており、これらの住居に伴う柱穴を推定することはできなかった。遺物は、わずかに残存する竪穴式住居跡の床面で、細片化した土師器甕が出土している。

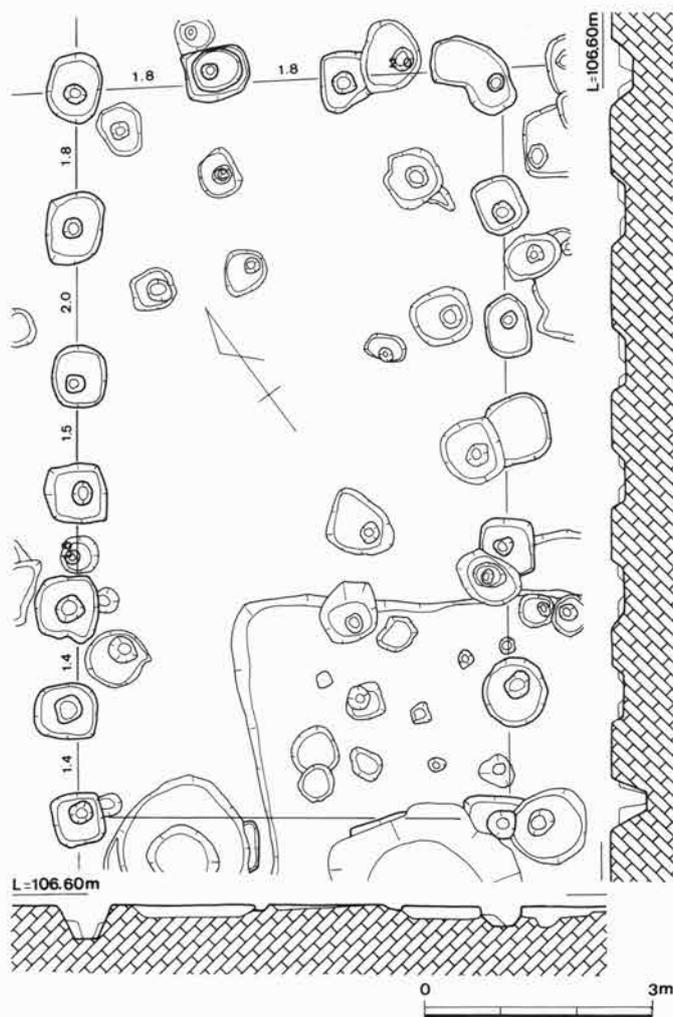
**竪穴式住居跡 S H07(第27図、図版第27)** 北側隅付近でS H06と切り合い関係を有する、一辺約3.7m×4.6mの規模が復原される方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から8cmを測る。

主軸はN39°Eである。壁溝は認められなかった。支柱穴は4本で、掘形は円形で直径20~50cm・深さ20~50cmを測る。南西辺の南東端に直径80cm・深さ55cmの貯蔵穴を持ち、内部から須恵器杯身が出土した。遺物は、竪穴式住居跡の床面で、須恵器杯身・ミニチュア土器が出土している。

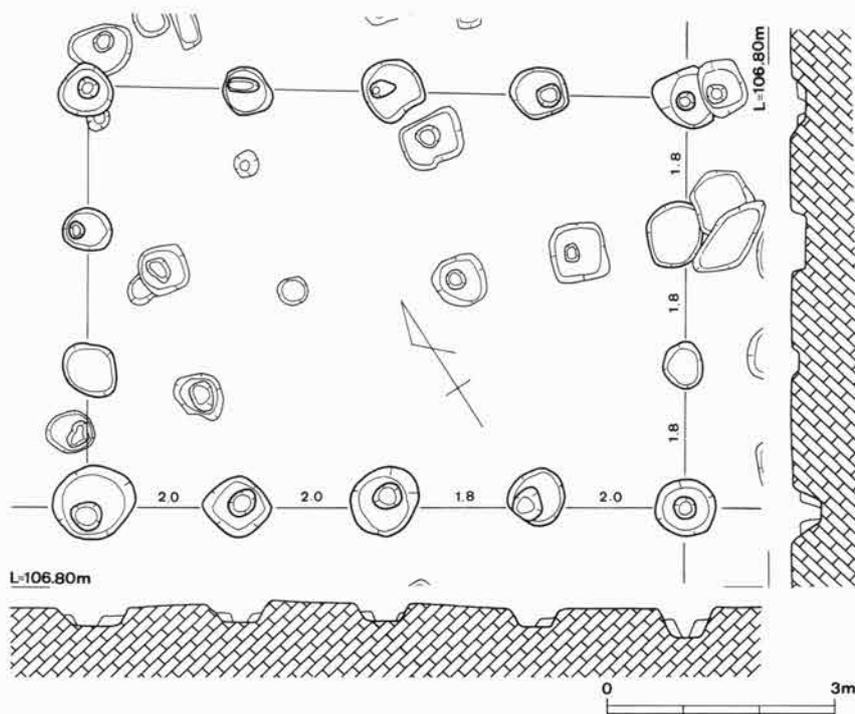


第27図 竪穴式住居跡 S H05~07実測図

**竪穴式住居跡 S H02(第22図、図版第21)** 北側隅付近でS H06と切り合い、壁溝のみ検出した一辺約4.3m×5mの規模が復原される長方形の竪穴式住居跡である。主軸はN21°Eである。壁溝は、幅0.2m・深さ5cmを測る。支柱穴は4本で、掘形は円形で、直径40~80cm・深さ26~56cmを測る。遺物は、竪穴式住居跡の柱穴内より、須恵器杯身片が出土している。



第28図 掘立柱建物跡 S B 17実測図



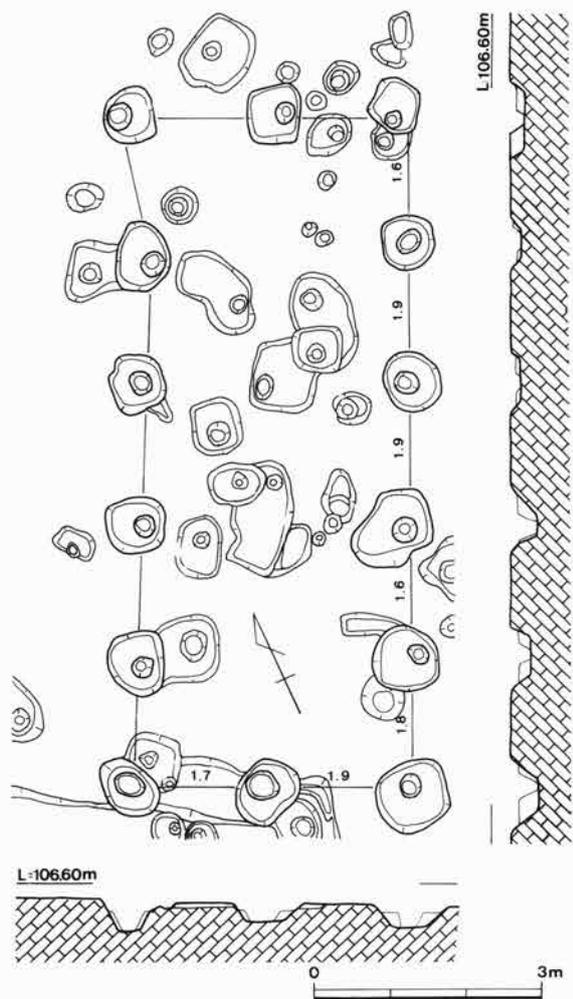
第29図 掘立柱建物跡 S B 18実測図

竪穴式住居跡 S H03(第25図、図版第21) S H04と切り合い、一辺約5.5mの規模が復原される方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から10cmを測る。主軸はN39°Eである。壁溝は認められなかった。支柱穴は4本で、掘形は円形で直径50~75cm・深さ20~50cmを測る。遺物は、竪穴式住居跡の床面で、須恵器杯身片・土錘・鍛冶滓が出土している。

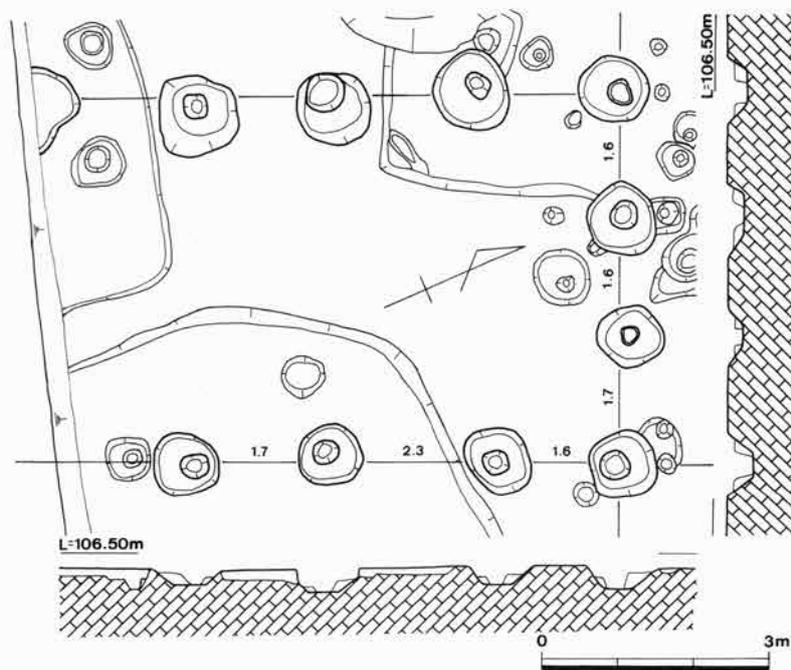
竪穴式住居跡 S H05(第27図、図版第27) 南東角付近が S H06と切り合い、東辺・北辺の掘形は後世の遺構により削平を受け存在しないが、一辺約51cmの規模が復原される方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から25cmを測る。主軸はN27°Eである。壁溝は認められなかった。支柱穴は4本で、うち3本を検出した。直径35~60cm・深さ45cmを測る。西辺中央部分に竈跡と考

えられる、幅0.9m×1.5m、深さ18cmの楕円形の掘形を検出した。内部埋土や床面からは、焼土や木炭・灰の堆積が認められた。遺物は竪穴式住居跡の床面で、須恵器杯身片・鍛冶滓が、柱穴内からは須恵器杯身片・鍛冶滓が出土した。

竪穴式住居跡 S H06(第27図、図版第27) 北側隅付近で S H05に切られる、3m×4.2



第30図 掘立柱建物跡 S B 19実測図



第31図 掘立柱建物跡 S B 20実測図

mの規模が復原される方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から9cmを測り、主軸はN6°Eであるが、壁溝は認められなかった。支柱穴は4本で、掘形は円形で直径25~45cm・深さ15~26cmを測る。遺物は、竪穴式住居跡の床面で、須恵器杯身片が出土している。

**竪穴式住居跡 S H 08**(第22図、図版第20) S H 12の西側に位置し、北辺側は一辺7.2mの規模を有する方形竪穴式住居跡である。周壁高は床面から8cmを測る。主軸はほぼ南北である。北辺中央部に直径50cmの焼土が認められたが、壁溝はなかった。柱穴は、調査地外になるよう検出されなかった。遺物は、床面より細片化した土師器・須恵器が出土した。

**竪穴式住居跡 S H 09**(第22図、図版第21) S H 02と切り合い、南側隅付近を S D 41に削られる。長辺4.3m×短辺3mの規模を有する長方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から8cmを測る。主軸はN41°Eである。床面は、中央部分を残し、側壁に沿って四周を幅30~60cm・深さ8cm掘り下

げている。柱穴は認められなかった。遺物は、床面で細片化した須恵器・土師器が出土している。

**竪穴式住居跡 S H 10**(第22図、図版第20) S H 05の北西側で検出したもので、S H 09と同様な形態をなし、長辺4.7m×短辺4.3mの規模を有する長方形の竪穴式住居跡である。周壁高は床面から6cmを測る。主軸はN41°Eである。床面は、中央部を残し、側壁に沿って東辺を除き、幅0.75~1m・深さ6cm掘り下

げている。柱穴は認められなかった。遺物は堅穴式住居跡の床面で細片化した須恵器・土師器が出土している。

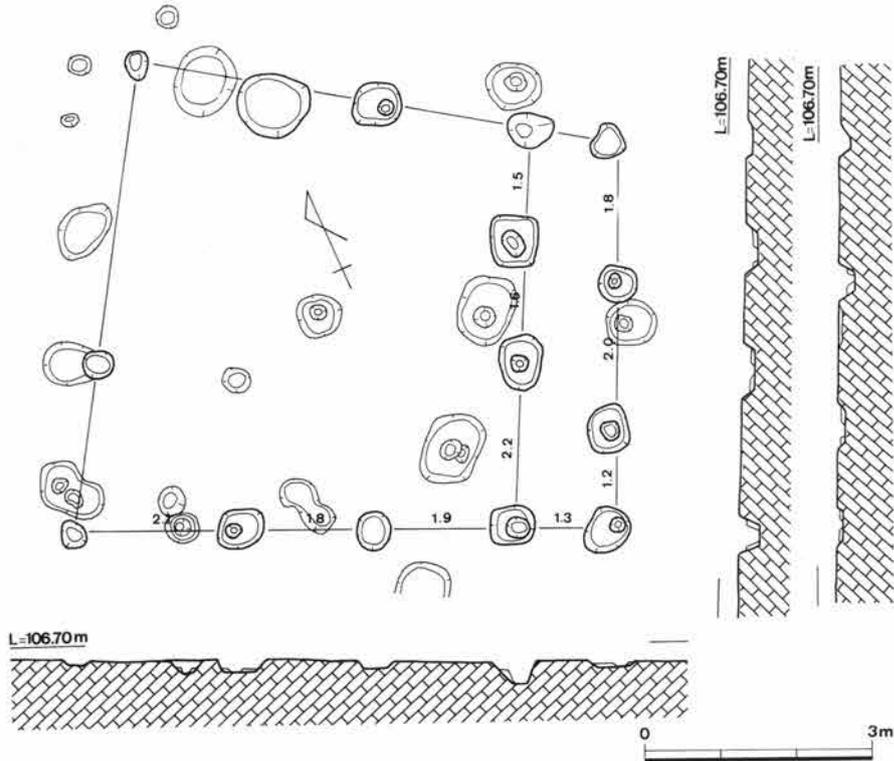
**堅穴式住居跡 S H 13**(第22図、図版第20) S H 11の東側で検出したもので、南側1/2が調査地外となる。一辺約5mの規模が復原される方形の堅穴式住居跡である。周壁高は床面から15cmを測る。

主軸はN27°Eである。壁溝は認められなかった。柱穴は2本検出した。掘形は円形で、直径40~75cm・深さ36~40cmを測る。遺物は、床面で細片化した須恵器が出土している。

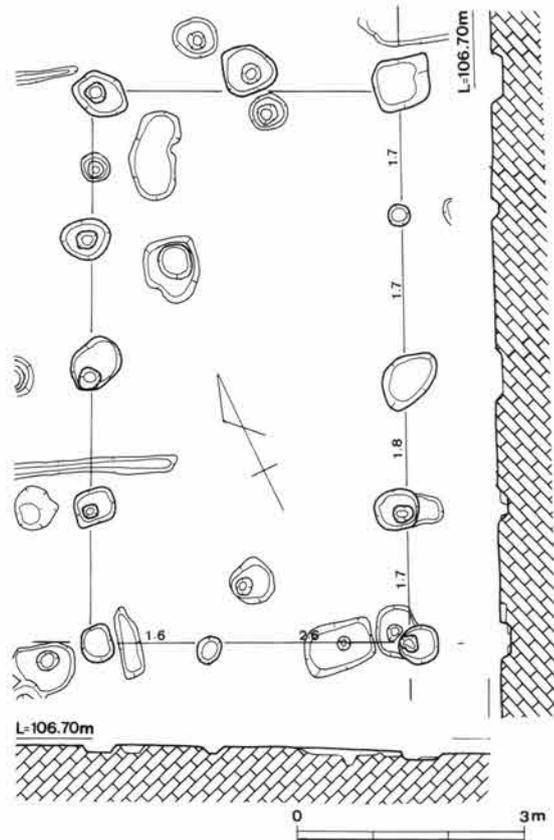
**堅穴式住居跡 S H 14**(第22図、図版第20) トレンチ北端で検出したもので、大半を後世の土坑に削平されるが、一辺5m以上の方形の堅穴式住居跡が復原される。南東角での周壁高は床面から5cmを測る。南東隅付近と東側の柱穴2本を検出した。掘形は円形で直径30~40cm・深さ30cmを測る。主軸はN18°Eである。遺物は柱穴内および南西隅付近の床面より、細片化した土師器が少量出土した。

②掘立柱建物跡

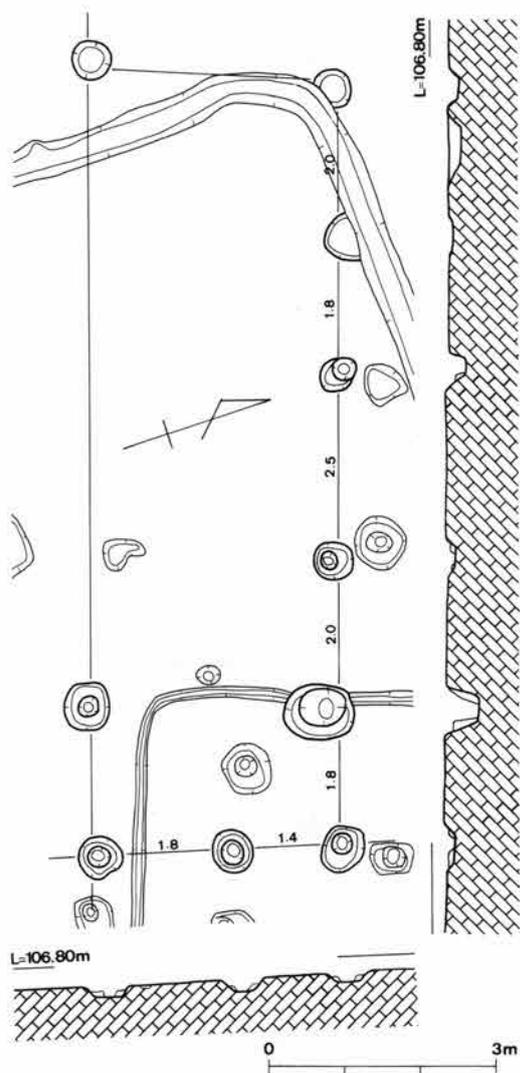
**掘立柱建物跡 S B 17**(第28図、図版第25) S H 15上層で検出した建物である。東西3間(5.6m)・南北6間(9.6m)の南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径50~85cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ7~45cmを測る。主軸はN35°Eである。



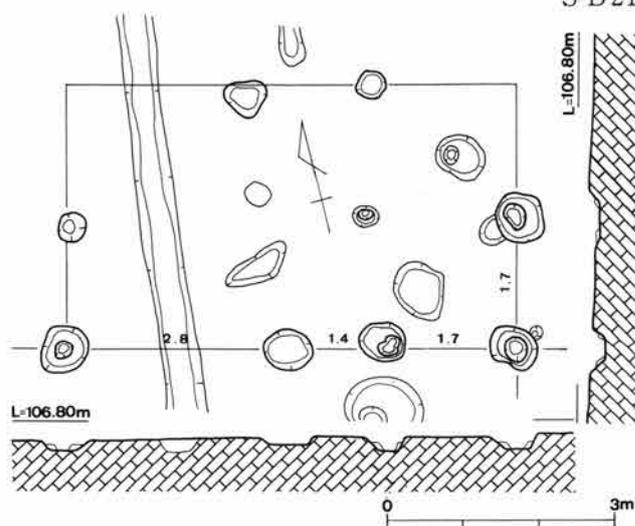
第32図 掘立柱建物跡 S B 21実測図



第33図 掘立柱建物跡 S B 22実測図



第34図 掘立柱建物跡 S B 23実測図



第35図 掘立柱建物跡 S B 24実測図

掘立柱建物跡 S B 18(第29図、図版第25) S H 15と並行する建物である。東西4間(7.8m)・南北3間(5.4m)の東西棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径0.5~1.1mの円形を呈し、遺構検出面からの深さ10~43cmを測る。主軸はN33° Eである。

掘立柱建物跡 S B 19(第30図、図版第25) S B 17と重なる建物跡である。東西2間(3.6m)・南北5間(8.8m)の南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は直径0.6~1mの円形または方形を呈し、遺構検出面からの深さ5~43cmを測る。主軸はN24° Eである。

掘立柱建物跡 S B 20(第31図、図版第25) S B 18南側で検出した建物である。東西3間(4.9m)・南北4間以上(7.8m)の南北棟の掘立柱建物跡と考えられる。柱穴は、直径0.5~1.0mの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ9~36cmを測る。主軸はN24° Eである。

掘立柱建物跡 S B 21(第32図、図版第25) S B 16北側で検出した建物である。東西3間(5.8m)・南北3間(5.3m)の東西棟の建物跡で、東に廂がつく。廂は1.3m出る。柱穴は、直径30~90cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ6~30cmを測る。主軸はN25° Eである。

掘立柱建物跡 S B 22(第33図、図版第25)

S B 21西側で検出した建物である。東西2間(4.2m)・南北4間(6.9m)の南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径30~70cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ10~20cmを測る。主軸はN14° Eである。

掘立柱建物跡 S B 23(第34図、図版第25) S B 22西側で検出した建物である。東西5間(10.1m)・南北2間(3.2m)の東西棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径35~90cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ10~30cmを測る。

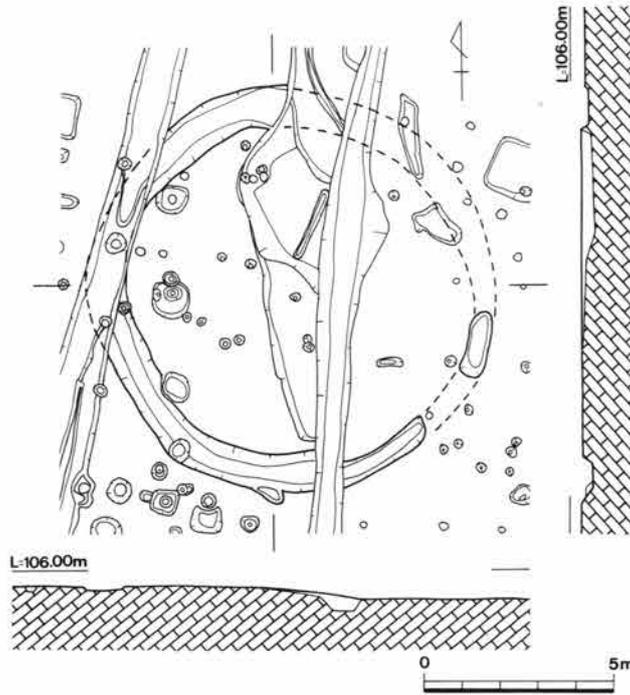
主軸はN14°Eである。

S B 24(第35図、図版第25) S H 01北側で検出した建物である。東西4間(5.9m)・南北2間(3.5m)の東西棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径30~70cmの円形を呈し、遺構検出面からの深さ10~21cmを測る。主軸はN14°Eである。

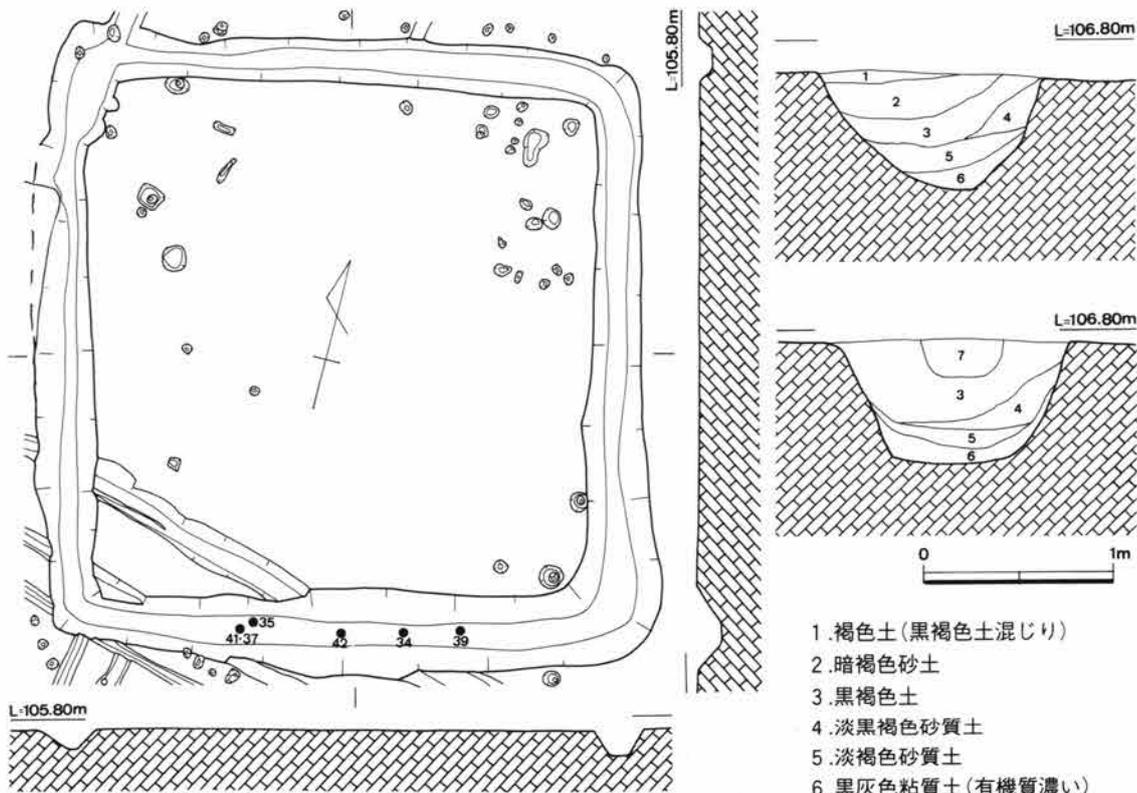
掘立柱建物跡S B 28(第22図、図版第20) S H 08上層で検出した建物である。東西3間(6.8m)のみ検出したもので、南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径50~70cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さは20~25cmを測る。主軸はN14°Eである。

③太田古墳群

太田1号墳(第36図、図版第23) トレンチ北端で検出したもので、直径9mの円墳が復原される。墳丘には、幅1m・深さ30cmの周溝がめぐる。墳丘の東側1/2は耕

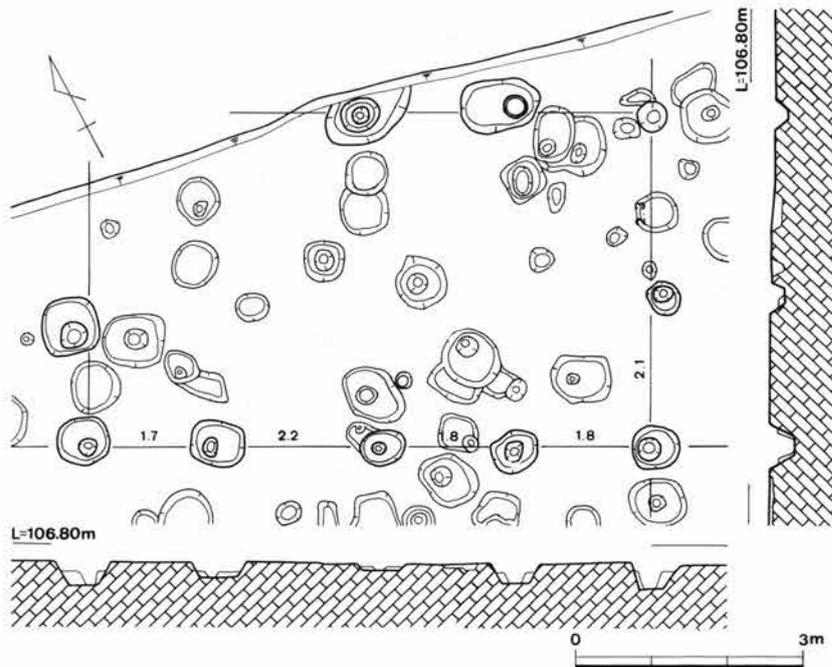


第36図 太田1号墳実測図



- 1. 褐色土(黒褐色土混じり)
- 2. 暗褐色砂土
- 3. 黒褐色土
- 4. 淡黒褐色砂質土
- 5. 淡褐色砂質土
- 6. 黒灰色粘質土(有機質濃い)
- 7. 近世の耕作に伴う溝

第37図 太田2号墳実測図

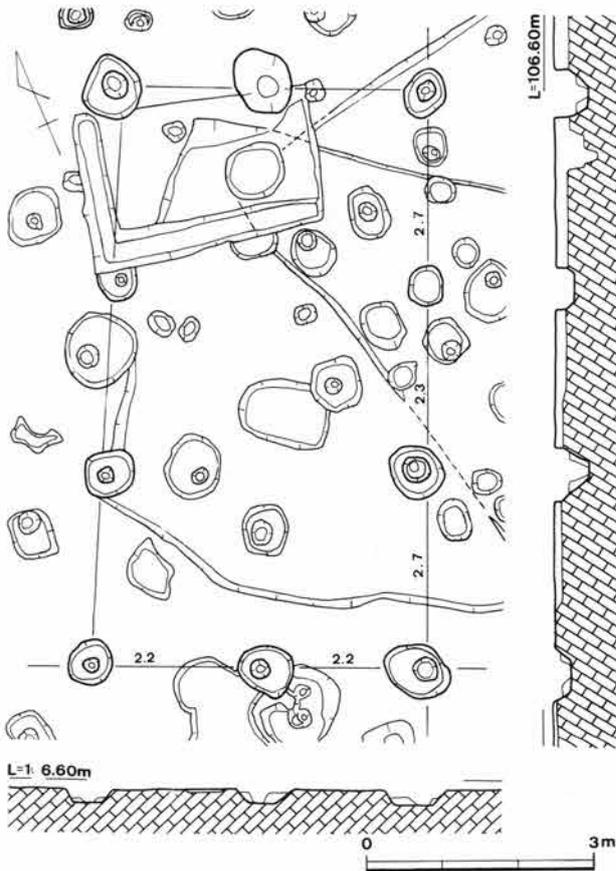


第38図 掘立柱建物跡 S B 25実測図

作に伴い、西側の周溝の一部は中世の溝により削平を受ける。墳頂部は、削平を受け埋葬施設は検出されなかった。周溝内より少量の土師器が出土しているが、図化できなかった。

太田2号墳(第37図、図版第23・24) 1号墳の南側で検出した一辺14mを測る方墳である。墳丘には、幅1.1~2.35m・深さ16~90cmの周溝がめぐる。周溝は、北東

隅が最も浅く、南東隅が最も深い。周溝底面は、東辺が北から南に、西辺は南から北へ、南辺は西から東に、北辺は中央部に向かってゆるい傾斜をなす。周溝内の堆積状況は、底面から標高106.2m付近までは滞水していたようで、有機質の堆積が認められた。南辺中央部では、この有機質の堆積層上面に西側から順に土師器高杯・甕・高杯・甕・高杯と一直線上に遺物がならべられていた。西辺中央部でも同様に土師器高杯・甕・壺がまとまって出土している。その後、これらの土器が埋没したのち、一気に埋まったような状況が北辺では観察されたが、西辺では、最後まで浅い窪みとして残っていたようである。この埋没していく過程の土砂中より、須恵器高杯・蓋片が出土している。南・西辺では、耕作に伴う溝により観察できなかった。1号墳同様、墳丘は削平を受け、埋葬施設は検出できなかった。



第39図 掘立柱建物跡 S B 26実測図

④溝

溝跡 S D48(図版第26・27) S H06北東側柱穴付近より北東方向に延びる直線的な溝である。溝幅約50cm・深さ約20~30cmを測る。北東方向に流れる溝で、北側の旧河道推定域に集落内の排水を行っていたと考えられる。溝内の埋土中より布留式併行期の甕が出土した。

(3)奈良時代・平安時代

①掘立柱建物跡

奈良時代・平安時代の遺構としては掘立柱建物跡8棟、溝5条、井戸4基がある。当該期の遺物が出土する多くの柱穴が認められるが、建物の復原はできなかった。

掘立柱建物跡 S B 25(第38図、図版第21)

S D40の東側で検出した建物である。東西4間(7.5m)・南北2間(4.4m)の東西棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径0.4~1.0mの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ10~25cmを測る。主軸はN23°Eである。

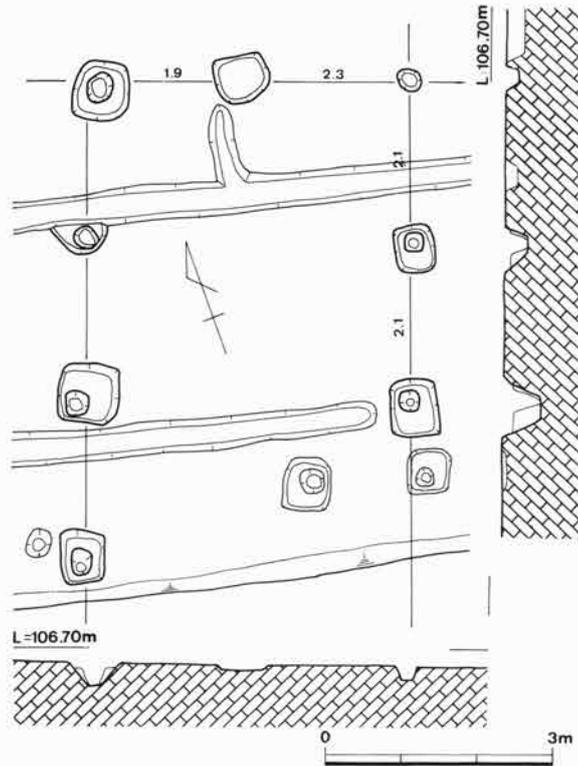
掘立柱建物跡 S B 26(第39図、図版第21)

S H03上層で検出した建物である。東西2間(4.4m)・南北3間(7.7m)の南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径40~90cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ10~35cmを測る。主軸はN23°Eである。

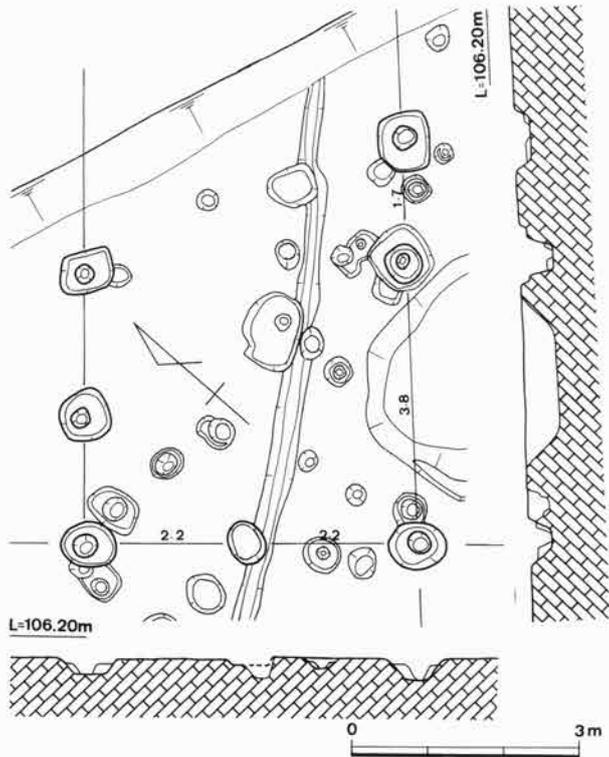
掘立柱建物跡 S B 27(第40図、図版第25)

S B16南側で検出した建物跡である。東西2間(4.2m)・南北3間(6.4m)以上の南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径35~80cmの円形あるいは長方形を呈し、遺構検出面からの深さ20~50cmを測る。主軸はN19°Eである。

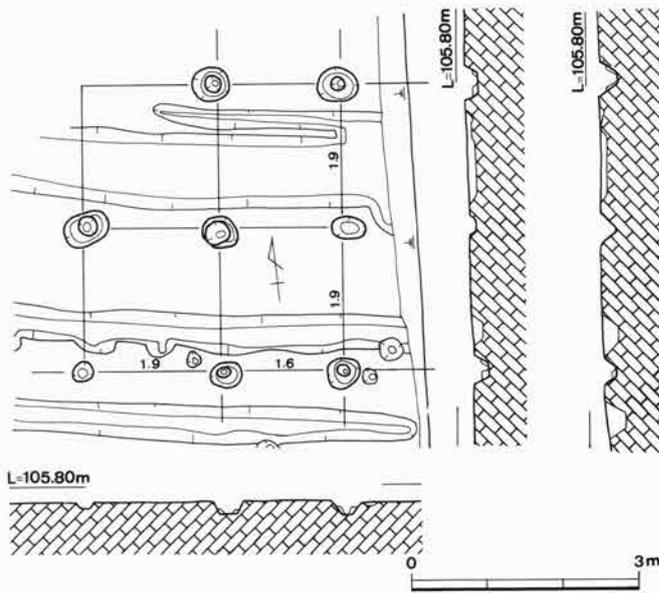
掘立柱建物跡 S B 29(第22図、図版第20) S H12上層で検出した建物である。東西2間(4.8



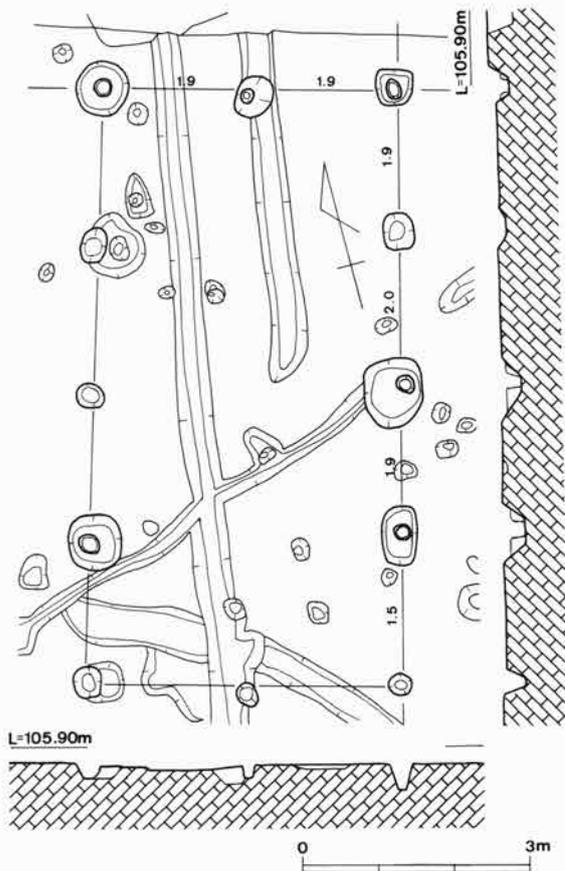
第40図 掘立柱建物跡 S B 27実測図



第41図 掘立柱建物跡 S B 30実測図



第42図 掘立柱建物跡 S B 37実測図



第43図 掘立柱建物跡 S B 38実測図

m)のみ検出したもので、南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径55~80cmの円形あるいは長方形を呈し、遺構検出面からの深さ30~40cmを測る。主軸はN13°Eである。

掘立柱建物跡 S B 30(第41図、図版第26) S B 27東側で検出した建物である。桁行4間以上(5.5m)・梁間2間(4.4m)の南西から北東棟を向く建物跡と考えられる。柱穴は、直径50~80cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ8~30cmを測る。主軸はN47°Eである。

掘立柱建物跡 S B 37(第42図、図版第23) 2号墳南東隅で検出した建物跡である。東西3間(3.5m)以上・南北2間(3.8m)の東西棟の総柱建物跡と考えられる。柱穴は、直径25~50cmの円形を呈し、遺構検出面からの深さ10~24cmを測る。主軸はN6°Eである。

掘立柱建物跡 S B 38(第43図、図版第23・26) 2号墳南西隅で検出した建物跡である。東西2間(3.8m)・南北4間(7.3m)の東西棟建物跡と考えられる。柱穴は、直径30~90cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ10~30cmを測る。主軸はN14°Eである。

掘立柱建物跡 S B 39(第44図、図版第20) トレンチ南端近くで検出した建物跡である。東西2間以上(3.4m)・南北2間(3.4m)の南北棟の総柱建物跡と考えられる。柱穴は、直径35~70cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ10~25cmを測る。根石を持つ柱穴も認められる。主軸はN21°Eである。

溝跡 S D 42(第22図、図版第27・28) トレンチ中央付近で検出した北西方向から南東方向に流れる直線的な溝である。中世の削平を多く受けており、溝幅約30~70cm・深さ約15~50cmを測る。

溝跡 S D 42(第22図、図版第27・28) トレンチ中央付近で検出した北西方向から南東方向に流れる直線的な溝である。中世の削平を多く受けており、溝幅約30~70cm・深さ約15~50cmを測る。

南側延長部分は削平によるためか存在しない。土師器細片が少量出土した。集落内の排水溝と考えられる。

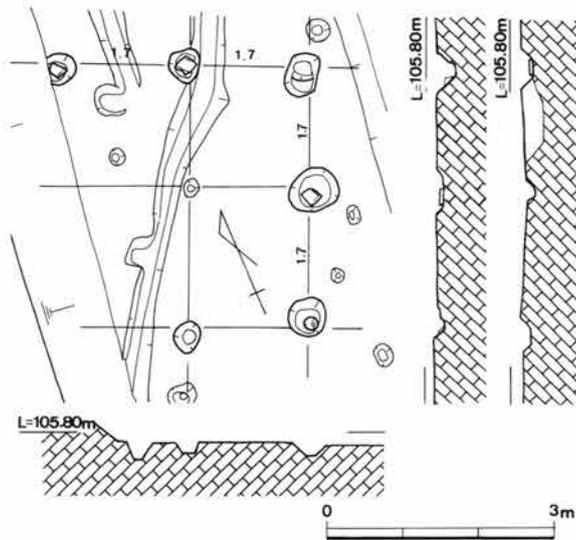
溝跡 S D44~47(第23図、図版第20・27) 2号墳東側と南側で検出したもので S D44・45、S D46・47の2本は併走すると考えられる。舌状の台地先端付近を等高線に並行するように、南西側から北東に流れ、途中「L」字状に屈曲したのち、旧河道推定域に流れるものである。この両溝間は、北端で約2.5mあり、北側から台地上の集落内に入る道路であると考えられる。道路を屈曲させる理由となったのは、2基の太田古墳群であったと推定される。S D45は溝幅約1m・深さ20cm、S D46は溝幅50cm・深さ30cm、S D47は溝幅50cm・深さ40cm、S D44は溝幅70cm・深さ15cmを測る。S D45から土師器甕(54)が出土した。

## ②井戸

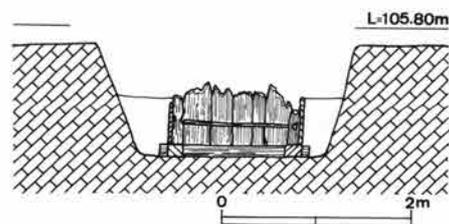
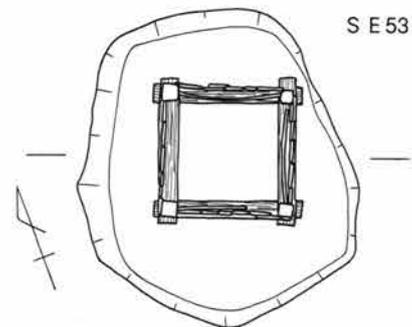
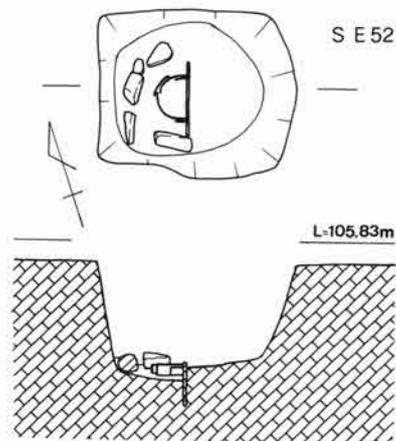
井戸 S E 49(第22図、図版第20) S B33の北側で検出した。掘形は円形で直径約2.5m・深さ80cmを測り、底部は平坦である。井戸枠は残存しない。出土遺物に須恵器杯身・蓋、土師器などがある。

井戸 S E 50(第22図、図版第20) S B20の北側で検出した。掘形は円形で直径約2m・深さ70cmを測り、底部は平坦である。井戸枠は残存しない。出土遺物に須恵器杯身・蓋、土師器などがある。

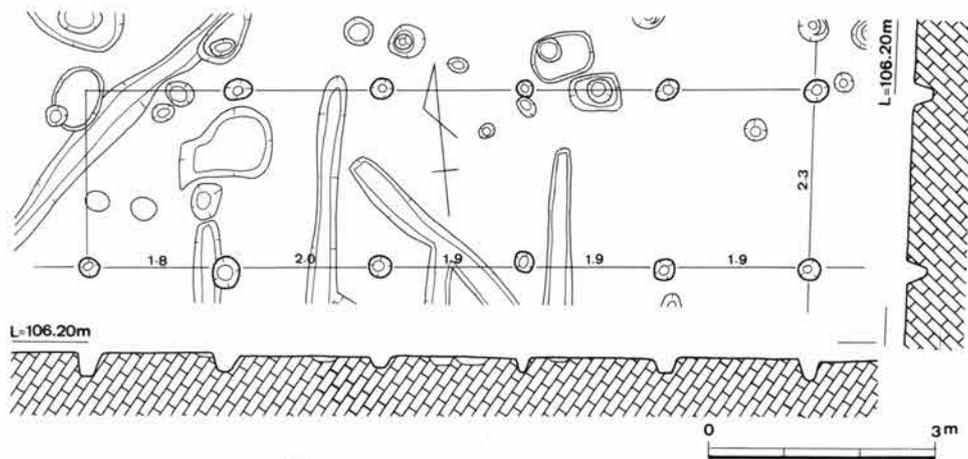
井戸 S E 53(第45図、図版第29) トレンチ南端で検出したもので、井戸掘形は方形で、一辺2.9m×3.6m・深さ1.2mを測る。井戸枠は土圧により内傾していたが、遺存状態は非常によく、その構造をうかがうことができた。井戸枠は、基底部に長さ約1.55m・幅18cm・厚さ12cmの角材を井桁状に組み、胴木とする。この胴木の交点に、約10cm四方の胴木を貫通する柄を穿ち、四隅に一辺1.5m前後の角柱を配し、四面の井戸枠には厚さ3~4cm前後の板材を使用する。枠板材は縦位置に組み、胴木より上方25cmの各面内側には横棧が設けられている。板材は各面5



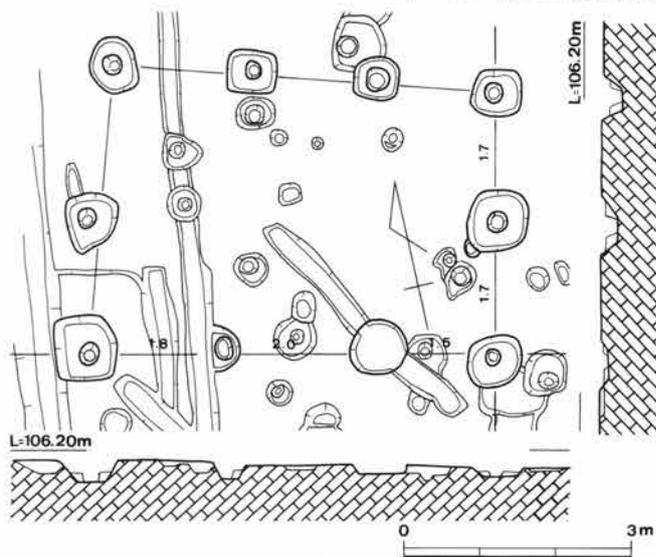
第44図 掘立柱建物跡 S B 39実測図



第45図 井戸 S E 52・53実測図



第46図 掘立柱建物跡 S B 33実測図



第47図 掘立柱建物跡 S B 31実測図

～6枚が使用されているが、部分的に前後2枚使用されているところもある。角柱・板材とも枿が残っており、建築部材が転用されたものである。井戸内からは須恵器杯身・蓋・甕、土師器甕・皿、緑釉陶器等が出土した。

井戸 S E 54(第23図、図版第29) S E 53の東側、トレンチ南東隅で検出した。井戸掘形は方形をなすと思われるが、約1/2が調査地外となる。深さ約1.2mを測り、底部に円形曲物を井戸枠として据える。曲物は当初2段であった

ようで、下段は直径40cm・深さ10cm、上段は長径60cm以上・短径50cm・高さ25cmが残存していた。井戸内から出土した遺物には、須恵器甕・蓋とともに、わずかに残る墨書土器等が含まれていた。

#### (4) 鎌倉時代

##### ① 掘立柱建物跡

遺構として検出したものには、掘立柱建物跡6棟・溝3条・井戸2基がある。掘立柱建物跡の多くは、南北方向に主軸を置く傾向が認められた。

掘立柱建物跡 S B 31(第47図、図版第26) 柵列 S A 55北側で検出した建物である。東西3間(5.3m)・南北2間(3.4m)の東西棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径60～80cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ15～30cmを測る。主軸はN12°Eである。

掘立柱建物跡 S B 32(第22図、図版第26) S E 39西側で検出した建物である。東西2間(5.6m)・南北2間(4.5m)の東西棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径35～70cmの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ15～50cmを測る。主軸はN21°Eである。

掘立柱建物跡 S B 33(第46図、図版第26) S B 30の北側で検出した建跡である。東西 5 間(9.6 m)・南北 1 間(2.3m)の建物跡と考えられる。柱穴は、直径25~40cmの円形を呈し、遺構検出面からの深さ15~30cmを測る。主軸はN 7° Eである。

掘立柱建物跡 S B 34(第48図、図版第26) トレンチ中央で検出した建物である。東西 4 間(9.9 m)・南北 2 間(4.2m)の東西棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径0.6~1.2mの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ15~60cmを測る。主軸はN 13° Eである。

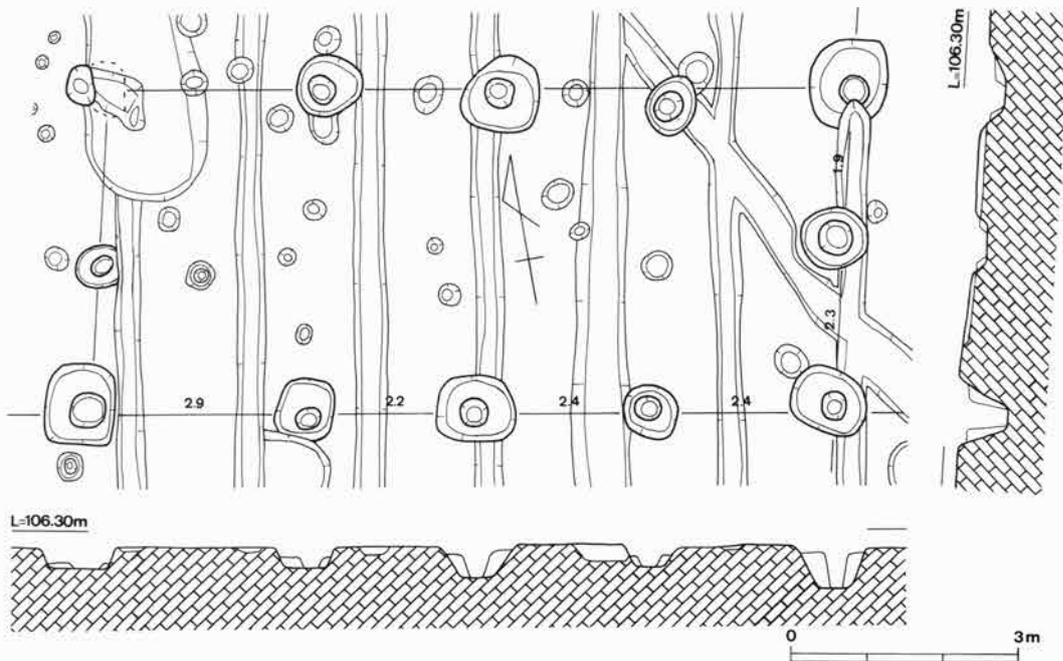
掘立柱建物跡 S B 35(第49図、図版第26・28) 柵列 S A 55西側で検出した建物である。東西 2 間(5 m)・南北 2 間以上(5.3m)の南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径0.7~1 mの円形あるいは方形を呈し、遺構検出面からの深さ30~50cmを測る。主軸はN 12° Eである。

掘立柱建物跡 S B 36(第49図、図版第26・28) S B 32と重複する建物である。東西 2 間(4.8 m)・南北 2 間以上(4.7m)の南北棟の建物跡と考えられる。柱穴は、直径0.6~1 mの円形あるいは長方形を呈し、遺構検出面からの深さ20~50cmを測る。主軸はN 1° Eである。

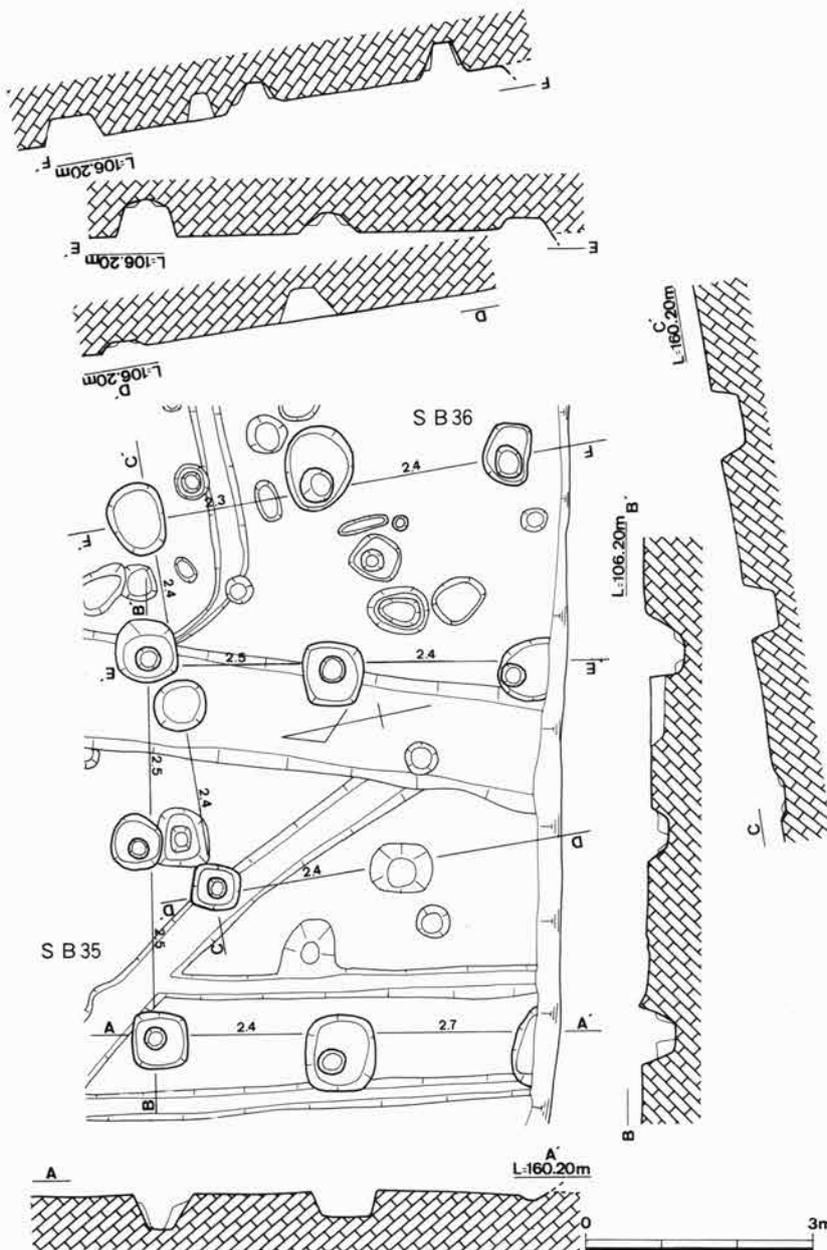
②柵列

S A 55(第22図、図版第28) S D 43とほぼ並行して延びるもので、1号墳付近でその方向を東西に転じる。S B 34を中心とする屋敷界を区画するものと考えられる。検出長は南北 8 間・東西 6 間分で、北端はS B 33中心から北に 9 mに位置する。南端は調査地外、西端は削平されたようである。柱間寸法は不揃いな部分もあるが、約 2 m前後である。柱穴掘形は、直径35~60cm前後の円形をなし、深さ20~50cmを測る。主軸はN 7° Eである。

S A 56(第23図、図版第20) S A 55とほぼ並行して延びるもので、屋敷界を区画するものと考えられる。検出長は南北 6 間・東西 1 間分で、柱間寸法は不揃いな部分もあるが、約 2 mである。柱穴掘形は、直径35~60cm前後の円形をなし、深さ20~50cmを測る。主軸はN 6° Eである。S



第48図 掘立柱建物跡 S B 34実測図



第49図 掘立柱建物跡 S B 35・36実測図

A 55・56間の距離は、北端で9m、南端で10mを測る。

### ③溝

溝 S D 40(第22図、図版第28)トレンチ西端で検出した素掘り溝である。S D 51と並行して延びてきたものが、S D 51の屈曲部分から北に方向を転じる。溝幅約1~1.6m・深さ0~48cmを測る。南側は削平により存在しない。断面は、逆台形と「U」字形をなす部分がある。溝底は、北側に傾斜している。溝内埋土中からは多くの遺物が出土したが、埋没時期を示すものとして第56図がある。

溝 S D 43(第22図、図版第28) S A 55・S B 32に先行するもので、台地に直交する素掘り溝である。溝幅約1.1~1.5m・深さ25cmを測り、断面は逆台

形状である。1号墳より南側は、後世の溝と重複しているため、溝幅がやや広がっている。溝底は北側に傾斜している。S D 41・42の溝中心間の距離は約41mである。現在の畦畔とは合致せず、現在の畦畔以前の耕作ないし台地上の土地利用に伴う、区画溝であると考えられる。

溝 S D 41(第22図、図版第25・28) S D 40と並行する素掘り溝で、南北方向に延びてきたものが、S B 24付近で90°屈曲し、東側に延びていく直線的な溝である。溝幅約40cm・深さ約19cmを測り、断面は逆台形である。溝底は、屈曲部で東側と南側に傾斜している。耕作ないし屋敷の区画に伴うものと考えられる。溝内埋土中より鉄滓(第58図128)が出土した。

### ④井戸

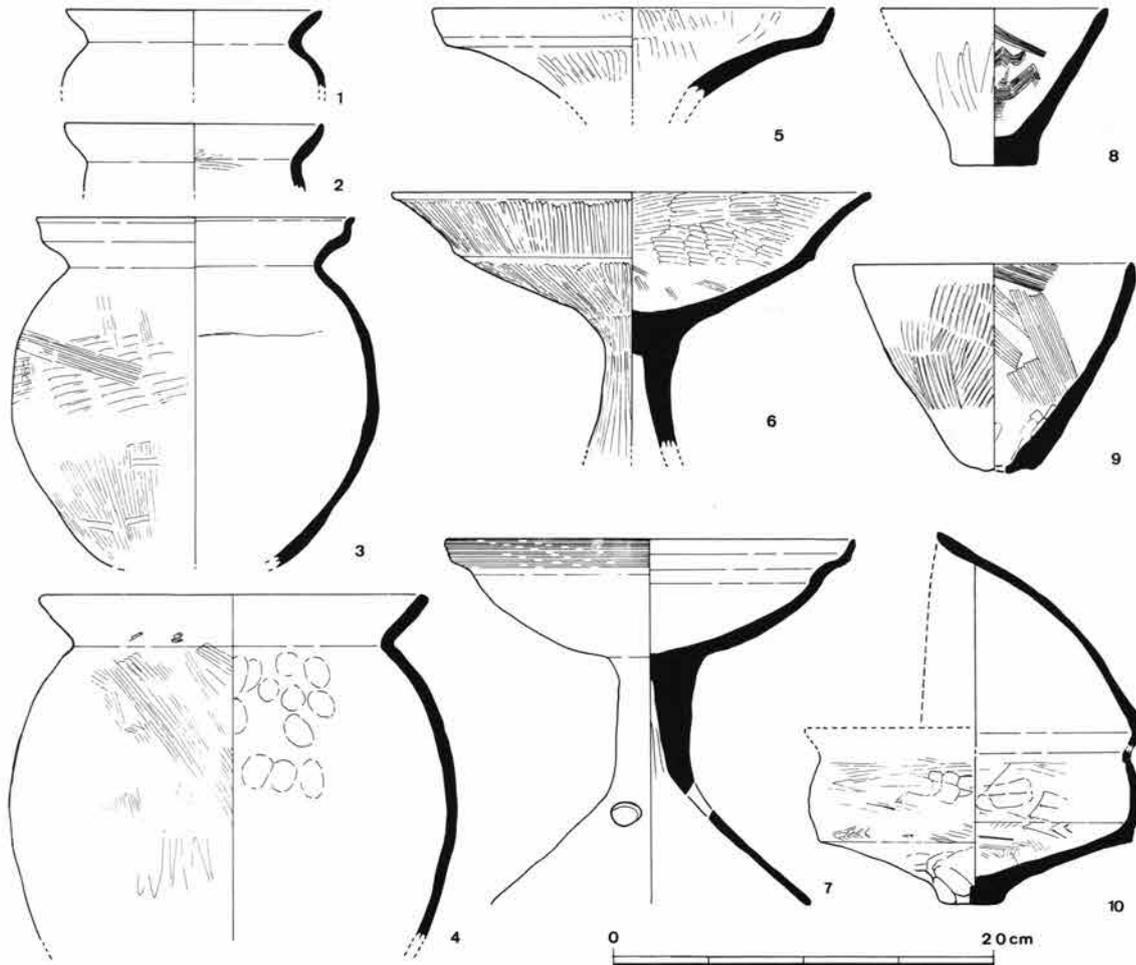
井戸 S E 51(第22図、図版第26) S A 55の北側で検出した。掘形は楕円形で長径約3.15m×短

径約2.65m・深さ60cmを測り、底部は平坦である。井戸枠は残存しない。出土遺物に瓦器碗・皿、土師器甕・皿がある。

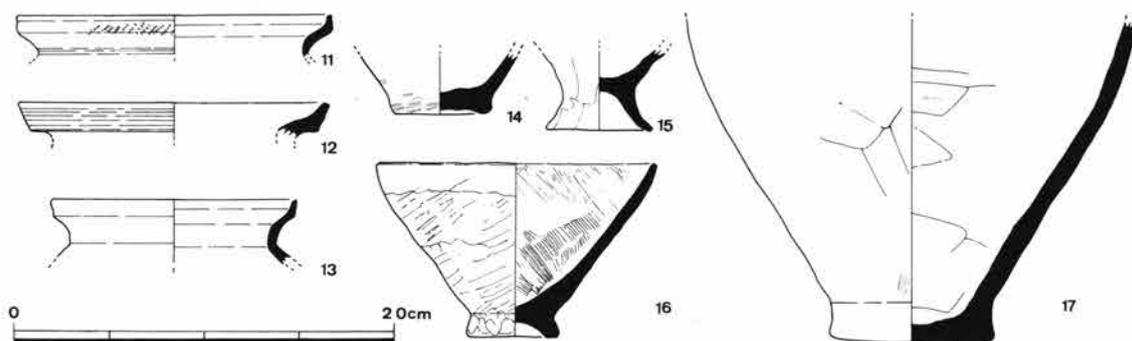
井戸S E 52(第45図、図版第29) S D 47の西側で検出した。井戸掘形は方形で一辺2.35m×1.8m・深さ1.2mを測る。底部は平坦である。底部に円形曲物と板材を井戸枠として据える。井戸枠は、掘形中心部よりやや西側にずれており、東側を幅10~20cm・厚さ3cmの板材を打ち込み、西側部分のみ曲物で井戸枠とする。曲物は約1/2を板材と接合させており、半径約45cm・深さ6cmが残存する。この曲物周辺には湧水層が存在しており、崩落防止のため南・北・西側には3cm×15cmほどの石材が5石配されている。井戸枠が中央部分に設けられなかった理由としては、掘削中に壁面が崩落して、底面が埋まりかけたため、急遽板材を打ち込み補強したものと考えられる。調査中に、北西側の壁面がオーバーハングしていることが観察された。井戸内から出土した遺物には、瓦器碗・土師器甕・皿が出土している。

### 3. 出土遺物

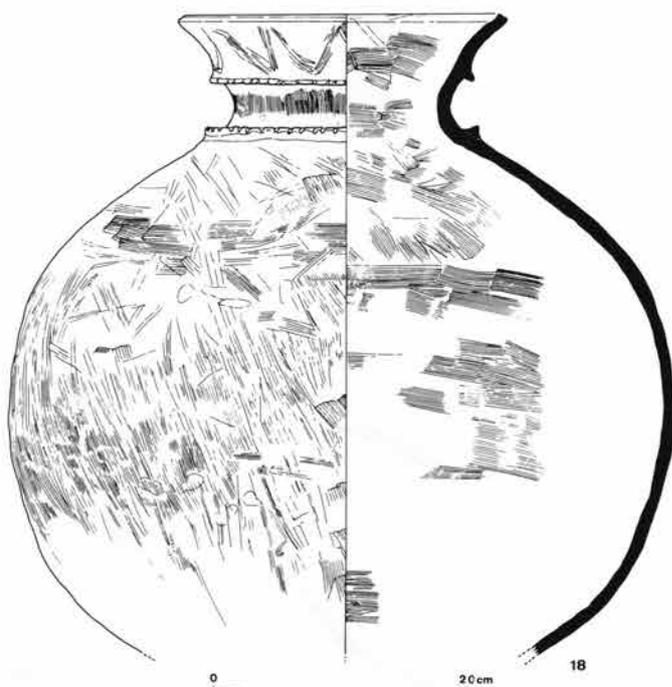
調査では、縄文時代から鎌倉時代までの遺物が出土しており、土器・石器・金属器・鍛冶滓・瓦が出土した。遺物の大半は土器で整理箱にして約27箱が出土している。内訳は、弥生~古墳時



第50図 出土遺物実測図(1)



第51図 出土遺物実測図(2)



第52図 出土遺物実測図(3)

代、奈良～鎌倉時代の遺物がほぼ同量である。各遺構すべてを網羅することはできないので、主な遺構のみ概略を述べる。

①土器

S H01出土土器(第50図、図版第30) 器種・器形が豊富であり、いずれも住居床面から出土した。1～4は甕である。1は、後円部が「く」字状に屈曲し、肩が張る。3は、受口状口縁のもので、体部の最大径が中央にあり、体部上半は右上がりのタタキ、下半はタタキと縦ハケ調整。内面は板ナデ調整か？4は、口縁端部は平坦な面を持つ。体部はハケ調整。

内面は上半に指押さえを施す。5は、器台でやや丸い受け部を持つ。外面および受け部をヘラミガキ調整で仕上げる。

6・7は大型高杯である。6は杯部が屈曲して外上方にのび、後円部が外反し、端部は丸くおさめる。杯部内外面・脚部外面はていねいなヘラミガキ調整により仕上げる。7は浅い椀状の杯部から複合口縁形を呈する口縁部へと続く。口縁部外面には6条の擬凹線文を施す。脚部の透し孔は3か所。8は平底の鉢で、外上方に直線的に延びる体部を持ち、口縁端部はまるくおさめる。9は有孔鉢で、外上方にのびる内湾気味の体部をもち、端部はやや尖る。底部はやや丸い。10は、手焙形土器である。偏平な鉢形の器体に半ドーム状の覆いをかぶせる。弥生時代後期後半の土器である。

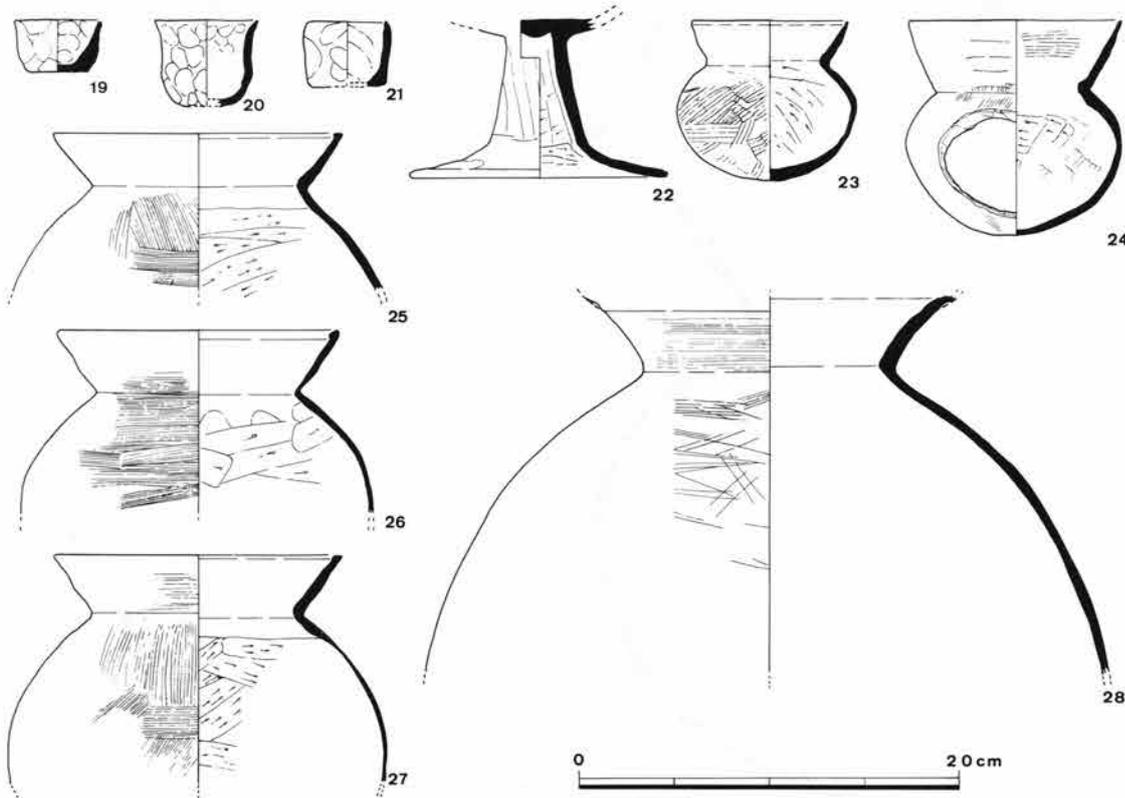
S H12出土土器(第51図) 11～13は甕である。いずれも複合口縁を呈するもので、11は口縁部に刺突文、12は口縁部外面に6条の擬凹線文を施す。14・15・17は甕底部片である。17は、体部内外面に板ナデ調整により仕上げる。16は台付鉢で、体部外面は右上がりのタタキ、内面は細か

いハケ調整。弥生時代後期後半の土器である。

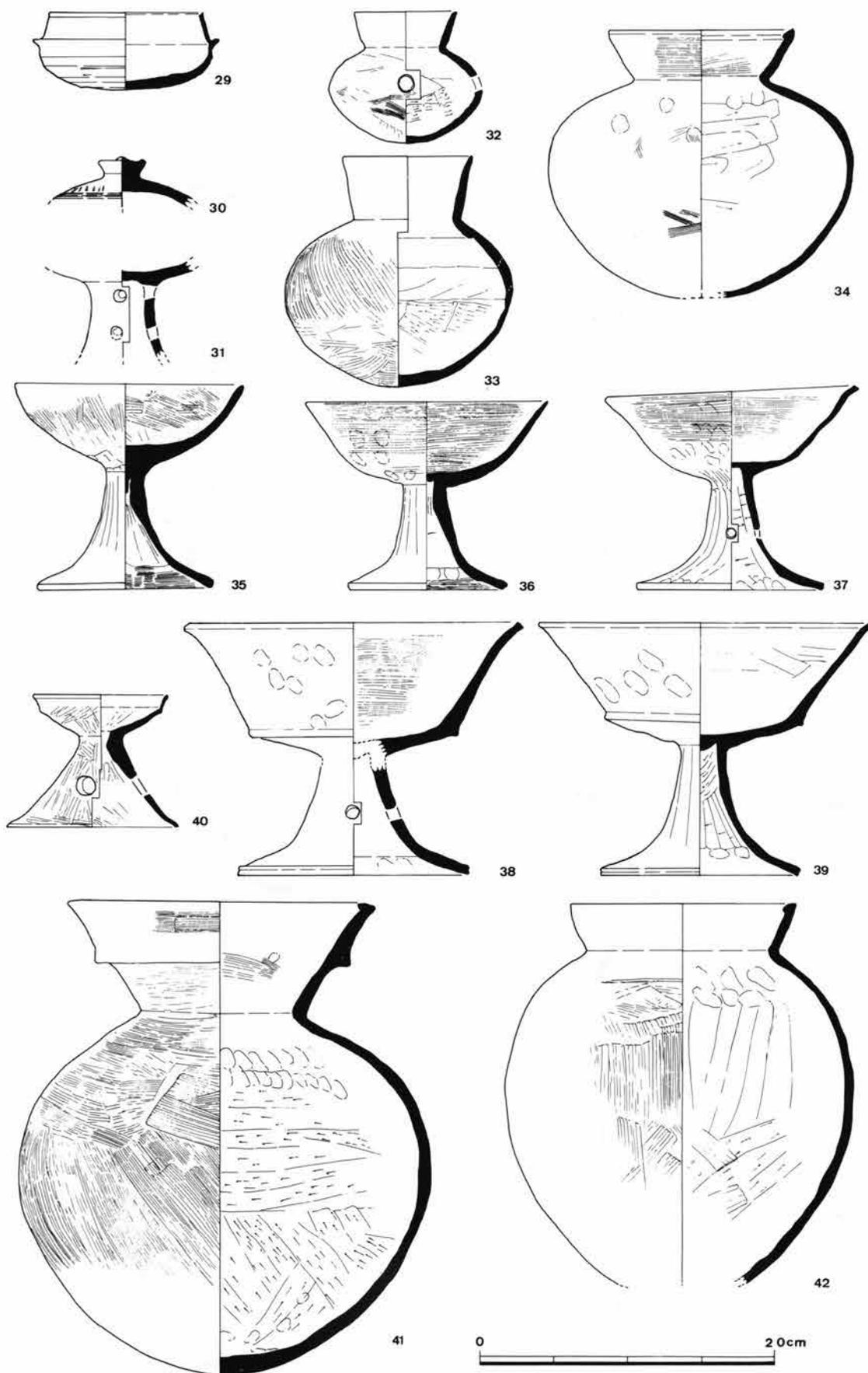
**包含層出土土器(第52図)** SD43が埋没した後の整地層から出土したもので、複合口縁をもつが口縁の立ち上がりが小さく、受け口状を成す。体部は球形で、体部と頸部の境に突帯が付く。口縁部に櫛描文を施し、突帯には刻目がみられる。弥生時代後期後半の土器である。

**SH11出土土器(第53図)** 19~21は、ミニチュア土器である。25~28は甕で、球状の体部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなり、端部は内側に肥厚する。22は高杯で、脚部が屈曲して外上方に延びる。23・24は小型丸底壺で口縁端部は「く」字状に屈曲し、端部は尖る。体部は球形である。24は、体部が大きく穿孔される。布留式併行期のものである。

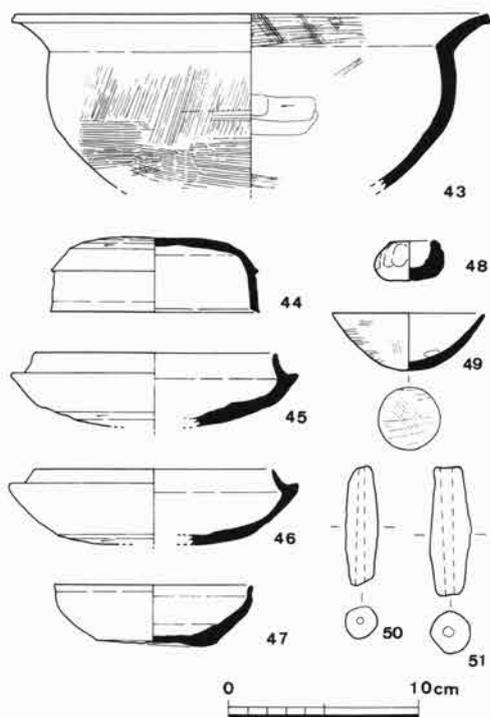
**太田2号墳出土土器(第54図)** いずれも周溝内より出土したもので、29・40は検出面出土で埋没時に混入したものと考えられる。29は、須恵器杯でTK47併行期と考えられる。40は小型器台で透し孔は3か所。古墳時代前期初頭と考えられる。30・31は小片であるが陶質土器か初期須恵器の可能性はある。30は蓋で天井部には櫛で刺突文をめぐらせる。31は高杯で、杯と脚との接合部付近の破片である。円形の透し孔が、2段4方向に認められる。32は須恵器甕を模倣したと考えられる壺である。33・34・41は壺で、体部は球形で、34は口縁端部は内側に肥厚する。体部外面はハケ、内面はケズリ調整と指押さえを施す。高杯35~39は杯部の屈曲が不明瞭な碗状のもの(35~37)、口縁部が外反し、杯部が深いもの(38・39)がある。37・38には4方向に円形の透かし孔が認められる。図示したもののほか、35・36タイプのもものが4点、37タイプが5点、38タイプが1点、40タイプが2点出土している。布留系の土器で、古墳時代中期前半と考えられる。



第53図 出土遺物実測図(4)



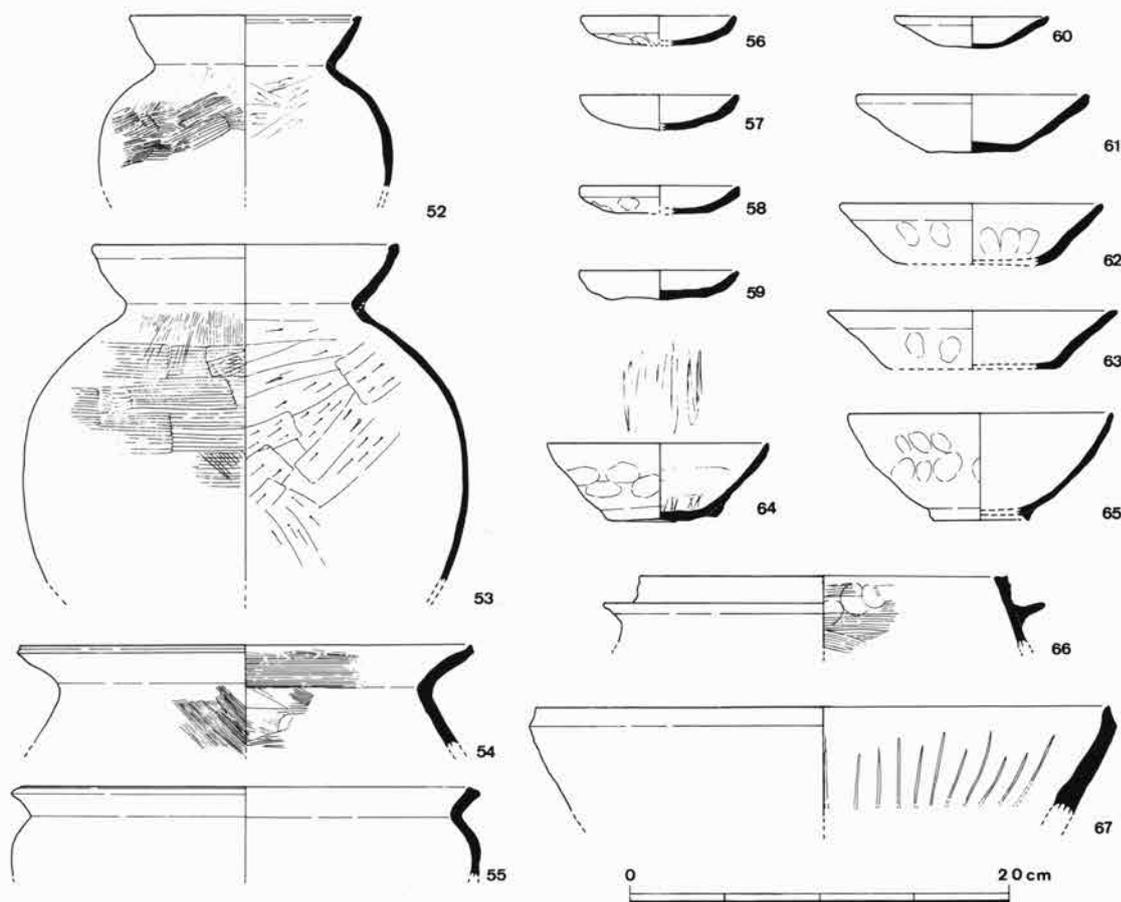
第54図 出土遺物実測図(5)



第55図 出土遺物実測図(6)

S H02・03・05・06・07出土遺物(第55図) 43は、混入遺物と考えられるもので、S H03出土である。44はS H07出土の須恵器蓋でT K47型式併行期、45・46は大型化した段階で、器高が低く立ち上がりが短いことから、T K10~43型式併行期のものと考えられる。47はS H02出土の杯でT K217型式併行期と考えられる。48・49はミニチュア土器である。48はS H06、49はS H07から出土した。50・51の土錘はS H03から出土した。50が15 g、51が24 gである。

溝内出土遺物(第56図) 52・53はS D49より出土した。S H11出土遺物同様、布留式併行期と考えられる。54は、S D45出土で飛鳥時代後半~奈良時代にかけてのものである。55は鉢で平安時代前期。土師皿56~63はS D40から出土した。67は古丹波のすり鉢でS D40から出土した、いずれも埋没時期を示す資料である。室町時代。瓦器碗64は、2号墳上の南北溝より出土し



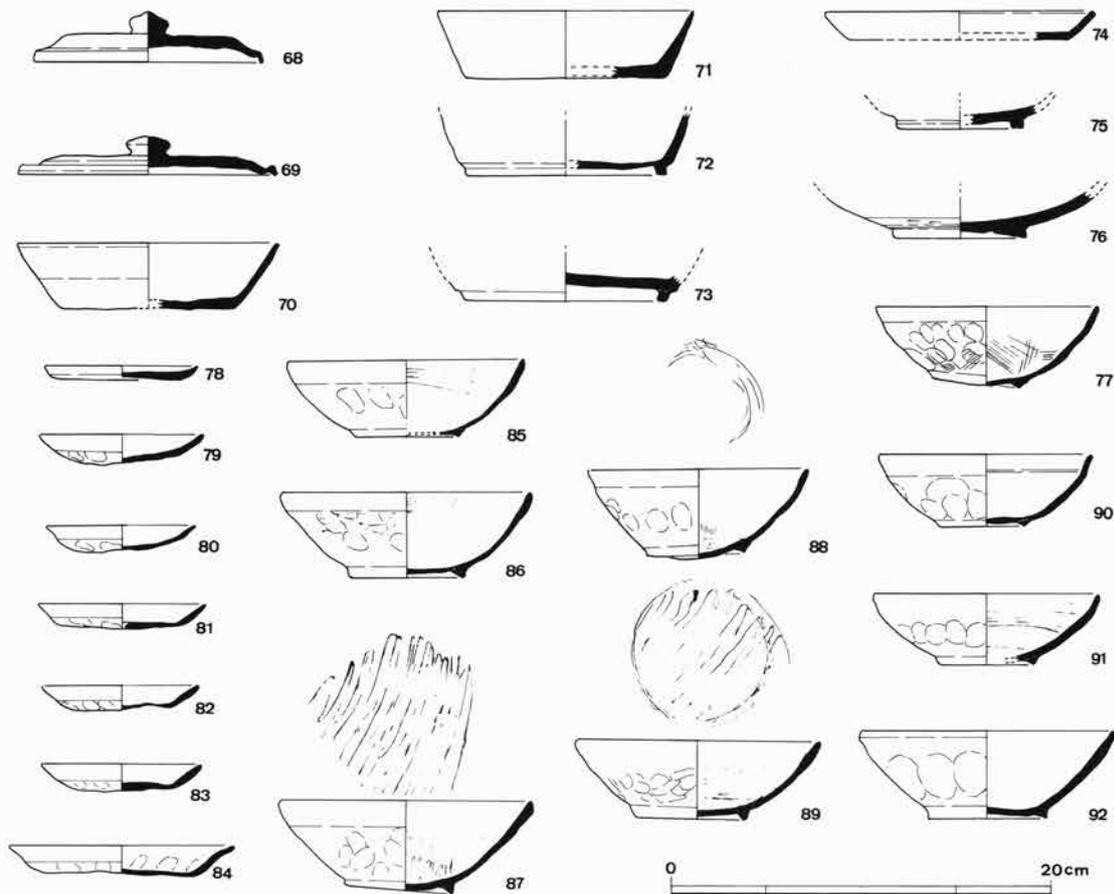
第56図 出土遺物実測図(7)

たもので、鎌倉時代中期。65は、2号墳の南側の東西方向の溝中より出土したもので、鎌倉時代後期。いずれも、耕作に伴う溝である。羽釜66はS D41から出土したもので、直線的に立ち上がり横方向の短い鰐が付く。内面にはハケ目が残る。

井戸出土遺物(第57図) S E53からは、68・69・71・72・74・76が出土した。蓋は端部が下方に尖る。扁平で大型品でないことから平安時代前半と考えられる。70・73・75はS E54から出土した高台の細部形態から9世紀前半と考えられる。76は緑釉の椀で、9世紀後半でS E53の埋没時期を示す。78～92はS E51から出土したもので、鎌倉時代中頃のものである。

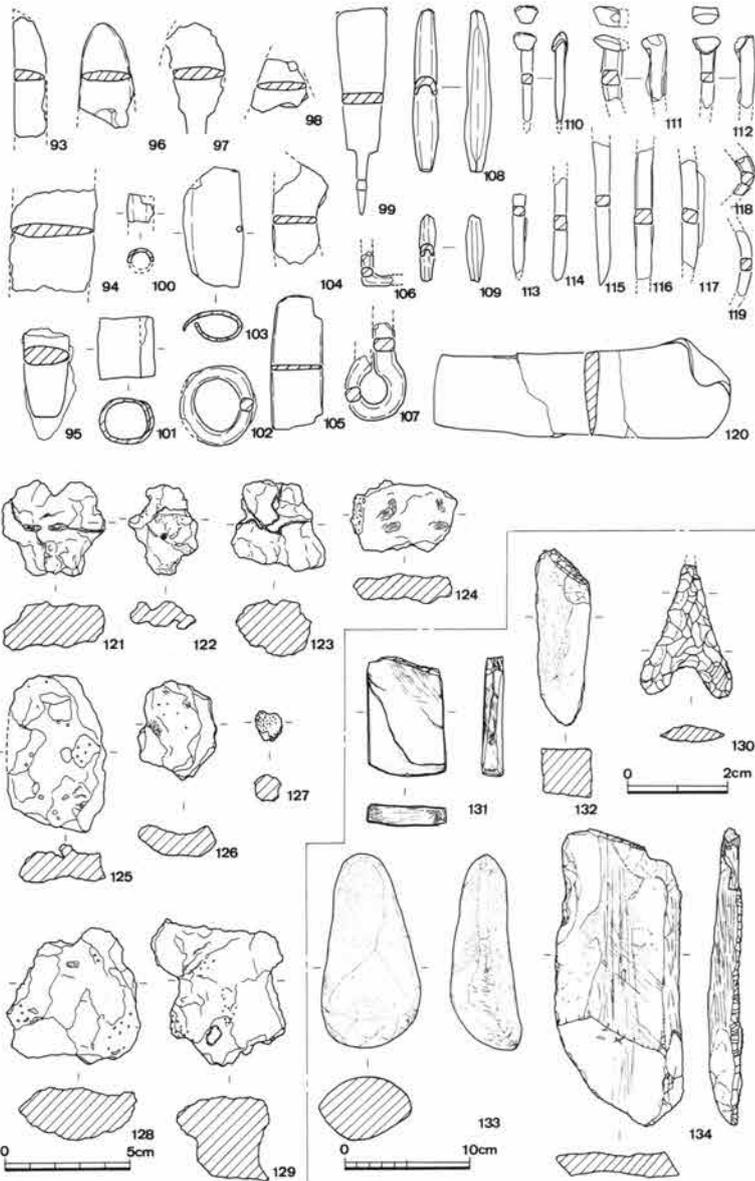
②鉄製品(第58図)

出土した鉄製品は、遺構に伴うものは明記したが、それ以外は包含層中より出土したものである。93は刀子で、刀身部分である。断面は二等辺三角形である。94は刀と思われる刀身の一部であるが、棟側がやや刃状になっている。幅3.5cm。95は刀の茎と考えられるもので、錆により膨らんでいる。2号墳東側周溝内より出土。96～99は鉄鏃で、96・97は腸扶柳葉鏃、98は三角形鏃の可能性がある。99は斧箭式のもので、全長8.1cmを測る。100は口金と考えられる。101は刀装具で、厚さ0.15cmの鉄板を直径2.2cmに巻いたもので、S H05より出土した。環状鉄器102は、直径約3.1cm・厚さ0.5cmを測る。106・107は馬具の可能性がある。106は鉸具、107は轡の一部と考えられる。108・109は不明鉄器で同様な形態をなし、鉄板を「U」字状に曲げるもので、108は



第57図 出土遺物実測図(8)

両端部を叩き、接合する。全長6.4cm・幅1cmを測る。110～119は鉄釘である。118・119は鉄釘でない可能性もある。出土した鉄器中最も多く、小片も含めると50点ある。いずれも角釘で、110～112は頭部先端が屈曲し、扁平化した頭部を持つ折曲頭形のもので、110は残存長3.6cm、芯部断面は0.5cmを測る。103～105は飾り金具と考えられるものである。103は、折れ曲がっているが、厚さ0.2cm・一辺6cmの隅丸方形の鉄板で、中央部に約0.3cmの孔がある。104・105は薄い鉄板であり、全長は不明であるが、105は幅2.1cm・残存長5.5cm、先端付近は幅0.4cm・長さ1cmほど狭くなる。鉄鎌120は直線的なもので、柄の取付け部の巻き込みが残る。全長12cm・厚さ0.6cm。



第58図 出土遺物実測図(9)

121～129は鉄滓で、127はSH03、121・126・129はSH05、124はSE49、122はSB25柱穴

内、123は柱穴内、125はSH11埋土中より出土したが、検出面のため混入遺物と考えられる。128はSD41より出土したもので、いずれも金属学的調査を行った。末尾に付載として結果を掲載しているのでこれを参照されたい。これ以外にあと10点の鉄滓が出土している。すべて鍛冶滓と考えられ、包含層中より出土したもので最も大きいものは535gあり、逆に小さいものは127の1.2gである。気孔があき、鉄分が多く残る部分は錆化が著しい。121・122・124・128・129のように木炭が挟み込まれているものが観察される。鍛冶炉が検出されていないため、鍛造剥片・粒状滓の出土はない。鍛冶炉が存在した可能性を示すものとしては、炉壁片・羽口の小片が認められる。

③石器(第58図)

130は、先端を一部欠損する凹基無茎式の打製石鎌である。石材はサヌカイト製で長さ2.7cmを

測る。全体にていねいな剥離が施されている。地山直上で検出したもので、縄文時代に比定される。133はS H01より出土した敲石で、砂岩系の長円礫を利用したもので、下端に敲打痕が認められる。長さ15.6cmを測る。131・132・134は砥石である。131は欠損品であるが、上方の欠損部分を除き、全面に使用痕が残る。凝灰岩製でS E51から出土した。132・134はS H01から出土したもので、粘板岩系の原石をそのまま使用したもので、134は小口面を除き全面使用痕が残るが、132は一面だけである。

#### 4. ま と め

今回の調査では、弥生時代後期末から中世にかけての多くの遺構が検出されるとともに、新たに太田古墳群(2基)も検出された。台地の一部を調査したにすぎないが、この地での土地利用の一端を垣間見ることができた。ただ、包含層中から出土する多くの遺物を見ると、弥生時代から中世までの全期間を通じて、継続して居住が行われていたことは明らかである。遺構の変遷は、弥生時代後期末にはS H01・03・12が出現し、古墳時代前期にはS H11・15・16とS D50、中期前半には太田1・2号墳、後期初頭にS H07、後半にはS H02・04・05・06・08~10・13・14とS B17~24へと続く。飛鳥時代後半には2号墳東側で検出された道状遺構、奈良時代中頃から平安時代にかけてはS B25~29とS E49・50、平安時代にはS B28・37~39とS D42とS E53・54、鎌倉時代にはS B31~36とS A55・56とS D40・41・43とS E51・52などの遺構が見られる。

弥生時代後期、古墳時代前期は古墳時代後期の竪穴式住居跡と比べるとやや大型の住居が検出されたが、これらの竪穴式住居跡は一集落単位での住居の単位数は不明であるが、出土遺物からすると、あと数棟の住居が存在していたと思われる。その後、台地先端付近を利用して2基の古墳が築造される。古墳については、中期に属するものであり、山内川流域の谷部では、鹿谷地区の葎田野西山古墳群に次ぐものであり、平地に築造されていた点で特筆される。また、従来から亀岡市内では、中期古墳は、2基近接した方墳が築造されていると指摘されていたが、規模は小さいが円墳と方墳が共存していたという特色もある。京都府教育委員会が行った第7次調査では埴輪片が採集されたり、調査地南側には塚という伝承が残り、周辺では拳大の河原石の散乱が認められることから、葦石・埴輪をもつさらに大きい古墳が存在する可能性もある。また、遺構の希薄なS D40西側周辺では、古墳の破壊に伴うと考えられる鉄製品の出土が見られる。

古墳築造後は周辺には竪穴式住居跡は存在していない。6世紀後半以降7世紀初頭にかけては、豪族の居館されている亀岡市鹿谷遺跡、八木町八木嶋遺跡<sup>(注14)</sup>のように掘立柱建物跡の住居や倉庫とともに、竪穴式住居跡が同時に併存していたと考えられる。このように、古墳時代後期には2種の異なった建物が存在する。古墳時代の住居跡を見た場合、住居様式の均一性の崩壊が認められ、時間の経過とともに、竪穴式住居跡から掘立柱建物跡へと移行していく過程が観察される。八木嶋遺跡では40棟の掘立柱建物跡が検出され、主屋を中心とする建物群の周囲は浅い溝と堀で区画されている。この区画外には竪穴式住居跡2棟も検出されている。鹿谷遺跡は、5世紀後半~7世紀前半・奈良時代・平安・鎌倉時代の長期間存続した遺跡であるが、古墳時代の竪穴式住居跡

は100棟検出され、大型の掘立柱建物跡も見つかっているが、八木嶋遺跡に対してその比が逆転している。これらのことは、この集落の居住者の階層の差と見ることもできる。太田遺跡では、八木嶋遺跡のように整然と並んだ大型建物は検出されなかったが、集落内に小規模な住居区画が存在した可能性を示唆する。この時期の住居跡は掘立柱建物跡・竪穴式住居跡とも2～3回の建て替えによるものであることが明らかとなったが、時期別に区分するとほぼ方位を同じくする2～3棟の掘立柱建物跡を1単位とし、東西・南北棟の建物として並び、その周辺に八木嶋遺跡と同じように従属的な住居と考えられる竪穴式住居跡数棟が付随する。建て替えが行われても一定の範囲の中で行われたようで、前代の建物跡周辺に限られており、竪穴式住居跡も同様な状況をなしており、占有していた敷地空間が存在するようである。このことは7世紀代に入ってもそのまま継承されたようで、古墳を迂回するような道状遺構にみられるように、遺構は確認されなかったが、8世紀中頃に至るまでの遺物が出土する柱穴が認められることから、同様な敷地空間の占有があったものと考えられる。

9世紀前半以降本格的な台地内および周辺の土地利用が開始されたようで、それまで古墳周囲に遺構は存在しなかったが、これ以降、柱穴内から遺物が認められるようになる。古墳周濠内埋土土層中からも、当該時期の遺物が少量ではあるが認められることから、古墳が破壊されたと考えられる。それに伴い、新しい土地区画が設けられた(S D43)。この区画が条里に基づくものであったかどうかは不明であるが、現在の畦畔になる以前の区画であることには間違いはない。第5次調査で検出された南北溝とは西に約275mの距離に当たる。この溝を中心に平安時代は集落が形成されたようで、2号墳南側および前代からの集落部分が居住空間に供され、それより北側は作業空間ないしは生産域であったようである。その後、S D41が設けられ前代からの居住域が消滅し、それに伴いS D43が埋められ、新たにS D40が設けられたようである。S D43埋没後は、それに沿うような形で柵列S A55が設けられ、整然とした建物配置が行われるようになる(S B30・31・32)。さらに柵列S A55の東側には新たに柵列S A56が設けられており、整然とした配置であったようである。この柵列間は約10mを測り、区画に基づくことは明らかである。この時点では、この区画以外には建物の存在は確認できない。台地北端は集落域となり、南西側は生産域に転じるようである。その後、S D40が室町時代をもって埋没しており、太田遺跡の終焉を迎えるようである。

弥生時代以降、小居住空間を踏襲してきたものが、古墳の築造に伴い集落形態に大きな影響を与え、平安時代以降、古墳の破壊により、新たな方格地割の設定が集落形態に変容をもたらしたものと考えられる。また、鍛冶滓の出土に見られるように、古墳時代後期以降中世に至るまで、集落内で鉄器の生産も行われていたことも明らかとなった。今後の周辺の調査に期待するところが大きい。

(増田孝彦)

注1 水谷壽克・森下 衛・鶴島三壽・中川和哉・柴 暁彦ほか「千代川遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』)

第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

- 注2 石井清司・田代 弘ほか「北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注3 吉水眞彦・大槻眞純ほか「昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』 京都府教育委員会) 1977  
田代 弘・細川康晴「国道9号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要(3)小金岐古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注4 野島 永・河野一隆「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注5 野々口陽子「4. 余部遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第88冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注6 村尾政人・田代 弘ほか「太田遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注7 樋口隆久「太田遺跡第2次発掘調査」(『亀岡市文化財調査報告書』第37冊 亀岡市教育委員会) 1996
- 注8 松尾史子「府営農業基盤整備関係遺跡平成8年度発掘調査概要 [1] 太田遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1997)』 京都府教育委員会) 1997
- 注9 岸岡貴英「府営農業基盤整備関係遺跡平成8年度発掘調査概要 [1] 太田遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1997)』 京都府教育委員会) 1997
- 注10 奈良康正「府営農業基盤整備関係遺跡平成8年度発掘調査概要 [1] 太田遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1997)』 京都府教育委員会) 1997
- 注11 増田孝彦「1. 太田遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注12 岡崎研一「1. 太田遺跡第8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第89冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注13 調査参加者は次の通りである(順不同・敬称略)。  
出野 宣・中村拓也・鎌田安彦・西村治郎・山口卓也・西田 稔・松元順代・高田眞由美・関口睦美・柿谷悦子・三尾恭子・高山和泉・田村 茜・中岡五月美・後藤朋子・庄林真弓・吉岡一男・森重雄・美馬如子・福島ちえ子・桂 正・竹岡春雄・西田恭三・前田幸枝・石田初美・大石ふゆ子・東前愛子・村嶋みよ子・原野実子・竹岡喜代子・西田貞代・斉藤初美・大西房美・石田忠一・原野恭治・竹岡美恵子・黒田直弘・出畑忠一・中西貞子・岡本志げ乃・竹岡弘子・原野秀司・石田百合子・山元宏文・堤 満・陸田初代・森川敦子・榎本順子・長井謙治
- 注14 柴 暁彦・原田三壽「2. 国道478号バイパス関係遺跡平成2・4年度発掘調査概要 (1)八木嶋遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

# 太田遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤正己・鈴木瑞穂

## 1. 調査項目

① 肉眼観察 ② 顕微鏡組織 ③ ビッカース断面硬度 ④ 化学組成分析

## 2. 調査結果

### (1)OTA-1 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：椀形鍛冶滓の破片である。側面2面は破面。縁辺は波状の曲面を呈する。上面は滑らかで長さ1cm前後の木炭痕が一面にごく薄く認められる。下面は凹凸が著しく、鍛冶炉中の木炭の上層に形成された滓と思われる。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 ①に示す。淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト( $\text{Fayalite} : 2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、微小白色樹枝状結晶ヴスタイト( $\text{Wustite} : \text{FeO}$ )が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 1 ①に淡灰色木ずれ状結晶の硬度測定<sup>(註)</sup>の圧痕を示す。硬度値は636Hvで、ファイヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファイヤライトに同定される。

④ 化学組成分析：Table. 2に示す。鉄分低くガラス分の多い成分系であった。全鉄分(Total Fe)46.14%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.08%、酸化第1鉄( $\text{FeO}$ )47.85%、酸化第2鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )12.68%の割合であった。ガラス質成分( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )35.48%で、このうち塩基性成分( $\text{CaO} + \text{MgO}$ )1.96%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )0.24%、バナジウム(V)<0.01%と低値であった。また、酸化マンガン( $\text{MnO}$ )0.17%、銅(Cu)は0.10%と非常に高い値を示した。含銅磁鉄鉱を始発原料とする鉄素材の鍛冶作業の派生物と考えられる。

### (2)OTA-2 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：小型の椀形鍛冶滓の破片である。側面は5面全面破面。底面には石英粒、砂粒の混入の顕著な鍛冶炉床土が厚く付着する。上面には一部光沢のあるガラス質部分が薄くみられる。色調は灰褐色でやや風化気味である。

② 顕微鏡組織：Photo. 2 ②~④に示す。②は暗黒色ガラス質スラグ中の微小析出物である。③は淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。④中央は銹化鉄( $\text{Geothite} : \alpha - \text{FeO} \cdot \text{OH}$ )部分で、その周囲にファイヤライトが晶出する。ガラス質分の多い鍛冶滓である。

### (3)OTA-3 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：上下面ともにおだやかな凹凸の著しい小型で完形の椀形鍛冶滓である。凹部に

は木炭痕が認められ、鍛冶炉中の木炭の上層に形成された滓と思われる。

②顕微鏡組織：Photo. 1 ⑤～⑦に示す。⑤はややまとまった錆化鉄部分が認められる。また、滓部は淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト、微小白色樹枝状結晶ヴスタイトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出している。⑥⑦は淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト、微小白色樹枝状結晶ヴスタイトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出し、さらに微小金属鉄粒が錆化して散在する。

③化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分45.78%に対して、金属鉄0.15%、酸化第1鉄16.69%、錆化鉄含みで酸化第2鉄46.69%の割合であった。ガラス質成分25.81%で、このうちに塩基性成分0.84%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン0.15%、バナジウム0.00%と低値であった。また、酸化マンガン0.11%、さらに銅は0.15%と非常に高い値を示した。OTA-1と同様、含銅磁鉄鉱を始発原料とする鉄素材の鍛冶作業の派生物と考えられる。

#### (4)OTA-4 含鉄鉄滓

①肉眼観察：不整形の厚い酸化土砂に覆われた試料である。表面に錆化による亀裂が顕著にみられる。地の色調は灰色で細かい気孔が認められる。

②顕微鏡組織：Photo. 2 ①～③に示す。既に金属鉄(Metallic Fe)は残留せず、錆化鉄となるが、片状黒鉛および素地のパーライト痕跡が認められ、ねずみ鑄鉄に分類される。

③化学組成分析：Table. 2 に示す。酸化土砂に覆われた錆化鉄なので、酸化物定量分析を行っている。全鉄分51.66%に対して、金属鉄0.13%、酸化第1鉄16.10%、錆化鉄含みで酸化第2鉄主体の55.78%の割合であった。炭素含有量は4.01%と鑄鉄レベルを呈し、夾雑物( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )13.06%である。随伴微量元素は押並べて少なく、砂鉄特有成分の二酸化チタン0.07%、バナジウム0.00%、酸化マンガン0.02%、銅0.005%であった。鉱石が始発原料の鉄塊と思われる。用途としては浸炭なめかけ用の原料鉄の可能性が挙げられよう。

#### (5)OTA-5 鍛冶滓

①肉眼観察：非常に小型で軽い質感の鍛冶滓である。1面のみ破面で、非常に細かい気孔がやや密に認められる。

②顕微鏡組織：Photo. 2 ④～⑧に示す。④～⑥は淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。⑦⑧は暗黒色ガラス質スラグ中の微小析出物である。赤熱鉄素材の酸化防止用粘土汁多用時の派生物であろうか。

#### (6)OTA-6 鍛冶滓

①肉眼観察：やや流動状の滑らかな表面をした不定形の鍛冶滓である。破面はなく完形である。長さ1cmの木炭痕が認められ、色調は黒灰色で細かい気孔がまばらにみられる。

②顕微鏡組織：Photo. 3 ①～③に示す。白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ビッカース断面硬度：Photo. 3 ①に硬度測定の前痕を示す。硬度値は432Hvであった。測定時の亀裂のためか、ヴスタイトの文献硬度値450～500Hvの下限を僅かに下回るが、ヴスタイトに同定される。

## (7)OTA-7 椀形鍛冶滓

①肉眼観察：やや細長い形状の小型で偏平な椀形鍛冶滓である。側面2面が僅かに破面であるが、ほぼ完形に近い。上面はほぼ平坦で細かい木炭痕が数箇所認められる。下面はやや凹凸があり、粉炭が付着する。地の色調は黒灰色である。

②顕微鏡組織：Photo. 4 ①～③に示す。①は白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。②③は錆化鉄である。

③化学組成分析：Table. 2に示す。鉄分高く脈石成分の少ない成分系である。全鉄分51.88%に対して、金属鉄0.23%、酸化第1鉄31.46%、酸化第2鉄38.89%の割合であった。ガラス質成分20.84%で、このうち塩基性成分0.66%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン0.17%、バナジウム<0.01%であった。酸化マンガン0.06%、銅0.005%であった。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

## (8)OTA-8 椀形鍛冶滓

①肉眼観察：偏平な椀形鍛冶滓である。側面3面は破面。上面には長さ1cm程の木炭痕が数箇所に認められる。下面には淡褐色の炉床粘土の付着が一部みられる。地の色調は灰色で表面風化が著しい。

②顕微鏡組織：Photo. 4 ④～⑧に示す。④～⑥は主要鉱物相で白色粒状結晶ヴスタイトが凝集気味に晶出し、その粒間に淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトと、基地の暗黒色ガラス質スラグが認められる。⑦⑧は椀形滓底部の炉床粘土に接する部分で、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト、微小白色樹枝状結晶ヴスタイトが基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ピッカース断面硬度：Photo. 3に硬度測定の影響を示す。硬度値は462Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイトに同定される。

④化学組成分析：Table. 2に示す。鉄分低くガラス分が多い。また脈石成分の少ない成分系である。全鉄分23.39%に対して、金属鉄0.02%、酸化第1鉄21.34%、酸化第2鉄40.55%の割合であった。ガラス質成分59.44%で、このうち塩基性成分3.62%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン0.34%、バナジウム0.00%と低値であった。また、酸化マンガン0.11%、銅0.006%と低値であった。

## (9)OTA-9 椀形鍛冶滓

①肉眼観察：椀形鍛冶滓の破片である。側面2面は破面。上面には長さ1cm程の木炭痕が数箇所に認められる。下面は石英粒、長石粒の混入の著しい鍛冶炉床土が付着する部分と、粉炭痕や垂下時の凹凸が残る部分が存在する。滓の地の色調は黒灰色。

②顕微鏡組織：Photo. 4 ④～⑧に示す。④は白色粒状結晶ヴスタイト、滓部で淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。⑤～⑦は錆化鉄部分で、金属鉄は既に残留せず錆化しているが、パーライト(Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なった層状組織)とフェライト結晶粒界の痕跡を留めている。0.1%前後の炭素含有量で、軟鋼であったと推定される。

③ビッカース断面硬度：Photo. 4 ④に白色粒状結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は454Hvで、文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイトに同定される。

④化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分51.02%に対して、金属鉄0.07%、酸化第1鉄43.87%、酸化第2鉄24.09%の割合であった。ガラス質成分26.83%で、このうちに塩基性成分0.96%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン0.19%、バナジウム<0.01%と低値であった。また、酸化マンガン0.04%と低値で、銅0.007%であった。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

### 3. まとめ

太田遺跡の古墳時代後期から中世に比定される出土鍛冶滓の調査の結果、以下のことが明らかとなった。

古墳時代後期の鍛冶滓の鉱物組成は、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが発達し、ヴスタイトが僅かに晶出する。化学組成は脈石成分が少なく、銅(Cu)が著しく高い特徴を有する。含銅磁鉄鉱を始発原料とする精製された鉄素材の鍛冶作業の派生物である可能性が高い。

一方、古代以降の鍛冶滓はヴスタイトの晶出が顕著で、化学組成は脈石成分が少ないため、鍛錬鍛冶滓と推定される。鉄器製作に関わる鍛冶滓である。

以上のように、古墳時代後期と古代以降では明確に異なる特徴を示し、搬入鉄素材のあり方が異なっていたものと推定される。なお、OTA-8は鉱物組成、化学組成からむしろ古代以降に分類される可能性があるだろう。

注1 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』 1968

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル 度	調査項目						備考		
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ 組織	顕微鏡 組織	ビッカース 断面硬度	X線回折	CMA	化学分析		耐火度	カー ボ
OTA-1	太田	SH05 柱穴	腕形鍛冶滓	6c後半～末	54×50×33	76.8	なし		○				○			
OTA-2	太田	SH05 床面	腕形鍛冶滓	6c後半～末	37×31×21	13.9	なし		○							
OTA-3	太田	SH05 床面	腕形鍛冶滓	6c後半～末	41×39×17	33.6	なし		○					○		
OTA-4	太田	P-118	含鉄鉄滓	不明	35×35×23	31.4	なし		○					○		
OTA-5	太田	SH04	鍛冶滓	6c後半～末	11×11×10	1.2	なし		○							
OTA-6	太田	P-82	鍛冶滓	平安時代前半 8c後半～9c前半	36×27×10	10.5	なし		○							
OTA-7	太田	SE49	腕形鍛冶滓	平安時代後半 9c前半～中頃	41×28×10	15.1	なし		○					○		
OTA-8	太田	SH11	腕形鍛冶滓	混入遺物 古墳時代前期?	60×39×12	39.9	なし		○					○		
OTA-9	太田	SD41	腕形鍛冶滓	中世	54×52×21	71.8	なし		○					○		

Table. 2 供試材の化学組成

符号	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化珪素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化アルミナ (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化リン (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)
OTA-1	46.14	0.08	47.85	12.68	26.51	5.92	1.28	0.68	0.96	0.13	0.17	0.24	0.08	0.10	0.22	0.25	<0.01	0.10
OTA-3	45.78	0.15	16.69	46.69	19.47	4.47	0.55	0.29	0.87	0.16	0.11	0.15	0.20	0.09	0.19	0.71	0.00	0.15
OTA-4	51.66	0.13	16.10	55.78	9.630	2.50	0.17	0.09	0.57	0.10	0.02	0.07	0.03	0.09	0.47	4.07	0.00	0.01
OTA-7	51.88	0.23	31.46	38.89	13.75	4.51	1.19	0.47	0.75	0.17	0.06	0.17	0.13	0.06	0.56	0.56	<0.01	0.01
OTA-8	23.39	0.02	21.34	9.70	40.55	12.33	2.25	1.37	2.28	0.66	0.11	0.34	0.14	0.08	0.69	0.72	0.00	0.01
OTA-9	51.02	0.07	43.87	24.09	18.96	5.740	0.60	0.36	0.95	0.22	0.04	0.19	0.10	0.04	0.31	0.30	<0.01	0.01

符号	造滓成分		TiO <sub>2</sub>
	造滓成分	Total Fe	
OTA-1	0	0.769	0.005
OTA-3	0	0.564	0.003
OTA-4	0.00	0.253	0.001
OTA-7	0	0.402	0.003
OTA-8	0	2.541	0.015
OTA-9	0	0.526	0.004

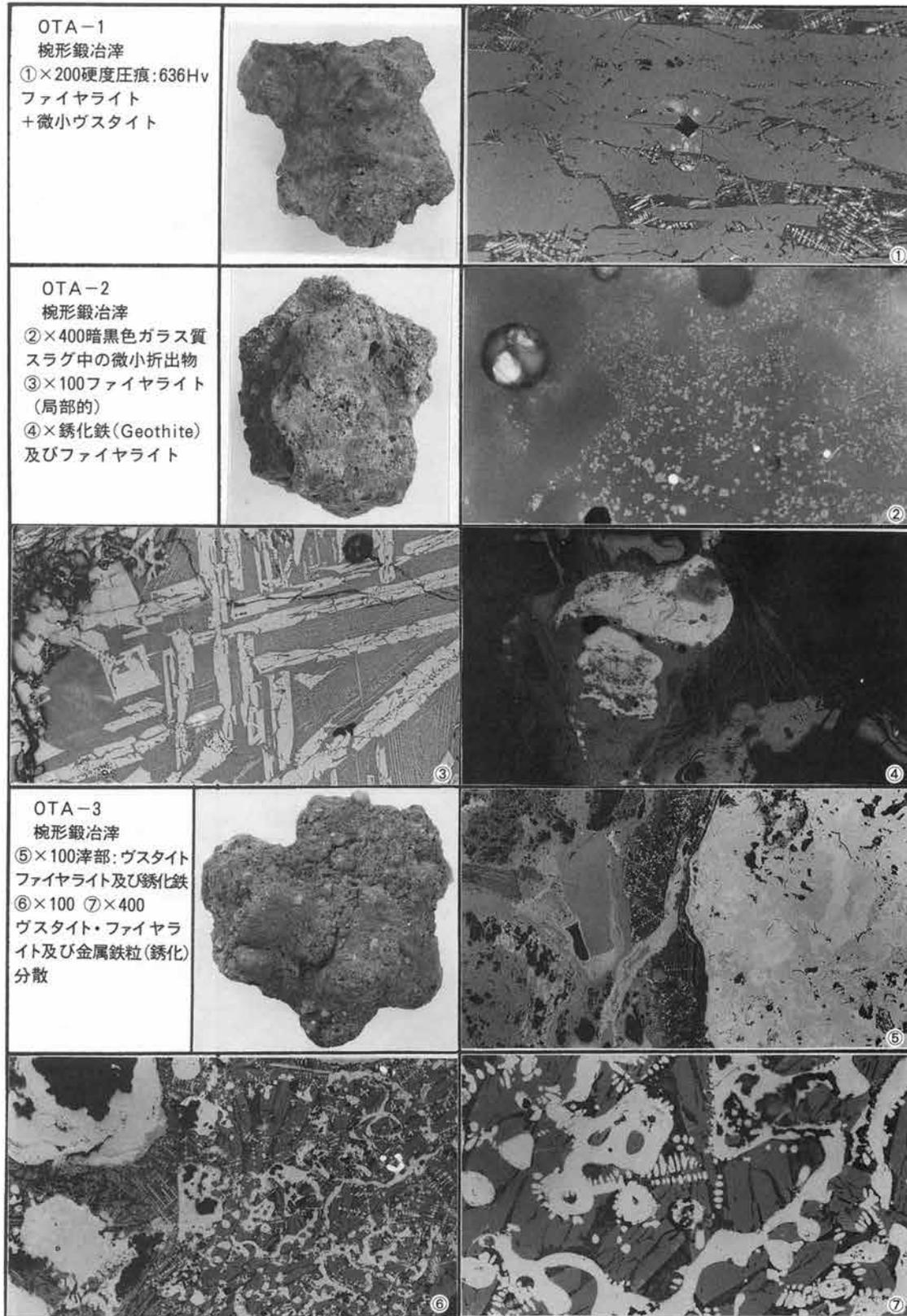


Photo1. 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

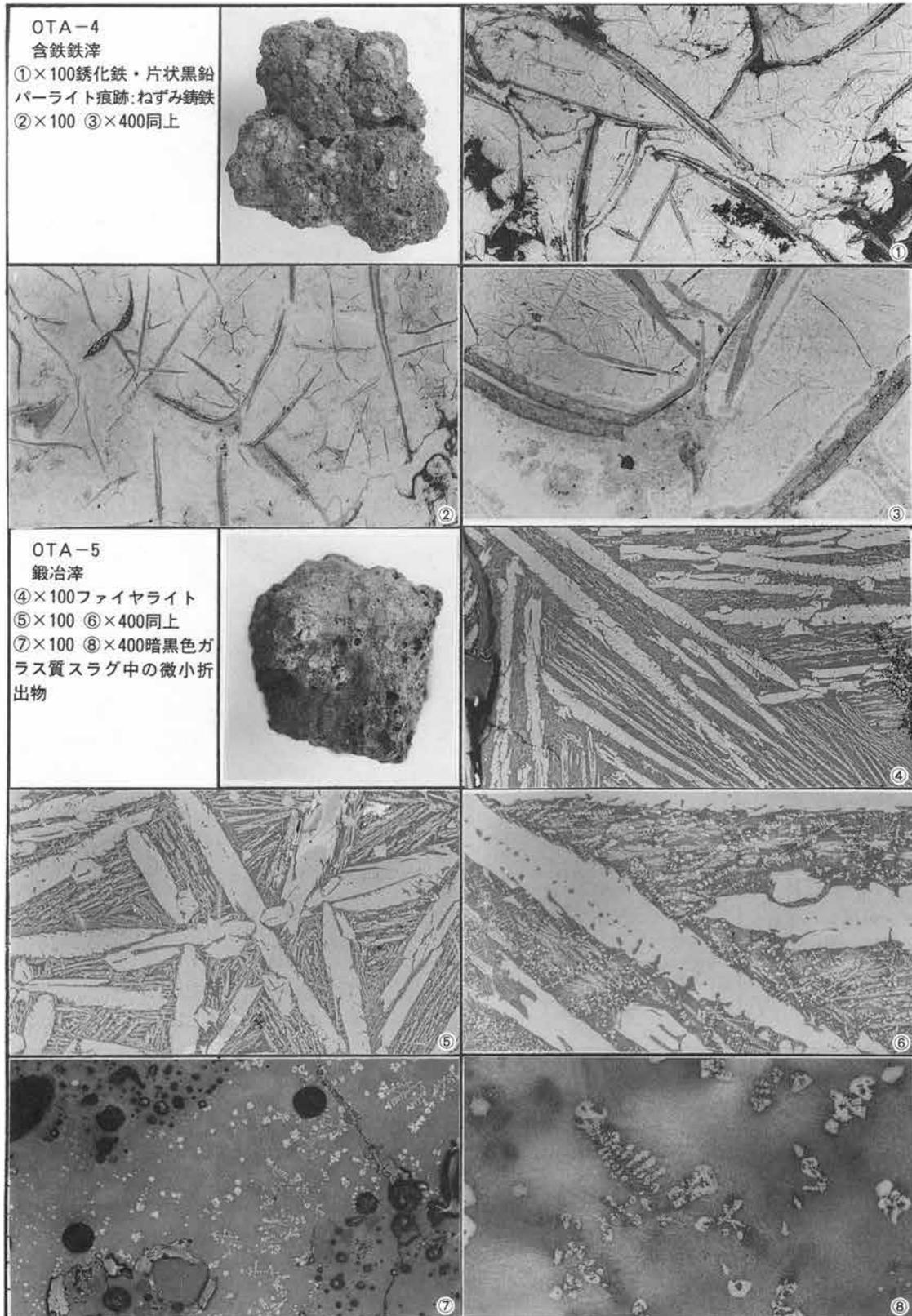


Photo 2. 含鉄鉄滓・鍛冶滓の顕微鏡組織

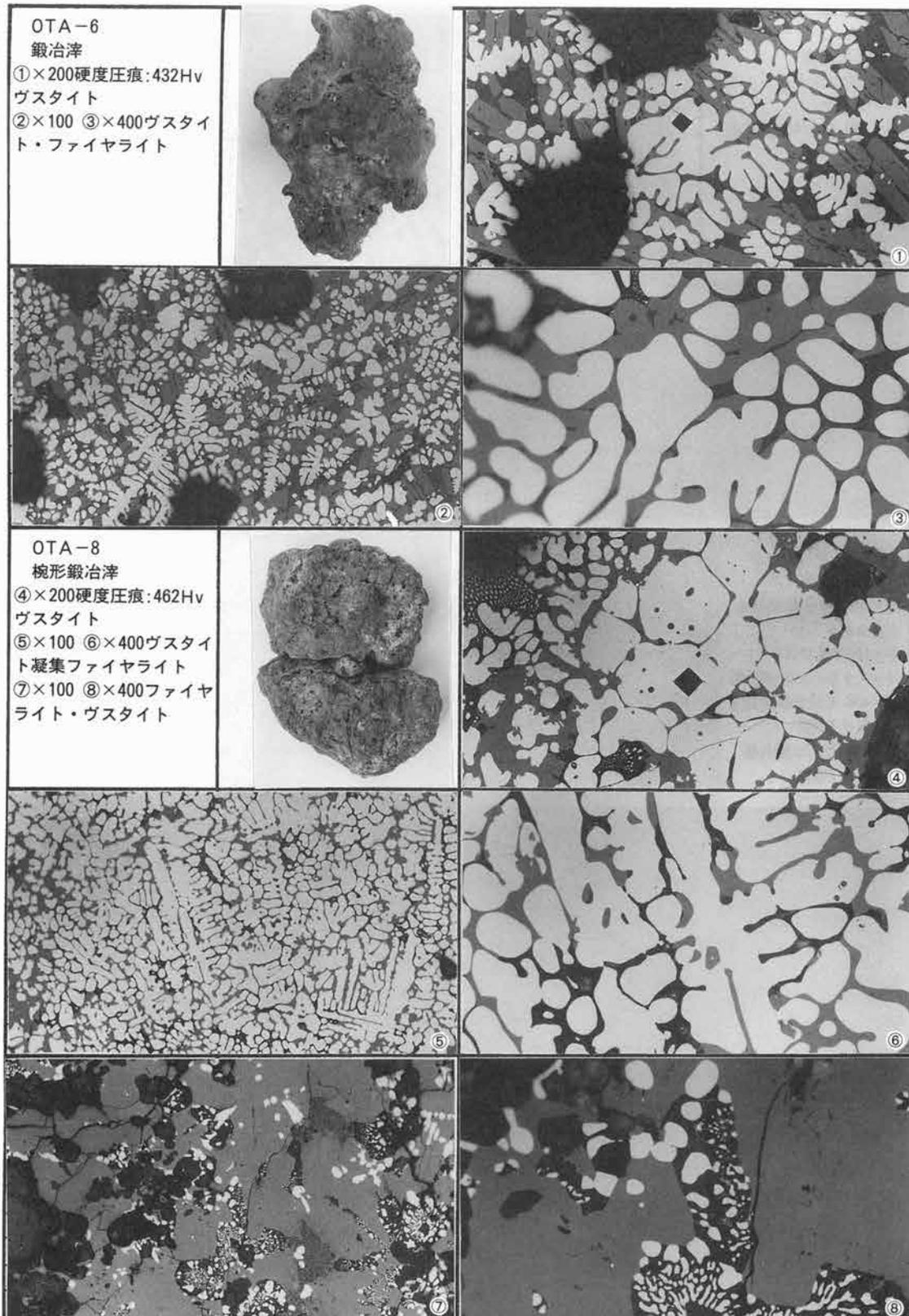


Photo 3. 鍛冶滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

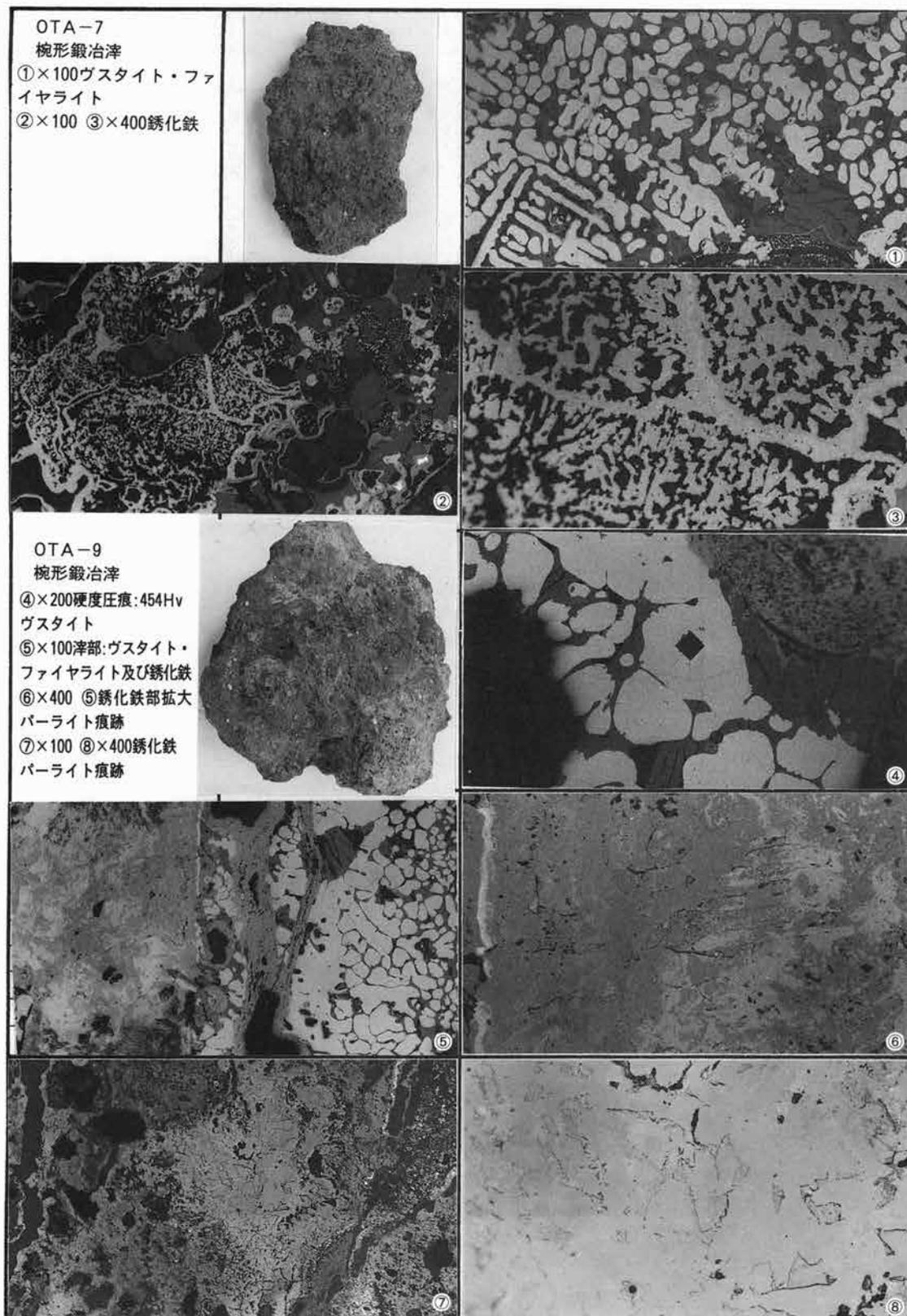


Photo 4. 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

## 5. 河原遺跡発掘調査概要

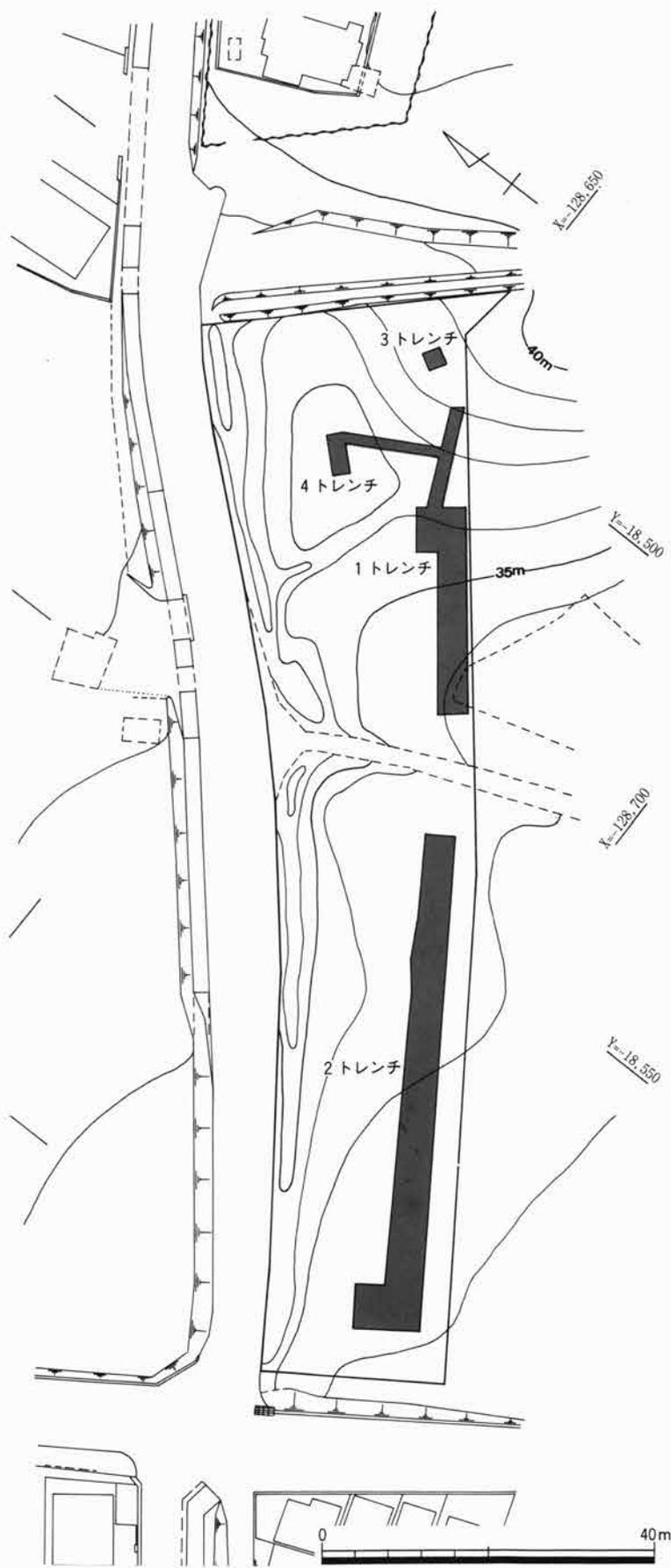
### 1. はじめに

今回の調査は、京都府土木建築部公園緑地課が計画している、木津川右岸運動公園(仮称)整備工事に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査として実施したものである。河原遺跡は、城陽市長池河原に所在する。遺跡は、J R 奈良線長池駅東側の丘陵縁辺部に東西約200m・南北約150mにわたって広がる。京都府遺跡地図 [第2版] では散布地となっているが、これまでに発掘調査が行われたことはなく、遺跡の内容は不明である。周辺には古墳時代の竪穴式住居跡や方形周溝遺構などが検出された国指定史跡の森山遺跡<sup>(注1)</sup>、平安時代前期の緑釉陶器などを副葬する木棺墓が検出された芝山遺跡<sup>(注2)</sup>などがある。

今回の調査対象地は、遺跡の北を限る道路に沿った幅約20m・長さ約125mの範囲で、現況は、道路沿いの並木と東端部の竹林を除いて一面の笹藪であった。笹藪伐採後の地形観察では、調査対象地は、北東から南西に向かって下る緩傾斜地で、東端の竹林部分は小さな谷状地形を呈する。現地調査の期間は平成11年12月15日から平成12年2月16日まで、調査面積は約400m<sup>2</sup>である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美、同調査員森島康雄が担当し、本概要報告は森島が執筆した。



第59図 調査地位置図(1/25,000・1/2,500)



第60図 トレンチ配置図(1/800)

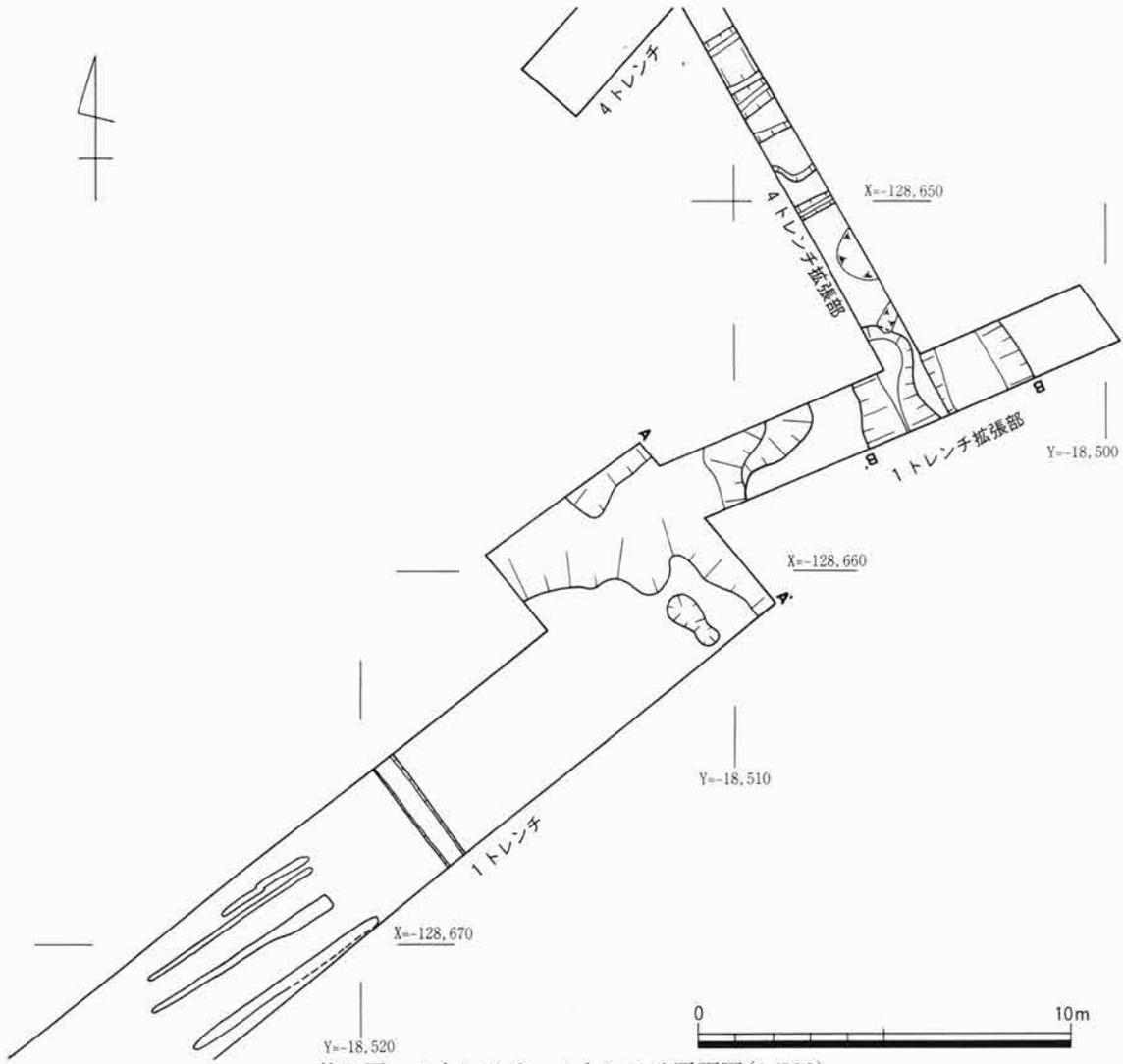
なお、調査に要した費用は、全額、京都府土木建築部が負担した。

## 2. 調査概要

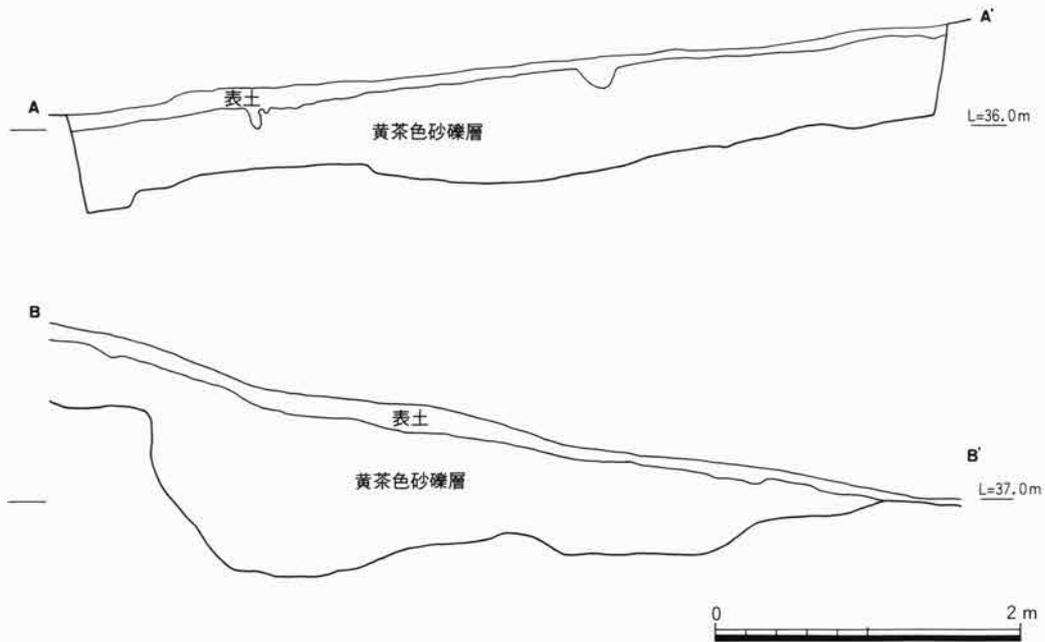
今回の調査では、遺構・遺物の広がりを確認するために、調査対象地に4カ所のトレンチを設定し、調査順にトレンチ番号を付けた。1・2トレンチは重機により表土を掘削したが、竹林の中に設けた3・4トレンチは人力で表土を掘削した。

1トレンチ 調査対象地の中央を横切る農道の東側に設けた約100㎡のトレンチである。10~30cmの表土を除去すると地山が現れた。トレンチは小さな谷状地形の南側斜面から南西に向かう緩傾斜地にあたり、この地形変換点付近に幅約50~60cm・深さ約10cmの1条の溝と、その西側に、これと直交する方向の幅約20cm・深さ約20~30cmの4条の溝が認められた。前者は地境溝、後者は耕作に関連する溝と考えられる。後者に表土と同様の黒い腐植土が堆積していたことなどから、近代以降の攪乱と判断した。

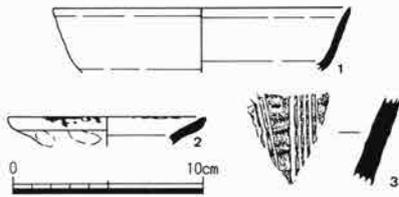
また、トレンチ北東部では北西側に向かって下がる乳白色砂質土の地山の斜面が現れ、



第61図 1トレンチ・4トレンチ平面図(1/200)



第62図 1トレンチ土層断面図(1/50)



第63図 出土遺物実測図

この部分には黄茶色砂礫が最大約70cm堆積していた。黄茶色砂礫が厚く堆積した部分からトレンチを東北東側に約25m拡張したところ、地山の斜面は、北側の谷状地形に向かって開く北西向きの浅い小さな谷状地形であることが判明した。この斜面上方には、黄茶色砂礫に覆われた掘り込みが認められた。この掘り込みのさらに上方の表土直下から、古墳時代の須恵器甕の小破片が1点出土した。1 トレンチからは、このほか、近世陶磁器や棧瓦片などが出土した。

2 トレンチ 調査対象地は中央を横切る農道の西側に設けた約260㎡のトレンチである。約30cmの表土と約40cmの黄茶色砂礫を除去すると灰白色砂礫の地山が現れた。黄茶色砂礫から平安時代前期の須恵器杯（第63図1）、江戸時代初期の土師器皿（同図2）、戦国時代の信楽焼すり鉢（同図3）のほか、近世陶磁器などが出土した。

地山が軟らかい砂礫層であったために、念のため、トレンチの東端で地表下約2.6mまで掘削したが、砂礫層が続くのみで遺構面・遺物ともに認められなかった。

3 トレンチ 調査対象地東端部の竹林の中に設けた小トレンチである。約5cmの表土と約30cmの茶灰色礫混じり砂質土を除去すると、灰黄色砂礫の地山が現れた。近世陶磁器が数点出土した。

4 トレンチ 調査対象地東部の谷部分に設けた2m×5mの小トレンチである。約10cmの表土と、約15cmの茶灰色砂混じり砂質土を除去すると、黄灰色砂礫の直下に地山が現れた。近世陶磁器や瓦片が出土した。谷部分から南東側の斜面にかけて幅1mでトレンチを拡張したが、トレンチに直交する近世以降の溝が検出されたのみで、顕著な遺構は検出されなかった。近世陶磁器や泥面子・瓦片などが出土した。

### 3. ま と め

今回の調査では、遺構や良好な遺物包含層が検出されず、ごくわずかの遺物が出土したのみであり、明確な遺跡の兆候を確認することができなかった。

（森島康雄）

注1 城陽市教育委員会「森山遺跡発掘調査報告書」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第32集 城陽市教育委員会）1997

注2 城陽市教育委員会「芝山遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集 城陽市教育委員会）1975

小池 寛「芝山遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第25冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987

城陽市教育委員会「芝山遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 城陽市教育委員会）1995

古瀬誠三「芝山遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 第77冊）1997

増田孝彦「芝山遺跡平成10年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第89冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1999

## 6. 新田遺跡第5次発掘調査概要

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、府営ほ場(大住地区)の整備事業に先立ち、京都府農林水産部の依頼を受けて実施したものである。新田遺跡は、京都府南部の京田辺市と八幡市にまたがる南北1.5km・東西1.0kmを測る広大な遺跡である。今回の調査地は、新田遺跡の南端に位置し、京都府京田辺市松井北ヶ市に所在する。調査にあたっては、平成10年度に京田辺市教育委員会による試掘調査の成果を受けて実施した。

発掘調査は、調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正、同主査調査員竹井治雄、同調査員筒井崇史が担当し、多くの調査補助員・整理員の協力を得た。調査期間は、平成11年11月10日(注1)から平成12年2月28日である。調査面積は1,000m<sup>2</sup>である。本概要報告は、竹井・筒井のほか、調査第2課第2係主査調査員 岡崎研一、奈良大学学生 田部剛士・松尾洋次郎・松田早映子が執筆し、文末に文責を記した。遺物実測および挿図の作成は、岡崎の協力を得て、筒井の指示のもと整理員が行った。また、図版に掲載した写真は、空中写真のほかは竹井が撮影した。本概要報告の編集は筒井が行った。

調査期間中は、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立山城郷土資料館・京田辺市教育委員会・京都府山城土地改良事務所をはじめとする関係諸機関からご協力を得た。

なお、本発掘調査に係る経費は、京都府農林水産部が全額負担した。

(筒井崇史)

### 2. 位置と環境

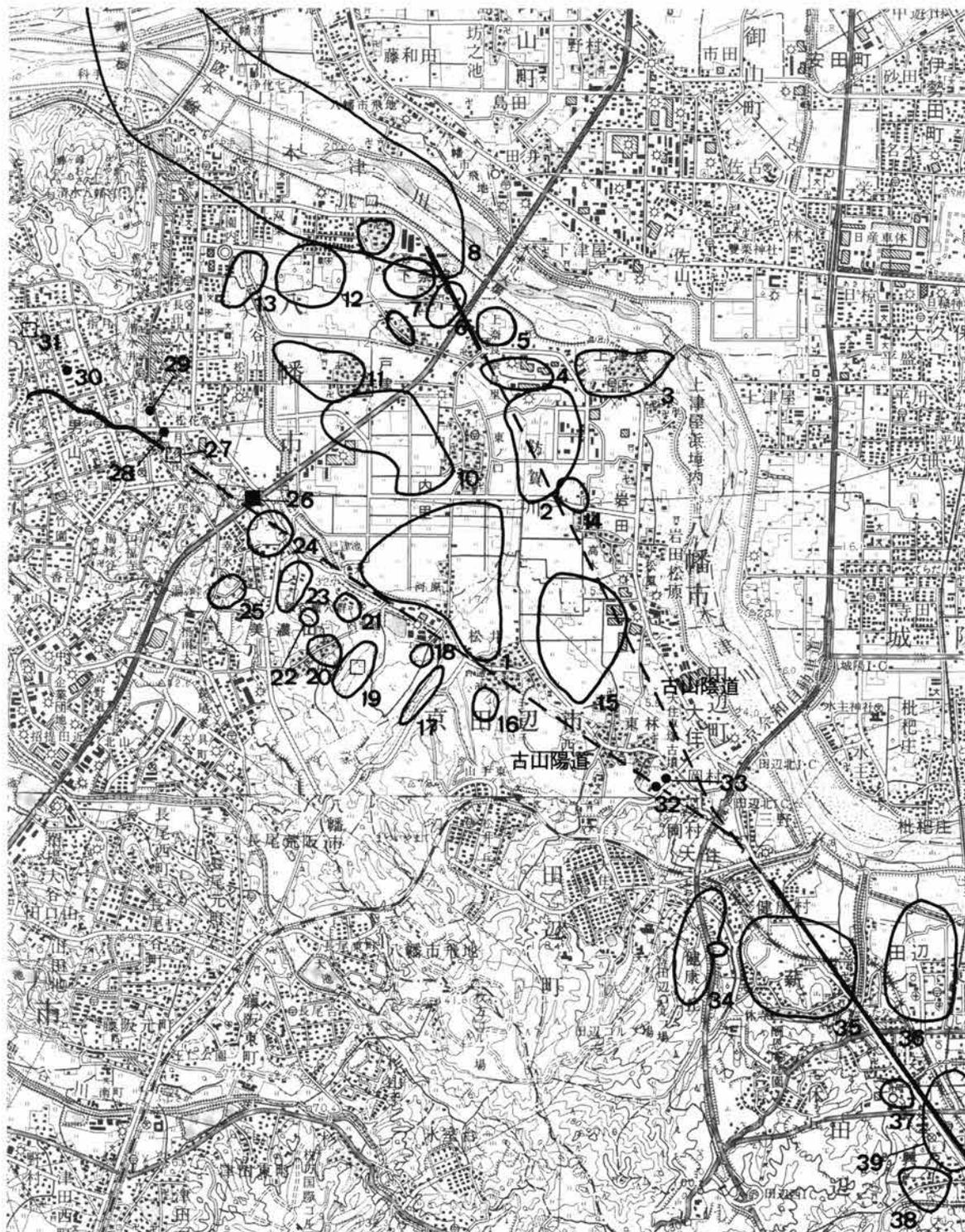
#### ①地理的環境

新田遺跡の所在する京田辺市・八幡市は、京都盆地の南部を貫流する木津川の左岸に位置する。両市の西部は、生駒山系から派生する美濃山丘陵があり、大阪府との府境となる。東部には、北流する木津川により形成された沖積平野が広がり、ほ場整備以前の水田の畦畔から旧河道の復原が可能である。調査地周辺は、昔から奈良・京都・大阪の都市を結ぶ要所に当たる。今回の調査地は京田辺市の最北端に位置する。

調査地周辺の地形は、西南に位置する美濃山



第64図 調査地位置図



第65図 調査地周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

- |           |            |              |           |            |
|-----------|------------|--------------|-----------|------------|
| 1. 新田遺跡   | 2. 内里八丁遺跡  | 3. 上津屋遺跡     | 4. 上奈良遺跡  | 5. 上奈良北遺跡  |
| 6. 出垣内遺跡  | 7. 下奈良遺跡   | 8. 木津川河床遺跡   | 9. 今里遺跡   | 10. 内里五丁遺跡 |
| 11. 戸津遺跡  | 12. 河口扇遺跡  | 13. 島遺跡      | 14. 西岩田遺跡 | 15. 魚田遺跡   |
| 16. 松井横穴群 | 17. 荒坂横穴群  | 18. 女谷横穴群    | 19. 美濃山廃寺 | 20. 美濃山横穴群 |
| 21. 狐谷横穴群 | 22. 井の元南遺跡 | 23. 金右衛門垣内遺跡 | 24. 幸水遺跡  | 25. 西ノ口遺跡  |
| 26. ヒル塚古墳 | 27. 清水廃寺   | 28. 東車塚古墳    | 29. 西車塚古墳 | 30. 茶白山古墳  |
| 31. 西山廃寺  | 32. 大住南塚古墳 | 33. 大住車塚古墳   | 34. 狼谷遺跡  | 35. 薪遺跡    |
| 36. 稲葉遺跡  | 37. 田辺遺跡   | 38. 興戸宮ノ前遺跡  | 39. 興戸遺跡  |            |

丘陵から舌状にのびる小支丘の緩傾斜地に当たり、標高21m前後の低位段丘上である。調査地の南側には、幅30m・比高差3mの谷状地形があり、旧河道と思われる。この地形は、現在の松井の集落に沿って北西から南東に向かう。一方、調査地の北西側(標高15m前後)は、沖積地であり、現在、水田が営まれている。

過去の新田遺跡の調査は、沖積地の旧河道・氾濫原上であったため、遺構・遺物の分布密度が粗かったが、今回の調査地は、段丘上に位置することから、遺構・遺物の検出が期待された。

(竹井治雄・松田早映子)

## ②歴史的環境

調査地周辺の遺跡について概観する。<sup>(註2)</sup>

旧石器・縄文時代の遺跡は少なく、八幡市荒坂遺跡・金右衛門垣内遺跡が知られている。弥生時代になると遺跡は増加する。京田辺市狼谷遺跡・薪遺跡、八幡市井の元南遺跡・西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡、また、弥生時代～鎌倉時代にかけての複合遺跡である八幡市内里八丁遺跡などがある。内里八丁遺跡では稲株痕跡を残す弥生時代終末期の水田跡が確認されている。

古墳時代になると、丘陵上やその縁辺部に古墳が築造される。特に前期後半には、京田辺市大住車塚古墳・大住南塚古墳、八幡市西車塚古墳・東車塚古墳・茶臼山古墳などの前方後円(方)墳が築造される。大住車塚古墳は、全長67mの周濠をもつ前方後方墳である。隣接する大住南塚古墳は、発掘調査により葺石・埴輪などがみつき、周濠をもつ前方後方墳であることが明らかにされた。中・後期の古墳はあまり知られていない。古墳時代を通じて営まれる集落遺跡としては、木津川河床遺跡・内里八丁遺跡のほか、新田遺跡(第1次調査)で中期末頃の竪穴式住居跡が確認されている。後期になると、調査地周辺の丘陵部に横穴墓が多く造営される。八幡市美濃山横穴群・狐谷横穴群、京田辺市松井横穴群などである。このうち、発掘調査された八幡市狐谷横穴群では、計8基の横穴が検出され、おおむね古墳時代後期後半から飛鳥時代にかけて営まれたことが明らかになった。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、木津川旧河道の兩岸の自然堤防上に形成された、八幡市内里八丁遺跡をはじめ、西岩田遺跡・上奈良遺跡・上奈良北遺跡・今里遺跡などがある。とくに内里八丁遺跡では、飛鳥時代から奈良時代にかけての大型の建物跡群が検出され、一般集落とは異なる公的な施設が設けられていた可能性が高いと考えられている。また、今回の調査地のすぐ北東の丘陵上に所在する八幡市荒坂遺跡では、『和名類聚抄』の「綴喜郡大住郷」あるいは「綴喜郡有智郷」の郷家と考えられる建物跡群がみついている。調査地周辺の須恵器窯としては、奈良時代末から平安時代初期にかけての須恵器窯である京田辺市松井窯跡群がある。このほかに、京田辺市南部では、興戸宮ノ前窯跡・交野ヶ原窯跡群・マムシ谷窯跡などの須恵器窯がある。瓦窯では、少し離れるが、四天王寺創建時の瓦を焼いた八幡市平野山瓦窯跡などがある。

また、飛鳥・奈良時代の官道の復原が歴史地理学の立場から試みられている。足利健亮氏は、古山陰道が木津川旧河道東岸の自然堤防上を通過すると推定しており、内里八丁遺跡では古山陰道とみられる道路状遺構が検出されている。また、同様に京田辺市岡村から分岐した古山陽道が、

今回の調査地の近傍を通過して、枚方市樟葉へ向かうという。道路状遺構は内里八丁遺跡の例を除いて確認されていないが、京田辺市興戸遺跡では、古山陰・古山陽併用道から一町単位の方格地割がなされたと考えられる溝や柵などの遺構が検出されている。

以上、周辺遺跡について簡単に述べてきたが、足利健亮の古山陽道推定路線が、調査地周辺を通過するため、これとの関連が注目された。

(松田早映子)

### 3. 過去の調査

新田遺跡は、京田辺市と八幡市にまたがる遺跡である。これまでに、京都南道路(第二京阪道路)の建設やほ場整備にともない発掘調査が実施されている。ここでは過去に行われた調査について概略を述べる。<sup>(註3)</sup>

新田遺跡における発掘調査は、八幡市域におけるほ場整備にともない、京都府教育委員会によって実施されたのが最初である(第1次調査)。調査は、昭和58・59年に、おもに試掘グリッドを設定して実施され、木津川の旧河道に関する知見とともに、古墳時代中期末頃に属する竪穴式住居跡が検出された。また、出土遺物から弥生時代後期から平安時代にわたる複合遺跡であることが明らかになった。ただ、木津川の旧河道による削平のため、集落遺跡としてのまとまりは明らかではない。

第2次調査は、第二京阪道路の建設にともない、平成元年度に八幡市域の新田遺跡について、当調査研究センターが実施した。調査地は、第1次調査地の東側、新田遺跡の東辺にあたる。調査は、試掘トレンチを設定して実施したが、調査地全域が木津川などの旧河道にあると判断された。ただし、出土遺物には弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・近世陶器などがある。

第3次調査は、京都南道路建設にともなうもので、平成4年度に京田辺市域の新田遺跡について、当調査研究センターが実施した。調査地は、新田遺跡の南半部にあたる。調査は、試掘トレンチを設定して実施したが、大半のトレンチで、第2次調査と同様、木津川もしくは大谷川の旧河道であることを確認し、遺構面が確認されたトレンチで、調査区を拡張して遺構の検出を行った。検出された遺構には、掘立柱建物跡・柵跡・素掘り溝などがある。建物跡の時期は不明であるが、包含層中からは須恵器・土師器・瓦器などが出土した。

第4次調査は、京田辺市大住地区のほ場整備にともない、平成10年度に京田辺市教育委員会が新田遺跡の南部を対象に実施した試掘調査である。調査の結果、南側の標高19~21m付近で遺物包含層や柱穴・土坑などの遺構を確認した。出土遺物としては、須恵器・土師器・瓦・埴輪・瓦器・陶器などがある。この調査を受けて、今回の第5次調査を実施した。

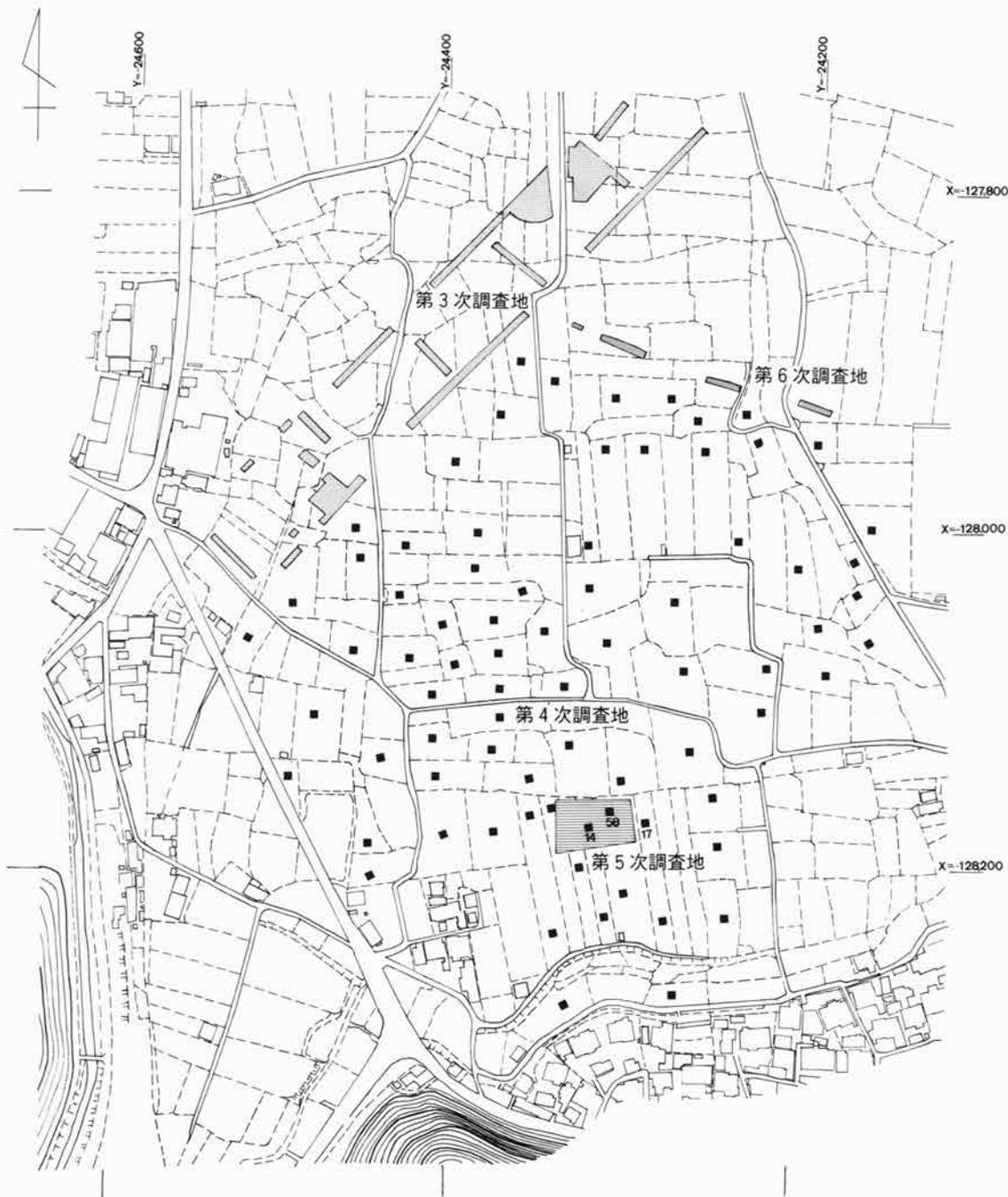
第6次調査は、第二京阪道路に接続する府道建設にともなう試掘調査で、第5次調査と平行して、当調査研究センターが実施した。調査地は、第3次調査地に近接するため、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、中世の水田遺構や素掘溝などが検出された。

(筒井崇史)

#### 4. 調査経過

今回の発掘調査は、先述のように、京田辺市教育委員会による試掘調査(第4次調査)の結果を受けて、ほ場整備事業によって削平される地点を対象として実施した。調査区は、試掘トレンチ No.14・17・58を含み、南北20~24m・東西47mの矩形を呈する。調査面積は1,000㎡である。

発掘調査は、平成11年11月10日から開始した。まず、ほ場整備の都合上、表土層(現代の耕作土)を重機で排出した。次いで、中・近世の耕作土および遺物包含層を重機で除去し、京田辺市教育委員会の調査により、確認されていた遺構面まで掘り下げた。現地表下約0.6mで遺構面(黄褐色粘砂質土)を検出した。その後、遺構面の精査を人力で行い、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡



第66図 新田遺跡調査地点配置図

をはじめ、溝・土坑・柱穴などを多数検出した。検出した遺構のうち、時期が明らかになるものの大半は飛鳥時代から奈良時代にかけてのものである。遺構の記録は、平板で略測を行いながら遺構番号を付け、必要に応じて遺構図の作成、写真撮影を行った。

遺構の検出・掘削作業がおおむね終了した平成12年2月3日には、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。その後も、遺構の完掘、記録、写真撮影などを継続して行い、2月17日には、現地説明会を開催した。現地説明会には81名の参加があった。2月28日には全ての作業が終了し、全ての機材を撤収して現地調査を終了した。

(竹井治雄・筒井崇史)

## 5. 調査の概要

### (1) 基本層序

調査地内の基本的な土層は、1. 暗黒灰色泥土、2. 淡褐灰色粘質土層、3. 暗茶褐色粘砂質土、4. 黄褐色粘質土層、5. 淡白灰色シルト層である。1層は表土層で、現在の水田耕作土である。2層は厚さ40～50cmの還元化された中・近世の耕作土である。3層は厚さ20cm程度の奈良・平安時代の遺物包含層である。4層は大阪層群の表層風化した土層で、遺構を形成する基盤層である。5層は低位段丘の砂質・シルトで構成される地山である。おおむね、京田辺市教育委員会による試掘調査の、試掘トレンチNo.14の土層の断面観察と一致し、3層の下半ないし4層上面において大半の遺構が検出された。

### (2) 地区割り

調査にあたっては、調査区内に地区割りを設定した。このための基準点は、国土座標を用いることとし、トレンチ内(新点A)への基準点の導入は、四等三角点「乾角」と第二京阪多角点「No.6」の2点を使用した。また水準点は、既知点「KBM2」を利用した。新点Aの座標値は、X座標値＝-128,157.119m、Y座標値＝-24,334.200mである。標高は20.035mである。

新点Aを利用して、調査地内の地区割りを設定した。地区割りは、国土座標軸に合わせて、5mごとの方眼に割り付けた。その表示方法は、5mごとの基準線について、X軸は北からa～e、Y軸は西から1～10とし、地区名は、方眼の北西の交点名(例、2a)によった。なお、概要報告の挿図の方位はすべて座標北で示した。また、遺構の主軸も座標北からの角度を示す。

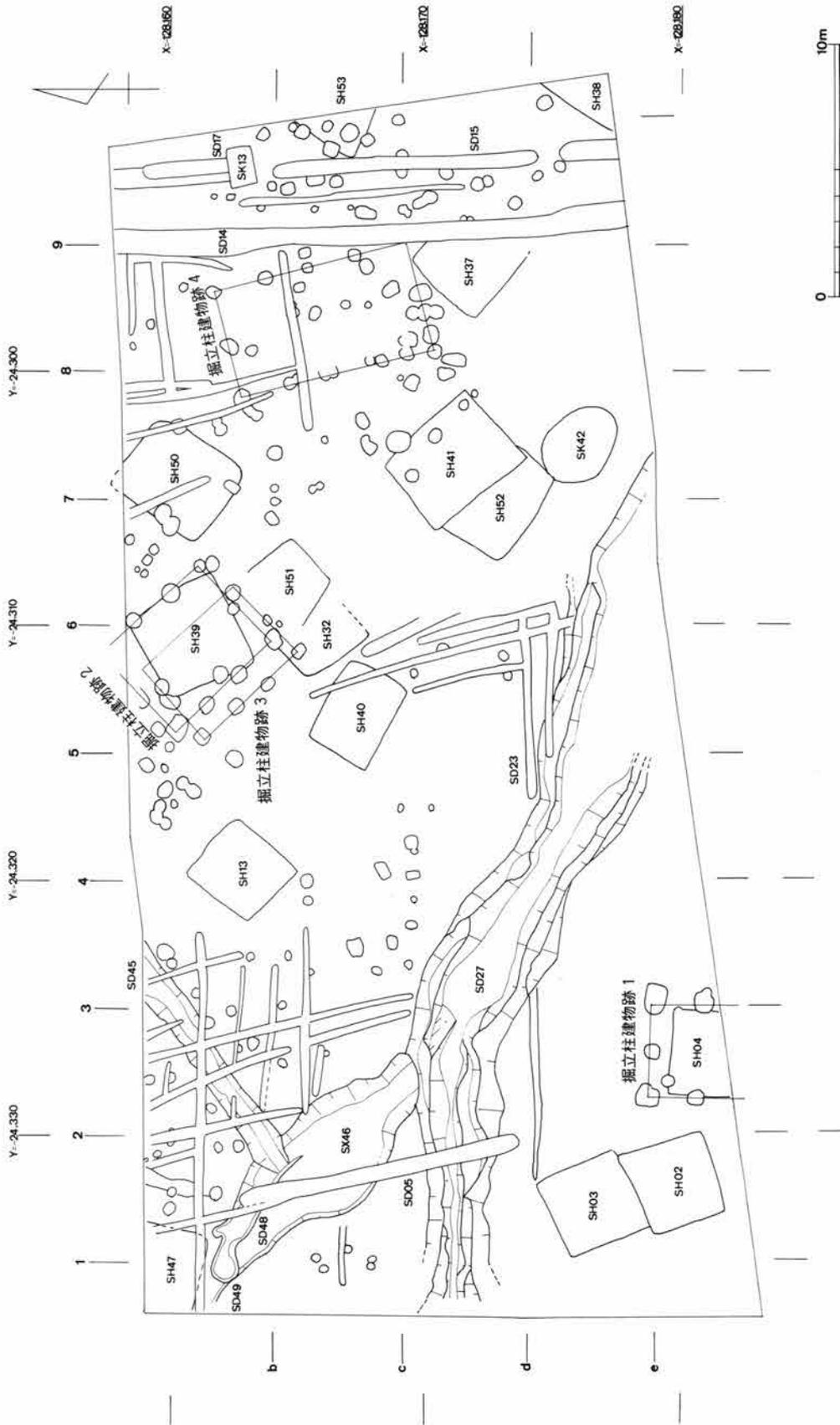
(竹井治雄)

### (3) 検出遺構

今回の調査では、竪穴式住居跡15基、掘立柱建物跡4棟、大溝1条、溝・柱穴などを多数検出した。検出された遺構の分布状況は、竪穴式住居跡がほぼ全域に分布するのに対して、掘立柱建物跡やまとまりのある柱穴群は、主に東半で検出された。調査区の南西に大溝SD27がある。また、全域にわたって、素掘り溝を検出した。以下、主要遺構の概要について報告する。

#### ① 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡SH02(第68図、図版第45-1) 1e区で検出した方形を呈する竪穴式住居跡で



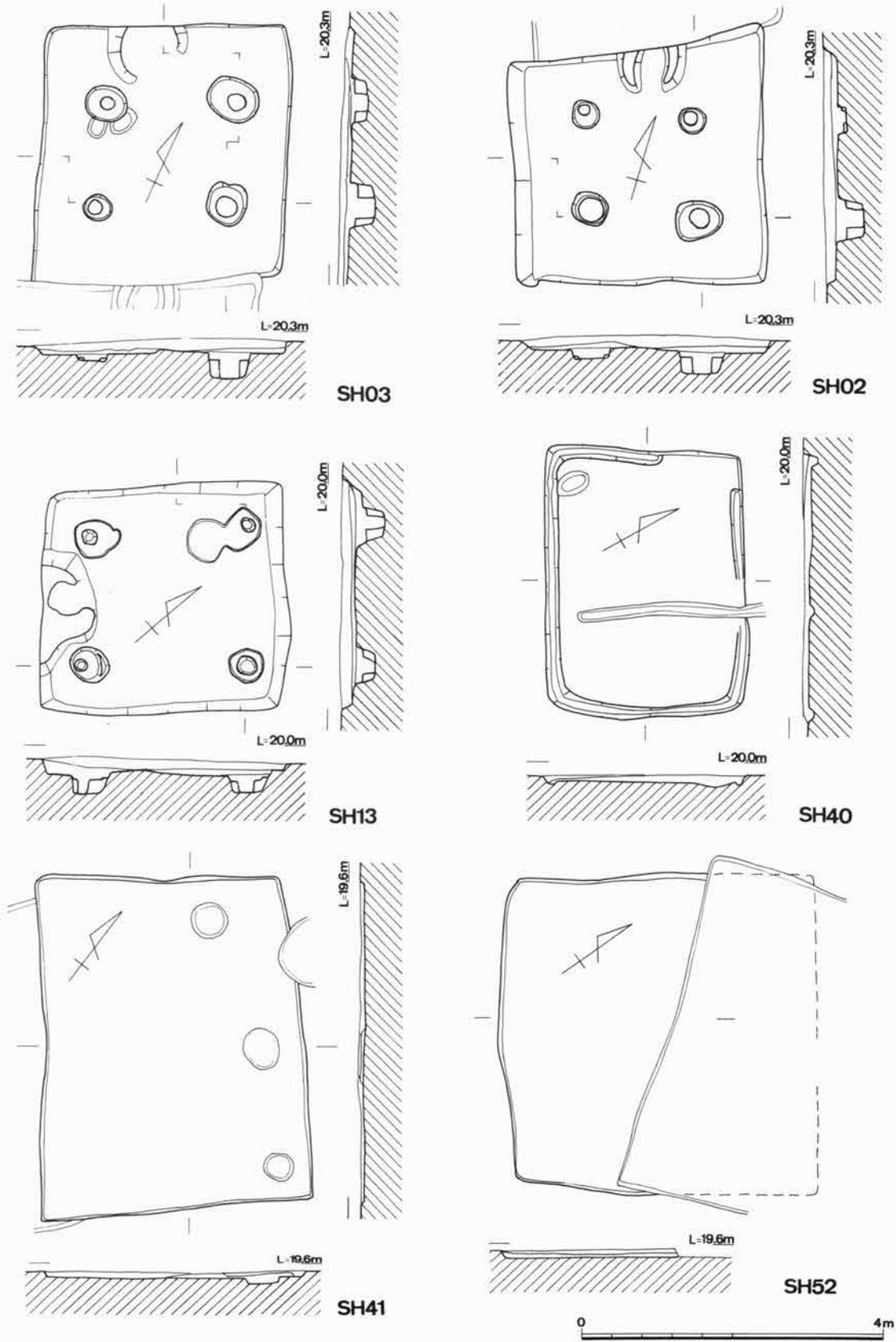
第67図 遺構配置図

ある。竪穴式住居跡SH03と重複関係にあり、SH02が先行する。長辺3.3m・短辺3.0m・深さ0.2m前後を測る。主軸はN19°Wである。住居跡の埋土は暗茶灰色砂質土である。北壁の中央に竈を有する。竈の形態は、馬蹄形を呈しており、全長0.7m前後を測る。焚き口部の周辺には炭化物・焼土塊が散在する。また、北東角にも少量の焼土が認められる。この焼土と竈の間に薄い炭の堆積層が広がる。竈からかき出された炭層と考えられる。周壁は垂直に立ち上がり、周壁溝は検出されなかった。主柱穴は4基が検出され、直径0.4~0.5m・深さ0.2~0.3mを測る。いずれも柱痕を確認しており、直径は20~30cmを測る。柱間寸法は1.5mと1.3mを測る。出土遺物は、大半が埋土中から出土した。須恵器杯B蓋・杯B・壺蓋、土師器杯・甕・鍋、瓦などがある(78~86)。残存率の高いものが多い。遺物は、おおむね飛鳥時代末~奈良時代初頭に位置づけられる。出土状況から竪穴式住居跡が完全に廃棄された段階のものと考えられる。したがって、SH02は、飛鳥時代後半に営まれ、飛鳥時代末には廃絶したと考えられる。

**竪穴式住居跡SH03**(第68図、図版第45-1~3) 1d区で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡SH02と重複関係にある。長辺長3.3m・短辺3.0m・深さ0.1m前後を測る。主軸はN20°Wである。埋土は主に暗茶褐色粘質土(炭化物・焼土を含む)である。北壁の中央に竈を有する。崩落が著しく形態・規模は確認しにくい。残存する焼土の痕跡から長さ0.6m・幅0.5mと推定される。焚き口の周辺には炭化物が広がる。周壁溝は有さない。柱穴は4基が検出され、おおむね直径0.4~0.5m・深さ0.3~0.4mを測る。いずれも柱痕を確認しており、直径は20~30cmを測る。柱間寸法は1.8mと1.3mを測る。出土遺物は、大半が住居埋土中から出土した。須恵器杯A、土師器杯・甕などがある(第80図87~90)。出土した遺物は、おおむね竪穴式住居跡SH03と同時期に位置づけられ、竪穴式住居跡が完全に廃棄された段階のものと考えられる。したがって、住居跡の時期は、SH02との切り合い関係より、SH02より新しいが、さほど時間差は無いと思われる。

**竪穴式住居跡SH04**(第69図、図版第48-1) 2e区で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。掘立柱建物跡1と重複関係にあり、SH04が先行する。住居跡の南半が調査区外にのびるため、その全容は明らかでない。東西長3.4m・深さ0.1mを測る。主軸はN5°Eである。埋土はSH02の埋土に類似した暗茶灰色砂質土である。西壁に竈を有する。竈の形態は馬蹄形を呈するが、一部直線的な焼土痕が見られる。焚き口の周辺には炭化物・焼土が広がる。周壁は垂直に立ち上がるが、周壁溝は認められなかった。主柱穴は1基のみ確認できた。出土遺物には、埋土中から須恵器・土師器などがある。出土した須恵器杯B(91)は、奈良時代に位置づけられるが、埋土中出土であり、竪穴式住居跡が完全に廃棄された時期を示す。

**竪穴式住居跡SH13**(第68図、図版第46) 4a区で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。長辺3.3m・短辺3.0m・深さ0.2mを測る。主軸はN45°Wである。埋土は暗茶褐色粘質土である。南西壁の中央に竈を有する。竈の形態は馬蹄形を呈し、全長0.6m前後を測る。竈の反対側の北東辺は、幅1mの入り口であることが確認できた。周壁は垂直に立ち上がり、周壁溝は認められなかった。柱穴は各コーナー付近に近接して4基検出された。直径0.4m・深さ0.3mを測



第68図 竪穴式住居跡実測図

る。柱間寸法は1.8mと2.1mを測る。出土遺物は、大半が住居埋土中から出土した。須恵器杯B蓋・甕、土師器甕などがある(92~94)。出土した遺物は、SH02出土遺物に類似し、おおむね飛鳥時代末から奈良時代初頭に位置づけられよう。竪穴式住居跡が完全に廃棄された段階のものであろう。

**竪穴式住居跡SH40(第68図)** 5b区で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。長辺3.3m・短辺2.6m・深さ0.2mを測る。主軸はN30°Eである。埋土は暗茶褐色粘質土と暗黒灰色炭化物の混合層である。主柱穴は認められない。周壁は垂直に立ち上がり、周壁溝が北角の一部を除いてほぼ全周する。焼土の小塊や炭化物が北東辺中央の周壁に接して検出されたが、竈とは判断できなかった。出土遺物は、少量の土師器片がある。

**竪穴式住居跡SH41(第68図)** 7c区で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡SH52と重複し、SH41が後出である。長辺4.3m・短辺4.3m・深さ5cmを測り、ほぼ正方形である。主軸はN45°Wである。堆積土は茶灰色砂質土である。北東壁の南寄りに竈の残欠と思われる焼土が存在する。周壁溝は認められなかった。出土遺物は、わずかな須恵器・土師器片が出土したに過ぎない。小片のため時期を確定することができない。また、砥石が出土した(第83図124)。

**竪穴式住居跡SH52(第68図)** 6c区で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡SH41と重複するが、住居跡の東半をSH41のために失う。残存する南西辺4.0m・深さ0.1mを測る。主軸はN35°Wである。埋土は茶灰色砂質土で、SH41に類似する。SH41の床面中央に焼土が認められ、これをSH52の竈の痕跡と考えるならば、北西辺は3.8mに復原できる。周壁溝は認められない。遺物は、わずかな須恵器・土師器片が出土した。

**竪穴式住居跡SH39** 5a・6a区で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。掘立柱建物跡2・3、竪穴式住居跡SH51に重複して検出された。一辺3.9m・深さ0.4mを測り、ほぼ正方形である。主軸はN50°Wである。埋土は、上層が茶褐色砂質土、下層が茶褐色粘質土と黄白色砂質土との混合層である。主柱穴は4基確認でき、直径0.3m・深さ0.2mを測る。柱間寸法は2.0mと1.6mを測る。竈はすでに消失し、煙道部が南西辺中央の周壁に残存する。煙道部は幅20cmを測り、周辺は赤褐色に焼土化している。出土遺物には須恵器・土師器などがある。

**竪穴式住居跡SH51** 6a・6b区で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡SH39の南東側で検出した。SH39と重複する。長辺3.8m・短辺3.2m・深さ0.1mを測る。主軸はN51°Wである。埋土は暗茶褐色砂泥である。

**竪穴式住居跡SH50** 7a区で検出した方形を呈する竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡SH51の北東側で検出した。長辺4.0m・短辺3.3m・深さ0.15mを測る。住居の主軸はN38°Eである。埋土は暗茶灰色砂質土である。竈は北西辺の北寄りに周壁溝に接する。周壁溝は南東辺、南西辺で確認できた。柱穴は2基確認し、直径0.4m・深さ0.3mを測る。柱間寸法は1.8mである。出土遺物には、土師器の細片があった。

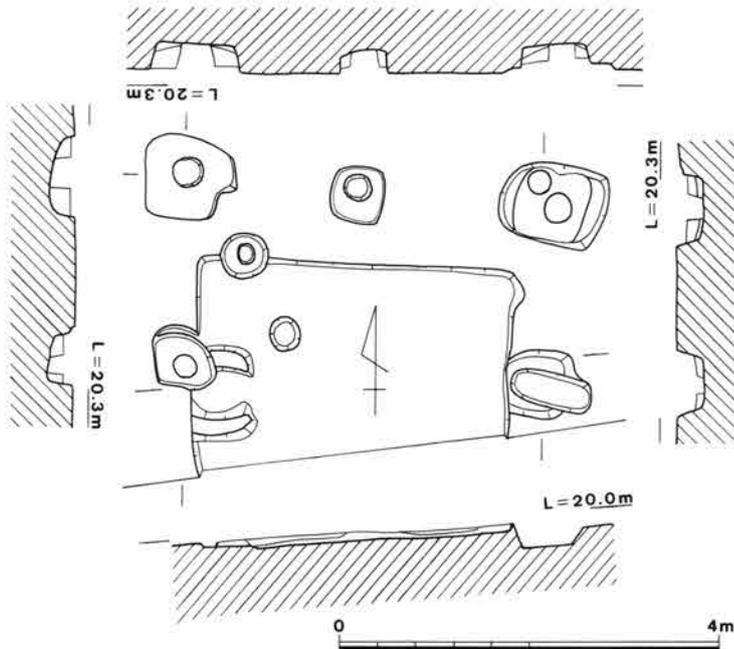
**竪穴式住居跡SH37** 8c区で検出された竪穴式住居跡である。溝SD14と重複して検出され

た。長辺3.3m・短辺3.1m・深さ0.1mを測り、住居跡の形態はほぼ正方形に近い。主軸はN42°Wである。埋土は茶灰色砂質土である。周壁は垂直に立ち上がるが、周壁溝は無い。

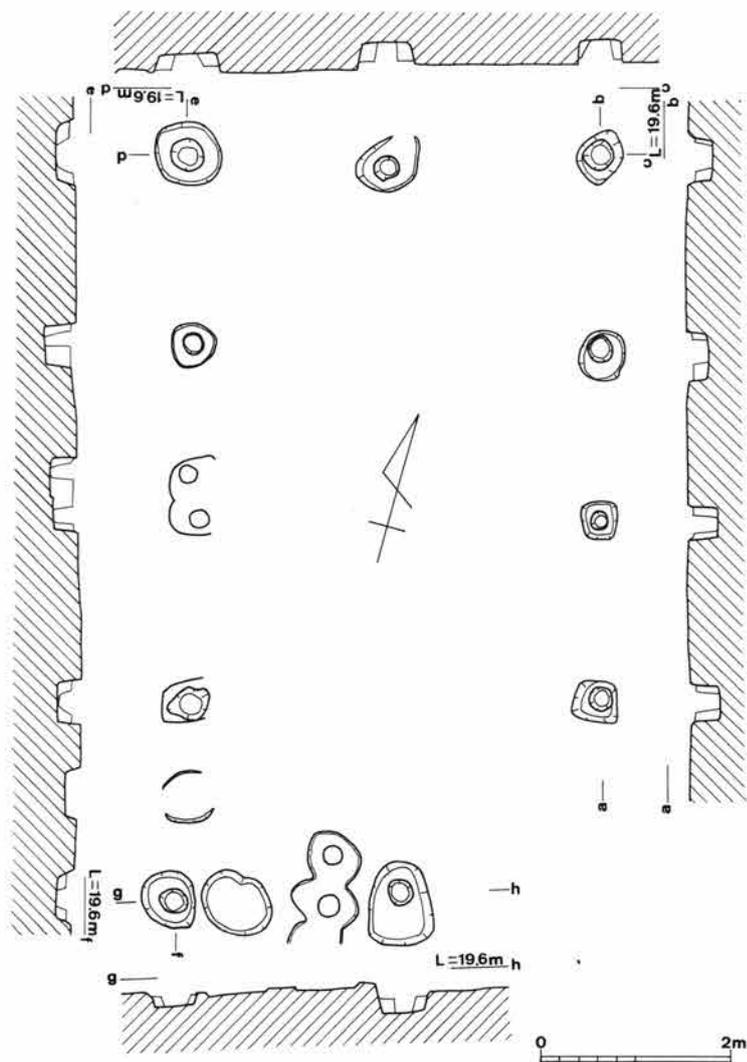
**竪穴式住居跡 S H36** 10d区で検出された竪穴式住居跡である。周壁の一部を検出したのみである。形態は方形と思われるが、全体の規模は不明である。深さ5cmを測る。北西の周壁の方位は、N36°Eである。埋土は茶灰色砂質土である。出土遺物には、少量の土師器小片があった。

**竪穴式住居跡 S H53** 9b区で検出された竪穴式住居跡である。住居跡の一角を検出したにとどまる。住居跡の形態は方形に復原できるが、全体の規模は不明である。北西の周壁の方位は、N31°Eである。埋土は茶灰色砂質土に炭化物が混じり、S H36の埋土に類似する。周壁は垂直に立ち上がる。

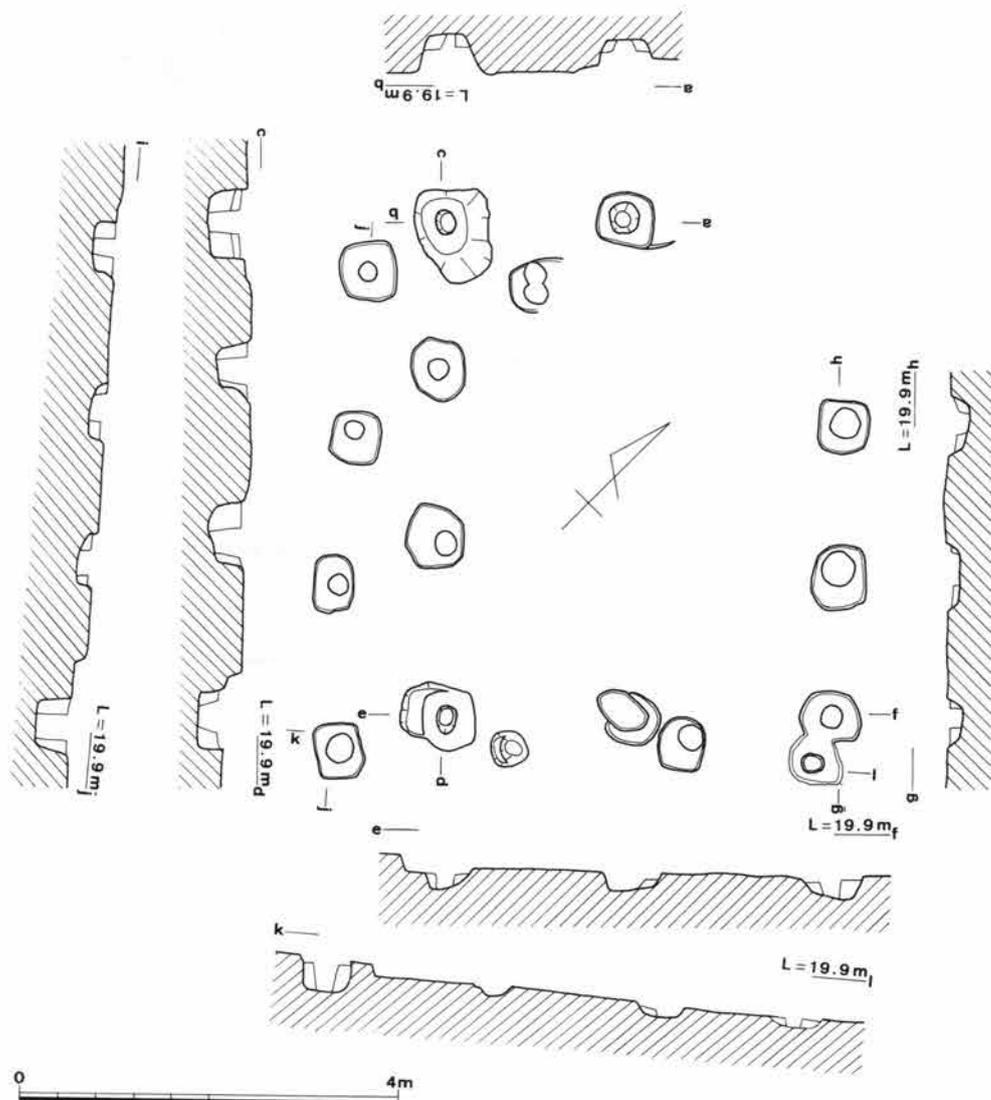
**竪穴式住居跡 S H47** トレンチ北西角の1a区で検出された竪穴式住居跡である。溝S D48と重複するが、住居跡の一部を検出したにとどまる。形態は方形と思われるが、全体の規模については不詳である。南辺の方位は、N12°Eである。埋土は暗茶灰色砂質土である。ただし、



第69図 竪穴式住居跡 S H04・掘立柱建物跡 1 実測図



第70図 掘立柱建物跡 4 実測図



第71図 掘立柱建物跡2・3実測図

住居跡と言いきれず、異なった遺構の可能性もある。

**竪穴式住居跡 SH32** 5 b区で検出された竪穴式住居跡である。住居跡の形態は方形に復原できるが、東半分が水田耕作の削平を受け消失しているため、規模は不明である。周壁は垂直に立ち上がり、深さ0.4mを測る。北西の周壁の方位は、N44°Eである。埋土は茶褐色砂質土で、炭化物を多量に含む。

## ②掘立柱建物跡

掘立柱建物跡としては、4棟復原することができた。この他にも、多数の柱穴を検出しており、掘立柱建物跡の数は、本来もっと多かったと考えられる。いずれの掘立柱建物跡の柱穴からも、時期の明らかになる遺物はほとんど出土していないが、いずれも竪穴式住居跡に後出することから、奈良時代以降に属すると思われる。

**掘立柱建物跡 1** (第69図、図版第42-3・43-1) 2 e区で検出された掘立柱建物跡であるが、調査区外にのびるため、全容は不明である。竪穴式住居跡 SH04と重複する。桁行は1間分(長さ2.1m)のみ検出した。梁間は2間(長さ3.6m)である。主軸はN1°Eである。柱穴の掘形は方

形を呈し、一辺0.4m前後を測り、隅柱は一回り大きく一辺0.6mを測る。確認できた柱痕はおおむね20～25cmを測る。柱間寸法は、梁行1.8m等間、桁間2.1mを測る。埋土は茶褐色粘質土である。出土遺物は、各柱穴から少量であるが、奈良時代の土師器、須恵器の破片がある。

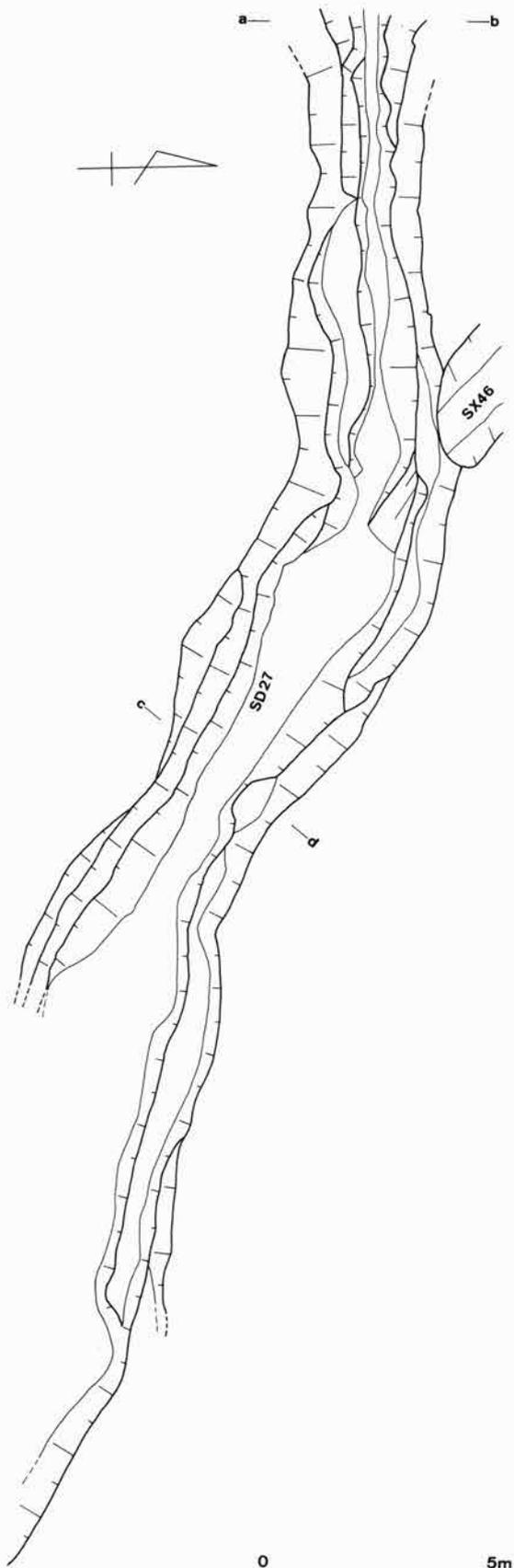
**掘立柱建物跡2** (第71図) 5 a・6 a区で検出された掘立柱建物跡である。竪穴式住居跡SH 39・51、掘立柱建物跡3と重複する。桁行3間(長さ5.3m)・梁間2間(長さ4.2m)を測る。柱間寸法は梁間2.1m等間、桁行1.75m等間を測る。主軸はN39°Wである。柱穴は、北東隅の1基が調査区外にあるほかは全て確認した。これらの柱穴の底はおおむね標高19.1～19.2mを測り、ほぼ一定である。柱穴の掘形は、基本的には方形を呈し、一辺0.4～0.5mを測り、五角形のものもある。柱痕は直径20cm程度の円形を呈する。埋土は炭化物を含む茶褐色粘質土である。出土遺物は、各柱穴から土師器・須恵器の破片が少量ある。

**掘立柱建物跡3** (第71図) 5 a・6 a区で検出された掘立柱建物跡である。桁行き3間(長さ5.05m)・梁間2間(長さ3.6m)を測る。掘立柱建物跡2と重複し、主軸はN40°Wである。柱間寸法は桁行1.7m等間、梁間1.8m等間を測る。柱穴の掘形は、隅丸方形を呈し、一辺0.4～0.5m、柱痕は直径20cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。出土遺物には、各柱穴からの土師器・須恵器の破片がある。掘立柱建物跡2との先後関係は、明らかでないが、建物の規模・方位がほぼ同一であり、出土遺物の時期差も認められず、奈良時代において短期間に建て替えが行われたと考えられる。

**掘立柱建物跡4** (第70図、図版第43-3) 8 b区で検出された掘立柱建物跡である。桁行4間(長さ7.8m)・梁間2間(長さ4.3m)を数える。建物の主軸はN14°Wである。柱間寸法は桁行1.9m等間、梁間2.15m等間を測る。柱穴の掘形は、方形を呈し、一辺0.3～0.4m、柱痕は直径10～20cmを測る。埋土はおおむね茶灰色砂質土である。出土遺物には土師器・須恵器の破片がある。

### ③大溝SD27(第72図、図版第44)

大溝SD27は、調査区の南壁に沿って検出されたおおむね東西方向を指向する大溝である。検出長35m・検出幅2.2～4.1m・深さ1.0～1.3mを測る。溝の西半は主軸がN1°Eとほぼ東西方向を指向するのに対して、東半は主軸がN26°Eを指向し、「く」字状に屈曲する。溝の断面形は「V」字状に近く、検出面からの傾斜角が、35～40°程度であるのに対して、溝の中位付近で傾斜角が70°程度となり、一段深く掘り込められたような状況を呈する。溝の堆積状況は、この傾斜変換点を境に大きく変わり、上層は淡茶褐色土を呈する。下層は、礫を含む茶褐色粘質土あるいは茶灰色ないし灰色砂質土である。また、中層として砂礫を多く含む茶褐色粘質土や青灰色粘質土が部分的に認められる。堆積状況から、上層は短期間に人為的に埋められたものと考えられ、下層は機能時に堆積したのと考えられる。溝の底面の標高は、西端で18.5m、中央で18.45m、東端で18.4mを測り、わずかであるが東に向けて低くなる。溝の底面の幅は、0.2mを測り、非常に狭いが、2 c・5 d区では1.0～1.5mを測る。出土遺物は非常に多く、溝全体を通じて上層・下層ともに飛鳥・奈良時代の遺物が、多数、混在した状態で出土した。出土遺物は、完形品に近い土器類があり、あるいは破片でも磨滅していないものが多い。

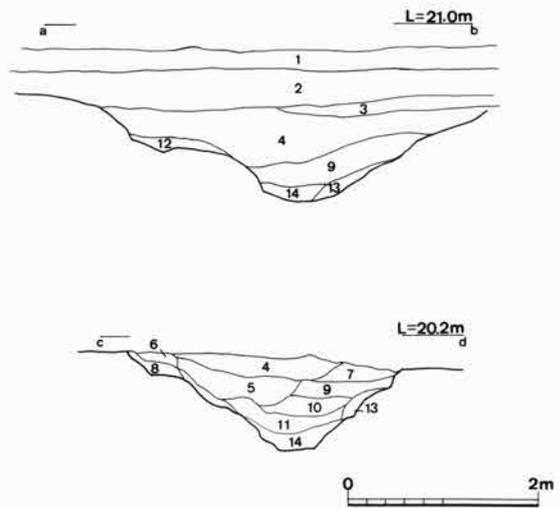


第72図 大溝 S D 27実測図

出土遺物としては、上層から須恵器杯A・杯B・杯G・杯H・杯G蓋・杯H蓋・短頸壺・平瓶・甕、土師器杯B・杯C・杯G・鉢・高杯・甑などのほか、移動式竈、丸瓦、鉄滓、砥石や須恵器生産にともなう窯の焼き台などが出土した。また、弥生時代中期に位置付けられる壺または甕の底部の破片が1点出土している。中・下層では、須恵器杯A・杯B・杯G・杯H・杯B蓋・杯H蓋・高杯・壺・横瓶、土師器杯C・杯G・杯・高杯・甕・鍋などがある。なお、溝の上層の上面において皇朝十二銭の一つ「富寿神宝」が出土した。大溝の時期は、下層から出土した須恵器の特徴から、奈良時代後半に年代が与えられる。

④その他の遺構

溝 S D 45(第74図) 溝 S D 49につながる溝と考えられる。検出長10.4m・幅1.2m前後・深



第73図 溝 S D 27断面実測図

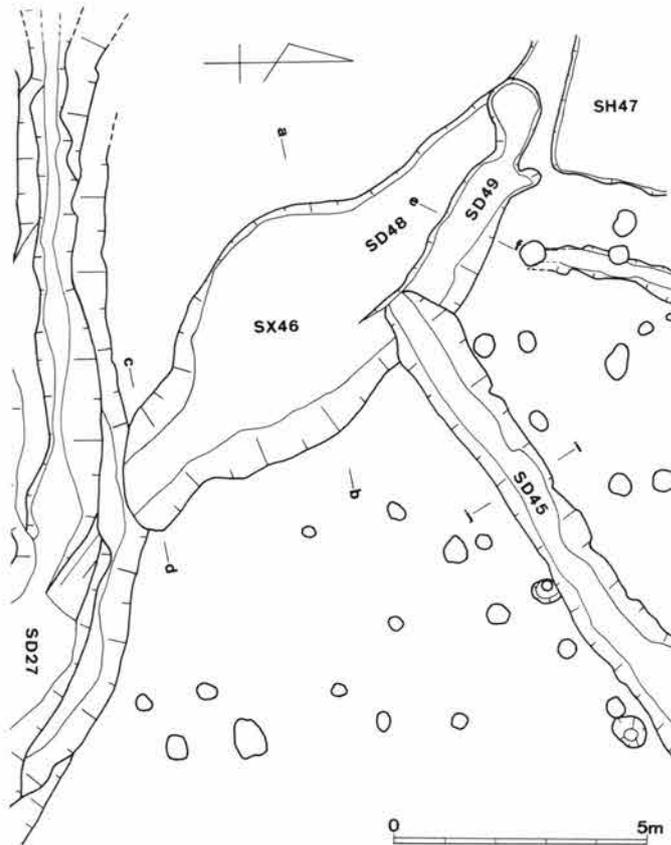
- |                       |            |
|-----------------------|------------|
| 1. 暗黒灰色泥土             | 2. 淡褐灰色粘質土 |
| 3. 暗茶褐色粘砂質土           |            |
| 4. 淡茶褐色粘砂質土(小礫少々)     |            |
| 5. 淡茶褐色粘砂質土(砂質多い)     |            |
| 6. 暗黄灰色砂質土(粗砂)        | 7. 淡茶褐色砂質土 |
| 8. 明黄褐色砂質土(粗砂)        |            |
| 9. 淡茶褐色砂質土(小礫少々含む)    |            |
| 10. 茶褐色粘質土(小礫少々含む)    |            |
| 11. 茶褐色粘質土(小礫多く含む)    |            |
| 12. 灰黄色砂質土(崩落土)       | 13. 茶灰色砂質土 |
| 14. 茶褐色粘質土(砂質・小礫少々含む) |            |

さ0.35mを測る。直線的な溝であり、主軸はN45°Eを測る。埋土は茶褐色粗砂である。遺物は、おもに須恵器・土師器の小片が少量出土した。

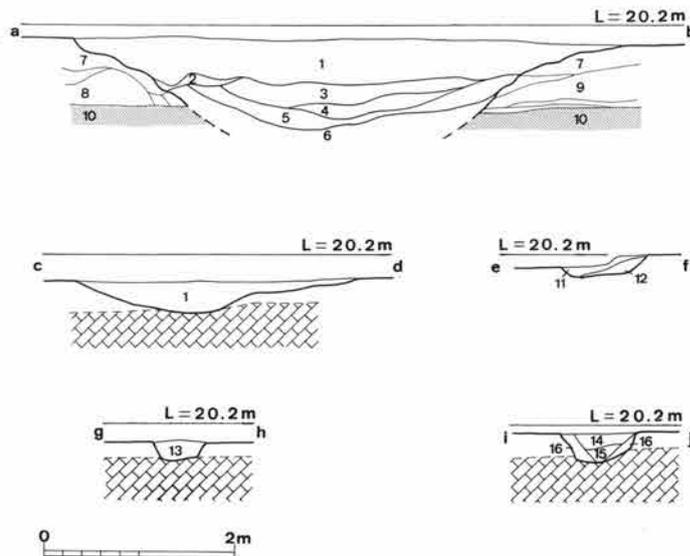
溝SD48(第74図) SD48は、検出長5.3m・幅1.5m以上・深さ0.3m前後を測り、北西から南東方向に流れる主軸はN45°Eを測る。埋土は褐色粘質土である。SD48は、やや不明瞭であるが、SX46に先行すると考えられる。出土遺物には、須恵器・土師器の小片がある。

溝SD49(第74図) SD49は全長5.9m・幅1.1m・深さ0.4m前後を測り、SX46につながる。主軸はN25°Wである。SD49はSD48と重複するが、SX46との関係からSD48よりは新しく、SX46と同時期の可能性が高い。出土遺物としては土師器甕などがややまとまって出土した。

土坑SX46(第74図) SD48・SD49と重複して検出された土坑状の遺構である。埋土は、上層が暗茶褐色粘質土(1・2)、下層が青灰色粗砂混じり粘質土ほか(3~6)、最下層が黒褐色粘土である。SX46とSD48・49との前後関係は明らかでないが、SD49がSX46に流れ込むような状況であることから、SD49とSX46は一連の遺構と考えられる。また、上層の埋土がSD27で確認された上層埋土に類似することから、SD27と同時に埋め立てられた可能性が高い。出土遺物は、比較的少量にあり、須恵器杯H・杯G・杯A・杯B、土師器皿・甕などが出土し



第74図 調査区西北部分検出遺構平面図



第75図 土坑状遺構SX46ほか実測図

- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1. 暗茶褐色粘質土(遺物多量に含む) | 2. 暗茶灰色粘質土      |
| 3. 淡青灰色粗砂混じり粘質土     | 4. 青灰色粗砂混じり粘質土  |
| 5. 青灰色細砂混じり砂質土      | 6. 黒褐色粘土        |
| 7. 黄褐色砂質土           | 8. 茶褐砂礫         |
| 9. 淡茶褐色砂質土          |                 |
| 10. 黒茶色粗砂混じり粘質土     |                 |
| 11. 暗茶褐色粗砂混じり粘質土    | 12. 茶灰色細砂混じり粘質土 |
| 13. 茶褐色粘質土(溝埋土)     | 14. 暗茶褐色粗砂      |
| 15. 茶褐色粗砂           | 16. 茶褐色粗砂混じり砂質土 |

た。基本的には、大溝SD27と同じような土器様相を呈し、遺物の大半は飛鳥時代に位置づけられるが、実際の機能時は奈良時代の中頃から後半と考えられる。SX46の性格は不明であるが、土坑状を呈するので、水溜め場のような機能を想定したい。

溝SD14・15・17(第67図、図版第42-1) 調査区の東端で検出された溝である。溝SD14は、検出長20m・幅0.8~1.0m・深さ0.3mを測る。溝SD15は、検出長8.4m・幅0.5m・深さ0.3mを測る。溝SD17は検出長4.3m・幅0.7m・深さ0.2mを測る。主軸はいずれも、おおむねN2°Wである。SD14とSD15・17がほぼ平行である点から、里道のような道路状遺構と考えたい。

溝SD05(第67図) トレンチ西側の溝SD05は、溝SD27の上層より検出された。主軸はN14°Wである。畑地の区画溝と考えられる。

素掘り溝(第67図) 素掘り溝は、ほぼ調査区の全域で検出された。素掘り溝には、幅0.7~1.0mを測る幅広の溝と、0.2~0.3mを測る幅狭の溝がある。また、方位の異なる溝群や直線あるいは曲線をなす溝群があり、時期差や性格・機能の違いを表すと考えられる。主軸方位がN13°Wをとるものは、溝SD05と並行し、N2°Wをとるものは溝SD14・15と直交している。両者の新旧関係は、さほど時期差はないが、主軸方位がN13°Wをとる方が古い溝である。出土遺物は、各々の溝から少量であるが、平安時代の土師器、須恵器の碎片があった。これら素掘り溝の時期は、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡よりも新しいことから平安時代以後と思われる。

自然流路 調査地を「S」字状に流れる流路跡である。出土遺物は、弥生土器もしくは土師器の小片しかなく、詳細な時期は不明であるが、以上に報告したいずれの遺構も、切り合い関係から新しく位置づけられ、この流路跡が最も新しく位置づけられる遺構である。

(竹井治雄・筒井崇史)

### (3) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器などの土器類、瓦、鉄器、鉄滓、砥石など、整理箱にして約30箱ある。出土遺物は、大溝SD27および土坑状遺構SX46から多く出土したほか、各竪穴式住居跡からも少なからず出土した。また、掘立柱建物跡をはじめとする柱穴からも遺物が出土したが、小片が多い。

今回の報告では、時間的な制約もあり、その一部しか報告できない。以下では、多量の遺物が出土した大溝SD27の土器について報告し、その後、竪穴式住居跡およびその他の遺構から出土した遺物について報告する。器種の名称は、奈良国立文化財研究所において使用されている名称にしたがった。<sup>(注5)</sup>

なお、図示した遺物は、出土した遺物の一部であり、各遺構の時期をおおむね反映していると思うが、十分な分析作業を経ずに図示していることをあらかじめ断っておく。

(筒井崇史)

#### ①大溝SD27出土遺物(第76~79図)

SD27出土遺物は、大きく中・下層出土遺物と上層出土遺物に分けることができる。

中・下層出土土器 須恵器杯A・杯B・杯G・杯H・杯B蓋・杯H蓋・高杯・壺・横瓶、土師

器杯C・杯G・杯・高杯・甕・鍋などがある。1～15は須恵器、16～24は土師器である。なお、20は中層、他は下層出土である。

1は杯H蓋である。やや平らな天井部と垂直に下る口縁部上半部とからなり、天井部内面および口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、天井部外面にヘラケズリ調整を施す。2は杯Hである。内面および口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面にヘラケズリ調整を施す。口縁部外面から底部にかけては、自然釉が付着する。

3・4は杯Gである。平らな底部に、やや内湾気味に立ちあがる口縁部からなり、内面および口縁部・体部外面に回転ナデ調整を施す。3は、底部ヘラ切り後、かるくナデ調整を施す。4は底部にヘラ切り痕をとどめる。口縁部内面に重ね焼きを行った痕跡がみられる。

5～7は杯B蓋である。平らな天井部と口縁端部が下方に屈曲する。内面および口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。つまみ部は欠損している。天井部外面はロクロでヘラケズリ調整を施す。6・7は口縁部が屈曲するA形態を呈する。

8・9は杯Aである。平らな底部に、斜め上方に立ち上がる口縁部からなり、内面および口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。8は底部ヘラ切り後、軽くナデ調整を施す。9は底部にヘラ切り痕をとどめる。10～13は杯Bである。平らな底部に、斜め上方に立ち上がる口縁部からなり、底部に高台を付す。内面および口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。高台貼り付け後に回転ナデ調整を施す。11・12は底部外面にヘラ切り痕を残す。

14は横瓶である。樽状の体部と斜め上方に開く口縁部からなり、口縁端部は内方に屈曲する。体部内外面は回転ナデ調整を施す。体部外面は、ほぼ全体に自然釉が付着する。外面の一部を欠損するものの、ほぼ完形品である。

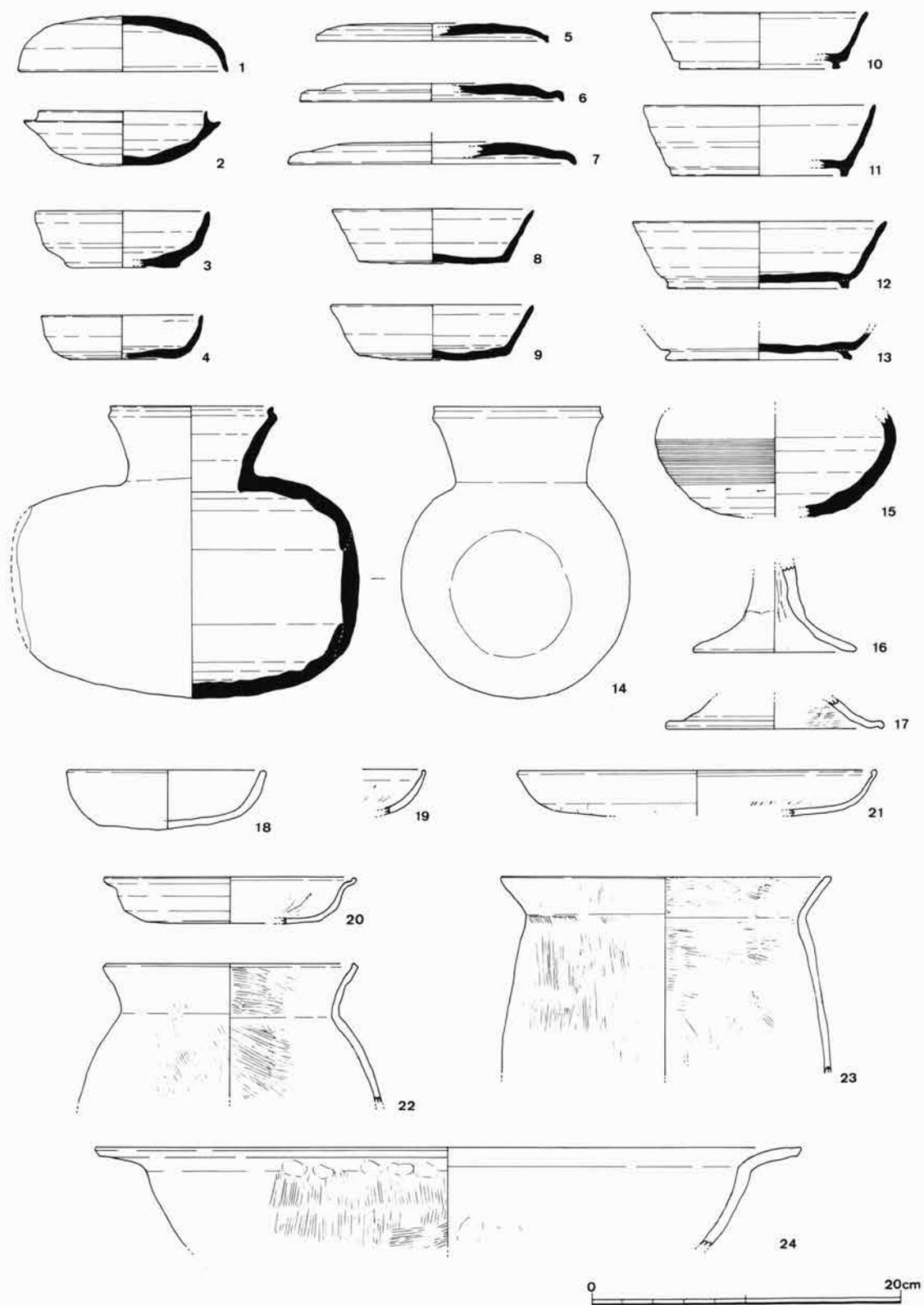
15は壺の体部片である。球形に近い体部で、体部外面の中位にカキ目を施し、下半は回転ヘラケズリ調整を施す。体部内面に回転ナデ調整を施す。

16・17は高杯の脚部である。16は、脚部内面に指押さえ、脚部外面にナデ調整を施す。脚柱部には面取りを行う。17は、脚部裾が屈曲しており、脚部内面にハケ調整を施した後、ナデ調整を施す。脚部外面にはヨコナデ調整を施す。

18は杯Gである。丸底気味の底部と内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁部内外面にヨコナデを行う。底部外面に指押さえを施した後、ナデ調整を施す。19は杯Cである。口縁部のみの破片で、ヨコナデ調整を施す。内面に放射状暗文を施す。20は杯である。やや丸底気味の底部に、内湾する体部と、大きく外方に開く口縁部からなる。口縁端部は内側に丸く肥厚する。内面は放射状暗文をつけ、口縁部内外面にヨコナデ調整を施す。

21は皿である。平底と内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、内面および口縁部外面上半にヨコナデ調整を施す。底部外面に指押さえを施す。内面に放射状暗文を施す。

22・23は甕である。やや外反気味を呈する口縁部と肩があまり張らない体部からなる。体部は長胴を呈すると考えられる。22は口縁端部をつまみあげ、外傾する面を持つ。体部外面に縦方向のハケ調整、内面に横方向のハケ調整を施す。23は口縁端部がほぼ水平な面を持つ。体部外面に



第76図 出土遺物実測図(1) 大溝S D27中・下層

縦方向のハケ調整、内面下半に縦方向のハケ調整、上半に横方向のハケ調整を施す。口縁部外面にはハケ調整の後にナデ調整を施す。

24は鍋である。ゆるやかに立ち上がる体部と大きく外側に開く口縁部からなり、口縁端部は外方に傾斜する面をもつ。体部には縦方向のハケ調整、内面に指押さえを施す。

**上層出土土器** 須恵器杯A・杯B・杯G・杯H・杯G蓋・杯H蓋・短頸壺・平瓶・長頸壺・甕、土師器杯B・杯C・杯G・鉢・高杯・甑などがある。25～52・76・77は須恵器、53～68は土師器である

25・26は杯H蓋である。25はやや平らな天井部と垂下する口縁部からなり、内面および口縁部外面に回転ナデ調整を施す。天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施した後、頂部にナデ調整を施す。口縁部内面に自然釉が付着する。26は内面および口縁部外面に回転ナデ調整を施す。また、天井部外面にカキ目を施す。27は杯Hである。立ち上がりは、かなり内方に傾斜する。内面と口縁部外面に回転ナデ調整を施し、底部内面には不定方向のナデ調整を施す。底部外面は、回転ヘラケズリ調整を施す。

28～30は杯Gである。丸底気味の底部に、やや内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。いずれも回転ナデ調整を基本とし、30は底部内面に不定方向のナデ調整を施す。底部は、28・30がヘラ切りの後、ナデ調整を施すが、29は回転ヘラケズリ調整を加える。30は口縁部内面上半から外面上半に重ね焼きの痕がみとめられる。なお、29は回転ヘラケズリ調整が施されることから蓋である可能性もある。

34は杯Aである。平らな底部に斜め上方に開く口縁部からなり、内面および口縁部外面に回転ナデ調整を施し、底部外面にヘラ切り後、ナデ調整を施す。

31～33は杯B蓋である。いずれも内面にかえりをもつ。回転ナデ調整を基本とし、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。31のかえりの先端は、口縁端部より下方に伸びる。32は口縁部内面に重ね焼きの痕がみとめられる。

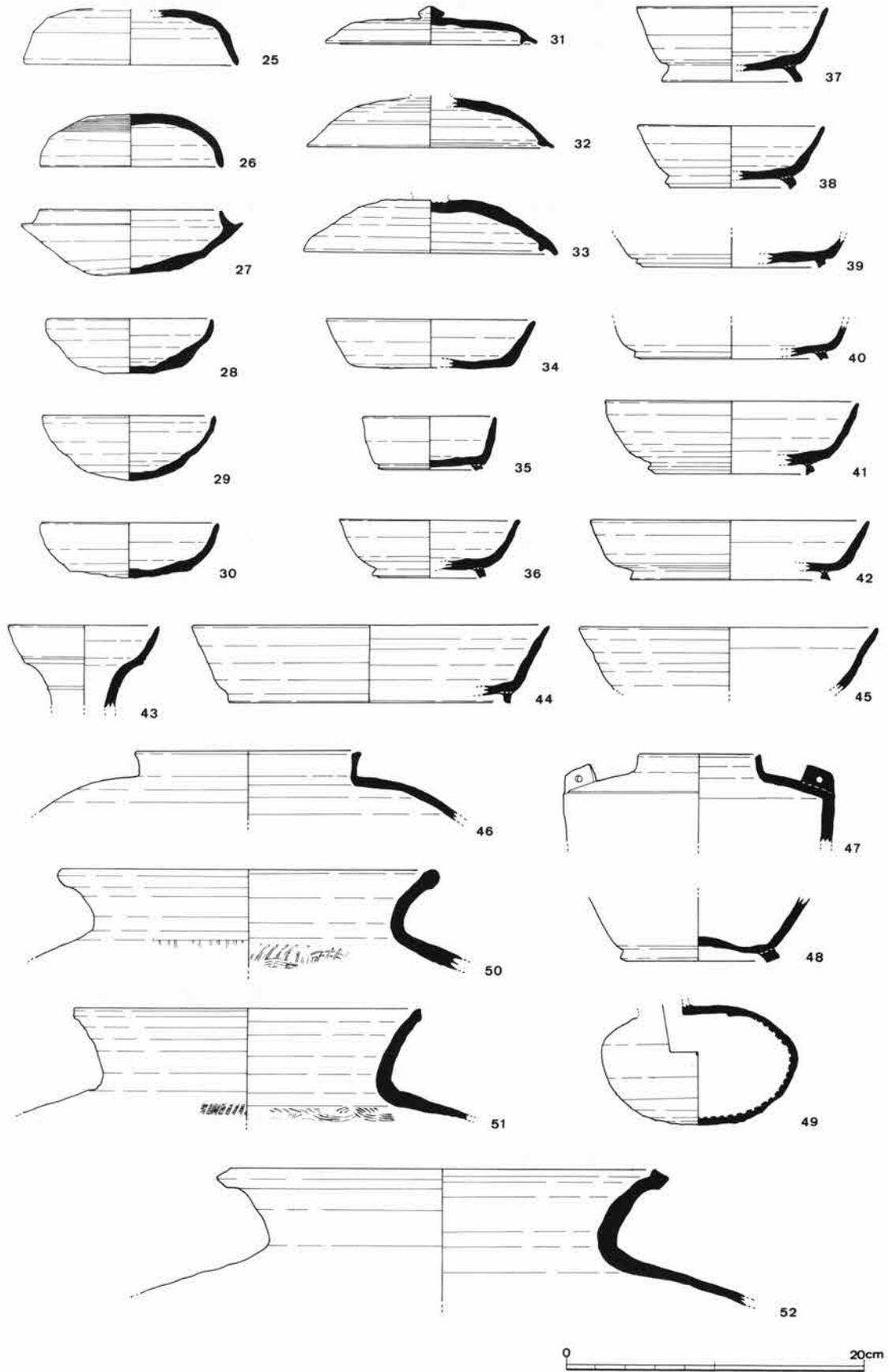
35～42・44は杯Bである。いずれも、平底と外上方に開く口縁部からなる。いずれの個体にも高台を貼り付けるが、37はやや高めの高台を有する。基本的には回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切り後不調整、あるいは軽くナデ調整を施すのことが多い。36～38・42は、体部下半に回転ヘラケズリ調整を施す。44は他の個体に比べ高台が底部周縁部に貼り付けられる

45は椀と考えられる。外上方に開く口縁部のみの破片である。内外面に回転ナデ調整を施す。

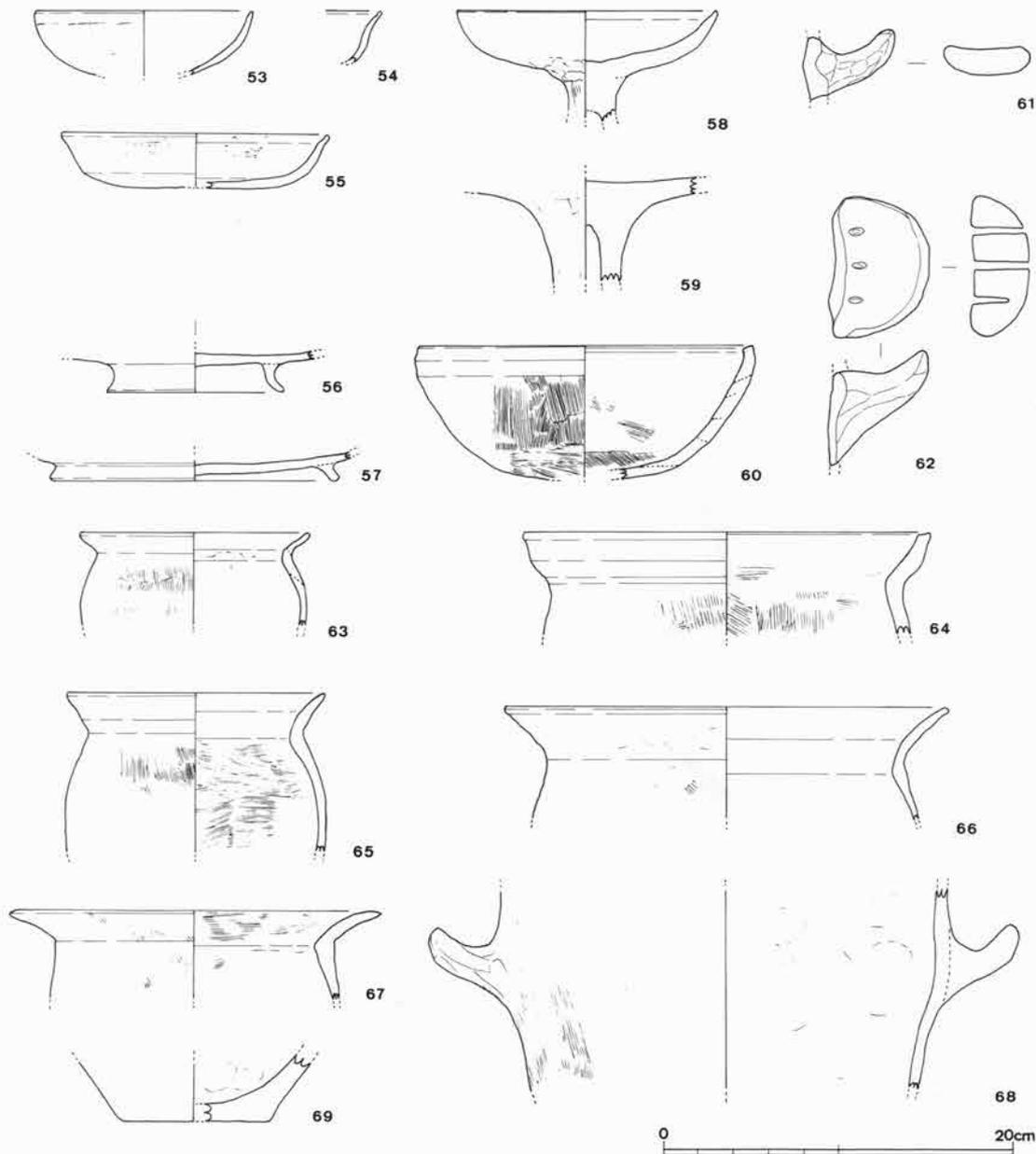
43は甕の口縁部である。口頸部が外反し、口縁部はほぼ斜め上方に直線的にのびる。内外面とも、回転ナデ調整を施し、口頸部と口縁部に1条ずつの沈線が認められる。

46・47は短頸壺である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。46は直立する短い口縁部をもつ。47は、やや内方に傾斜する短い口縁部をもち、肩が大きく張る体部をもつ。肩には、円形の透かし穴を有した方形の耳が付される。48は壺の底部である。体部内面に回転ナデ調整、体部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。高台は底部周縁部に貼り付けられる。

76は長頸壺である。口縁部と底部を欠損する。



第77図 出土遺物実測図(2) 大溝S D27上層

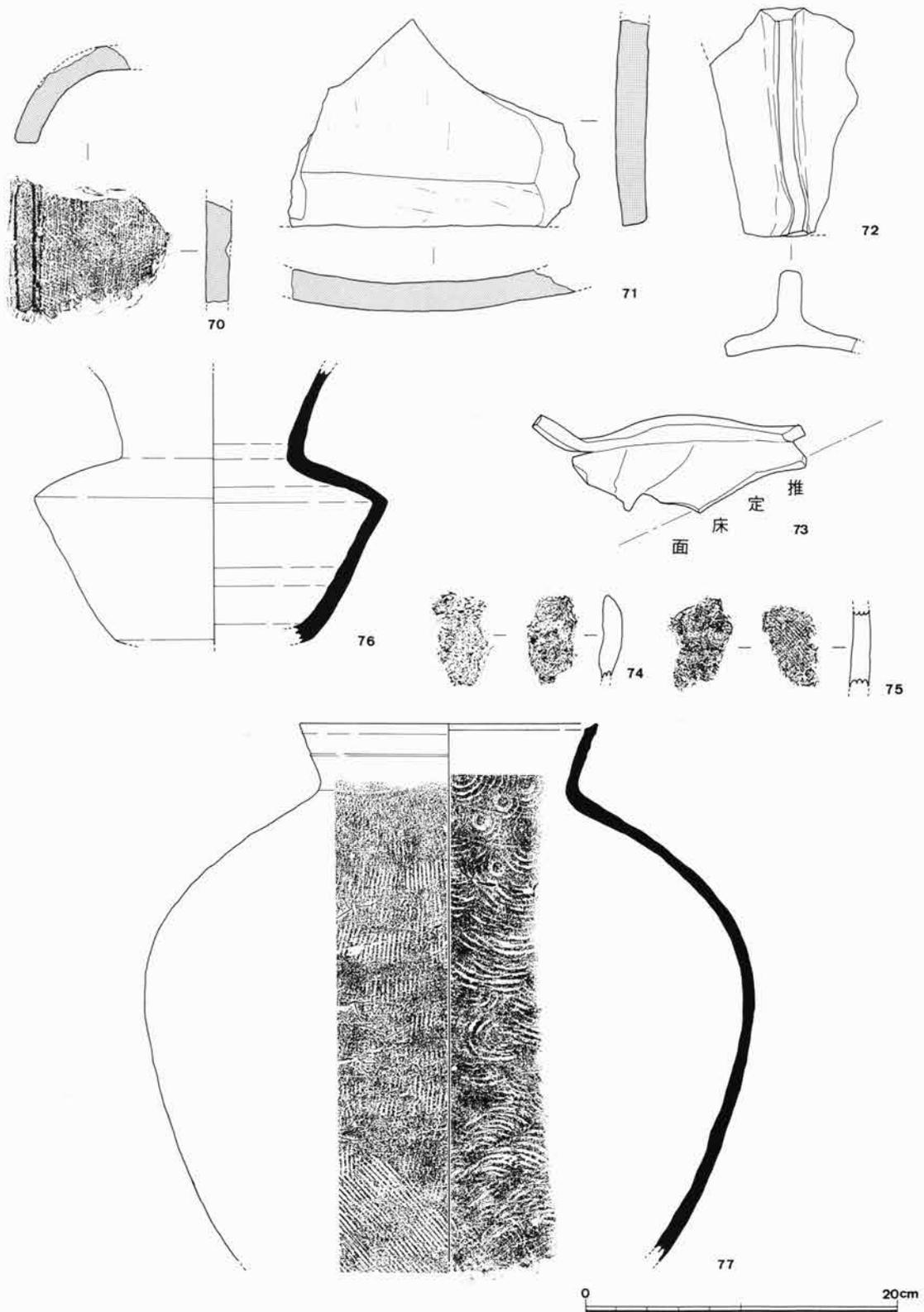


第78図 出土遺物実測図(3) 大溝SD27上層

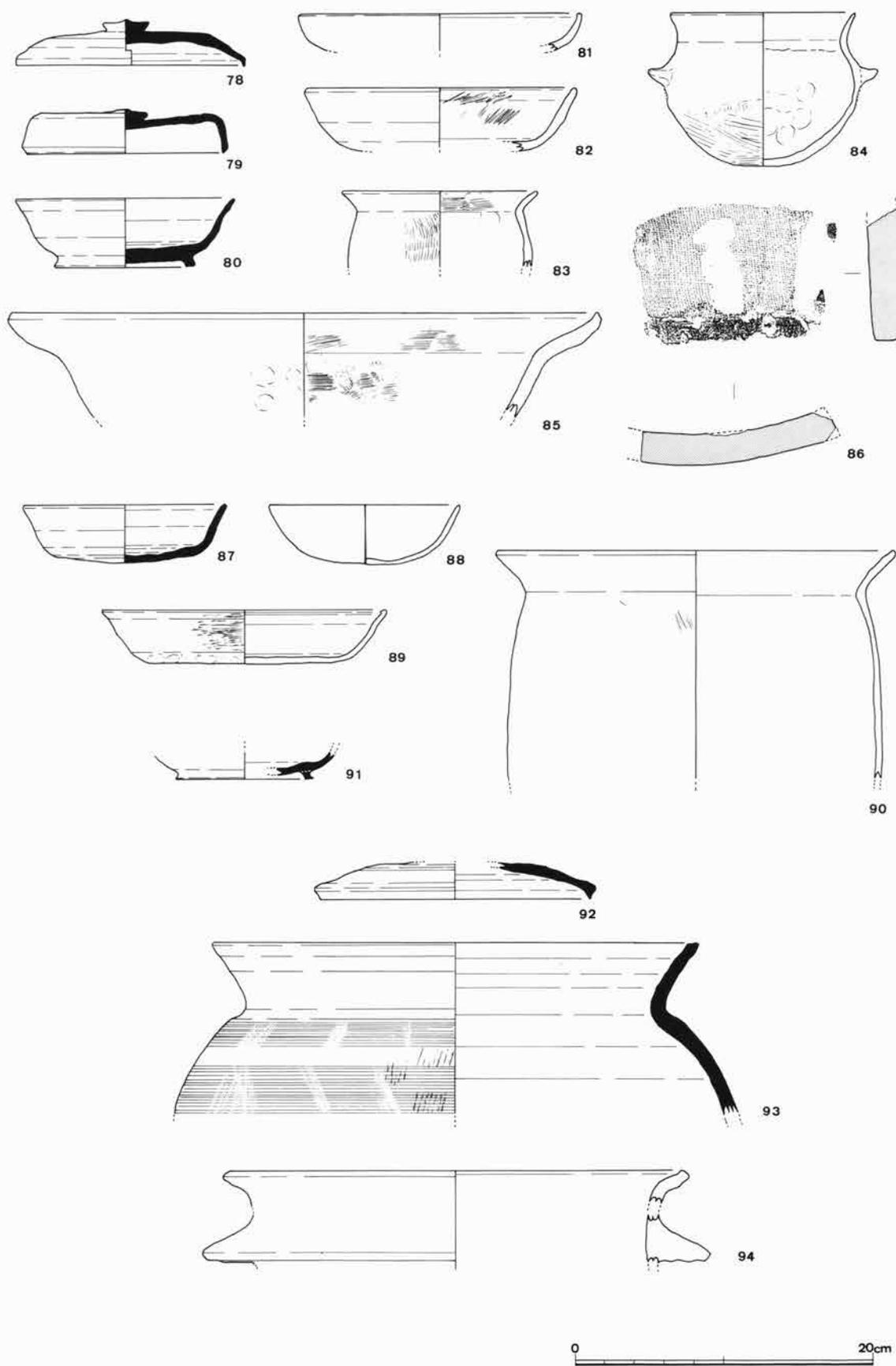
49は平瓶である。やや扁平な球形に近い体部だけの破片である。体部の調整は、底部外面にヘラケズリ調整を施す。体部外面に、自然釉が付着する。

50～51・77は甕である。基本的には、外上方に外反する口縁部をもつが、口縁端部の形状がそれぞれ異なる。口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。50は口縁端部を丸くおさめる。51は口縁端部外面に面を有する。52は、口縁端部を上方につまみ上げたような形状を呈する。また、口縁部内外面および体部にかけて自然釉が付着する。77は口縁部は斜め上方に直線的にのびる。

53は杯Cである。丸底と内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁部内外面にヨコナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が認められる。54・55は杯Gである。丸身を帯びた平底と斜め上方に開く口縁部からなる。54は口縁部のみの破片で、口縁端部は内側に丸く肥厚する。口縁部内面上



第79図 出土遺物実測図(4) 大溝SD27



第80図 出土遺物実測図(5) 竪穴式住居跡

半および外面にヨコナデを行い、口縁部内面下半にミガキを施す。内面に放射状暗文を施す。55は口縁部内外面にミガキ調整を施す。底部外面は指押さえの後、ナデ調整を施す。

56・57は杯Bである。どちらも底部のみの破片である。56は、内面に螺旋状暗文を施す。高台は、比較的高く、やや外方に開く。底部外面は指押さえの後、ナデ調整を施す。57も内面に螺旋状暗文を施すが、図示していない。高台は、やや外側に開く。底部外面は指押さえの後、ナデ調整を施す。

58は高杯である。脚部の中位以下を欠損する。杯部内外面にヨコナデ調整を施す。杯部底部外面にはヘラケズリ調整が施される。脚部外面にはハケ調整を施した後、指押さえを施す。

59は高杯の杯底部と脚部の破片である。脚部に面取りを行う。杯部内面にナデ調整を施す。脚部内面にシボリ痕が認められる。

60は鉢である。深い器形を呈し、口縁端部は内傾する面をもつ。体部外面に縦方向のハケ調整、底部外面に横方向のハケ調整を施す。底部内面には横方向のハケ調整を施した後、ナデ調整を施す。口縁部内外面にはヨコナデ調整を施す。

61・62は把手である。指押さえで整形した後、ナデ調整を施す。62には3つの孔が穿たれる。

63～67は甕である。口縁部や体部の形状がいずれも異なる。調整は口縁部がヨコナデもしくはハケ、体部はハケを主体とする。64～67は、肩の張りが弱く、やや長胴気味の体部を呈する。63は体部外面に縦方向のハケ調整、内面上半に横方向のナデ調整、下半に縦方向のナデ調整を施す。64は、口縁端部に内傾する面をもつ。体部外面に縦方向のハケ調整、内面に縦方向のハケ調整を施す。口縁部内面下半に横方向のハケ調整を施した後、強めのナデ調整を施す。65は体部外面に縦方向のハケ調整を施した後、ナデ調整を施す。内面に横方向のハケ調整を施す。66は内外面とも摩滅が著しく、調整は不明瞭である。67は、内面および口縁部内面に横方向のハケ調整を、口縁部外面および外面に縦方向のハケ調整を施す。

68は甑の体部の破片である。体部外面下半に縦方向のハケ調整を、外面上半に縦方向のていねいなナデ調整を施す。内面は、指押さえの後、ナデ調整を施す。体部中位に一对の把手が付く。

また、須恵器・土師器のほかに、上層から弥生土器の底部が1点出土した。69は、平底を呈する底部の破片で、内面に指押さえを施した後、ナデ調整を施す。外面もナデ調整を施す。

(松尾洋次郎)

その他の出土遺物 S D27では以上の土器類の他にも、瓦・竈・焼き台・製塩土器などが出土した。70・71は瓦である。70は丸瓦である。布目痕跡を残す。71は平瓦である。指によるナデの痕跡が明瞭に残る。72は竈の焚き口部部分の破片である。厚さ2.6cmの鏝がつく。73は須恵器窯などでみられる焼き台と思われる破片である。74・75は製塩土器と考えられる破片で、75は内面に布目痕跡がある。

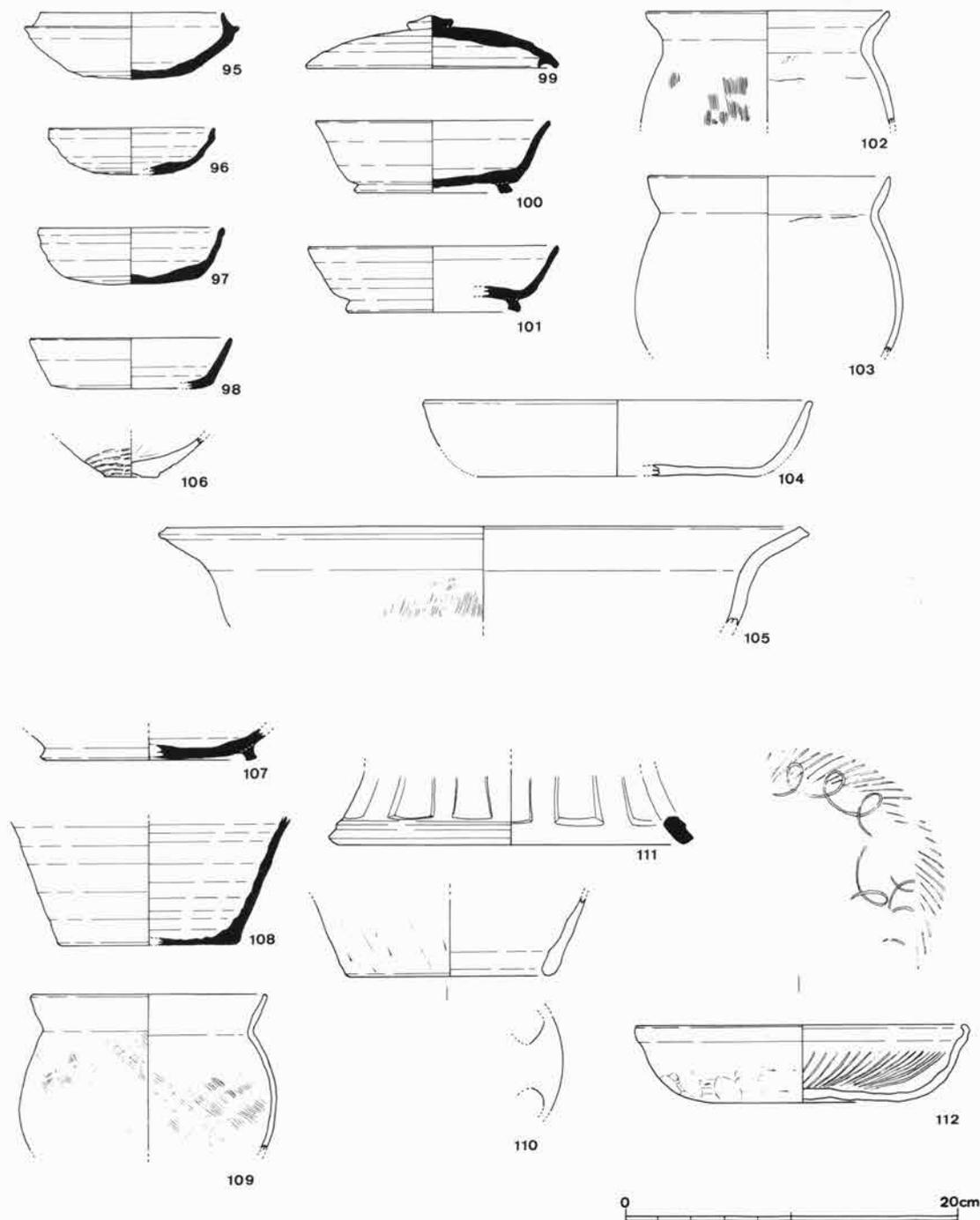
## ② 竪穴式住居跡出土遺物(第80図)

竪穴式住居跡 S H02(78～86) 竪穴式住居跡 S H02からは、須恵器・土師器のほか、瓦片が出土した。78は、須恵器杯B蓋である。内面にかえりを有さない。79は須恵器壺蓋である。80は須恵器杯Bである。口縁部がやや外反する。81は土師器皿である。82は土師器杯である。83は土師

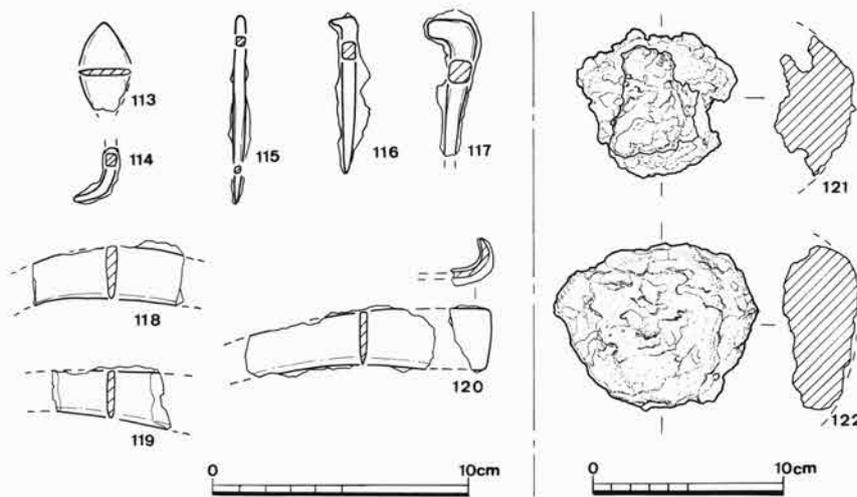
器甕である。84は把手付き甕である。外面は2次焼成による剥離が認められる。85は土師器鍋である。86は平瓦の破片である。布目痕跡を残す。

竪穴式住居跡SH03(87~90) 竪穴式住居跡SH03からは、須恵器・土師器が出土した。87は須恵器杯Aである。88は土師器碗である。89は土師器杯である。内面は磨滅が著しく調整が不明瞭であるが、外面に横方向の細かいミガキ調整を施す。90は土師器甕である。体部があまり張らず、器高が高いので長胴の甕と考えられる。

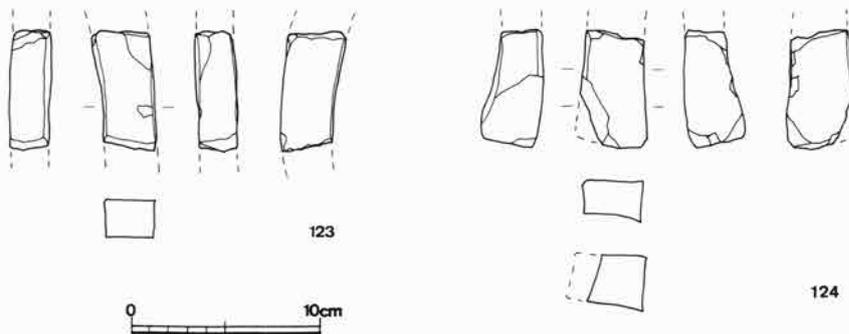
竪穴式住居跡SH04(91) 竪穴式住居跡SH04からは須恵器・土師器などが出土した。図示し



第81図 出土遺物実測図(6) 土坑状遺構SX46ほか



第82図 出土遺物実測図(7) 鉄器・鍛冶滓



第83図 出土遺物実測図(8) 砥石

たのは須恵器杯B底部  
1点のみである。

竪穴式住居跡 S H  
13(92~94) 竪穴式住  
居跡 S H 13からは、須  
恵器・土師器などが出  
土した。92は須恵器杯  
B蓋である。やや厚手  
の蓋である。93は須恵  
器甕である。肩部にカ  
キメを施す。94は土師  
器甕である。口縁部の  
直下に長さ3.2cmを測る  
鏝を有する。口縁端部  
はややつまみ上げ気味  
を呈する。体部は長胴  
を呈すると考えられる。

③その他出土遺物(第  
81図)

土坑状遺構 S X 46(95~106) 土坑状遺構 S X 46からは須恵器・土師器などが出土した。出土  
遺物の様相は S D 27上層出土物のそれに類似した様相を示す。95は須恵器杯Hである。96は須  
恵器杯Gである。97・98は須恵器杯Aである。97は外面に回転ナデの痕跡が明瞭に残る。98は底  
部から外上方に直線的にのびる口縁部を持つ。99は杯B蓋である。内面にかえりを有する。  
100・101は杯Bである。100は口縁部がやや外反する。102・103は土師器甕である。104は土師器  
皿である。105は土師器鍋である。106は弥生土器の底部である。底部外面にタタキ調整痕を残す。  
弥生時代後期のものである。

溝 S D 05(107) 須恵器杯B 1点図示したが、周辺からの混入と思われる。

溝 S D 14(108) 壺の底部と考えられる

土坑状遺構 S X 01(109) 土師器甕 2点出土した。うち 1点を図示した。

土坑 S K 42(110) 土師器甕の底部の小片である。

包含層(111・112) 111は須恵器の円面硯である。小片のため全体の形状は明らかでない。112  
は土師器杯である。内面に放射状暗文と連結輪状暗文を施す。

(筒井崇史)

④鉄製品(第82図)

114・115は S D 05から、117は S D 28から、119は S H 02から、121は S D 14から、それ以外は

S D27から出土した。鉄鏃113は、幅2.8cm・厚さ0.5cm・長さ4.5cmを測り、茎部は欠損する。114～117は釘である。114・115は、断面が一辺0.5cmの方形を呈し、細身である。116・117は頭部が「L」字状に屈曲しており、皆折釘と思われる。断面は方形で1.0cm四方である。118～120は鎌で、幅約2.8cm・厚さ約0.4cmを測る。小割りに切断され、不要品となった鎌を再溶解するためと考える。鍛冶滓は、約30点出土した。小破片から椀形滓と判るものまでさまざまである。出土地点にまともは見られない。121・122は出土した鍛冶滓の中で最も椀形滓として形状を留めているもので、肉眼観察では破面は気泡を多発する。色調は黒色を呈し、荒れ肌で、裏面に茶褐色土が付着する。木炭痕は確認できなかった。また、精錬滓に見られるような流動面は見られない。小破片についても同様に観察できた。鍛冶滓の分析はできなかったため、原料については不明であるが、小割の鎌の出土を考えると、再生鍛冶を主作業とする工房が存在した可能性が高い。ただし、粒状滓・鍛造剥片などは検出されなかった。

(岡崎研一)

#### ⑤砥石(第83図)

調査地内からは砥石が2点出土した(123・124)。123はS D27上層から、124はS H41から出土した。2点とも、4面全てを使用している。とくに124の一面は、使用により、よく磨滅しており、湾曲が著しい。2点とも線状痕は認められない。どちらも泥岩製の砥石である。2点とも欠損しており、123は残存長6.3cm、124は残存長6.2cmを測る。

(田部剛士)

## 6. ま と め

今回の調査地は、新田遺跡の南端に当たり、低位段丘上に位置する。調査の結果、飛鳥・奈良時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・大溝などが検出された。また、平安時代の里道の可能性のある道路状遺構や素掘り溝などもある。以下、主要な遺構について簡単にまとめた。

竪穴式住居跡は15基検出し、トレンチ全域に広がる。これらの住居跡は一部建て替えが認められるので、全てが同時に存在したわけではないが、出土遺物に大きな差はみられず、おおむね飛鳥時代後半から末頃を中心とした集落と考えられる。ただし、住居に造り付けられている竈の位置が不統一である点は注意すべきであろう。

掘立柱建物跡は4棟復原できたが、実際の数はいくつか多いと思われる。建物跡は方位から、建物跡1、建物跡2・3、建物4の3グループに分けられる。また、竪穴式住居跡と重複する建物跡が多いことから、竪穴式住居から掘立柱建物への建て替えが行われた可能性を示唆する。その時期は奈良時代前半頃と考えられる。なお、建物跡4は柱穴が小さいので、他の建物跡とは異なり、少し時間差があるかもしれない。

大溝S D27は、人工的に開削されたと考えられるが、その時期は不明である。ただし、東半が斜行するのに対して、西半が東西方向を指向する点については、斜行する部分が、古山陽道に関わるものである可能性がある。また、溝S D48・49、土坑状遺構S X46などはS D27のうち斜行

する溝の延長部分の名残りと考えたい。方位が必ずしも一致するわけではないが、S D27や掘立柱建物跡群が、N26~40°Wに集中することは、古山陽道との関わりを考える上で重要である。溝の廃絶は、土層の堆積状況や出土遺物から人為的に、しかも短期間に埋められたと考えられる。その時期は奈良時代後半から末頃と考えられる。

素掘り溝群は、東西方向の溝と南北方向の溝がある。東西方向の溝の方が新しい。東西方向の溝は、その方位が溝S D15に直交し、南北方向の溝は、溝S D05と平行する。溝S D14と溝S D15・17は平行しており、里道などの道路側溝と考えられ、条里制に関する資料を得られた。

以上の調査の成果から、今回の調査地は、飛鳥時代から奈良時代にかけて営まれた集落であると考えられる。その性格については、大溝S D27からは多量の土器類とともに鍛冶滓・焼き台などが出土しており、一般の集落よりも、須恵器生産や鉄器生産などに関わる集落である可能性もある。あるいは、円面硯や瓦が出土していることから、古山陽道に関わった、内里八丁遺跡のような公的施設あるいはそれに準じる施設の可能性もある。

(竹井治雄・筒井崇史)

付記：本概要報告の作成作業は、現地調査と平行して実施したため、遺構・遺物について十分な検討を行うことができなかった。また、調査担当者間の見解の相違を統一するにも至らなかった点がある。

検討の不十分な点については、今後、『京都府埋蔵文化財情報』などに報告することにした。

注1 調査参加者は以下の通りである(順不同・敬称略)。

荒尾倫子・一森雄次・江崎早苗・奥 浩和・川島多喜子・川端佐和子・川端美恵・合田美佐子  
小西麻佐子・田部剛士・長谷川透・松尾洋次郎・松田早映子・村本幸美・森川敦子

注2 歴史的環境の執筆については、各遺跡の調査報告書のほか、下記の文献による。

足利健亮「京都盆地の消えた古道二題」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

足利健亮『日本古代地理研究』 大明堂 1985

森下 衛「八幡市内里八丁遺跡の道路状遺構」(『京都府埋蔵文化財情報』第73号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注3 過去の調査報告は以下の通りである。

第1次：奥村清一郎「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報(1984)』 京都府教育委員会) 1984

奥村清一郎「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報(1985)』 京都府教育委員会) 1985

第2次：三好博喜・荒川 史「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

第3次：筒井崇史・森正哲司「京都南道路関係遺跡(内里八丁遺跡・荒坂遺跡・新田遺跡)平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

第4次：鷹野一太郎「新田遺跡第4次発掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第29集 京田辺市教育委員会) 1999

注4 遺構番号は、柱穴を除き、通し番号とした。柱穴は、別に通し番号とした。掘立柱建物跡については、柱穴を検出後、建物跡として復原できるものについて別の番号を付与した。

注5 「KBM2」の水準値は、第二京阪道路建設に伴い水準測量されたもので、「乾角」と同一点である。

注6 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 1978

## 7. 新田遺跡第6次発掘調査概要

### 1. はじめに

この調査は、農業基盤整備関係道路改良工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。調査対象地は、京田辺市松井に位置し、東西1.1km・南北1.2kmの新田遺跡のほぼ中央部にあたる。本遺跡は北隣の八幡市にまで及び、数回にわたっての発掘調査が実施されてきた。今回の調査を行うにあたって京田辺市教育委員会が次数整理を行った。それを、第1表に示した。平成10年度には、ほ場整備事業に先がけて、京田辺市教育委員会が調査地以南の水田部の試掘調査を実施している<sup>(注1)</sup>。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正・主査調査員岡崎研一が担当した。調査期間は、平成11年11月18日から平成12年1月28日まで行い、調査面積は、約300㎡である。これら調査に係る経費は、全額京都府土木建築部が負担した。

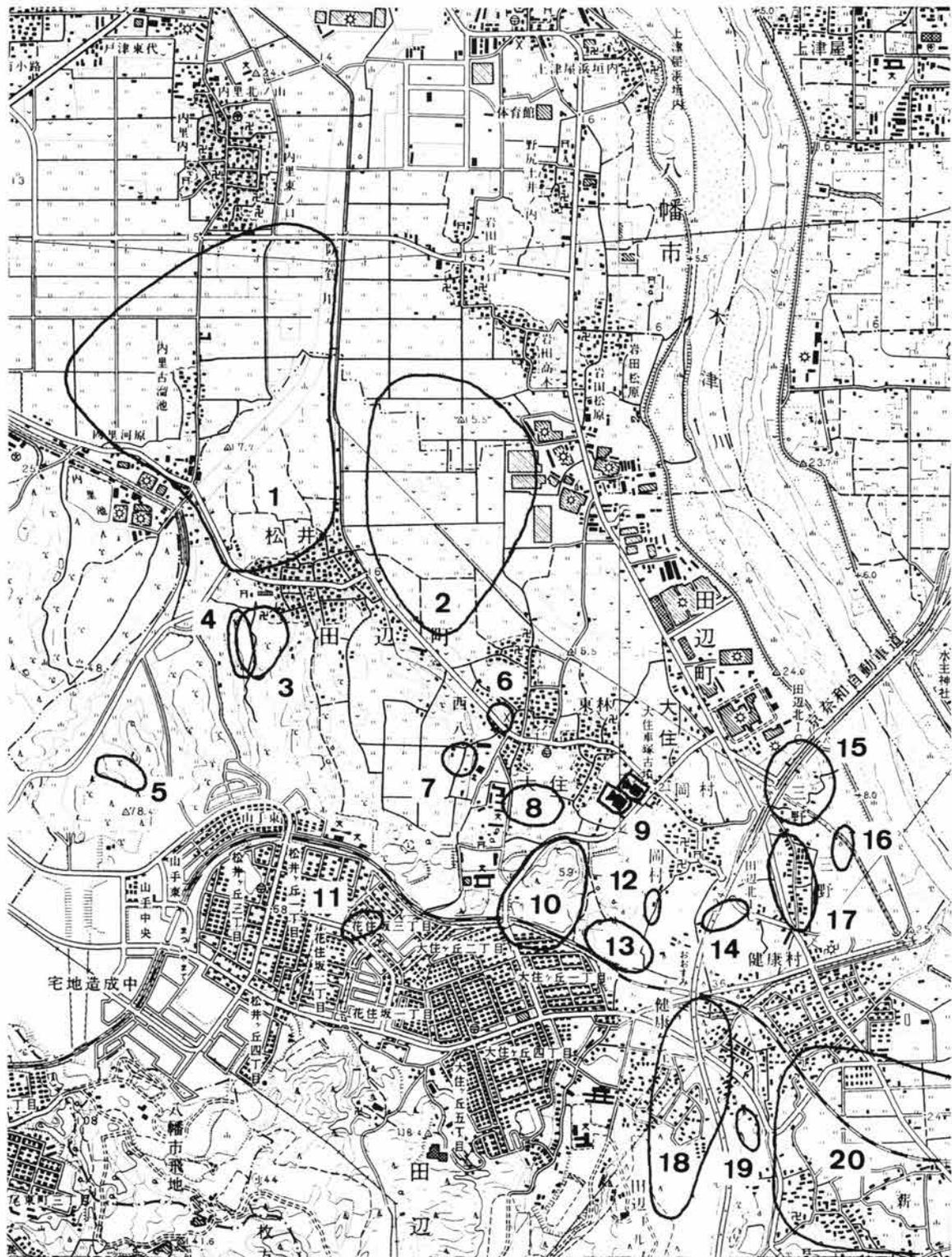
本概報は、岡崎が担当し、原稿執筆については文末に記した。遺構図の作成・遺物整理は、調査参加者がそれぞれ分業した。現地写真は、岡崎が撮影した。

調査期間中は、京都府教育庁指導部文化財保護課・京田辺市教育委員会・京都府立山城郷土資料館・京都府田辺土木事務所・各自治会など各関係諸機関の協力をいただいた。地元の方々にあたっては、調査補助員・整理員として従事していただいた<sup>(注2)</sup>。記して感謝の意を表したい。

(岡崎研一)

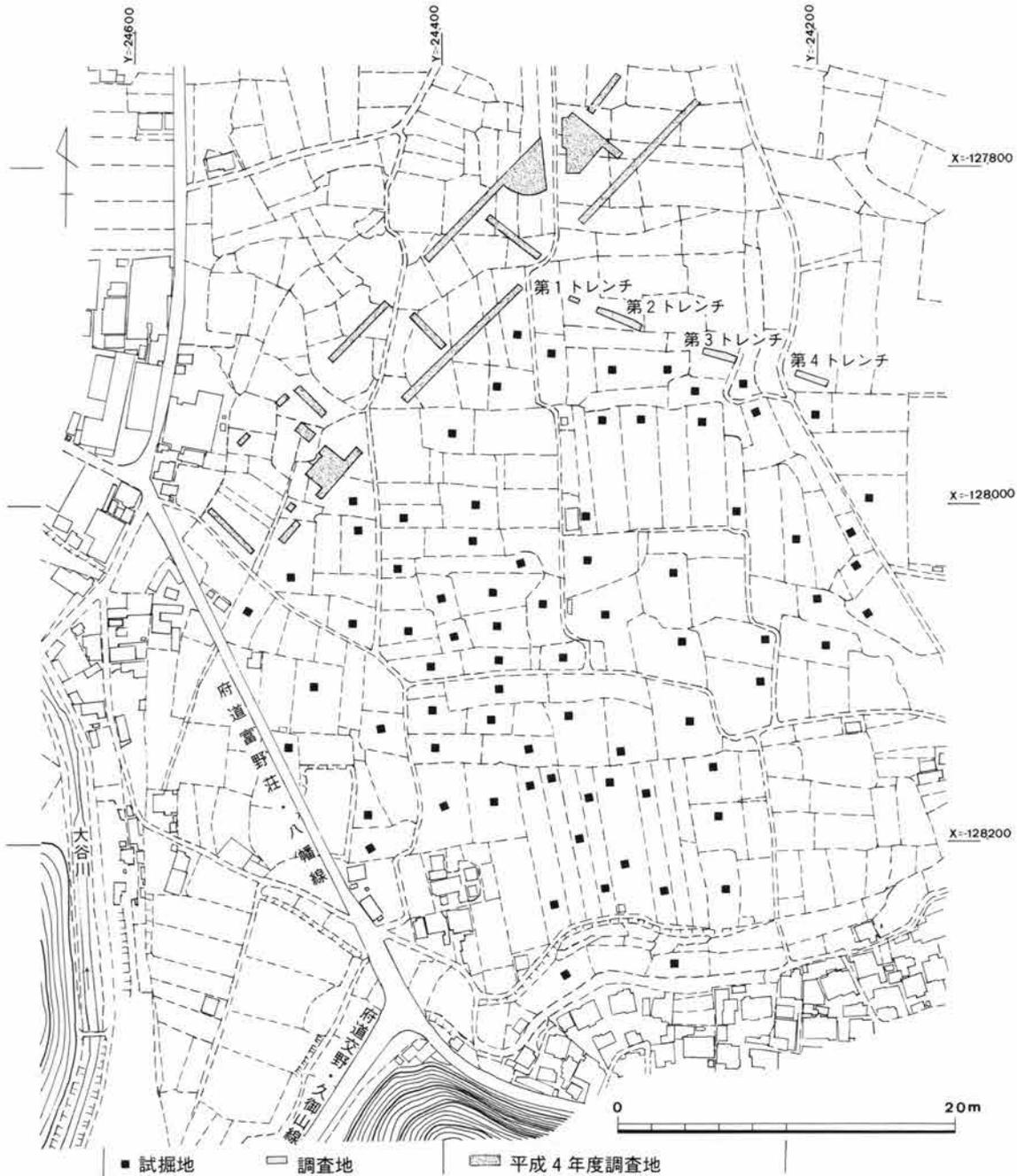
第1表 新田遺跡調査次数表

	次数	調査期間	調査面積	調査主体	調査担当	時代	検出遺構
京田 辺 市 域	第3次	平成4年11月4日 ～ 平成5年2月25日	約4,600㎡	(財)京都府埋蔵文化財 調査研究センター	森正哲次 筒井崇史	飛鳥時代 ～ 鎌倉時代	掘立柱建物跡 柵列跡 溝跡
	第4次	平成10年12月11日 ～ 平成11年1月29日	試掘地77か所	京田辺市教育委員会	鷹野一太郎 五百磐顕一	飛鳥時代 ～ 鎌倉時代	柱穴 土坑
	第5次	平成11年11月10日 ～ 平成12年2月28日	約1,000㎡	(財)京都府埋蔵文化財 調査研究センター	竹井治雄 筒井崇史	飛鳥時代 ～ 奈良時代	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡 溝跡など
八 幡 市 域	第1次	昭和58年9月5日 ～ 昭和58年11月22日	約270㎡	京都府教育委員会	奥村清一郎	古墳時代	竪穴式住居跡 土坑
	第2次	平成元年7月18日 ～ 平成元年9月22日	約4,300㎡	(財)京都府埋蔵文化財 調査研究センター	荒川 史		



第84図 調査地および周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

- |           |          |           |          |           |           |
|-----------|----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1. 新田遺跡   | 2. 魚田遺跡  | 3. 松井横穴群  | 4. 向山遺跡  | 5. 口仲谷遺跡  | 6. 八河原遺跡  |
| 7. 西野遺跡   | 8. 杉谷遺跡  | 9. 大住南塚古墳 | 10. 大住城跡 | 11. 上西野遺跡 | 12. 塔ノ脇遺跡 |
| 13. 池内山遺跡 | 14. 野上遺跡 | 15. 三本木遺跡 | 16. 志保遺跡 | 17. 三野遺跡  | 18. 狼谷遺跡  |
| 19. 畑山遺跡  | 20. 薪遺跡  |           |          |           |           |



第85図 調査地位置図

## 2. 位置と環境(第84図)

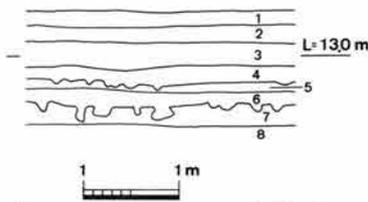
京田辺市は、南山城平野のほぼ中央を貫流する木津川左岸に所在する。市の西部は生駒山系に派生する大阪層群とよばれている砂礫層からなる丘陵地であり、東部は木津川によって形成されて沖積地が広がる。今回の調査地は、京田辺市の最北端、八幡市との境に位置する。

新田遺跡周辺の歴史的環境について簡単に概観する。旧石器・縄文時代の遺跡はほとんど見られない。弥生時代になると、京田辺市三山木遺跡・薪遺跡などがある。三山木遺跡は弥生時代前期から中期にかけての良好な土器・石器資料が出土している。薪遺跡は、西薪の丘陵上に立地し、また採集された土器より後期の遺跡と考えられている。

古墳時代になると、丘陵上やその縁辺部に古墳が築造される。特に前期後半には京田辺市大住車塚古墳・大住南塚古墳の2基の前方後方墳が築造される。大住車塚古墳は全長約67mの周濠を持つ古墳で、古くから「チコンジ山」と呼ばれており、昭和49(1974)年に史跡指定を受けている。その南西に隣接する大住南塚古墳も以前より「シオンベ池古墳」と呼ばれ、前方後円墳と見られていたが、京田辺市教育委員会の調査により葺石・埴輪などが見つかり、大住車塚古墳と同じく、周濠を持つ前方後方墳であることがわかった。中期の遺跡は知られておらず、後期になると、松井横穴群などの群集墳が築造される。松井横穴群は、調査地の南西に所在し、19基以上が築造されているのが確認されている。山城地域において横穴の存在は、この大住から八幡にかけて最も多く分布している。

飛鳥・奈良時代以降になると、魚田遺跡や新田遺跡など数多くの遺跡が挙げられる。魚田遺跡は京田辺市教育委員会の調査で、同市北端部で木津川の旧河道などが見つかっている。わずかに文献の上で、条里が敷かれていたことが残されているが、大住地区において条里関連遺構は見つかっていない。<sup>(注3)</sup>

(松尾洋次郎)



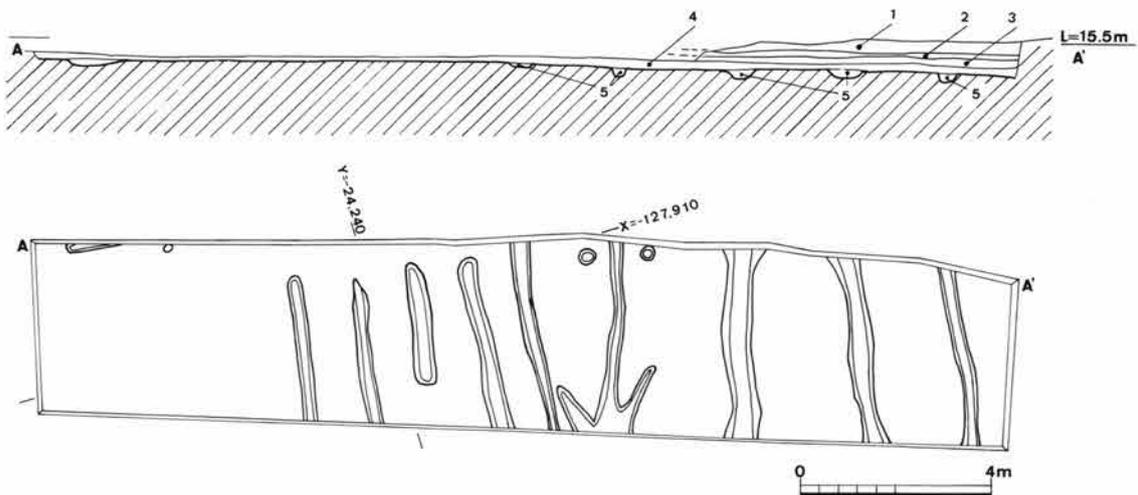
第86図 第4トレンチ柱状断面図

- 1. 耕土
- 2. 淡灰色土
- 3. 灰色土
- 4. 暗茶褐色土
- 5. 灰色土混暗茶褐色土
- 6. 白色砂土
- 7. 暗灰色粘土
- 8. 暗灰色砂土

### 3. 調査概要

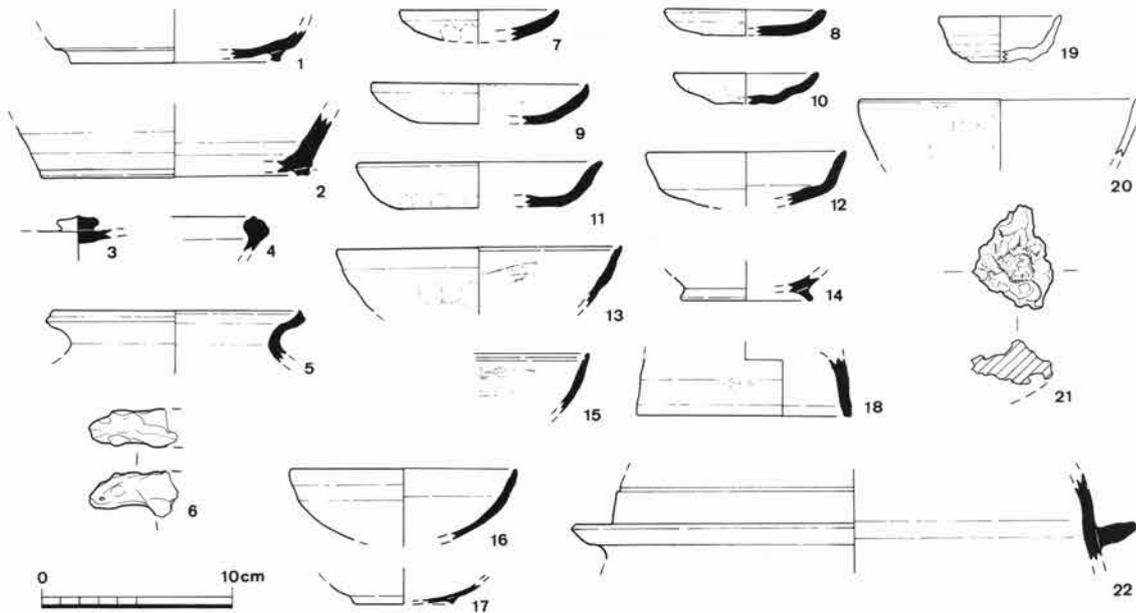
調査地内に4か所のトレンチを設定し、西側から数字で呼称した。

**基本層位** 第1・2トレンチ付近は、小字松井の集落から延びる微高地にあたるが、後世に削平を受けており、遺構の検出には至らなかった。耕土層や床土から磨滅した土師器片や瓦器片がわずかに出土した。微高地斜面にあたる第3・4トレンチで耕土・床土・暗茶褐色土・灰白色砂土となり、



第87図 第3トレンチ遺構実測図

- 1. 耕土
- 2. 灰色土
- 3. 暗茶褐色土
- 4. 濃褐色土
- 5. 暗灰色土



第88図 出土遺物実測図

暗茶褐色土には若干の遺物が混入していた。遺構は、灰白色砂土を掘り込んだ形で検出している。この遺構面は、西から東へ傾斜している。下層については、部分的に重機による掘削を行ったが、顕著な遺構・遺物の検出には至らなかった。

**検出遺構**(第86・87図、図版第50) 今回の調査で検出した遺構は、第3トレンチで確認した溝10条のみである。溝はN6°Wを測り、およそ1.2m間隔で見つかった。確認長約20m・幅約0.4m・深さ約0.2mを測り、断面「U」字形を呈す。溝内からは、若干の磨滅した土器片が出土した。これらの土器片や、上層でわずかに認められた濃茶褐色土の包含層出土の遺物から、おおむね13世紀代の遺構と考える。溝の検出状況やその規模などから当時の耕作溝と性格付けた。

第4トレンチでは、瓦器碗や土師器皿の破片を包含する暗茶褐色土・白色砂土下より、2面の水田面を検出することができた。下層の水田面が、比較的良好な状態で検出できたが、遺物は包含していなかったため、時期については不明である。畦畔の検出にも至っていない。水田面上の白色砂土が、稲株の痕跡に埋まっていた。

#### 4. 出土遺物

遺物の大半は、第2・3・4トレンチから出土したもので、層位的には包含層である濃茶褐色土・暗茶褐色土からである。第3トレンチの溝出土の遺物については、細片であったため図化できなかった。

杯1・2は、輪状の高台を貼り付ける。高台は底部縁をめぐることから、1は8世紀後半、2は9世紀初頭と思われる。蓋3は、つまみのみである。さほど大きくない擬宝珠つまみである。鉢4は、口縁端部の断面が円形をなす。甕5は土師器である。口縁端部を上方に尖らす。土馬6は非常に残りが悪く、全容は不明である。土師器皿7～12は、口径4cm前後の7・8・10と、5

～6 cmを測る9・11・12の2種に分かれる。口縁部は、上方に尖るものや外上方を向くものがある。外面には指押さえの痕跡が残り、9は内面にハケ目が見られた。14は黒色土器の底部で、13・15～17は瓦器碗である。13は口縁端部に凹線がめぐることから、いわゆる大和型の瓦器碗である。15は口縁部に凹線がめぐることから、いわゆる楠葉型の瓦器碗である。いずれも13世紀代のものと思われる。17の高台はかなり退化しており、13世紀後半に位置づけられる。18は瓦質で花印がスタンプされている。19・20は陶器の細片である。21は鍛冶滓である。22は羽釜である。

## 5. ま と め

平成10年度に京田辺市教育委員会が実施した試掘調査時に、隣接地より遺物包含層が確認されており、微高地にあたることから、何らかの遺構が存在するものと推測されていた。今回の調査で微高地部分は、後世に削平を受けていたことが判明し、遺物包含層も2次堆積的なものであった。微高地東側斜面部より中世の耕作溝を検出したことや、平成4年度に調査を実施した西側斜面部から掘立柱建物跡1棟を検出したことなどから、中世にはこの微高地上に建物跡が存在し、低位部は田畑として利用されていたと思われる。

(岡崎研一)

注1 京田辺市教育委員会「新田遺跡発掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第27集 京田辺市教育委員会) 1999

注2 一森雄次・山岡匠平・川端美恵・小西麻佐子・荒尾倫子・村本幸美(順不同・敬称略)

注3 注1に同じ。

田辺町教育委員会「魚田遺跡第1次・第2次発掘調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第22集) 1997

筒井崇史「新田遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

岡崎研一・田代 弘「三山木遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

## 8. 柿添遺跡第4次発掘調査概要

### 1. はじめに

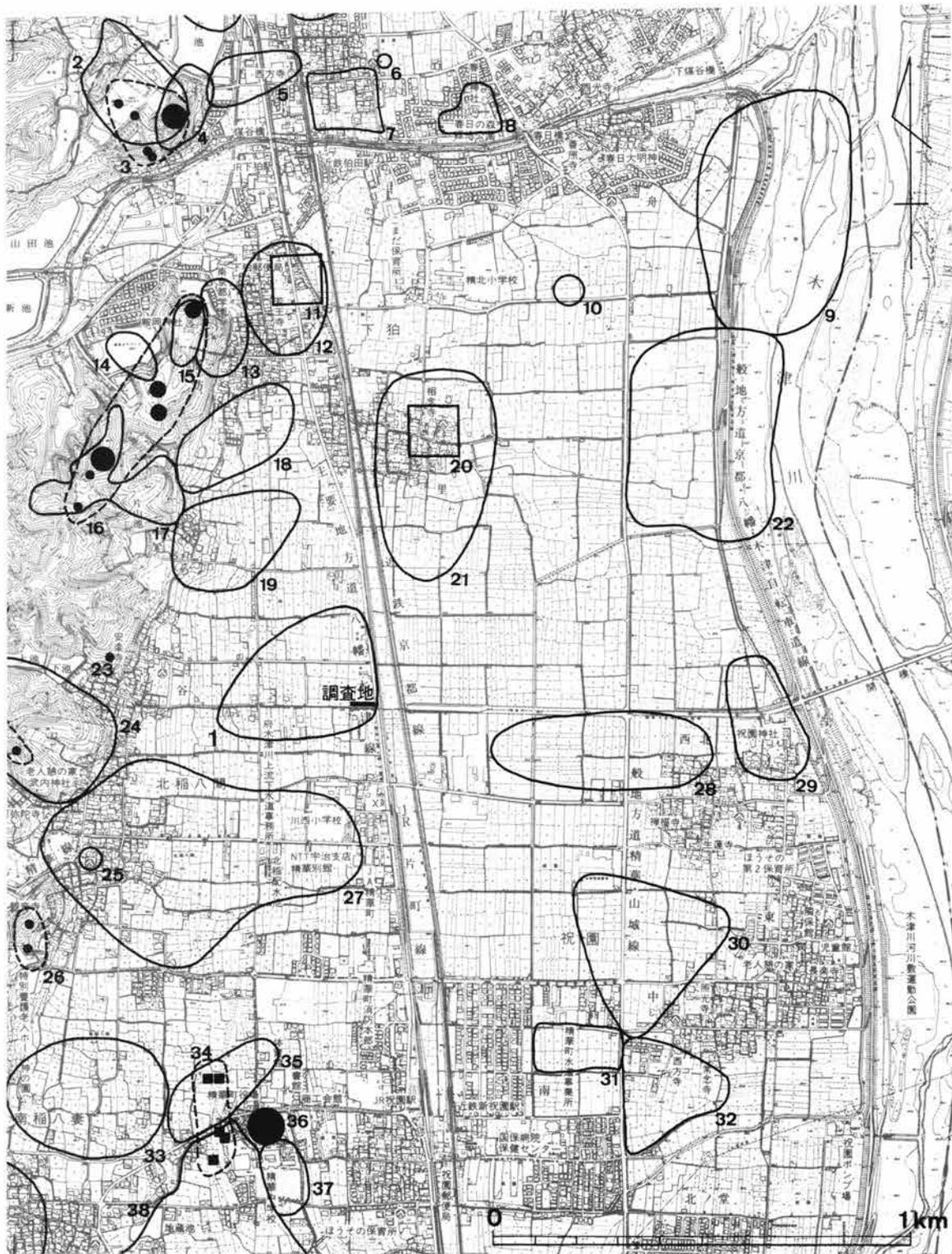
今回の調査は主要地方道枚方山城線緊急整備事業に伴う事前調査で、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。柿添遺跡は古墳時代および中世の集落跡で、相楽郡精華町北稲八間柿添に所在する。調査地は、山手幹線と開橋を結ぶ東西道路の計画地内にあたり、当調査研究センターでは、平成6年から8年にかけて3回の調査を行っている<sup>(注1)</sup>。今回の調査は第4次調査となる。これまでの調査では、古墳時代前期から中期にかけての集落の一部と中世の耕作に伴う溝が確認されている。特に、第2次調査で検出した古墳時代の竪穴式住居跡から、琥珀製の棗玉が出土したことから祭祀関連または工房の可能性が指摘されており、集落の性格について興味深い見解がなされている。現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、同調査員伊賀高弘・松尾史子が担当した。本概要報告は松尾が執筆し、写真は伊賀が撮影した。調査期間は平成12年1月6日から同2月28日で、調査面積は約600㎡である。調査にあたっては、京都府木津土木事務所・精華町教育委員会などの関係各機関および作業員・学生諸氏の協力を得た。記して感謝したい<sup>(注2)</sup>。なお、調査に係る費用は京都府土木建築部が全額負担した。

### 2. 調査概要(第89・90図)

調査地は木津川西岸に広がる沖積地に形成された扇状地上に位置し、標高は海拔約28mである。地形は東に向かって低くなっていく。周辺の遺跡には古墳時代前期・飛鳥時代・中世(12世紀中葉～13世紀前半)の集落である北稲遺跡<sup>(注3)</sup>、古墳時代前期の礫敷遺構が検出された北尻遺跡<sup>(注4)</sup>、古墳時代前期の方墳が新たに確認された北尻古墳群<sup>(注5)</sup>、古墳時代後期の竪穴式住居跡や大壁住居・区画溝を伴う掘立柱建物跡群が検出され、遺物などから渡来系集落と推定されている森垣外遺跡<sup>(注6)</sup>などがある。また、調査地の東側を南北に走る府道木津八幡線は古代山陽・山陰道の推定ルートにあっており<sup>(注7)</sup>、北約600mには里廃寺、さらに北には下狛廃寺がある。

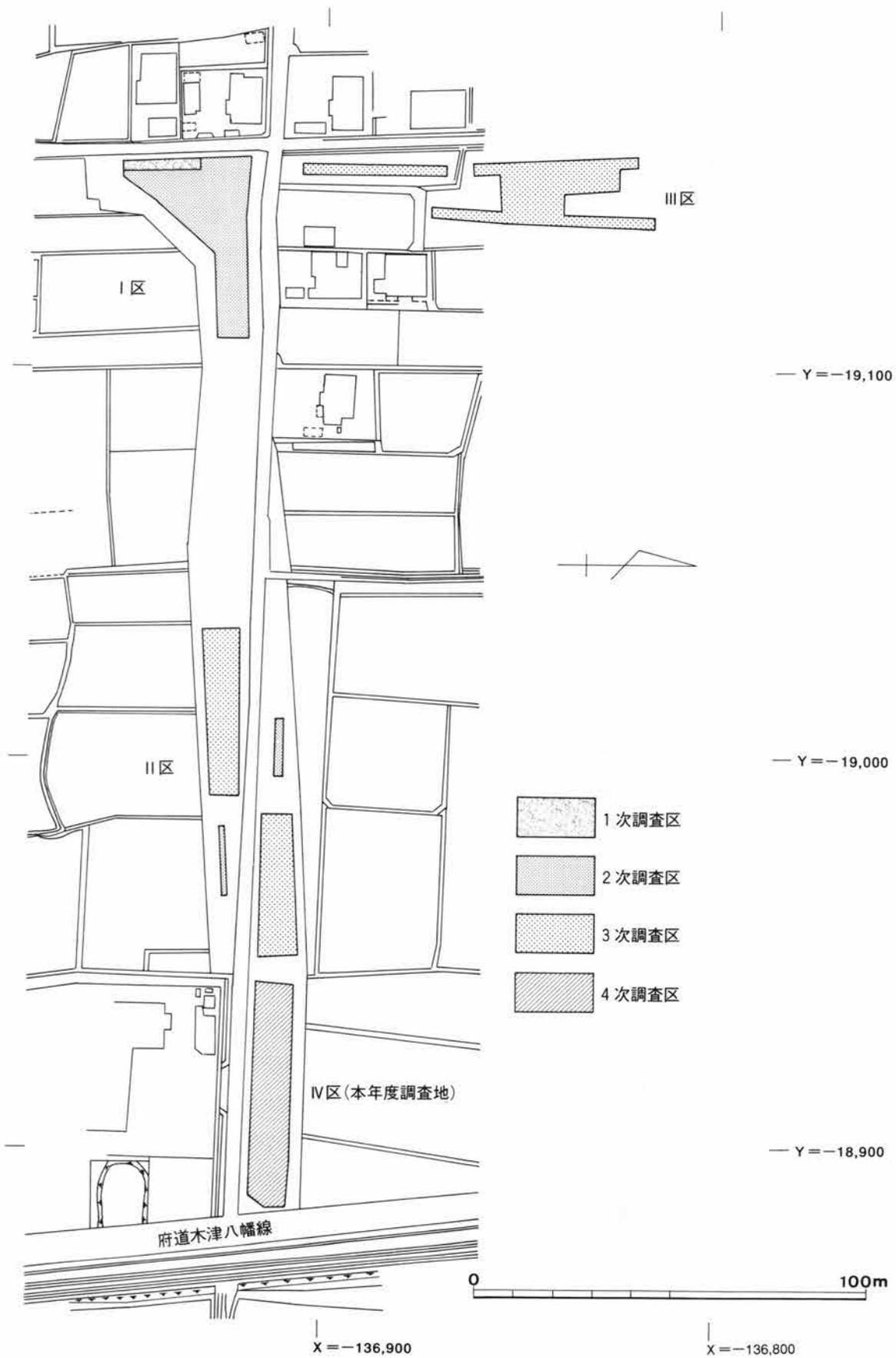
柿添遺跡は、遺物散布地であったが、先に述べたようにこれまで3次にわたって調査が行われ、古墳時代前期および中世の集落跡であることが明らかになった。第2次調査では竪穴式住居跡や溝・土坑が、第3次調査では土坑1基が検出されている。東にいくにしたがって遺構の密度は低くなっており、遺跡の中心はI区(第2次調査)の辺りにあると考えられる。また、調査地一帯は条理地割りがよく残っており、第2次調査で検出した水田の畦の方向とはほぼ重なっていることからこの地割りは13～14世紀に遡ると推定されている。

今回の調査地は、平成9年度調査区(Ⅱ区：北トレンチ)の東隣にあたり、調査前は水田であった。地区名は、過去の調査区の続きになるのでⅣ区と称することにした(第91図)。トレンチの規

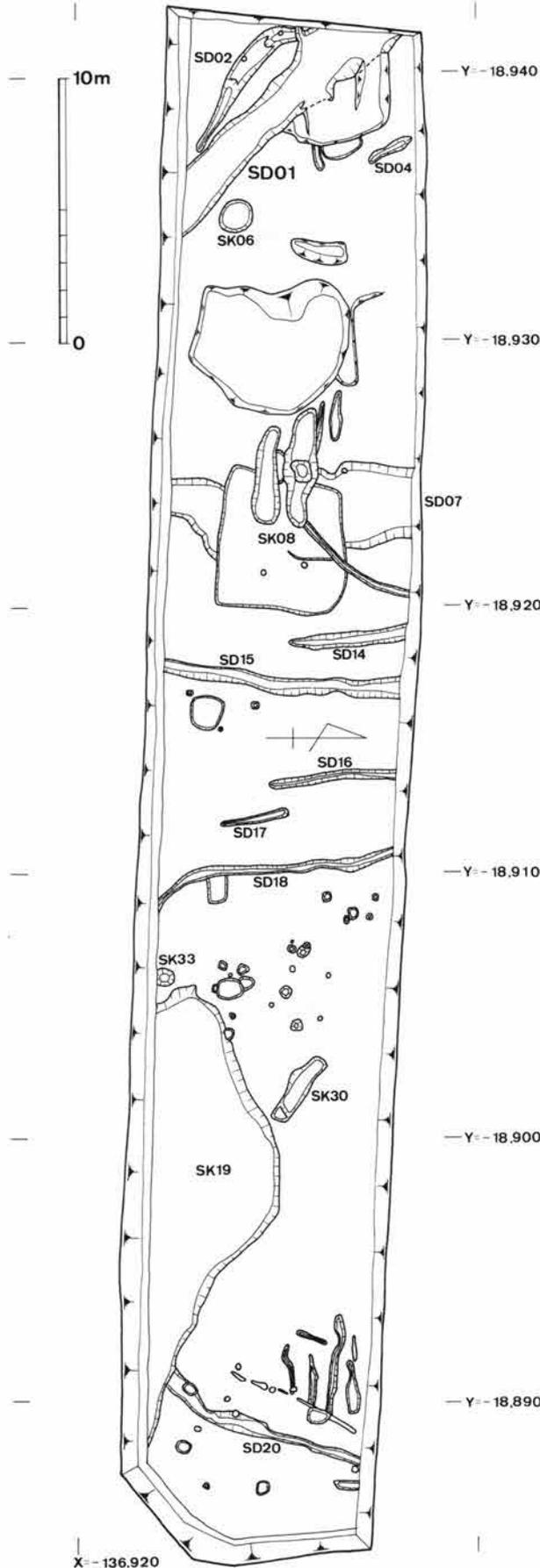


第89図 調査地位置図

- |           |            |            |            |            |           |
|-----------|------------|------------|------------|------------|-----------|
| 1. 柿添遺跡   | 2. 葉師山遺跡   | 3. 平谷古墳群   | 4. 葉師寺跡    | 5. 西ノ口遺跡   | 6. 長福寺遺跡  |
| 7. 前川原遺跡  | 8. 春日神社遺跡  | 9. 百久保地先遺跡 | 10. 石ヶ町遺跡  | 11. 下粕廃寺   | 12. 拝殿遺跡  |
| 13. 鞍岡山遺跡 | 14. 長芝遺跡   | 15. 鞍岡神社遺跡 | 16. 鞍岡山古墳群 | 17. 大福寺遺跡  | 18. 下馬遺跡  |
| 19. 片山遺跡  | 20. 里廃寺    | 21. 里遺跡    | 22. 棕ノ木遺跡  | 23. 石塚古墳   | 24. 城山遺跡  |
| 25. 観音寺跡  | 26. 国名平古墳群 | 27. 北稲遺跡   | 28. 西垣内遺跡  | 29. 祝園神社遺跡 | 30. 中垣内遺跡 |
| 31. 城ノ内遺跡 | 32. 古屋敷遺跡  | 32. 南稲遺跡   | 34. 北尻古墳群  | 35. 北尻遺跡   | 36. 丸山古墳  |
| 37. 祝園遺跡  | 38. 森垣外遺跡  |            |            |            |           |



第90図 トレンチ配置図 (S=1/1,500)



第91図 遺構平面図(S=1/250)

模は60m×10mである。

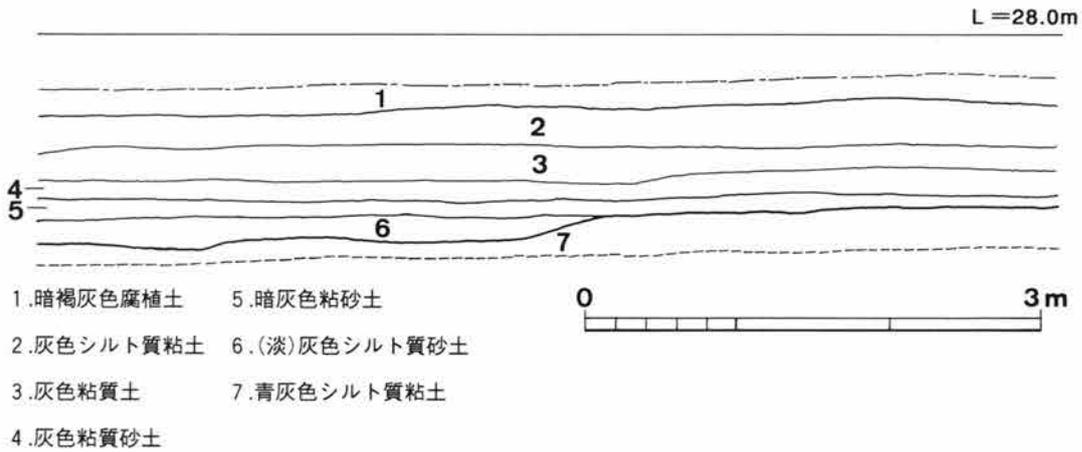
基本層序は、上から近現代の水田の耕作土(第1層)・中近世包含層(旧耕作土:第2~5層)・古代包含層(第6層)・地山(第7層)の順で、地山は青灰色~黄褐色シルト質粘土である。第5層の暗灰色粗砂土は第2・3次調査で古墳時代の包含層と認識されている層と同じ層である可能性も考えられたが、今回の調査では遺物が出土していないため時期の確定はできなかった。しかし、トレンチ東部において暗灰色粗砂土直下で遺構検出を行ったところ、古墳時代から中世の遺物を含む溝やピットが確認できたので、少なくともそれ以降であることは確実である。地形は全体に東に向かって低くなり、トレンチ東部では暗灰色粗砂土と地山の間の淡灰色シルト質砂(第6層)が厚く堆積していた。遺構は淡灰色シルト質砂および地山の上面で検出した。

(1)検出遺構

今回検出した遺構には溝やピット群・土坑・落ち込みなどがある。以下、主な遺構について説明していきたい。

SD01(第93図) トレンチ西端で確認した溝で、北西から南東にむかって流れる。幅約1.5m・長さ約11.5m分を検出した。深さは約0.3mで、断面は浅い「U」字形である。埋土は、灰色粗砂および淡褐色シルト質土で短期間に埋まっている。灰色粗砂から土師器の小型丸底壺(第93図2)と複合口縁壺の口縁部片(第93図1)が出土した。いずれも摩滅が激しく、調整等は不明である。これらから、この溝は古墳時代前期のある段階に埋没したと考えられる。

SK08 トレンチ中央で確認した一辺約

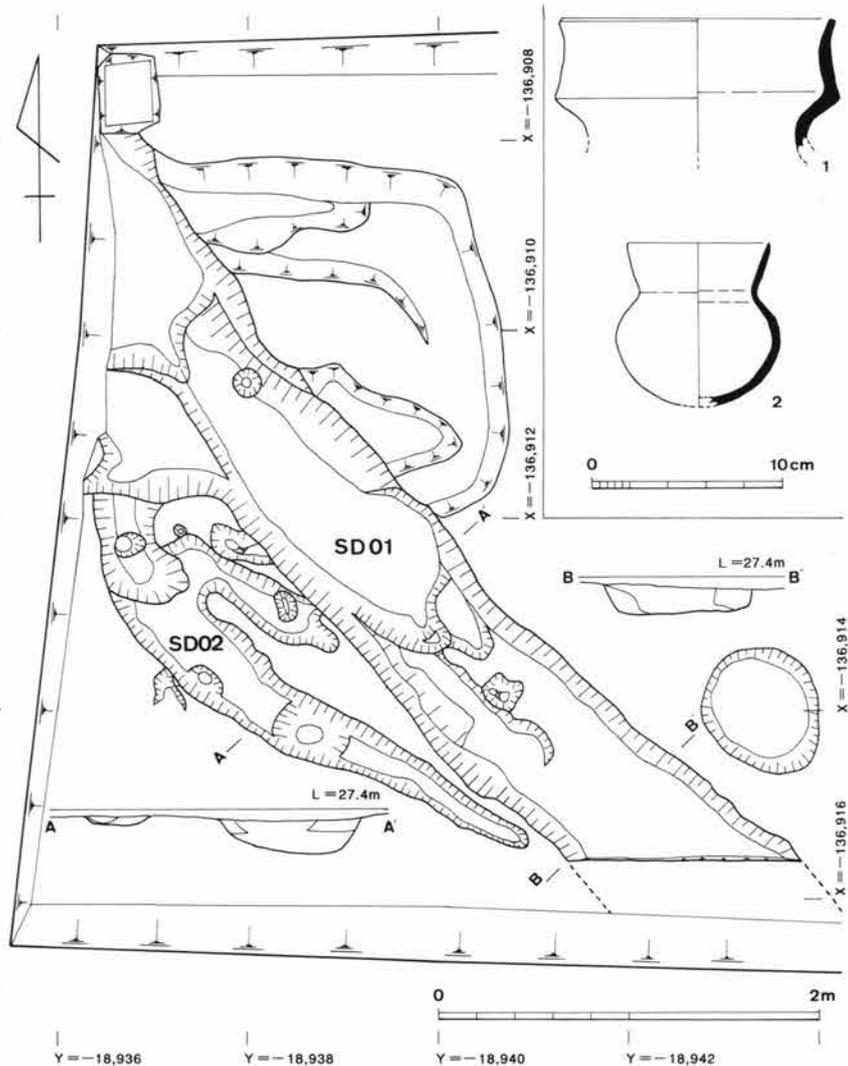


第92図 トレンチ南壁断面図(S=1/50)

5 m・深さ約10cmの  
 方形の土坑である。  
 支柱穴や周壁溝が無  
 いことから竪穴式住  
 居跡とは考えにくい。  
 出土遺物は伴わな  
 かった。

SK19 トレンチ  
 東部南側で検出した  
 落ち込み状遺構であ  
 る。埋土は上から順  
 に暗灰色粗砂質土・  
 灰色粗砂・淡青灰色  
 シルトがほぼ水平に  
 堆積しており、最上  
 層で古墳時代前期か  
 ら後期の土師器や須  
 恵器などが出土した。

その他 トレンチ  
 中央に南北方向の溝  
 が数条あるが、これ  
 らは方向が周辺の条



第93図 S D01付近実測図(S=1/80)および出土遺物実測図(S=1/4)

理地割と一致することや層位から中世以降の耕作に伴う溝と考えられる。

ピット群については建物や柵としてまとまるものはない。時期は出土遺物から古墳時代以降および中世のものと考えられる。

## (2) 出土遺物

遺物には土師器・須恵器・青磁・白磁・国産陶器・瓦器・瓦質播鉢・瓦などがあり、遺物整理箱で1箱分出土した。遺構に伴う遺物はきわめて少なく、S D01・S K19とピットのいくつかから古墳時代の遺物が出土したほか、南北方向の溝々から中世の遺物が少量出土した程度である。また、いずれも小破片で、図化できるものはわずかだった。

## 3. ま と め

今回の調査では、古墳時代の溝および落ち込みと中世以降のピット群・耕作溝・土坑などを確認した。古墳時代の柿添遺跡に関しては、これまでの調査結果と併せて検討するとS D01より東側は遺構密度が低く、やはり集落の中心は西方の微高地にあると考えられる。S D01の性格については集落の東を限る溝になる可能性がある。ただし、ピット群の中には古墳時代の遺物のみ出土するものがあり、その時期により解釈が変わってくるが、現段階では調査の結果、遺跡の東端を確認したと考えておきたい。また、調査地の東端で古代山陽・山陰併用道の西側溝が検出されることが予想されたが、残念ながら今回の調査では確認できなかつた。<sup>(注8)</sup>

(松尾史子)

注1 伊賀高弘「北稻・柿添遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

有井広幸「柿添遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第72冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

引原茂治「柿添遺跡第3次」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

注2 現地調査および整理作業にあたっては以下の諸氏の協力を得た(五十音順・敬称略)

久田 亨・小牧健太郎・竹村弘美

注3 注1文献、北稻遺跡参照。

注4 伊賀高弘「北尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注5 森垣外遺跡第2・3次調査で3基の方墳が新規に発見された。精華町教育委員会の調査(平成10年度調査)でも1基以上確認されている。

注6 有井広幸「森垣外遺跡第1次」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

小池 寛「森垣外遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第86冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注7 足利健亮『日本古代地理研究』 大明堂 1985

注8 現道は明治時代に西側に拡幅して整備されたらしく、西側溝は現道の下にある可能性がある。

## 9. 春日神社遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

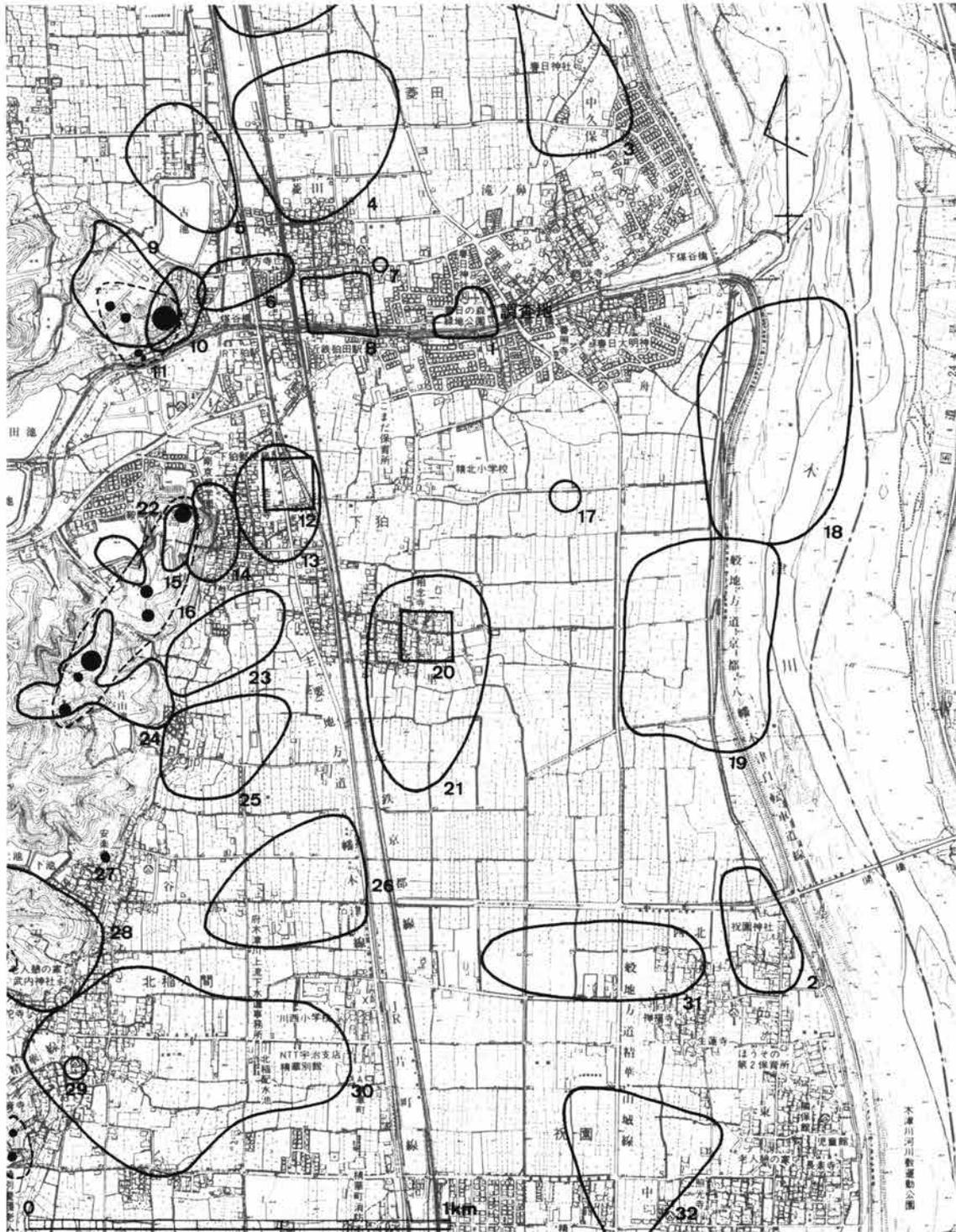
今回の調査は、一級河川煤谷川の河川整備促進事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。調査地は、相楽郡精華町大字菱田小字宮河原地内にあり、菱田の春日神社を中心に広がる春日神社遺跡の南辺部に位置する。春日神社遺跡は、精華町が刊行した遺跡地図に比較的新しく登録された中世を中心とする集落遺跡である。調査地は、現在の精華町(=相楽郡)の北端に所在する菱田の旧集落の南西約300mに位置し、現在の煤谷川の左岸(北岸)に面している。この煤谷川は、精華町の南西にある南稲八妻集落の西裏に谷頭を発して、北東方向に比較的長い河谷を形成して平野部に至り、これより下流は天井川を形成しつつ木津川本流に流下する。木津川沖積低地における流域の地形は、現河道をほぼ中心軸にして一定の幅をもつ自然堤防が木津川河口まで延びており、微高地をなす。この自然堤防の南北両側の一段低い地区には、土地区画の乱れから読み取れる旧河道を示す地帯が顕著に残り、それが条里地割りに影響を与えていることから、同地割り施行後の流路を示すものと考えられる。

現地調査は、この煤谷川の川幅を拡げ、周辺道路を整備する事業に先立ち、遺跡に重複する東西方向に狭長な地区が対象となり、当調査研究センターが主体となって、平成11年11月18日から12月16日まで実施した。調査総面積は約360㎡で、調査に係る経費は全額京都府土木建築部が負担した。調査担当者は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、同調査員伊賀高弘・松尾史子で、本概要報告は伊賀が執筆した。なお、京都府土木建築部、精華町教育委員会、京都府立山城郷土資料館などの関係諸機関からご協力、ご教示をいただいた。また、現地作業には作業員・補助員・整理員のご協力があった。感謝の意を表したい。

### 2. 調査の概要

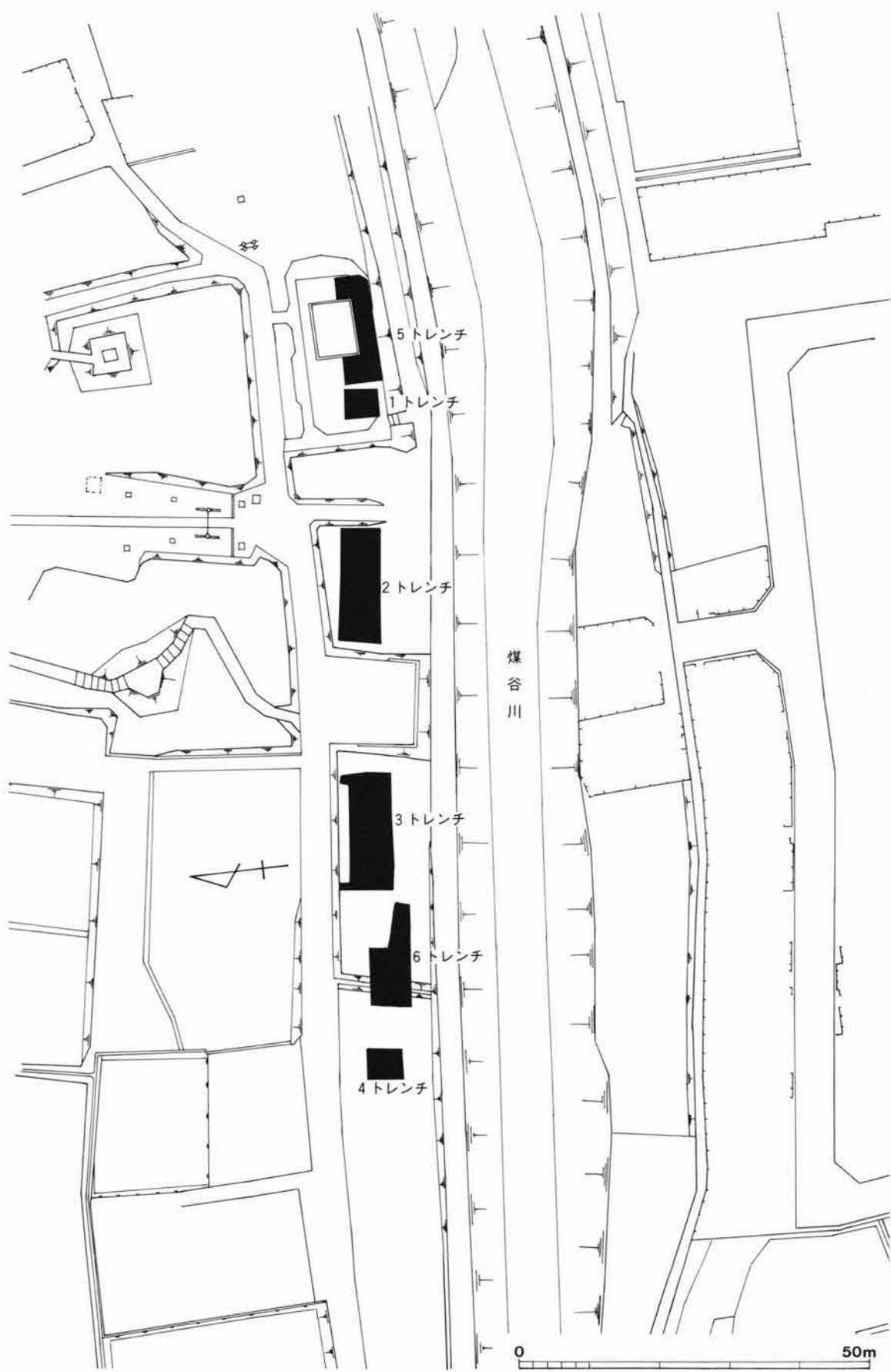
調査の対象地は、煤谷川左岸堤防を含む一帯であるが、この北岸地帯は堤防頂からゆるやかに北方に向けて勾配しているに過ぎず、南岸に比べて周辺地までに比高差は小さい。調査前の現況は雑木林ないし竹藪であった。調査はこの地区に6か所のトレンチを配して行った。

その結果、すべての調査区で厚い砂の堆積が認められた。すなわち、黒灰色腐植土からなる現表土を除去すると、非常に崩落しやすい河川流水堆積を顕著に示す灰色～灰褐色系の粗砂層が少なくとも掘削深を越えて厚く堆積しており、現地表面から3m弱掘り込んだ層位で湧水が激しく、これより下位の土層を追跡できなかった。湧水面は西端の4トレンチで標高29.3m、東端の5トレンチで28.0mを測り、東に向かって緩く傾斜している。2・5・6トレンチでは、この砂層の間層として黄褐灰色系のやや硬質な粘性土の堆積層が認められたが、その上面は安定した生活面

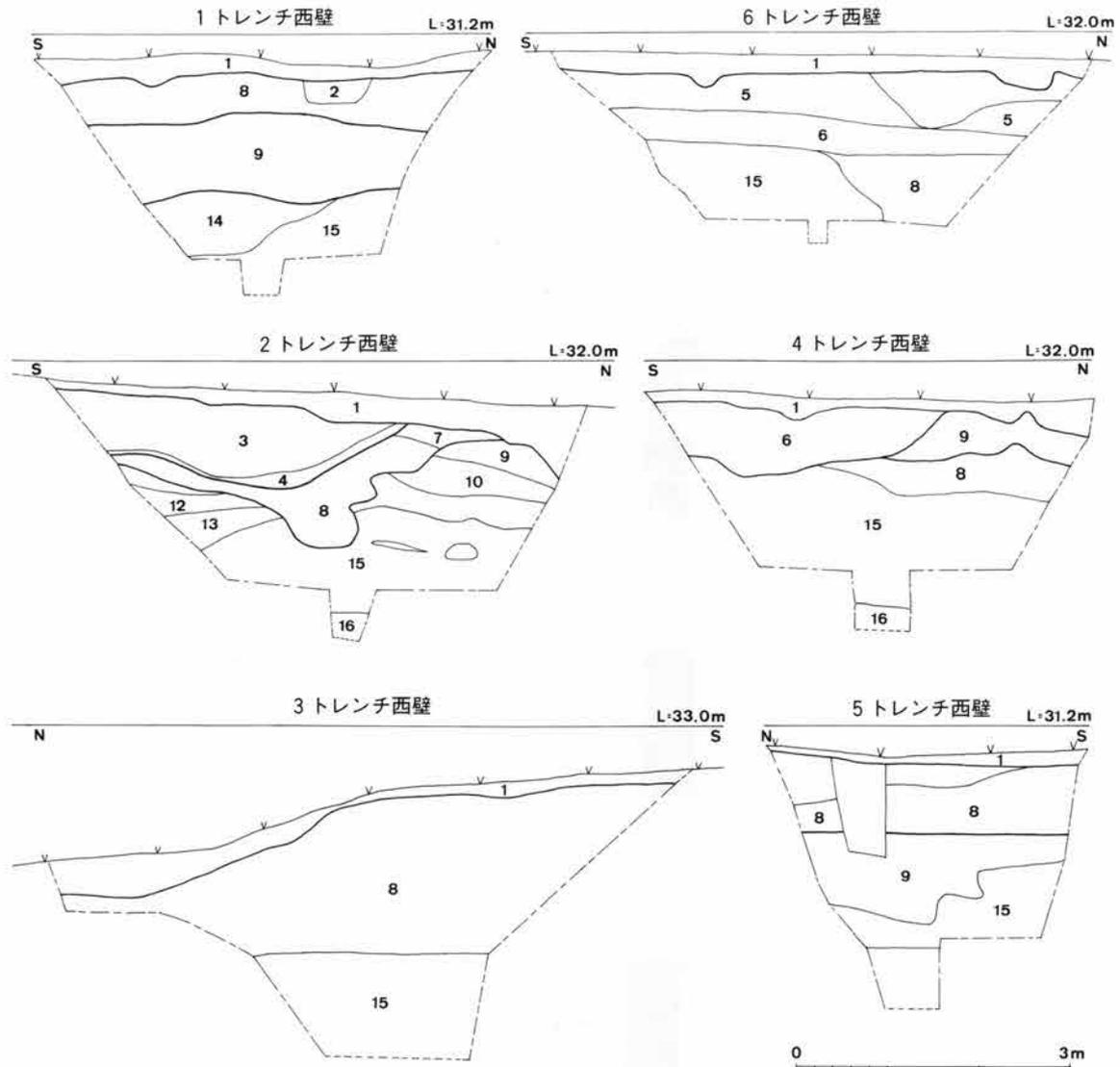


第94図 調査地位置図 (S=1/15,000)

- |             |           |            |            |           |           |
|-------------|-----------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 春日神社遺跡   | 2. 祝園神社遺跡 | 3. 元屋敷遺跡   | 4. 山路遺跡    | 5. 宮の口遺跡  | 6. 西ノ口遺跡  |
| 7. 長福寺遺跡    | 8. 前川原遺跡  | 9. 薬師原遺跡   | 10. 薬師寺跡   | 11. 下谷古墳群 | 12. 下狛廃寺  |
| 13. 拝殿遺跡    | 14. 鞍岡山遺跡 | 15. 鞍岡神社遺跡 | 16. 鞍岡山古墳群 | 17. 石ヶ町遺跡 |           |
| 18. 百久保地先遺跡 | 19. 椋ノ木遺跡 | 20. 里廃寺    | 21. 里遺跡    | 22. 長芝遺跡  | 23. 下馬遺跡  |
| 24. 大福寺遺跡   | 25. 片山遺跡  | 26. 柿添遺跡   | 27. 石塚古墳   | 28. 城山遺跡  | 29. 観音寺遺跡 |
| 30. 北稻遺跡    | 31. 西垣内遺跡 | 32. 中垣内遺跡  |            |           |           |



第95図 トレンチ配置図



第96図 土層断面図 (S=1/80)

- |                     |                    |                             |                      |
|---------------------|--------------------|-----------------------------|----------------------|
| 1. 黒灰色腐植土(表土)       | 2. 炭層              | 3. 黄茶褐色粘砂                   | 4. 黒灰色砂質土(腐植土)       |
| 5. 淡黄褐色砂土           | 6. 淡褐色灰色粗砂         | 7. 淡黄灰色粘砂                   | 8. 灰色粗砂(黄灰色粘砂混)      |
| 9. 淡黄褐色灰色粘質細砂(やや硬質) | 10. 黄褐色灰色シルト質砂土    | 11. 淡灰白色(硬質)細砂              | 12. 灰白色粗砂~黄茶色粗砂      |
| 13. 淡青灰色硬質細砂        | 14. 淡褐色灰色砂(灰白色粗砂混) | 15. 淡灰褐色粗砂(灰白色粗砂・灰色シルト質細砂混) | 16. 淡青灰色シルト質砂(湧水激しい) |
| 17. 淡灰色砂(やや硬質)      |                    |                             |                      |

としては機能せず、上面で遺構検出を試みたものの、何ら遺構は検出されなかった。

### 3. 小 結

今回の調査では、対象地の全域にわたって、煤谷川の洪水砂の厚い堆積が認められ、顕著な遺構遺物は検出されなかった。そして確認された砂の堆積は混入遺物から江戸時代以降の洪水によってもたらされたことが推測される。

(伊賀高弘)

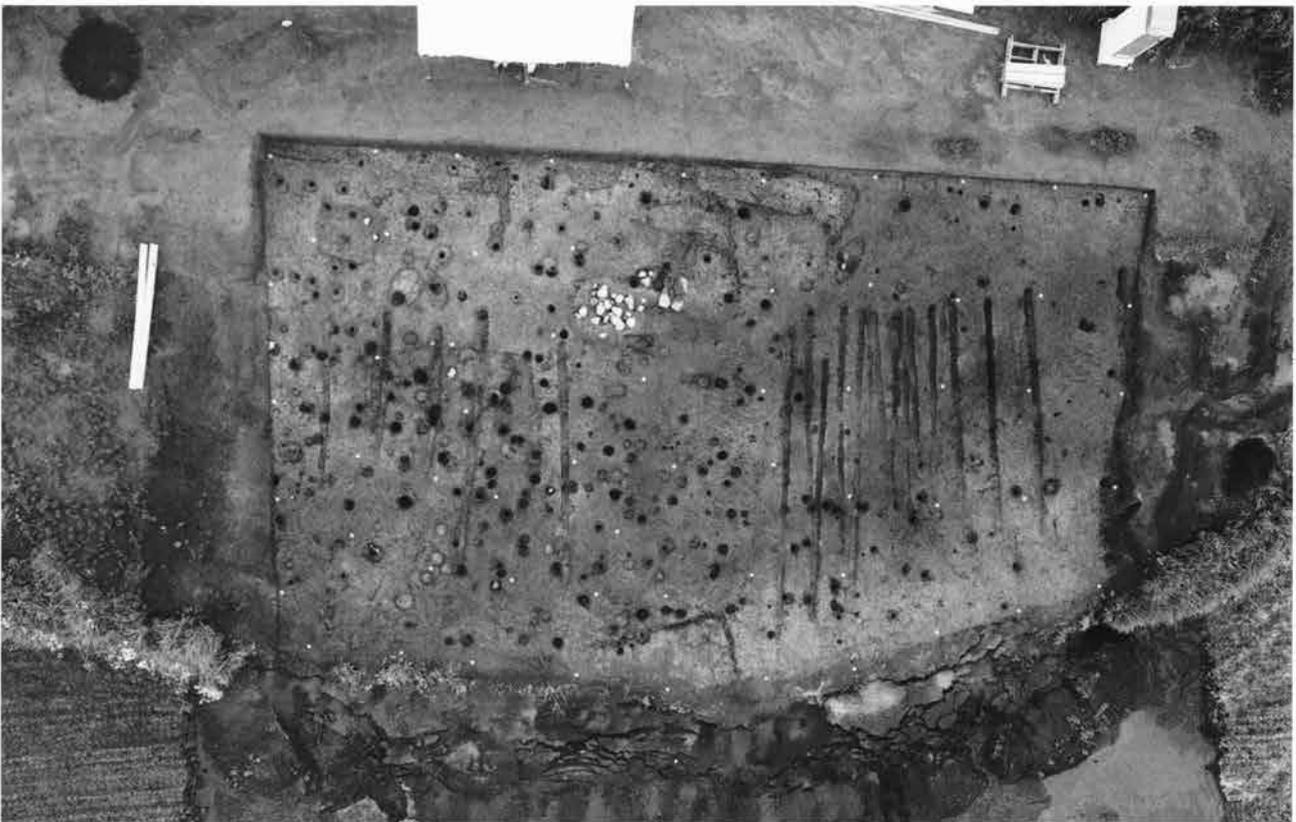
調査参加者(五十音順・敬称略) 久田 亨・小牧健太郎・寺尾貴美子

圖 版

図版第1 五十河遺跡



(1)調査前遠景(北西から)



(2)A地区全景(空撮・左が北)

図版第2 五十河遺跡



(1)溝 S D01 (南から)



(2)土坑 S K02 (南から)



(1)土坑S K07 (東から)

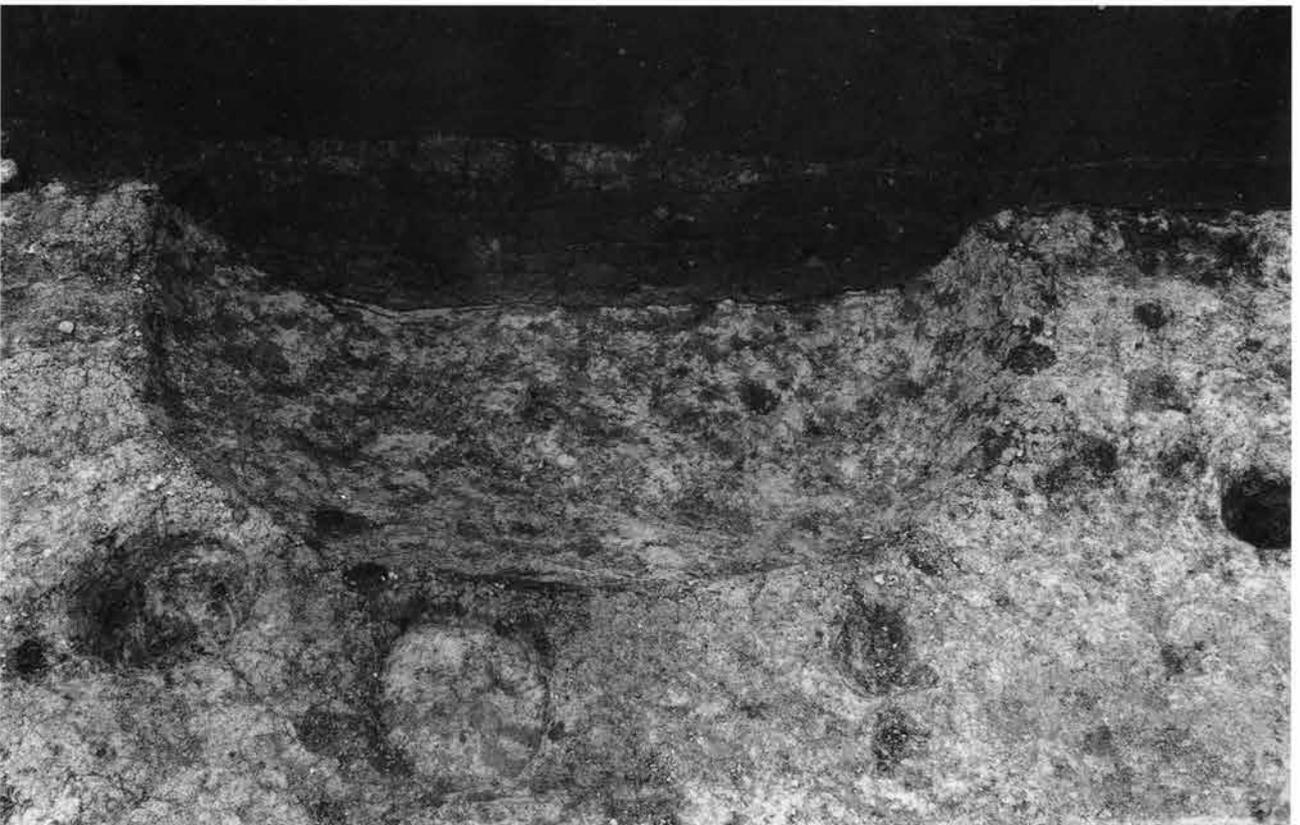


(2)集石除去後の土坑S K07 (東から)

図版第4 五十河遺跡



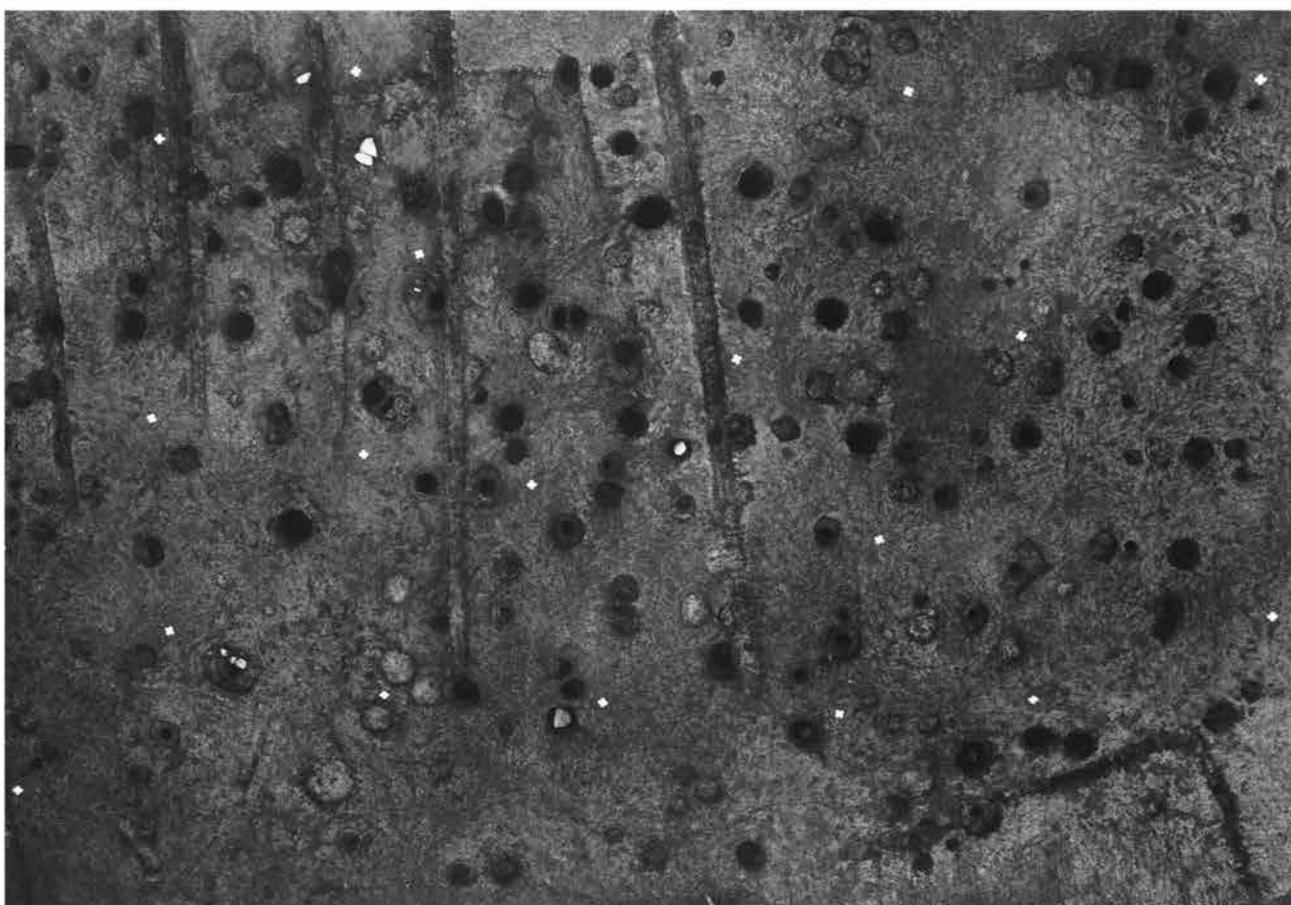
(1)土坑S K08 (北から)



(2)土坑S K09 (西から)



(1)土坑S K14 (南から)



(2)竪穴式住居跡S H10・11 (空撮・左が北)



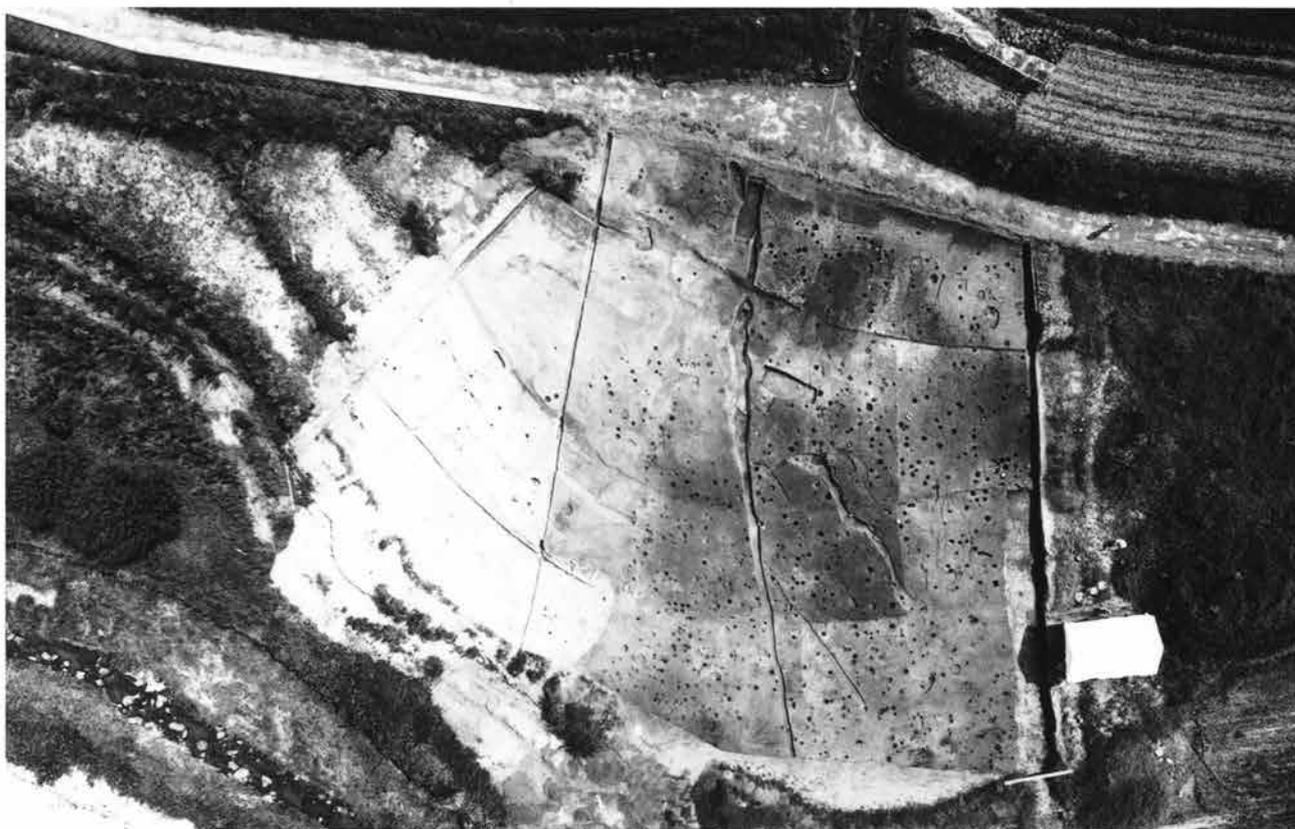
(1) 竪穴式住居跡 S H10 (北から)



(2) 竪穴式住居跡 S H11 (東から)



(1) B地区調査前全景（北から）



(2) 調査地全景（空撮・左が北）



(1)溝S D21遺物出土状況(南から)

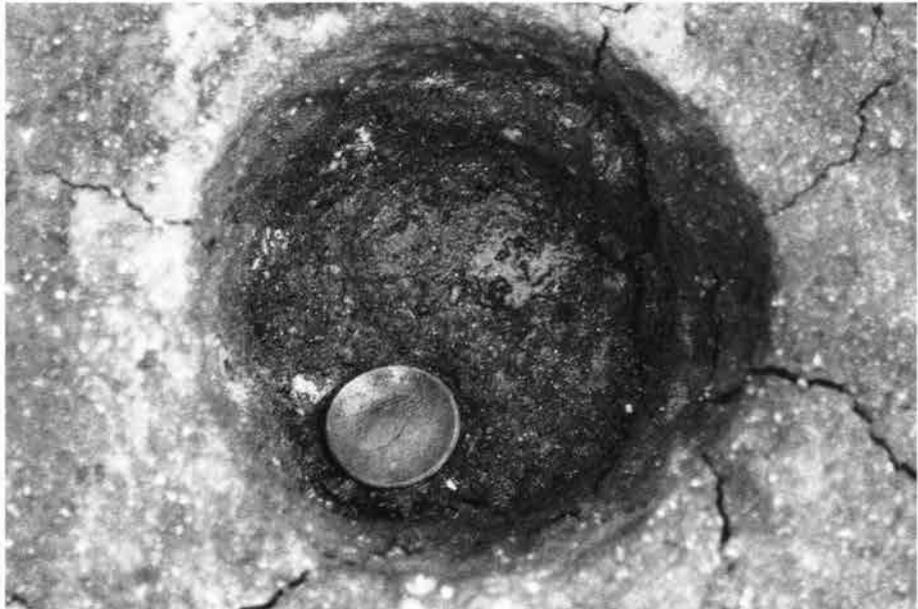


(2)溝S D21遺物出土状況(南から)

(1)溝S D22遺物出土状況(東から)



(2)ピットP A104遺物出土状況  
(東から)



(3)ピットP A256遺物出土状況  
(東から)





37



36



53



35



55



45



41



62



63



17



16



3



11



13



7



31



30



64



65



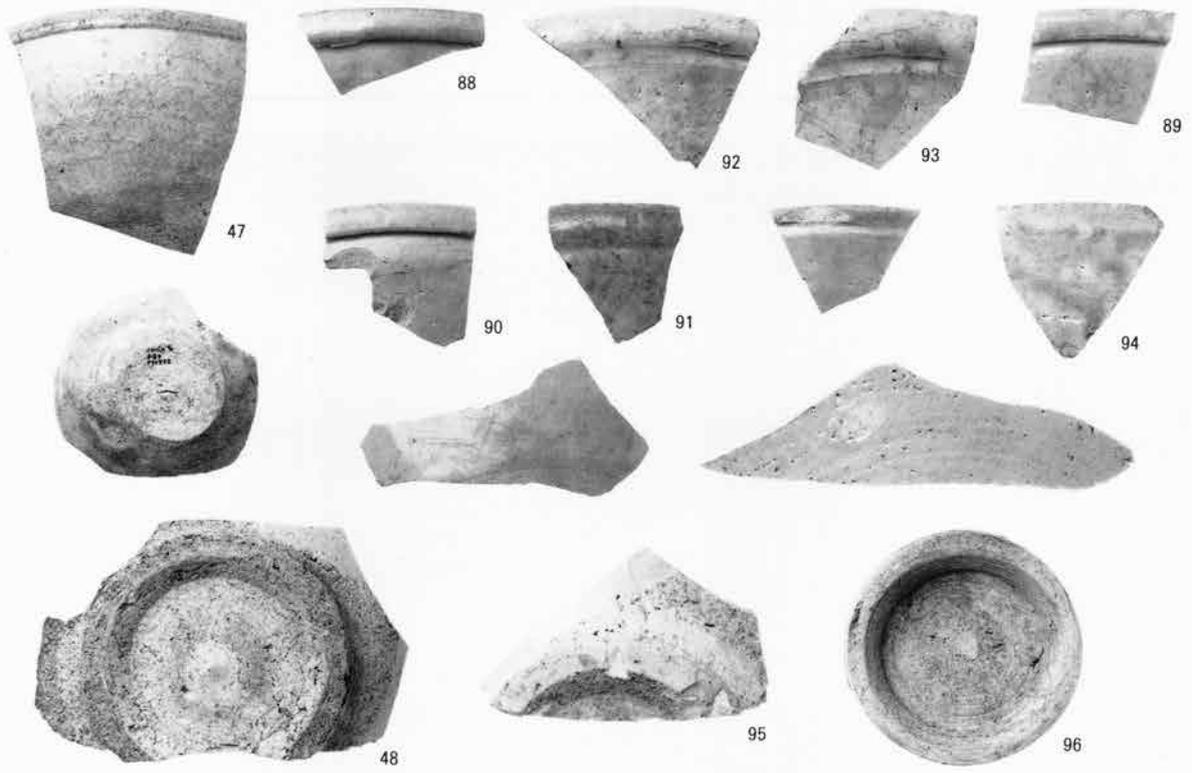
24



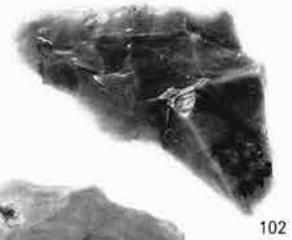
66

67

図版第12 五十河遺跡



(1)出土遺物(3)



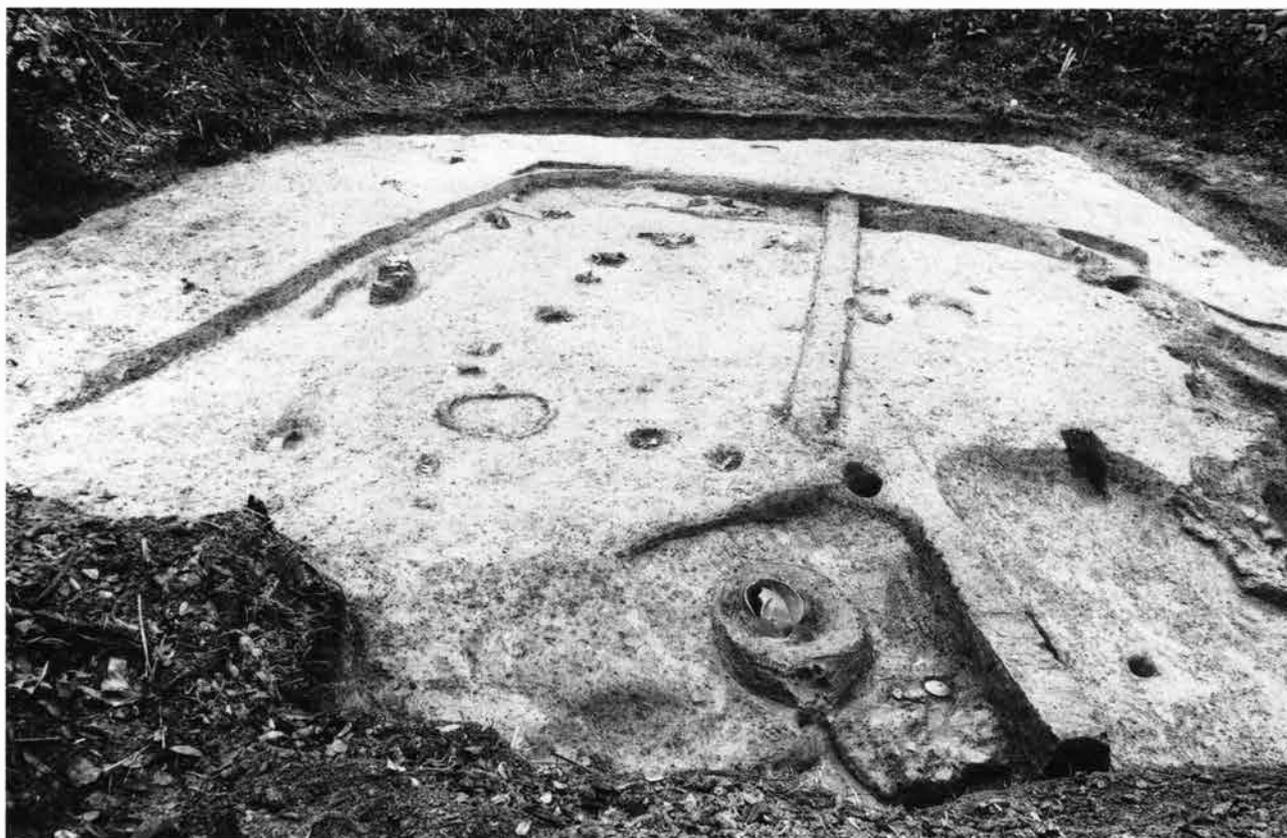
(2)出土遺物(4)



(1)調査前風景（A・Gトレンチ付近、北西から）



(2)調査前風景（F・Gトレンチ付近、南から）



(1) 竪穴式住居跡 (Gトレンチ、西から)



(2) 竪穴式住居跡内土器出土状況 (Gトレンチ)

図版第15 南稲葉遺跡



(1) 竪穴式住居跡・溝 (Gトレンチ、南西から)



(2) M・Nトレンチ掘削状況 (北西から)



(1)Hトレンチ遺構検出状況(南東から)



(2)Hトレンチ遺構断面(東から)



(1)第1トレンチ全景(北から)



(2)第2トレンチ全景(北から)



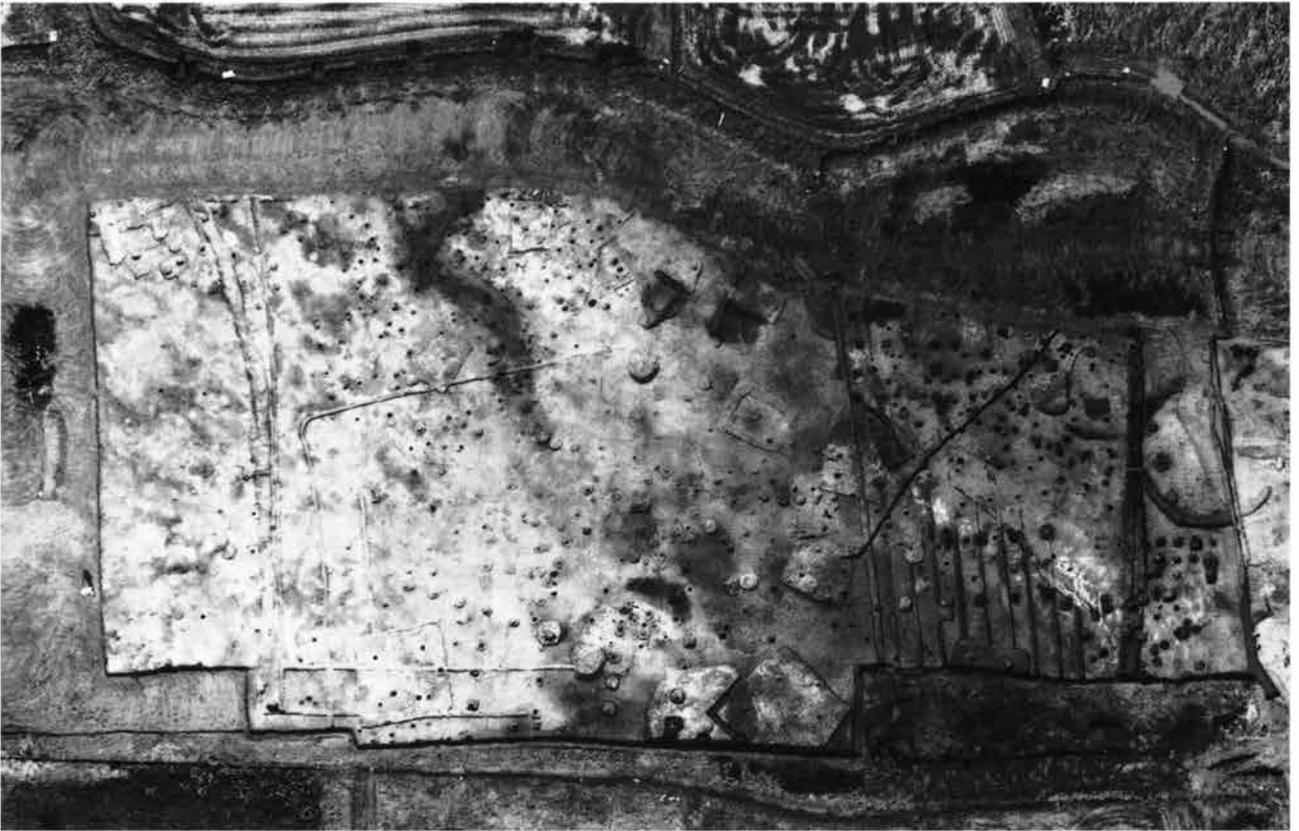
(1)第3トレンチ全景(西から)



(2)第3トレンチ検出遺構(北から)



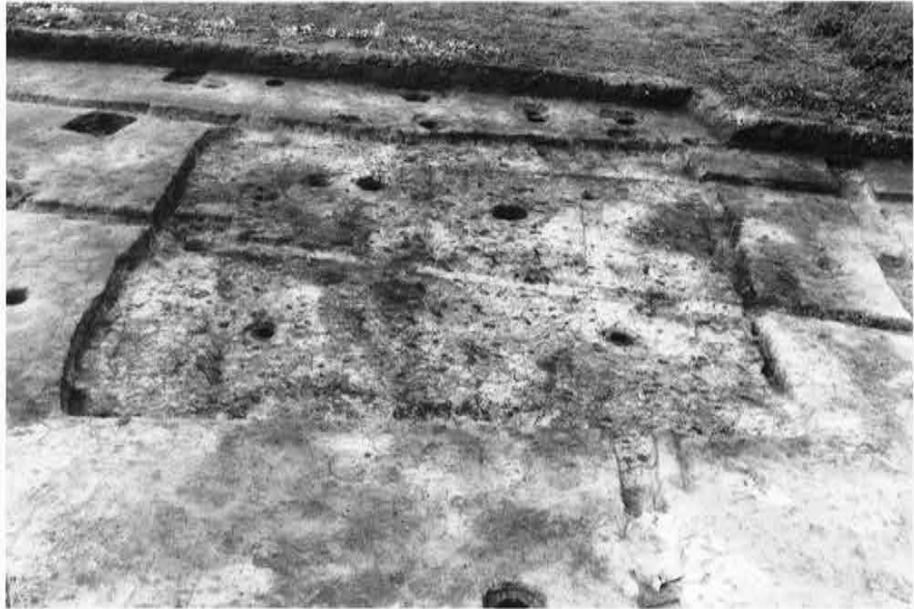
調査地全景（東上空から）



(1)調査地空中写真(南上方から)



(2)調査地空中写真(東上方から)



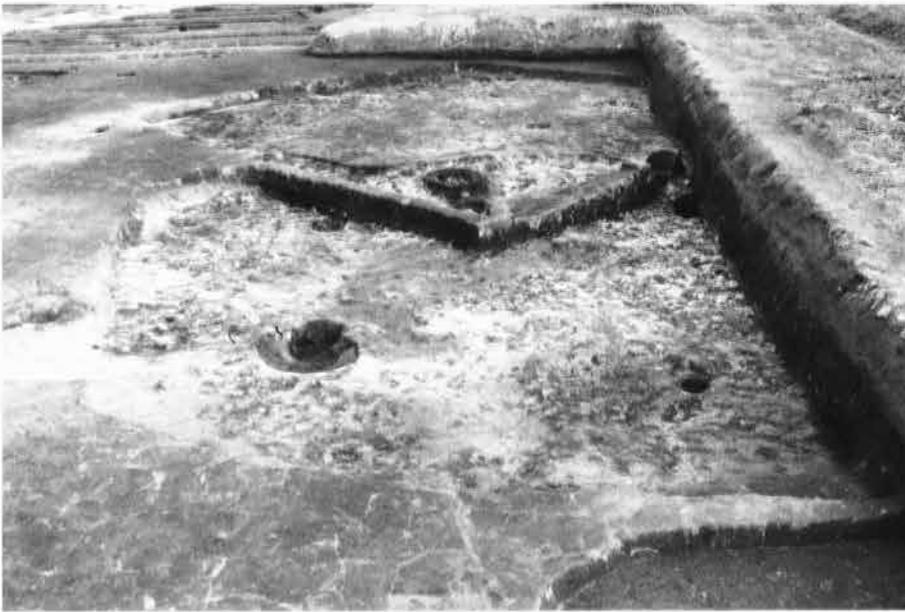
(1) S H01 近景 (北から)



(2) S H02・09 近景 (北から)



(3) S H03・04 近景 (南東から)



(1)SH11・12近景（西から）



(2)SH11遺物出土状況（北東から）



(3)SH11遺物出土状況（北西から）



(1)太田1・2号墳全景(北西から)



(2)太田1・2号墳S B37全景  
(南から)



(3)太田2号墳近景(西から)



(1)太田2号墳南側周溝内遺物出土状況(西から)



(2)太田2号墳南側周溝内遺物出土状況(北から)



(3)太田2号墳南側周溝内遺物出土状況(南から)



(1) S B 17 周辺全景 (北東から)



(2) S B 18 周辺全景 (東から)



(3) S H 02 ・ S B 23 全景



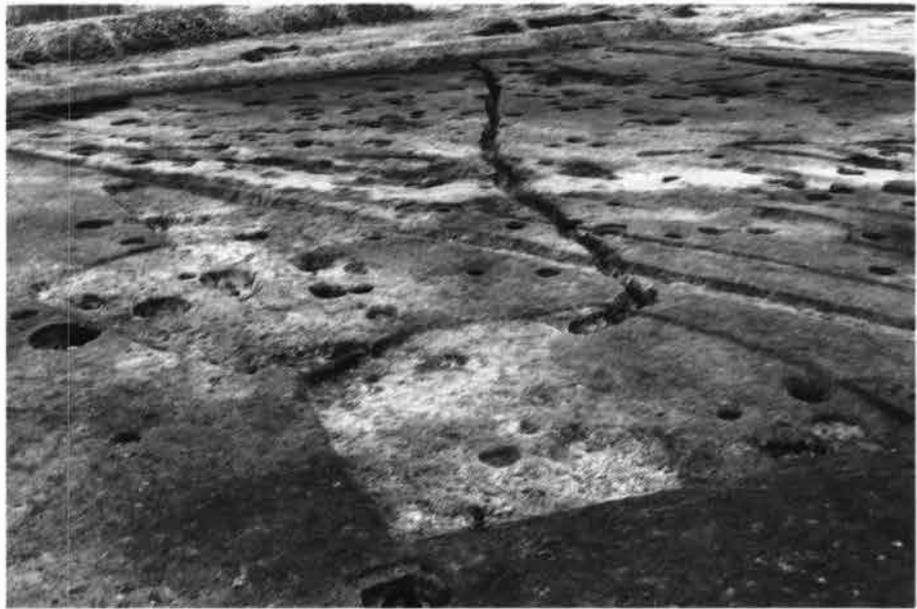
(1)S B38全景 (南から)



(2)S B34周辺全景 (北東から)



(3)S B32周辺全景 (西から)



(1) S H05~07、S D47全景



(2) S D46・47近景（北から）



(3) S D42・49周辺全景（南から）

図版第28 太田遺跡第10次



(1) S D 43周辺全景 (南から)



(2) S D 40全景 (南から)



(3) S D 41周辺全景 (北東から)



(1) S E 53近景 (南から)



(2) S E 54近景 (南から)



(3) S E 52近景 (北から)



10



6



7



18



8



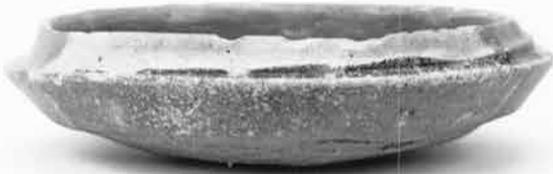
9



16



44



45



46



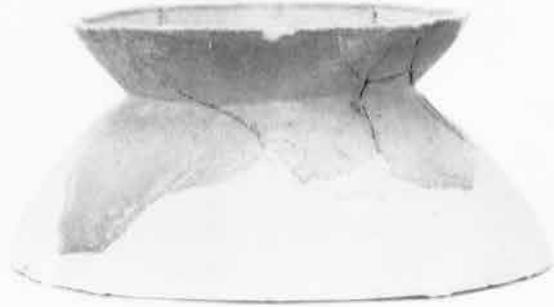
26



52



23



25



24



28



29



32



40



37



34



36



41



39



47



59



79



61



64



90



77



88

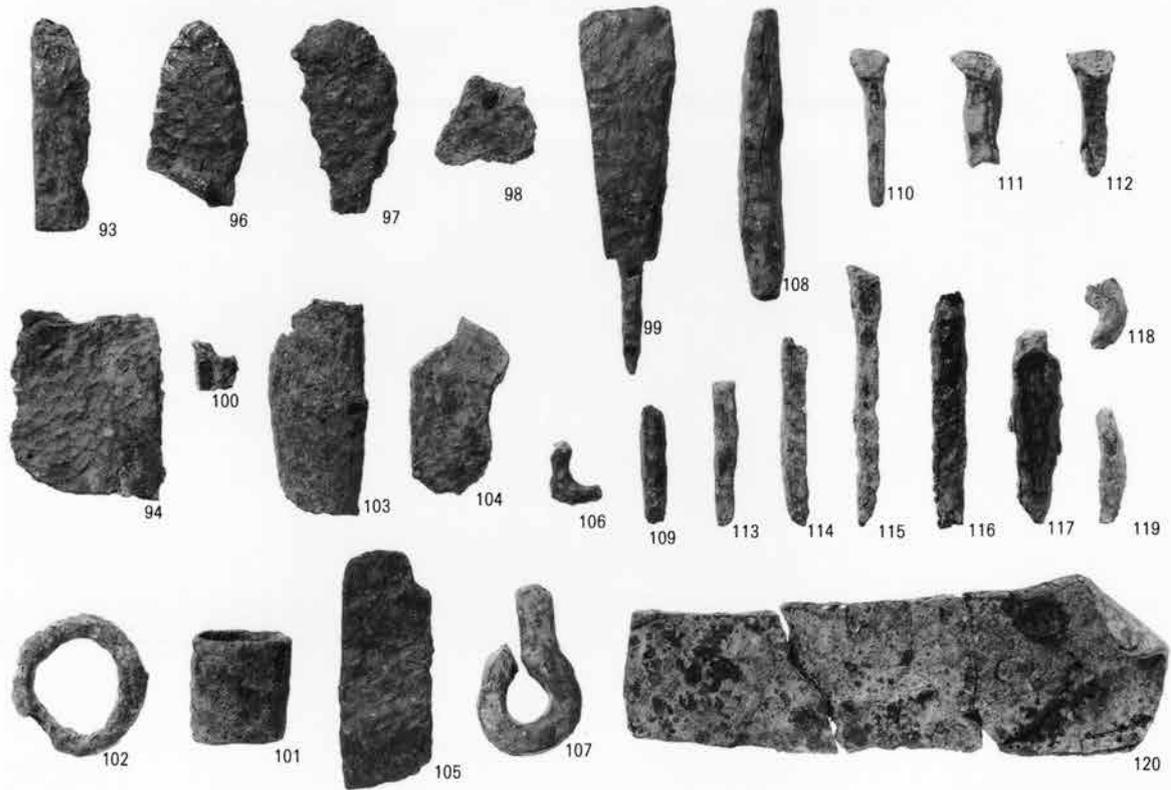


91

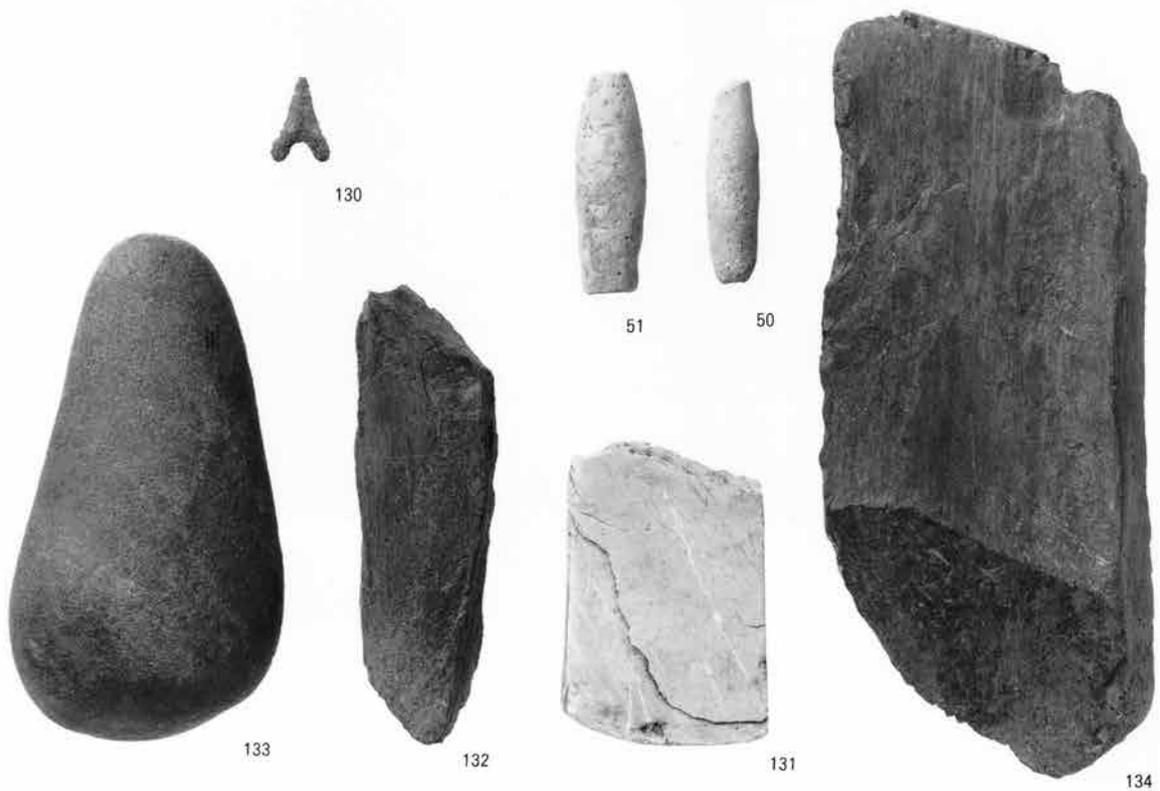


89

図版第34 太田遺跡第10次



(1)出土遺物(5)



(2)出土遺物(6)

(1)調査前風景（南から）



(2)調査前風景（東から）



(3)1トレンチ全景（南西から）





(1) 1 トレンチ北東部 (南東から)



(2) 1 トレンチ拡張部全景  
(南西から)



(3) 1 トレンチ拡張部断面  
(北西から)



(1) 2 トレンチ全景 (北東から)



(2) 2 トレンチ深掘り全景  
(南西から)



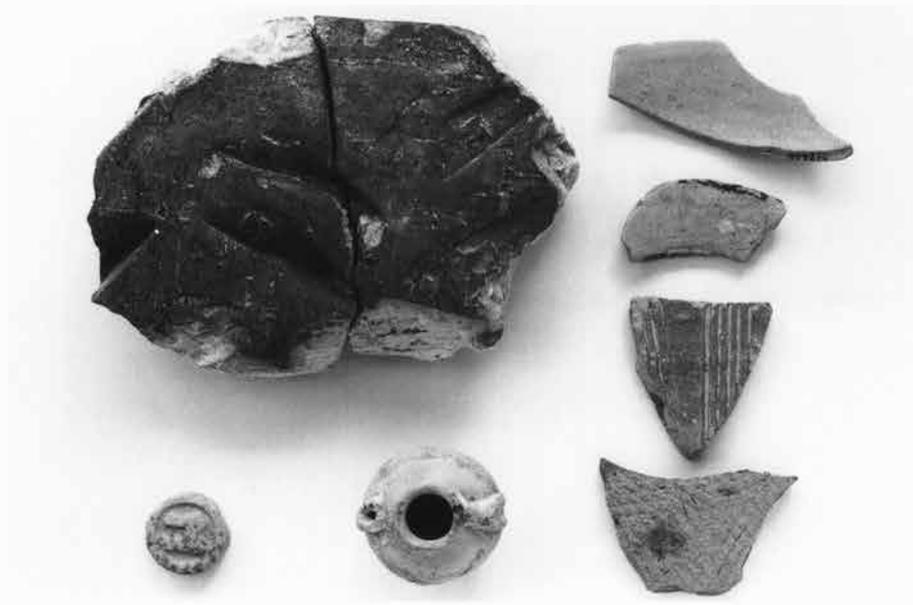
(3) 3 トレンチ全景 (南東から)



(1) 4 トレンチ全景 (南西から)



(2) 4 トレンチ拡張部全景  
(南東から)



(3) 出土遺物



(1)調査地遠景（北西から）



(2)調査地全景（上が北）



(1)調査地全景（東から）



(2)調査地全景・大溝S D27（西から）

図版第41 新田遺跡第5次

(1)調査前風景（西から）



(2)重機掘削風景（西から）



(3)調査作業風景（南東から）





(1)素掘り溝群、SD14・15・17  
(南から)



(2)素掘り溝群  
(トレンチ北西部分、東から)



(3)掘立柱建物跡1 (北から)

(1)掘立柱建物跡1 柱穴断面  
(北から)

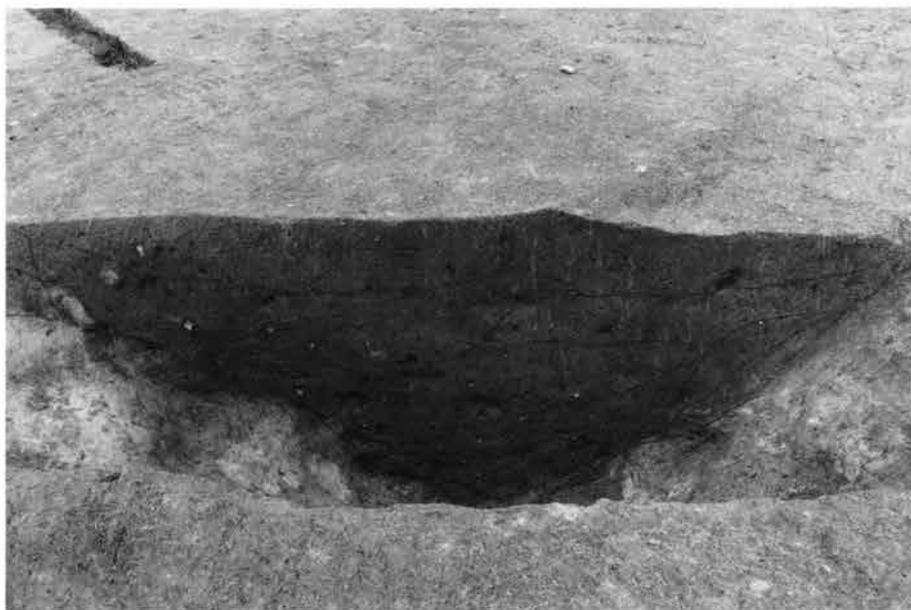


(2)掘立柱建物跡2・3 (南東から)



(3)掘立柱建物跡4 (南から)





(1)大溝S D 27断面(東から)



(2)大溝S D 27内(4・d区)  
土器出土状況(北西から)



(3)大溝S D 27内(2・c区)  
土器出土状況(垂直方向)

(1) 竪穴式住居跡 S H03 (上) ・  
竪穴式住居跡 S H02 (下)  
(南から)



(2) 竪穴式住居跡 S H03内土器出土  
状況 (南から)



(3) 竪穴式住居跡 S H03竈 (南から)





(1) 竪穴式住居跡 S H13 (北東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H13 竈  
(北東から)



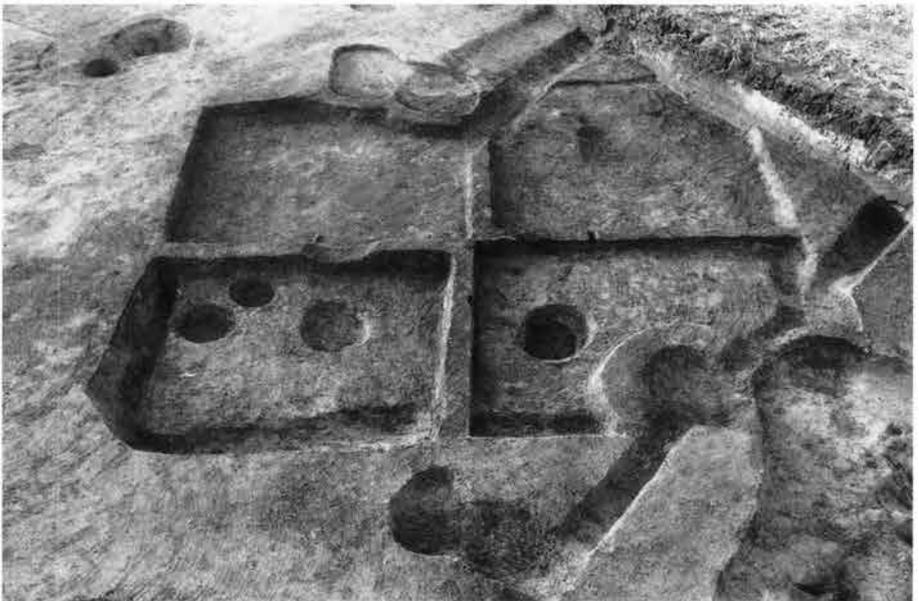
(3) 竪穴式住居跡 S H13 内鉄製品  
出土状況 (南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H39 (北東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H39 煙道部  
(北東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H50 (南東から)



(1) 堅穴式住居跡SH04 (北から)



(2) 堅穴式住居跡SH40 (南西から)



(3) 堅穴式住居跡SH41 (上) ・  
堅穴式住居跡SH52 (下)  
(南西から)

(1)調査地全景（西から）



(2)調査風景（北西から）



(3)トレンチ掘削状況（西から）





(1)第3トレンチ溝検出状況  
(西から)



(2)第3トレンチ溝完掘状況  
(西から)



(3)第4トレンチ断ち割り状況  
(南から)

図版第51 柿添遺跡第4次

(1)調査前風景 (西から)



(2)トレンチ内作業風景 (南東から)



(3)調査区全景 (西から)





(1) S D01横断面 (南東から)



(2) 調査区西半部検出状況 (東から)



(3) 調査区東半部検出状況 (西から)



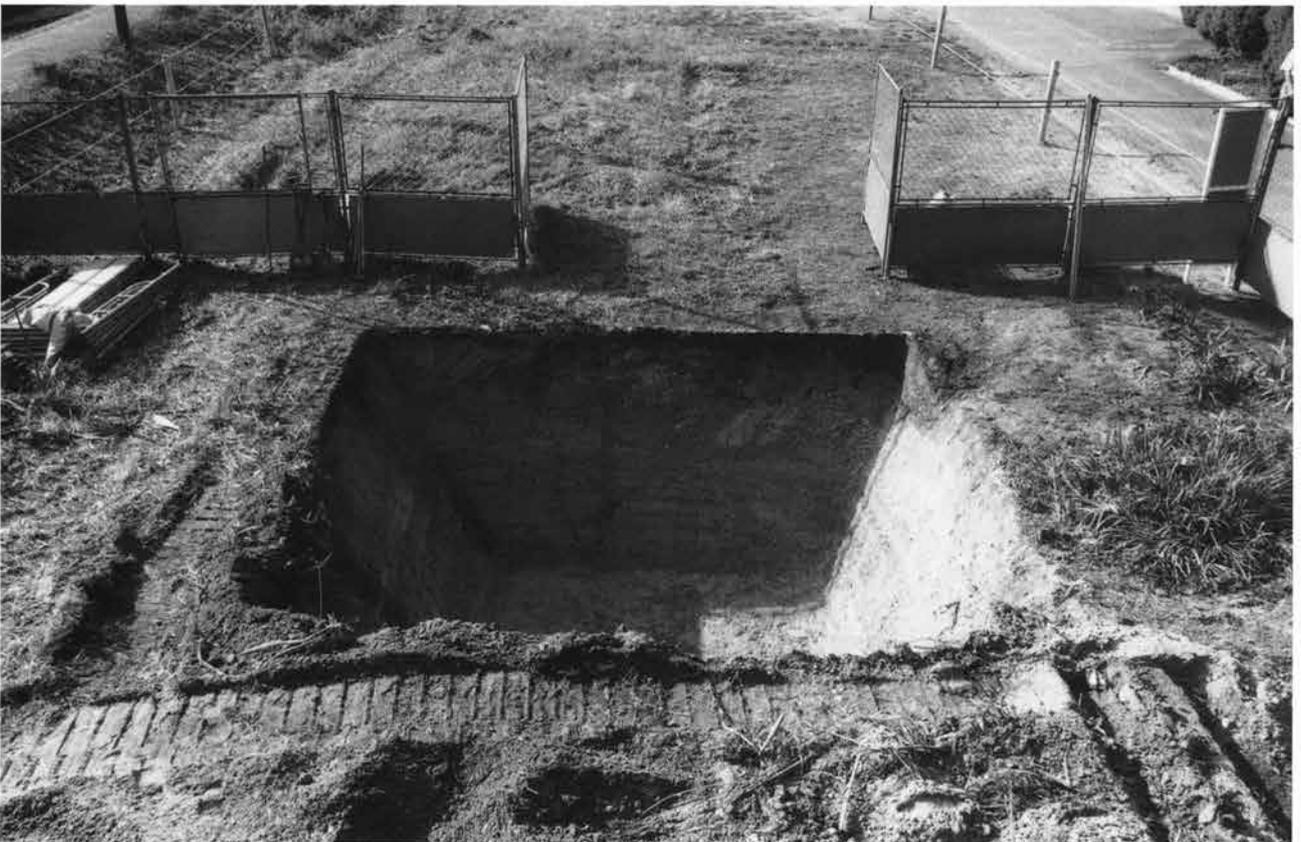
(1)調査前風景（3・6トレンチ部分、西南西から）



(2)作業風景（1トレンチ、西南西から）



(1) 1 トレンチ全景 (東から)



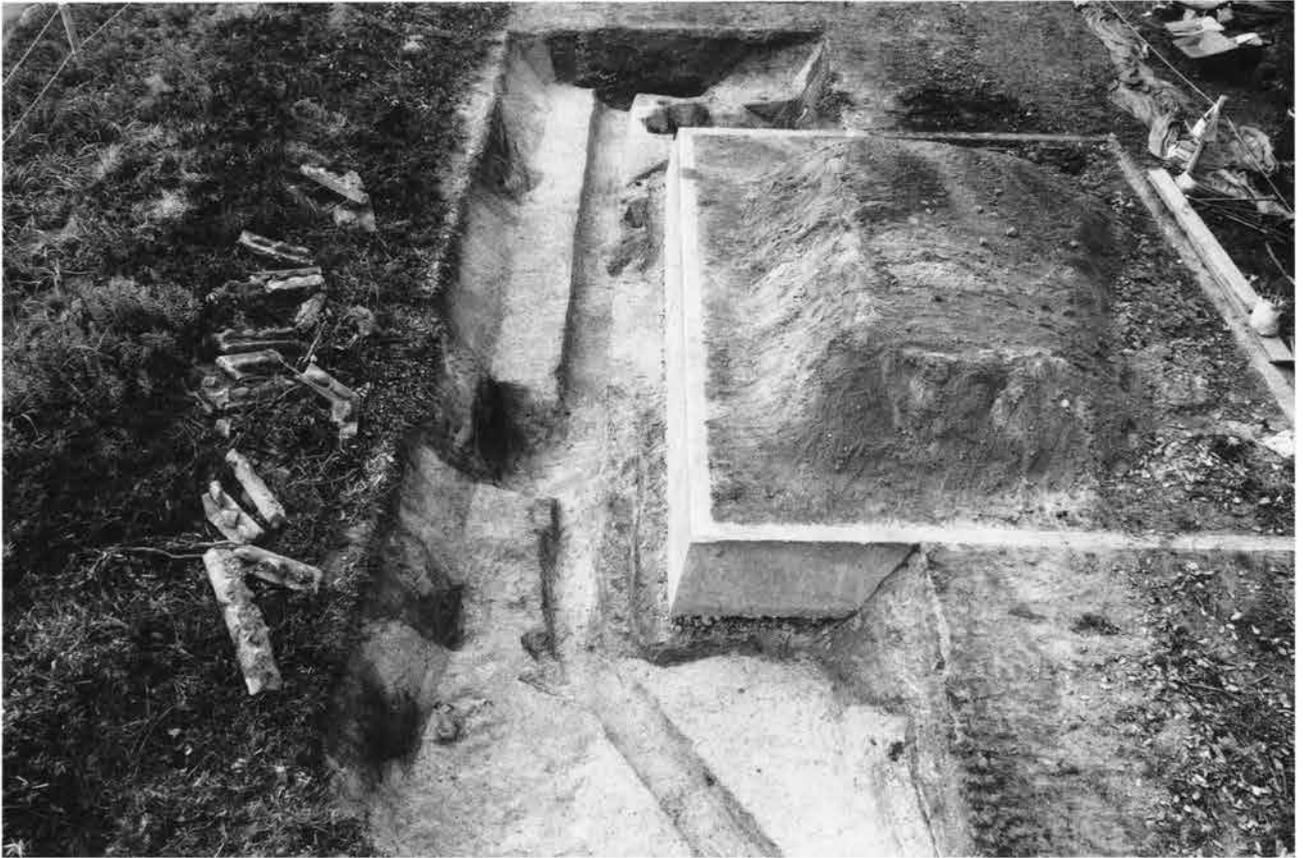
(2) 4 トレンチ全景 (東から)



(1) 2 トレンチ全景 (西から)



(2) 3 トレンチ全景 (西から)



(1)5 トレンチ全景 (東から)



(2)6 トレンチ全景 (東から)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第94冊							
編著者名	引原茂治・黒坪一樹・中川和哉・増田孝彦・森島康雄・竹井治雄・筒井崇史・岡崎研一・松尾史子・伊賀高弘							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2000 年 3 月 26 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		-	
いかがいせき 五十河遺跡	なかぐんおおみや ちょういかが 中郡大宮町五十河	482		35° 18' 19"	135° 30' 53"	19990511 ~ 19990812	1,500	ほ場整備
ふくちやま じょうあと 南稲葉遺跡	あやべしあんこくじ ちょうあさみなみい なば 綾部市安国寺町字 南稲葉	203				19991202 ~ 20000224	1,050	道路建設
すぎきたいせき 杉北遺跡	かめおかしあさひま ちすぎ 亀岡市旭町杉	206		35° 4' 44"	135° 33' 47"	19991129 ~ 20000114	500	ほ場整備
おおたいせき だいいじゅうじ 太田遺跡第 10次	亀岡市蕨田野町字 太田小字森23	206	108	35° 1' 4"	135° 32' 25"	19990525 ~ 20000228	4,000	ほ場整備
かわらいせき 河原遺跡	じょうようしながい けかわら 城陽市長池河原	207	59	34° 50' 23"	135° 47' 51"	19991215 ~ 20000217	400	公園整備
しんでんいせき きだいがい 新田遺跡第 5次	きょうたなべしまつ いきたがいち 京田辺市松井北ヶ 市	342	88	34° 50' 39"	135° 44' 3"	19991110 ~ 20000228	1,000	ほ場整備
しんでんいせき きだいろくじ 新田遺跡第 6次	きょうたなべしまつ い 京田辺市松井	342	88	34° 50' 47"	135° 44' 5"	19991117 ~ 20000128	300	道路改良
かきぞえいせき きだいよじ 柿添遺跡第 4次	そうらくぐんせい か ちょうきたいなはち まかきぞえ 相楽郡精華町北稲 八間柿添	366	47	34° 45' 56"	135° 47' 36"	20000106 ~ 20000228	600	道路建設
かすがじん じゃいせき 春日神社遺 跡	そうらくぐんせい か ちょうおおあざひし だこあざみやがわら 相楽郡精華町大字 菱田小字宮河原	366				19991118 ~ 19991216	360	河川整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五十河遺跡	集落	縄文 古墳 鎌倉	竪穴住居 土坑	土器・石器 須恵器 陶磁器・白磁	
南稲葉遺跡	集落	奈良	竪穴住居	須恵器・土師器	試掘
杉北遺跡	散布地			縄文土器？	
太田遺跡第 10次	集落・古墳	弥生 古墳 奈良・平安 鎌倉	竪穴住居 古墳・竪穴住居 掘立柱建物・井戸 掘立柱建物・溝	土器・石器 土器・鉄器 須恵器・土師器 瓦器	
河原遺跡	散布地			近世陶磁器	
新田遺跡第 5次	集落	飛鳥・奈良 平安	竪穴住居・掘立柱建物・大溝 里道	須恵器・土師器・鍛 冶滓・砥石	
新田遺跡第 6次	集落	奈良 平安 鎌倉	溝	須恵器 須恵器 瓦器・土師器・陶 器・鍛冶滓・漆器	
柿添遺跡第 4次	集落	古墳 中世	溝・落ち込み 耕作溝・土坑・ピット	土師器	
春日神社遺 跡	散布地				

## 京都府遺跡調査概報 第94冊

平成12年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Phone (075)256-0961 (代)